

平遺跡Ⅱ 第9次調査

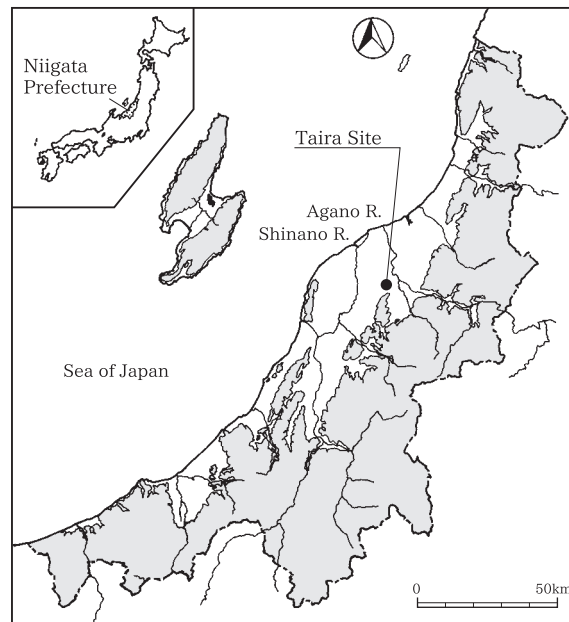
— 個人住宅建設に伴う平遺跡第9次発掘調査報告書 —

2022

新潟市教育委員会

たいら
平遺跡Ⅱ 第9次調査

— 個人住宅建設に伴う平遺跡第9次発掘調査報告書 —



2022

新潟市教育委員会

例 言

- 1 本書は新潟県新潟市秋葉区小口字居平で実施した平遺跡第9次調査の記録である。
- 2 調査は個人住宅建設に伴うもので、施工者の依頼に基づき行った。
- 3 調査は新潟市教育委員会が主体となり、新潟市文化スポーツ部歴史文化課新潟市文化財センターが補助執行した。
- 4 令和2年度に発掘調査、令和3年度に報告書作成を行った。発掘調査と整理作業の体制は第三章のとおりである。
- 5 出土遺物および発掘調査・整理作業に係る記録類は、一括して新潟市文化財センターが保管している。
- 6 本書の作成は前山精明（新潟市文化財センター）が行った。
- 7 地形図・層序図・遺構図などの作成は、株式会社オリスに委託した。
- 8 現地写真は、遺構・層序を中川晃子（株式会社吉田建設）・長沼吉嗣（同）と前山、空中写真者は株式会社オリスが撮影した。
- 9 自然科学分析は株式会社古環境研究所に委託した。
- 10 石器石材の同定にあたり、片桐憲一氏（株式会社開発技術コンサルタント）の教示を受けた。
- 11 遺物の実測は、内藤正義（新潟市文化財センター）の協力をえて前山が行った。
- 12 遺物のトレースは前山が行った。
- 13 遺物写真は前山が撮影した。
- 14 第13図掲載土器の出典は、1a～1d・2a・2bが〔新津市教委2001〕、4a・4bが〔田上町教委1976b〕である。
- 15 第22図の第1次調査出土土器は、再実測したものである。
- 16 第23図に示す土偶のうち、長峰遺跡出土例は〔MIHO MUSEUM 編2012〕および〔宮尾・寺崎2013〕掲載写真から作成した略図である。長山遺跡と佐伯遺跡出土例は〔八尾町教委1985〕掲載実測図を簡略化した。
- 17 第24図のA群石器組成エリアは、〔前山2004〕に新たな資料を加えて作成した。
- 18 第25図のアスファルト付着土器の図面および写真は、新たに作成した。
- 19 第26図の竪穴住居址平面図は、報告書を基に作成した概念図である。
- 20 第26図の竪穴住居址出土土器は、再実測したものである。
- 21 第28図の平遺跡第1次調査出土土器、五泉市新田遺跡・巳ノ明遺跡出土土器の含有物は、前山の観察に基づく。
- 22 第28図の新田遺跡出土軽石含有土器は、前山が撮影した。
- 23 執筆は第七章第2節・第3節・第4節を株式会社古環境研究所、第5節を上條信彦（弘前大学）・高橋和也（理化学研究所）、これ以外を前山が行った。
- 24 自然科学分析については、前山が編集した。
- 25 各種図面の作成・編集に関しては、有限会社不二出版に委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集を行い、完成データを印刷業者に入稿して印刷した。
- 26 調査から本書作成までの間に下記の方々と機関から御教示・御協力を賜った。ここに記して篤く御礼申し上げます。
天野二三生・荒川隆史・石川智紀・片桐憲一・栗島義明・坂井秀弥・高橋 保・寺崎裕助・古沢妥史・増子正三・山崎 天・綿田弘実・渡邊朋和・渡邊 肇・渡邊裕之・五泉市教育委員会・小口自治会

（所属・敬称略、五十音順）

凡 例

- 1 本書は本文・別表と巻末図版（図面図版・写真図版）からなる。
- 2 本書で示す方位はすべて真北である。
- 3 掲載図面のうち、既存の地形図などを使用した場合は図面の出典を示した。
- 4 遺構番号は、1区・2区・3区の順に通し番号で付したが、整理作業の過程で想定できた掘立柱建物については、分類別にSB401～SB418とした。
- 5 土器の実測図版は、遺構内出土資料・遺構外出土資料別に作成し、後者については所属時期が明確な土器、縄文施文資料、無文土器、底部の順に掲載した。
- 6 土器・土製品・石器の実測図版は3分の1を基本にし、これと異なる場合は図版に明示した。
- 7 遺物実測図版と遺物写真図版の縮尺は同一である。
- 8 炭化種実・アスファルト塊写真のサイズは、資料ごとに示した。
- 9 遺構図・遺物実測図に示す網は、各図版凡例のとおりである。
- 10 土器実測図断面に示す矢印は、撚糸文の施文範囲である。
- 11 土層・土器・土製品・石製品・搬入礫・アスファルト塊の色調は、『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局1967）を用い、色調名と番号を示した。
- 12 本書掲載遺物は、「土器・土製品」・「石器・搬入礫」ごとに通し番号を付した。本文および観察表・写真図版の番号もこれと同一である。
- 13 遺物の註記は「20平」の後にグリッド名・遺構番号を記した。

目 次

第I章 序 章

第1節 遺跡概観	1
第2節 発掘調査に至る経緯	1

第II章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境	2
A 新津丘陵	2
B 能代川・早出川低地と阿賀野川低地	2
第2節 周辺の遺跡	3
A 縄文時代前期	3
B 縄文時代中期	6
C 縄文時代後期	7
D 縄文時代晩期	7
E 弥生時代	7

第III章 調査の概要

第1節 確認調査(第8次調査)	8
第2節 発掘調査(第9次調査)	8
A 調査方法	8
B 調査経過	9
C 調査体制	11
第3節 整理作業	11
A 整理方法	11
B 整理経過	12
C 整理体制	12

第IV章 遺 跡

第1節 概 要	13
第2節 微地形と層序	13
A 微 地 形	13
B 層 序	13
第3節 遺 構	14
A 概 要	14
B 遺構の区分	14
C 遺構各説	16

第V章 遺 物

第1節 概 要	22
第2節 縄文時代の遺物	22
A 縄文土器	22
B 土 製 品	34
C 石 器	35
D 搬 入 礫	38
E アスファルト塊	38
F 炭化種実	39
G 動物遺体	40
第3節 弥生時代の遺物	41

第VI章 自然科学分析

第1節 概 要	42
第2節 花粉分析	43
第3節 樹種同定	45
第4節 黒曜石産地同定	46
第5節 アスファルト分析	48

第VII章 総 括

第1節 黒色土の遺構調査	49
第2節 土坑内集積砂と土器の混和材	50
第3節 中期前葉土器群からみた平遺跡	53
第4節 中期前葉の完形極小土偶	55
第5節 中期前葉の石器群	56
第6節 新津丘陵におけるアスファルトの利用	57
第7節 縄文時代後期前葉の平集落	58
引用・参考文献	61
別 表	64
報告書抄録・奥付	巻末

挿図目次

第 1 図	遺跡分布図	4	第 15 図	花粉顕微鏡写真	44
第 2 図	周辺の主要遺跡	5	第 16 図	平遺跡における花粉ダイアグラム	44
第 3 図	遺跡数の変遷	5	第 17 図	炭化材顕微鏡写真	45
第 4 図	新潟県内における縄文時代中・後期の遺跡分布	6	第 18 図	黒曜石産地の分布	47
第 5 図	第 8 次調査地と第 9 次調査地 2 区	8	第 19 図	黒曜石産地推定判別図	47
第 6 図	土坑・ピットの規模と掘立柱建物の方位	15	第 20 図	土坑内集積砂・近隣河川の砂粒と土器の混和材	51
第 7 図	ピットの形状と覆土の区分	16	第 21 図	土坑内集積砂と近隣河川の砂粒	52
第 8 図	Ⅲ群土器の竹管文施文幅	23	第 22 図	中期前葉 1 期・2 期の主要土器	54
第 9 図	Ⅲ群土器の区分	24	第 23 図	平遺跡の極小土偶と類似土偶	56
第 10 図	Ⅳ A2 群土器の区分	26	第 24 図	新潟県における縄文時代中期の A 群石器組成 エリア	57
第 11 図	アスファルト塊	39	第 25 図	1 次調査出土のアスファルト付着土器	58
第 12 図	炭化種実	40	第 26 図	1 次調査の竪穴住居址と出土土器	59
第 13 図	新津丘陵の天王山式土器出土遺跡と土器の 混和材	41	第 27 図	御井戸遺跡のクルミ集積	60
第 14 図	自然科学分析試料の採取地	42	第 28 図	後期前葉遺跡の土器含有物	60

表目次

第 1 表	遺跡一覧	5	第 4 表	黒曜石の測定値と推定産地	46
第 2 表	炭化種実一覧	39	第 5 表	黒曜石産地の判別群	47
第 3 表	花粉一覧	44	第 6 表	分析試料とイオウ同位体比	48

別表目次

別表 1	竪穴住居址状遺構計測表	64	別表 6	遺構別遺物一覧表	68
別表 2	土坑計測表	64	別表 7	縄文土器観察表	71
別表 3	掘立柱建物計測表	64	別表 8	土製品観察表	78
別表 4	掘立柱建物柱穴計測表	65	別表 9	石器・搬入礫観察表	79
別表 5	ピット計測表	65	別表 10	弥生土器観察表	79

図版目次

- | | | | |
|-------|--------------------------|-------|-------------------------|
| 図版 1 | 周辺の旧地形図 (1/50,000) | 図版 16 | 掘立柱建物 (5) |
| 図版 2 | 遺跡周辺の地形区分図 | 図版 17 | ピット (1) |
| 図版 3 | 調査地の位置とグリッド設定図 (1/2,500) | 図版 18 | ピット (2) |
| 図版 4 | 地形図・層序図 | 図版 19 | 遺構内出土の縄文土器 (1) |
| 図版 5 | 2区壁面の層序と遺構 | 図版 20 | 遺構内出土の縄文土器 (2) |
| 図版 6 | Ⅲ層上部確認遺構 | 図版 21 | 遺構内出土の縄文土器 (3) |
| 図版 7 | Ⅳ層上面確認遺構 | 図版 22 | 遺構内出土の縄文土器 (4) |
| 図版 8 | 主要遺構の分布 (1) | 図版 23 | 遺構内出土の縄文土器 (5) |
| 図版 9 | 主要遺構の分布 (2) | 図版 24 | 遺構外出土の縄文土器 (1) |
| 図版 10 | 竪穴住居址状遺構・袋状土坑・砂集積土坑 | 図版 25 | 遺構外出土の縄文土器 (2) |
| 図版 11 | 皿状土坑 | 図版 26 | 遺構外出土の縄文土器 (3)・弥生土器・土製品 |
| 図版 12 | 掘立柱建物 (1) | 図版 27 | 縄文時代の石器 (1)・搬入礫 |
| 図版 13 | 掘立柱建物 (2) | 図版 28 | 縄文時代の石器 (2) |
| 図版 14 | 掘立柱建物 (3) | 図版 29 | 縄文時代の石器 (3) |
| 図版 15 | 掘立柱建物 (4) | | |

写真図版目次

- | | | | |
|---------|-------------------------|---------|-------------------------|
| 写真図版 1 | 上空から見た平遺跡 (1) | 写真図版 16 | Ⅲ層上面確認ピット (2) |
| 写真図版 2 | 上空から見た平遺跡 (2) | 写真図版 17 | Ⅳ層上面確認ピット |
| 写真図版 3 | 2区の遺構全景 | 写真図版 18 | 遺構内出土の縄文土器 (1) |
| 写真図版 4 | 2区・3区の主要遺構 (1) | 写真図版 19 | 遺構内出土の縄文土器 (2) |
| 写真図版 5 | 2区・3区の主要遺構 (2) | 写真図版 20 | 遺構内出土の縄文土器 (3) |
| 写真図版 6 | 竪穴住居址状遺構・袋状土坑・砂集積土坑 (1) | 写真図版 21 | 遺構内出土の縄文土器 (4) |
| 写真図版 7 | 砂集積土坑 (2)・皿状土坑 (1) | 写真図版 22 | 遺構外出土の縄文土器 (1) |
| 写真図版 8 | 皿状土坑 (2) | 写真図版 23 | 遺構外出土の縄文土器 (2) |
| 写真図版 9 | 掘立柱建物 (1) | 写真図版 24 | 遺構外出土の縄文土器 (3)・土製品・弥生土器 |
| 写真図版 10 | 掘立柱建物 (2) | 写真図版 25 | 縄文土器と土製品の混和材 |
| 写真図版 11 | 掘立柱建物 (3) | 写真図版 26 | 石器 (1)・搬入礫 |
| 写真図版 12 | 掘立柱建物 (4) | 写真図版 27 | 石器 (2) |
| 写真図版 13 | 掘立柱建物 (5) | 写真図版 28 | 石器 (3) |
| 写真図版 14 | 掘立柱建物 (6) | | |
| 写真図版 15 | Ⅲ層上面確認ピット (1) | | |

第 I 章 序 章

第 1 節 遺 跡 概 観

越後平野の東縁に連なる山地帯の北端「新津丘陵」の北東部に平遺跡は位置する。遺跡は能代川の西岸に形成された海拔 20m 台の段丘上に立地し、現在畑地や宅地として利用されている。遺跡の存在は早くから知られ、1966 年刊行の『新潟県遺跡目録』で旧新津市域唯一の縄文時代遺跡として記載されている。また、1980 年に刊行された『新潟県遺跡地図』では、「居平遺跡」という名称で本遺跡の位置が示される。

平遺跡の名が広く知られるようになったのは、1981 年に行われた発掘調査である。段丘の東端部で行われる住宅建設に先だつもので、東西 20m・南北 60m の範囲を対象に 3 月 23 日から 10 月 2 日にかけて、川上貞雄氏を担当者として行われた。調査をつうじ縄文時代後期前葉の竪穴住居址と遺物廃棄域、中期前葉の竪穴住居址状遺構が確認され、二時期にわたって形成された集落跡であることが明らかになった〔新津市教委 1982〕。

本遺跡の広がりについては、発掘調査報告書で東西 40m・南北 70m ほどと推定され、1989 年刊行の『新津市史』においても同様の記述がなされている。一方、新潟県教育庁文化行政課は地形などを考慮しながら遺跡範囲の見直しを進め、東西 300m・南北 300m にわたる線引きを行った。2003 年以後、この範囲内での遺跡確認調査が計 7 回にわたり行われており、図版 3 に調査地点を示す。いずれも個人住宅の建設に伴うもので、西部に位置する 2003 年の 2 次調査・2004 の 3 次調査は新津市教育委員会が実施した。2005 年の市町村合併後は新潟市に調査主体が移り、2005 年に東部で 4 次調査、2010 年に北西部で 5 次調査、2011 年に 3 次調査隣接地で 6 次調査、2015 年に南部の段丘下で 7 次調査、2019 年に 4 次調査隣接地で 8 次調査が行われた。

以上のような調査をつうじ、遺物包含層や遺構が確認された地点は 4 次調査と 8 次調査地で、段丘崖に近い東部の平坦地に遺跡の中心があることが明らかになってきた。なお、4 次調査の対象となった地点については範囲が限定されるため工事立会が行われ、若干の縄文土器が出土した。

第 2 節 発掘調査に至る経緯

平成 31 年春、小口在住の天野二三生氏より遺跡内での個人住宅建設に関する照会があった。建設予定地は 1981 年に行われた 1 次調査地の北 50m あまりに位置する。この地点は本遺跡の中でも遺物が最も濃密に分布し、2005 年の 4 次調査に際し縄文時代の遺物包含層が確認された地点に隣接する。遺跡の重要性と確認調査の必要性を説明する中で確認調査実施の合意がえられ、令和元年 9 月 2 日、天野氏より埋蔵文化財の事前調査依頼書が新潟市教育委員会教育長に提出された。これをうけて新潟市文化スポーツ部歴史文化課は、同年 10 月 7 日に確認調査（8 次調査）を実施した。その結果、縄文時代中期前葉の遺物を多量に含む包含層と遺構が良好に保存されることが判明し、本発掘調査を要すると判断された。

住宅建設予定地は天野氏の宅地に隣接し、樹木の植栽地として利用されていた。住宅建設に先立ち樹木の移植を行いたい、との意向が示されことから調査方法について協議した結果、発掘調査の期間内に移植を行い、移植地を含めた範囲を調査対象とすることで合意した。また、令和 2 年内の完工を希望されることから、5 月から 7 月末までの間に調査を実施することとし、令和 2 年 3 月 10 日付で本発掘調査依頼文書が新潟市教育委員会教育長に提出された。その後新潟市教育委員会は、文化財保護法第 99 条による発掘調査通知を令和 2 年 5 月 15 日付新歴 F 第 21 号にて新潟県教育委員会に提出し、同年 5 月 18 日に発掘調査に着手することになった。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

平遺跡は、越後平野の東縁に南北に連なる山地帯の北端「新津丘陵」の北東部に位置する。遺跡は能代川に面した標高 20m あまりの段丘上に立地し、沖積地との比高は 10m ほどを測る。

図版 2 に本遺跡を中心とした東西 18km、南北 18km の地形区分図を示す。遺跡の背後には標高 100m に満たない山地帯が広がり、眼下に広がる沖積地に阿賀野川や早出川が眺望できる立地である。以下では、遺跡形成当時日常的な生活圏となった新津丘陵と能代川・早出川・阿賀野川低地の環境を概観する。

A 新津丘陵

南北に連なる新津丘陵は、金比羅山 (139m) を境に地形を異にする。金比羅山以北では 100m 以下の低山帯が広がるのに対し、それ以南では高度を高め、菩提寺山 (248m)・高立山 (276m)・護摩堂山 (268m) の主要三山が形成される。新津丘陵における完新世以前の地質は、第三紀深海堆積層、第四紀更新世前半の浅海堆積層、更新世後半の段丘堆積物層に大別される〔新津市 1990〕。

新津丘陵は原油の産出地として知られる。これは深海底や海底谷に堆積した第三紀「金津層」を貯留層とする。本遺跡の北西 1.5km には、文化 8 (1811) 年刊行の『北越奇談』で天然ガスと原油の湧出が紹介される「煮壺」が所在し、現在でも北部の朝日地内や南部の矢代田地内などで湧出地が存在する。図版 1 に示すドットは、明治末年の油井である。その数は 74 におよび、新津丘陵北麓の満日地区から高立山西麓の鎌倉新田までの南北 11km にわたり帯状に分布する。中でも密度が高いのは新津丘陵北部の金津から瀧谷・柄目木にかけての範囲で、本遺跡は密集域中央付近の東麓部に位置する。

浅海堆積層の一つ「兎谷層」は、海底隆起によって形成された第四紀海成層である。主な堆積物は細粒砂～粗粒砂からなり、高温石英などに混じり著しく磨耗した玉砂利状の黒曜石も含まれる。新津丘陵の各地に流れる小河川の砂粒は、磨耗度の高い石英や各種岩石を主体とする。これらは主として「兎谷層」の砂粒が流入したもので、越後平野周辺の河川砂の中でも特徴的な組成を示している。

本遺跡が立地する段丘は、さらなる隆起と海水準変動によって形成された地形である。高位・中位・低位に区分され、新津丘陵の西麓部を中心に形成されているが、能代川に面した東麓北部でも連続的な広がりを見せる。

平遺跡が形成された縄文時代の環境を示す良好な資料が南方 5km に位置する五泉市新田遺跡からえられている。能代川河畔の沖積地に立地する後期前葉の小規模遺跡で、自然流路に堆積した中期終末相当層準からクルミ・コナラ・クリ・トチ・ニワトコ・ガマズミなどの有用種実が多数出土した〔株式会社パリノサーヴェイ 2004〕。これらは新津丘陵の林縁部から流されて堆積した植物遺体と考えられており、本遺跡の周辺に縄文時代当時二次林が広がっていたことをうかがわせる。

B 能代川・早出川低地と阿賀野川低地

本遺跡の直下に広がる能代川・早出川・阿賀野川低地は、更新世に形成されたシルト層を基盤とし、阿賀野川・早出川・能代川の主要 3 河川が流れる。

新津丘陵の西麓に流れるかつての能代川は、小さな蛇行を繰り返しながら阿賀野川に合流していた。現在新津市街地を流れる「新津川」は、河川改修以前の能代川である。早出川は菅名岳を源流とする中規模な河川で、村

松周辺に広大な扇状地を形成させる。福島県を源流とする阿賀野川は、狭隘な山間を流下しながら阿賀野市域で越後平野に注ぐ。その流れは阿賀野市域で一変し、大きく蛇行しながら旧河道が交錯する。その在り方は北岸で顕著であるが、南岸においても蛇行した河道の痕跡を見ることができる。

阿賀野市域以東の阿賀野川や早出川の上・中流域では、多種にわたる転石が河原を覆う。両河川で採取できる花崗岩は、縄文時代において重要な石材として利用されていた。阿賀野川の転礫には軽石が含まれる。福島県西部の沼沢火山で発生した5,000年前（縄文時代前期終末）の噴火に由来するもので、越後平野周辺の遺跡に見られる一般的な搬入礫の一つである。この軽石は阿賀野川に大量に流入し、越後平野の広範囲にわたり供給されたことが明らかになっている〔卜部2018〕。

低地ならではの活動を示す事例が、かつての阿賀野川河畔に立地する阿賀野市山口野中遺跡（縄文時代晩期）からえられている〔パリノサーヴェイ2015〕。発掘調査で出土した動・植物遺体の中で現地産とみられる食料残渣は、種実1種（ヒシの実）と魚骨5種（フナ・コイ・アユ・サケ・トゲウオ）である。ヒシは静水域に生育する水生植物である。夏季後半から秋季にかけて結実し、夏場の端境期を回避する食料資源となった。サケとトゲウオが遡上種のシロザケ・イトヨであるとすれば、前者は晩秋、後者は春先に漁獲できた魚である。多種にわたるこれらの水辺資源は、通年的な居住を可能にさせる重要な食料となった。

第2節 周辺の遺跡

平遺跡では、1981年に行われた第1次調査にあたり後期前葉を主とする遺構・遺物と共に中期前葉・後期中葉の遺物が出土した〔新津市教委1982〕。本次調査ではこれに加えて前期前葉・前期終末・晩期後半・弥生時代後期の遺物が出土し、長期にわたり断続的に利用されることが明らかになった。

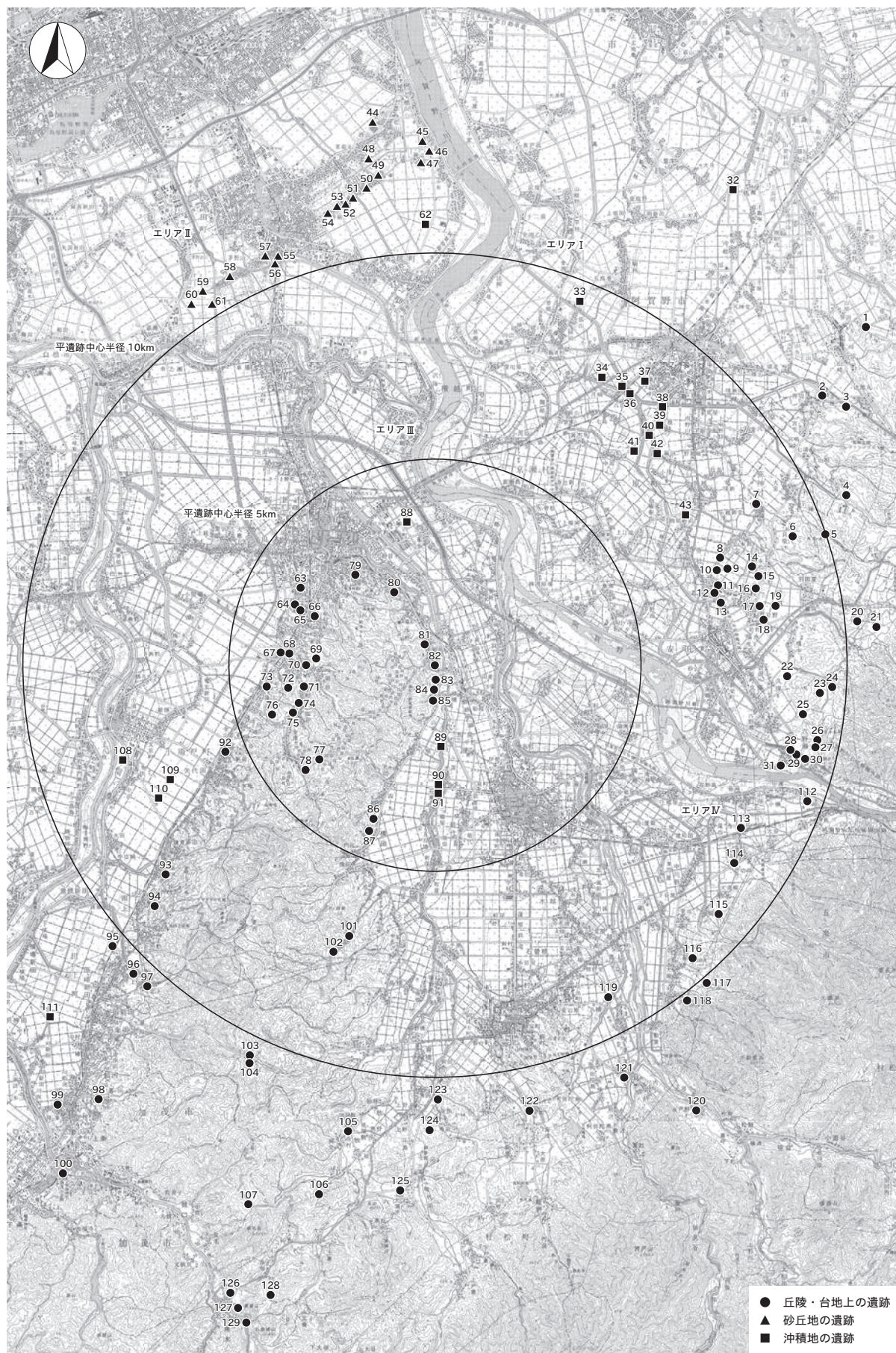
本遺跡を中心とした東西22km・南北33kmの範囲に分布する上記期間内の遺跡を第1図に示す。この空間内の遺跡は、地理的に見て阿賀野川北岸の笹神丘陵周辺（エリアⅠ）、阿賀野川南岸の亀田砂丘周辺（エリアⅡ）、新津丘陵周辺（エリアⅢ）、新津丘陵東方の菅名岳・白山麓（エリアⅣ）に大別できる。遺跡立地に着目すると、エリアⅠは丘陵・台地上のⅠAと沖積地のⅠB、エリアⅡは砂丘上のⅡAと沖積地のⅡB、エリアⅢは丘陵・台地上のⅢAと沖積地のⅢBに細分できる。エリアⅣについては、本遺跡中心半径5km圏内をⅢA1・ⅢB1、5km圏外をⅢA2・ⅢB2とする。各エリアに分布する遺跡数の変遷を第3図に示す。以下では上記圏外の遺跡（第2図）も含め、本遺跡形成期間の動向を時期別に概観する。

A 縄文時代前期

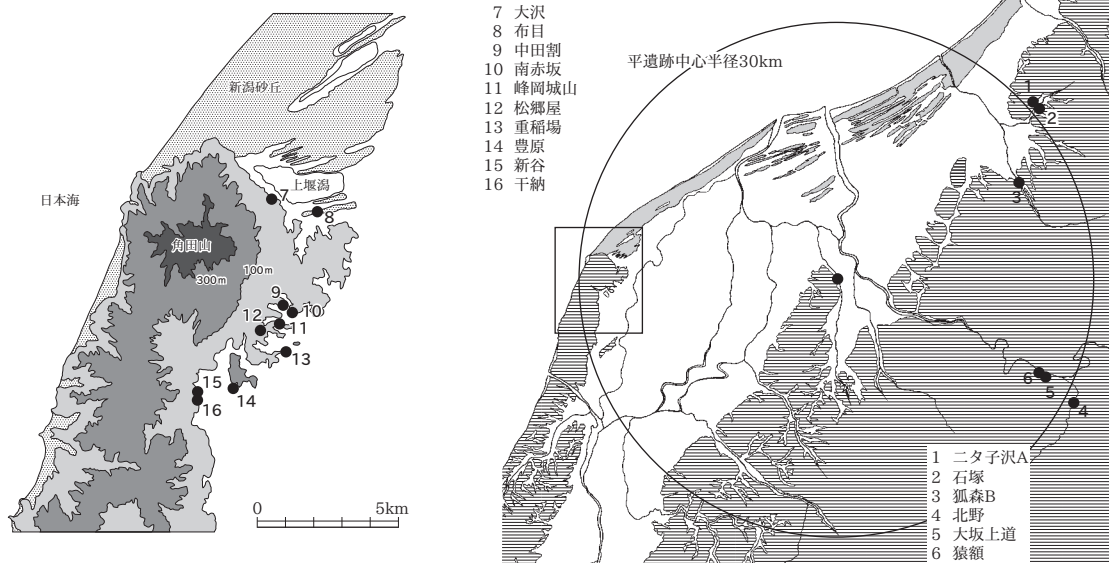
前期前葉から終末までの16遺跡がⅠA・ⅡA・ⅢA1・ⅢA2・Ⅳエリアに分布する。遺物多出遺跡は確認されおらず、集落の形成に至っていない時期である。

前期前葉の遺跡は、エリアⅡAの砂崩・笹山前〔酒井・廣野2002〕、エリアⅢA1の居村E〔新津市教委1997〕・三沢原〔中島1983〕、エリアⅢB1の古屋敷〔田上町教委1976b〕などで断片的な遺物が確認できるのみである。これに対し、海岸部の角田山麓には布目〔小野ほか1994〕・新谷〔前山1994〕などの遺物多出遺跡が分布する。この時期は、遊動的な居住形態から定住集落成立までの過渡期にあたる。新谷の活動域は広範囲に及び、阿賀野川水系から採取した花崗岩を大量に搬入していた。エリアⅠ～Ⅳに分布する小規模な遺跡は、季節的な居住地または角田山麓の拠点集落に付随するワークキャンプとみられる。

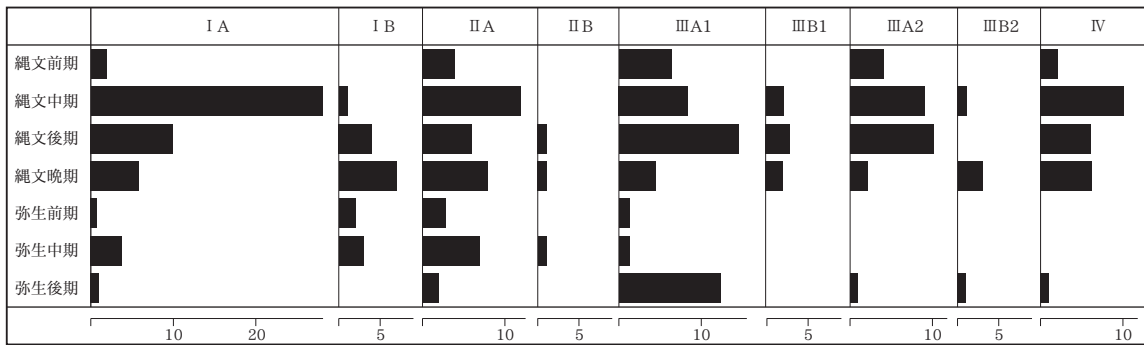
5つのエリアの中で、新津丘陵北部は前期終末の遺跡が比較的多く分布する。程島館跡〔相澤2019〕と草水町2丁目窯跡でまとまった量の土器と多種にわたる石器が出土し、定住的な集落成立の兆しを見せる。この時期の角田山麓では、豊原〔小野・前山ほか1987〕や南赤坂〔巻町教委2002〕で東北南部系土器が多量に出土している。阿賀野川の上流域には北野〔新潟県教委2003〕・猿額〔新潟県教委2008〕などの遺跡が点在し、東北南部系土器の



第1図 遺跡分布図



第2図 周辺の主要遺跡



第3図 遺跡数の変遷

第1表 遺跡一覧

No.	遺跡名	区分	時代
1	大沢	IA	縄文 中
2	馬屋尻	IA	縄文 中
3	浦林	IA	縄文 中
4	川端B	IA	縄文 中
5	風吹沢	IA	縄文 中
6	貝喰平	IA	縄文 中
7	大室堤下	IA	縄文 中
8	小山崎	IA	縄文 後 弥生前
9	行塚	IA	縄文 中後
10	中道	IA	縄文 中後
11	藤堂	IA	縄文 中後晩
12	物見山	IA	縄文 中 弥生 中
13	山ノ下	IA	縄文 中後 弥生 中
14	上野林F	IA	縄文 中
15	上野林B	IA	縄文 中
16	上野林D	IA	縄文 中
17	横峰	IA	縄文 中後晩 弥生 中後
18	岩野B	IA	縄文 中
19	上野林A	IA	縄文 中
20	中山	IA	縄文 中
21	ツベタ	IA	縄文 中後
22	山下A	IA	縄文 中 弥生 中
23	徳正寺	IA	縄文 中
24	野中	IA	縄文 中後
25	新割	IA	縄文 中
26	獅子沢	IA	縄文 中後 弥生 中
27	円山	IA	縄文 前中後
28	萩野	IA	縄文 中後
29	宮林	IA	縄文 中
30	赤坂山	IA	縄文 中 晩
31	六野瀬	IA	縄文 前 晩 弥生 中
32	榎木大割	IB	縄文 後晩
33	猫山	IB	縄文 中 弥生 中
34	山口	IB	縄文 中 弥生 前中
35	山口野中	IB	縄文 中 晩
36	境塚	IB	縄文 中 晩
37	三辺稲荷	IB	縄文 中 弥生 前
38	土橋北	IB	縄文 中 晩
39	土橋	IB	縄文 中 晩
40	石船戸東	IB	縄文 中 晩
41	石船戸	IB	縄文 中 晩
42	村北	IB	縄文 中後 晩
43	狐塚	IB	縄文 中 弥生 中

No.	遺跡名	区分	時代
44	小丸山	IIA	縄文 中 晩 弥生 中後
45	中山	IIA	縄文 中 後
46	城山	IIA	縄文 前中
47	笹山前	IIA	縄文 前中後 晩 弥生 中後
48	上の山	IIA	縄文 中後
49	駒込小丸山	IIA	縄文 中
50	山ノ家	IIA	縄文 前中 弥生 中
51	前郷	IIA	縄文 中 晩 弥生 中後
52	迎山	IIA	縄文 中 晩
53	砂前	IIA	縄文 前中
54	砂崩前郷	IIA	縄文 中後 晩
55	亀田城山A	IIA	縄文 中 弥生 中
56	西郷	IIA	縄文 中 晩 弥生 前中
57	日水南	IIA	縄文 中 後
58	養海山	IIA	縄文 中 弥生 前
59	西前郷	IIA	縄文 中 後
60	道生岡崎	IIA	縄文 中 晩
61	五番田	IIA	縄文 中 晩
62	小杉上田	IIA	縄文 中 後 晩 弥生 中
63	程島館跡	IIA	縄文 前
64	山崎	IIA	縄文 中 後
65	沢海	IIA	縄文 中 後 晩 弥生 前
66	原	IIA	縄文 中 後 晩 弥生 前
67	舟戸	IIA	縄文 中 後 弥生 後
68	塩辛	IIA	縄文 中 後 弥生 後
69	山境	IIA	縄文 前中 弥生 後
70	森田	IIA	縄文 中 後 弥生 後
71	高矢A	IIA	縄文 中 後 弥生 後
72	古津八幡山	IIA	縄文 中 後 弥生 後
73	鳥撃場	IIA	縄文 中 後 弥生 後
74	居村E	IIA	縄文 前中後
75	居村C	IIA	縄文 中 後 弥生 後
76	居村B	IIA	縄文 中 後 弥生 後
77	十ヶ沢A	IIA	縄文 中 後 弥生 後
78	十ヶ沢B	IIA	縄文 中 後 弥生 後
79	萩葉	IIA	縄文 中 後 晩 弥生 中
80	草水町2丁目窯跡	IIA	縄文 前中後
81	居平	IIA	縄文 中 後
82	平	IIA	縄文 前中後 晩 弥生 後
83	小突山	IIA	縄文 中後 晩 弥生 後
84	下野山	IIA	縄文 中 後 弥生 後
85	諏訪田	IIA	縄文 中 後 弥生 後
86	赤坂	IIA	縄文 前中後

No.	遺跡名	区分	時代
87	大倉山	IIIB1	縄文 中 後 弥生 後
88	大野中	IIIB1	縄文 中 後
89	箕下	IIIB1	縄文 中 後 晩
90	巳ノ明	IIIB1	縄文 中 後
91	新田	IIIB1	縄文 中 後 晩
92	三沢原	IIIA2	縄文 前
93	五社神社	IIIA2	縄文 中 後
94	中店	IIIA2	縄文 中 後 弥生 後
95	古屋敷	IIIA2	縄文 前中
96	塚野	IIIA2	縄文 中 後
97	川ノ下	IIIA2	縄文 中 後
98	川船河	IIIA2	縄文 中 後 晩
99	鎌ヶ峰北	IIIA2	縄文 中 後
100	加茂市役所	IIIA2	縄文 中 後
101	八幡手	IIIA2	縄文 中 後
102	宮古	IIIA2	縄文 中
103	大沢峠	IIIA2	縄文 中
104	大沢洞穴	IIIA2	縄文 中 後
105	牧	IIIA2	縄文 中 後 晩
106	下土倉	IIIA2	縄文 前中
107	猿毛山	IIIA2	縄文 前中後
108	瀬川浜堤外地	IIIB2	縄文 中
109	大沢谷内北	IIIB2	縄文 中 後 晩
110	大沢谷内	IIIB2	縄文 中 後 晩 弥生 後
111	保明浦	IIIB2	縄文 中 後 晩
112	馬下稲場	IV	縄文 中 後
113	小栗山	IV	縄文 中
114	切畑	IV	縄文 前
115	堀	IV	縄文 中
116	葉師平	IV	縄文 中
117	大蔵	IV	縄文 中 後
118	殿屋敷	IV	縄文 中
119	矢津	IV	縄文 中 後 晩
120	水戸野	IV	縄文 中
121	矢津川	IV	縄文 中 後 晩
122	安出	IV	縄文 中 後 晩
123	寺田A	IV	縄文 中 後 弥生 後
124	寺田	IV	縄文 中 後 晩
125	岡屋敷	IV	縄文 中 後 晩
126	岩野原ACD	IV	縄文 中 後 晩
127	岩野原B	IV	縄文 中
128	松ヶ沢	IV	縄文 中
129	七谷忠魂碑	IV	縄文 前中後

流入経路となっていた。程島館跡では全国的に類例の少ない「の」字状垂飾が北陸系土器と共に出土しており、前期終末の遺跡が密に分布する角田山麓との密接な関係をうかがわせる。

B 縄文時代中期

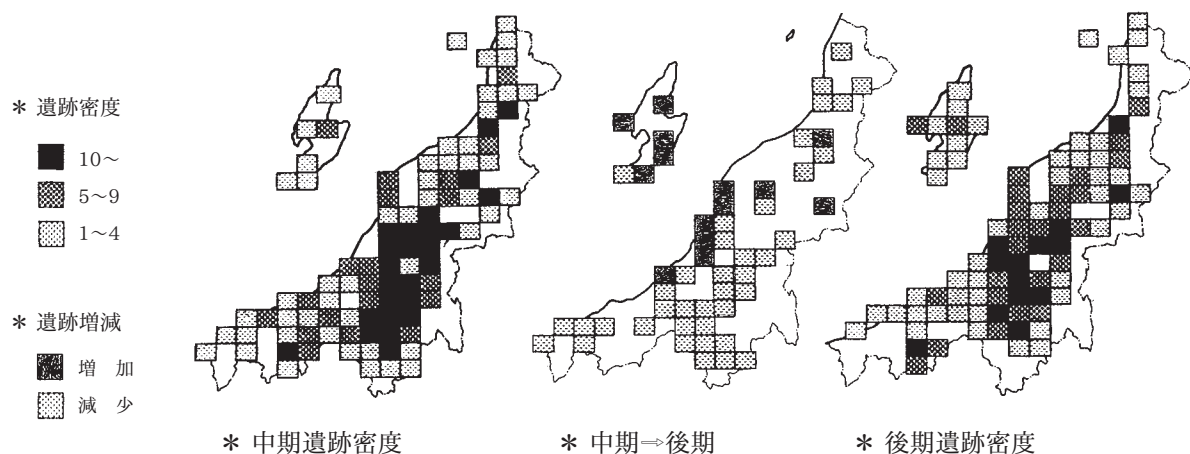
中期の遺跡数は、前期の4倍以上にあたる70箇所を上昇する。中でもエリアIAでの増加が著しく、26箇所の遺跡が密集する。この時期の本遺跡は中期前葉に限定されるため、これと並行関係にある遺跡を中心に概観する。本遺跡の中期前葉土器群は3時期に分けられる。

1期は北陸の新保式II期に平行する段階で、エリアIAの中道〔安田町教委1980〕・エリアIIAの砂崩〔前山2015〕・エリアIII B1の古屋敷〔田上町教委1976b〕・陣ヶ峰北〔小熊・立木2016〕で断片的な資料がえられているのみである。この段階の遺跡は角田山麓に遺跡が密集し、豊原で多量の遺物が出土している。

2期は新保式III期に並行し、エリアIAの萩野〔新潟県教委1994〕とエリアIIAの砂崩でまとまった資料がえられている。越後平野の周辺では、1期と同様に角田山東麓で豊原・松郷屋〔前山1994〕・大沢〔巻町教委1990〕などの遺物多出遺跡が密に分布し、新発田市域の狐森B〔新発田市教委2007〕や石塚でもまとまった資料が確認されている。このうち萩野は北東8kmの阿賀野川河畔に立地する。住居址は確認されていないが、多種にわたる遺物が出土しており、拠点的な集落と考えられる。日常生活圏が本遺跡と接近することから、密接な関係にあったとみられる。砂崩は砂丘地上の縄文時代遺跡の中で屈指の遺物量を誇る。しかし、基本的な生活用具が欠落する点で一般的な集落とは見なし難く、亀田砂丘に立地する縄文時代遺跡の大半も同様の性格をもつ。砂崩の土器は混和材がバラエティーに富む。その特徴から阿賀北・角田山麓・新津丘陵方面からの搬入品の可能性が高く、交易拠点としての性格が考えられる〔前山2015〕。

3期は新崎式I期に平行する。この段階の遺物多出遺跡は、エリアIAの中道・エリアIIAの砂崩、エリアIII A2の古屋敷、エリアIII A1の本遺跡があげられる。このほか、阿賀野川流域の大坂上道〔新潟県教委2008〕、角田山東麓の豊原・松郷屋・峰岡城山〔新潟市教委2013〕・中田割〔前山・那須2004〕・大沢などでも多量の遺物が出土し、活動の活発化を物語る。本遺跡はこの段階をもって一旦終息するが、中期中葉～後葉の拠点集落にあたるエリアIAの横峯A〔安田町教委1981〕・ツベタ〔安田町教委1983〕・エリアIII A1の秋葉〔新潟市教委2021〕・エリアIVの大蔵〔五泉市教委2001〕はいずれも中期前葉に形成が始まる。このうちツベタ・秋葉・大蔵は3期直後に集落が成立した可能性が高く、平遺跡と秋葉遺跡の補完的な推移も指摘できる。この段階にはエリアIII A2の高所に位置する大沢峠〔中島1980〕も成立し、遺跡立地上の画期をなしている。

新津丘陵の北部では、中期前葉終末に沖積地への進出が始まる。阿賀野川南岸の大野中〔前山2018〕と現信濃川河畔の横川浜堤外地〔中島1983〕がこれにあたる。秋葉の北方2kmたらずに位置する大野中は、秋葉と継続



第4図 新潟県内における縄文時代中・後期の遺跡分布 (巻町1995より)

期間が近似し、土器の混和材も類似することから、これに付随するキャンプ地とみられる。

C 縄文時代後期

後期になると、エリアⅠA・ⅡA・Ⅳで遺跡数が減少に転じる。対照的に、本遺跡が所在するエリアⅢA1では遺跡数が上昇し、新津丘陵南部のエリアⅢA2でも似た動きを見せる。両エリアの遺跡の多くは前葉に属す。後期前葉における遺跡の増加は、中越から下越南部の柏崎市域・角田山麓、五十嵐川流域や佐渡島内で見られる広域的な現象で、内陸部の遺跡減少と連動した動きとみられる(第4図)。後期前葉を4時期に区分した場合、エリアⅢA1の秋葉は三十稲場式新段階、エリアⅢA2の陣ヶ峰北は南三十稲場式古段階に終息する。古津八幡山〔新津市教委2001〕は南三十稲場式新段階に限定されており、長期間にわたって存続するケースは本遺跡に限定される。エリアⅠでは、後期前葉から沖積地への進出が本格化する。阿賀野川の北岸に立地する土橋〔村上2021〕は後期前葉の拠点集落で、本遺跡中心半径10km圏内に位置することから密接な関係が想定できる。エリアⅢでは東麓の沖積地に新田・巳ノ明〔五泉市教委2004a・2004b〕が形成される。前者は三十稲場式古段階、後者は南三十稲場式古段階に限定される小規模な遺跡である。

後期中葉に入り、遺跡数は全域で減少する。遺物多出遺跡も確認されておらず、集落としての本遺跡はこの段階をもって終息する。その後、後期後葉の拠点集落がエリアⅠA・ⅢA2で再び現われる。笹神丘陵の藤堂〔安田町教委1974〕や新津丘陵南部の川船河〔田上町教委1997〕である。前者は後期中葉に形成が始まるが、後者は後葉に限定され、後期中葉を境とした遺跡立地の変化を物語る。

D 縄文時代晩期

本次調査で晩期後半の土器が出土した。この時期には、エリアⅢA2の川船河〔小熊・立木2016〕、エリアⅢA1の原〔前山2016〕、エリアⅢB2の大沢谷内〔新潟市教委2012〕・大沢谷内北〔新潟市教委2010〕・保明浦〔田上町教委1993・1996・2003・2004〕・エリアⅣの矢津〔中島ほか1980〕で多量の遺物が出土している。

このうち沖積地に立地する大沢谷内では中葉～後葉の竪穴住居と掘立柱建物が確認されているが、土器が粗製深鉢に偏在する、基本的な生活用具が完備されない、食料残渣の大半をヒシ・サケ・イトヨが占め、トチやクルミ・哺乳動物が皆無に等しい、といった点で一般的な集落とは異なる性格をもつ。その一方で大量のアスファルト滓や鉄鉱石・ベンガラ・漆貯蔵土器・竪櫛などが出土しており、アスファルトの加工や交易活動に関わる季節的なキャンプ地とみられる。大沢谷内の北東5kmに位置する原は、その成立に主導的な役割を果たした集落と考えられる。本遺跡や笥下〔五泉市教委2004c〕も5km圏内に含まれており、これらの形成に原が関与した可能性が高い。

E 弥生時代

弥生時代の遺跡は、エリアⅠに11箇所、エリアⅡに8箇所、エリアⅢに17箇所、エリアⅣに1箇所分布する。遺跡数が多い3つのエリアでは主体時期に異なりがあり、エリアⅠでは中期、エリアⅡでは前・中期、エリアⅢでは後期に中心をもつ。エリアⅢは後期の遺跡密度が極めて高く、本遺跡の西約4kmに位置する古津八幡山〔新津市教委2001〕は中核的な役割を担っていた。後述のように、本遺跡では古津八幡山形成初期の天王山式土器が出土しており、同遺跡との密接な関係をうかがわせる。

本遺跡周辺に分布する縄文時代前期から弥生時代後期までの129遺跡のなかで、大別時期のオーダーで4時期以上におよぶ弥生時代遺跡が8箇所存在する。最多遺跡は6時期の笹山前(エリアⅡA)で、横峯A(エリアⅠA)・平(エリアⅢA1)が5時期、小丸山・前郷(エリアⅡA)・秋葉・原・小実山(エリアⅢA1)が4時期で続く。これらはエリアⅢA1とエリアⅡAに中心があり、新津丘陵北部の縄文時代遺跡を代表する平・秋葉・原遺跡が含まれる点も特徴的である。反復的な利用によって形成された多重遺跡の存在は、二つの空間が有意な地理的単位として認識され、活動領域の固定化と地理情報の蓄積・伝達が行われる中で生じた現象と考えられる。

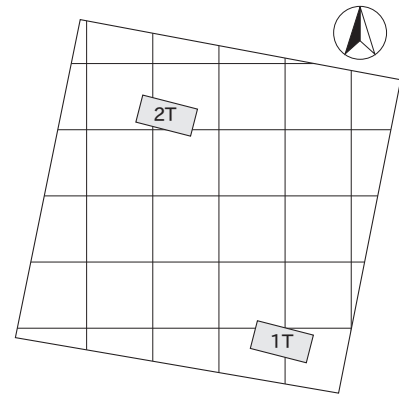
第Ⅲ章 調査の概要

第1節 確認調査(第8次調査)

個人住宅の建設計画に伴い2019年10月7日に実施した。調査地は2005年の4次調査にあたり縄文時代中期・後期の遺物包含層が確認された地点の北西50mあまりに位置する。調査は住宅が建設される一辺10mほどの区域に幅1m・長さ2mのトレンチ2箇所を設け、バックホーを使用して遺物包含層と遺構の確認にあたった(第5図)。

堆積土は、Ⅰ層(表土)・Ⅱ層(にぶい赤褐色土)・Ⅲ層(黒褐色土)・Ⅳ層(褐灰色土)・Ⅴ層(基盤層)に区分された。遺物はⅠ層からⅣ層までの間で中期前葉を中心とする縄文土器601点・石器2点などが出土した。このうち遺物量が多いのはⅡ層・Ⅲ層であるが、本来的な包含層はⅢ層とみなされた。

南東部の1Tではピット4基、北西部の2Tではピット7基が確認された。いずれもⅣ層上面から構築し、Ⅲ層を埋土とする遺構と判断された。



第5図 第8次調査地と第9次調査地2区

第2節 発掘調査(第9次調査)

A 調査方法

1) 現況

調査地は、遺跡の中心地とみられる段丘面東部に位置する。段丘崖の西方50mの緩斜面にあたり、1981年に行われた第1次調査地とは50mほどの隔りがある。調査地付近は野菜畑として長らく利用されていたが、調査時の現況は樹木の植栽地となっていた。調査対象となった区域は、個人住宅の建設が行われる一辺10mの範囲(2区)と樹木を移植する南部1区と北部3区で、総面積は113m²である。

2) グリッドの設定

新潟県教育委員会が示した遺跡範囲をカバーする形で、東西300m・南北300mにわたるグリッドを設定した。北西コーナーのX座標は+196.700、Y座標は+57.600である。これを基点として10m方眼を大グリッドとし、東西軸をA～AE、南北軸を1～31と呼称した(図版3)。小グリッドはこれを2m方眼で25に分割し、北西コーナーを基点として1～5・6～10・11～15・16～20・21～25区とした。

3) 調査方法

① 表土除去

表土Ⅰ層と客土Ⅱ層をバックホーで除去した。後者では遺物が多量に包含されることから遺物の採取に努め、小グリッド単位で取り上げながら作業を進めた。

② 遺構調査

調査は、樹木移植地の1区と3区から着手した。このうち3区では、遺物包含層にあたるⅢ層上面から掘り込む遺構の存在が明らかになった。そのため、Ⅲ層が良好に遺存する2区では、調査地壁面に接して幅50cmのトレンチを設けⅢ層の堆積厚を確認した後、同層上面での遺構探査を試みた。

Ⅲ層上面には、色調差による識別が困難であるが遺構の可能性のある「しまりをもった粘質土」が分布していた。両刃鎌を用いてその範囲を把握した後、中央に設けた幅 10～15cm のトレンチ断面の観察をつうじ遺構の是非を検討し、遺構と認定できた箇所については、断面記録の後遺構掘削を行った。Ⅲ層上面での遺構探査の終了後はⅣ層上面まで掘り下げ、通常どおりの遺構調査を行った。

③ 包含層調査

全域を手作業で掘り下げた。遺物量が多いことから、取り上げは小グリッド単位で行った。遺物包含層が厚く堆積する北東部については上下 2 層に人工分層し、層位的な検討資料とした。

④ 土壌採取と水洗選別

砂粒が密に堆積する土坑 9 基と多量の炭化物を含むピット 1 基で土壌を採取した。前者は砂層の主要部分、後者は炭化物の密度の高い部分を採取した後（株）吉田建設舟戸作業場に搬入し、1mm・3mm・5mm 篩を用いて水洗選別した。

⑤ 自然科学分析サンプルの採取

袋状土坑 1 基で花粉分析用サンプルを採取した。

⑥ 層序記録

発掘調査区周囲の壁面と遺構内に設けたトレンチ壁面の層序図作成を（株）オリスに委託し、写真測量によって図化した。

⑦ 遺構図・地形図の作成

（株）オリスに委託し、トータルステーションを用いて取得したデータをもとに 1/20 図面を作成した。

⑧ 写真撮影

35mm リバーサルフィルムとデジタルカメラを使用した。

B 調査経過

調査前写真を 5 月 7 日に撮影し、15 日に機材を搬入した。調査は 5 月 18 日に南部の樹木移植地 1 区から着手した。この地区では遺物包含層が削平されていたが、多数の遺構が存在することが判明した。以後 5 月 29 日までの 8 日間にわたり作業を行い、竪穴住居址状遺構や 2 基の皿状土坑・24 基のピットを確認した。

5 月 21 日には、北部の樹木移植地 3 区で調査を開始した。この地区は遺跡の保存状態が良好で、同日遺物包含層にあたるⅢ層を掘り下げたところ、砂粒の密集堆積域を確認した。この砂粒は壁面観察をつうじⅢ層上面から掘り込まれる土坑内の堆積物と判明したため、地権者の了解をえて 5 月 26 日北部を拡張した。この調査の過程で北側にも同様の土坑が存在することが判明したが、再度の拡張は行わず 5 月 28 日に 3 区の調査を終了した。その後、6 月 3 日に樹木を移植し、両地区を埋め戻した。この間、1 区の調査に携わった調査員長沼吉嗣（吉田建設）が 5 月 29 日をもって転出し、中川晃子（吉田建設）が調査員を引き継ぐことになった。

主要調査地にあたる 2 区では、1 区・3 区の調査と並行し 5 月 26 日に調査地北壁側から表土除去を始めた。調査にあたっては、3 区で確認した砂集積土坑の存在を重視し、表土除去が終わった区域で 5 月 29 日からⅢ層上面での遺構探査を試みた。これは両刃鎌を用いて土質の違いから遺構を見出そうとするもので、作業を進める中で「しまりをもった粘質土」が点在することを確認した。6 月 1 日に粘質土にトレンチを設け断面観察を行ったところ、Ⅳ層まで掘込むピット（Pit51）と判明し、上記のような遺構探査が有効な手法であることが明らかになった。同日には、3 区の砂集積土坑と同様の遺構が存在することも確認した。

樹木の移植を終えた 6 月 3 日からは本格的な表土除去を行い、5 日に終了した。同日調査区の壁際に 50cm のトレンチを設け、Ⅲ層の堆積厚を把握した。同日から本格的な遺構探査を始め、6 月 23 日までの 13 日間にわたり遺構調査を行った。確認できた遺構は土坑 29 基・ピット 52 基にのぼる。なお、Ⅲ層上面での遺構探査はトレンチによる絶ち割りが必要となるため、それによって平面形の把握が困難になる小範囲の粘質部につい

第2節 発掘調査



調査直前の発掘地



2区の表土掘削



2区壁際のトレンチ



2区Ⅲ層上面の遺構調査



2区Ⅲ層上面の遺構調査



2区Ⅳ層上面の遺構調査



新関小学校5年生見学



坂井秀弥氏来訪

ては除外した。ピットの中には柱痕が残るものが多くあり複数の掘立柱建物の存在が予想されたが、調査時点で有意な配列を見出すには至らなかった。特筆すべき遺物としては、東壁下の Pit133 からアスファルト塊が6月22日に出土した。6月19日には炭化物の採取を目的とした土壌採取を Pit78 で実施。6月22日には袋状土坑 SK109 で花粉分析用の土壌サンプリングを行った。作業終了後の23日、調査地東の排土山から全体写真を撮影した。6月25日にはⅢ層の面下げ作業を始め、翌26日に終了した。29日からはⅣ層上面での遺構調査を行い、小規模なピットがⅢ層上面を上回る状態で密に分布することが判明した。この間天候に恵まれていたが、6月30日以後は雨天の日が多く、作業能率が著しく低下した。7月14日には、雨天を利用し吉田建設舟戸作業場にて土壌水洗を実施した。その後、7月16日までの実質9日間にわたり土坑3基・ピット96基の調査にあたり、7月17日に空中写真の撮影を行った。空中写真撮影後は、7月20日・21日に壁面の層序記録と個別遺構の完掘写真撮影を行い、延べ49日間にわたる実質的な野外調査を終了した。その後、天候が回復した8月4日・5日に埋め戻しを行い、現地作業を完了した。

C 調査体制

令和元年度：第8次調査

調査主体	新潟市教育委員会（教育長：前田秀子）
所管課	新潟市文化スポーツ部歴史文化課（課長：小沢昌己・課長補佐：廣野耕造・埋蔵文化財担当係長（主幹）：朝岡政康）
調査担当	金田拓也（歴史文化課）

令和2年度：第9次調査

調査主体	新潟市教育委員会（教育長：井崎規之）
所管課	新潟市文化スポーツ部歴史文化課（課長：遠藤和典・課長補佐：廣野耕造・埋蔵文化財担当係長（主幹）：朝岡政康）
事務局	新潟市文化財センター（所長：渡邊朋和・係長（主幹）：遠藤恭雄）
調査担当	前山精明（新潟市文化財センター）
調査員	長沼吉嗣（株式会社吉田建設）・中川晃子（株式会社吉田建設）

第3節 整理作業

A 整理方法

① 土坑内集積砂の水洗

5mm・2mm・1mm メッシュ篩を用い、1mm 未満の微細な砂粒も回収した。

② 炭化物の抽出

1mm メッシュ篩を用いた水洗選別資料の中から炭化物を抽出し、樹種同定・種実同定試料とした。

③ 調査記録の整理

調査図面の校正、土層記録のデータ化・写真整理を中川晃子（株式会社吉田建設）が行った。

④ 遺物の基礎的整理

遺物の水洗・注記と計量を株式会社吉田建設に委託した。

⑤ 遺構図の作成

株式会社オリスが作成した平面・断面図を校正し、有限会社不二出版にデジタル図化を委託した。掘立柱建物のエレベーション図は、オリスが計測したⅢ層上面地形に基づき作成した。

⑥ 遺物の実測・トレース・写真撮影

土器の拓本・実測、土製品の実測、石器の実測・トレース、写真撮影は前山が行った。

B 整理経過

発掘調査終了を前にした2020年7月20日、株式会社吉田建設巻整理室で遺物の水洗作業を開始した。7月22日から9月30日までの間は、調査員中川が写真・図面の整理を行うとともに、中川の指示のもとで遺物の水洗・注記を行った。10月から11月の間は作業を中断したが、12月1日から12月24日までの間に吉田建設巻整理室で遺物の計量と図面・写真の本格的な整理を行い、12月25日にこれらを一括して新潟市文化財センターに移動した。

2021年1月以降は新潟市文化財センターで整理作業に専念した。1月からは遺構・遺物の本格的な検討、土坑内集積砂の分類・計量、自然科学分析試料の抽出を行い、2月27日の新潟市遺跡調査速報会で調査成果の概要を報告した。3月1日には土器の図化作業に着手した。4月からは新潟市文化財職員一名が整理作業に加わり、8月23日までの間に土器と土製品、8月25日までの間に石器類の作図を行った。

8月26日からは土器と焼成粘土塊の混和材観察、炭化種実の同定、遺構図面の再修正、遺物トレース、遺物写真の撮影を行い、11月16日にこれらの作業を終了した。それ以降は、遺構・遺物・写真図版のレイアウト、本文および挿図・別表の作成にあたった。



遺物水洗作業



註記作業

C 整理体制

令和2年度

調査主体	新潟市教育委員会（教育長：前田秀子）
主幹課	新潟市文化スポーツ部歴史文化課（課長：遠藤和典・課長補佐：廣野耕造・埋蔵文化財係長：朝岡政康）
事務局	新潟市文化財センター（所長：渡邊朋和・係長：遠藤恭雄）
調査担当	前山精明（新潟市文化財センター）

令和3年度

調査主体	新潟市教育委員会（教育長：井崎規之）
主幹課	新潟市文化スポーツ部歴史文化課（課長：遠藤和典・課長補佐：廣野耕造・埋蔵文化財担当係長（主幹）：朝岡政康）
事務局	新潟市文化財センター（所長：板垣正人・係長（主幹）：遠藤恭雄）
調査担当	前山精明（新潟市文化財センター）

第Ⅳ章 遺 跡

第 1 節 概 要

遺跡は新津丘陵の北東部に位置する。能代川に面して形成された海拔 20m・能代川との比高 10m あまりの中位段丘に立地し、眼下に阿賀野川や早出川を望む段丘崖付近に中心的な広がりをもつ。調査地点は、段丘崖から 50m ほど離れた場所にあたり、住宅建設が行われる 2 区とその南北に隣接する樹木移植地の 1 区・3 区からなる。調査面積は 113m² である。

調査地南部の 1 区は高域部に位置するため基盤層の上部まで削平されていたが、2 区と 3 区では縄文時代中期前葉の遺物包含層が遺存していた。確認層序はⅠ層（表土）・Ⅱ層（客土）・Ⅲ層（遺物包含層）・Ⅳ層（基盤層）に大別できる。Ⅲ層上面やⅣ層上面の地形は北東に向かって緩やかに傾斜する。遺構の多くはⅢ層上部を確認面とする。中期前葉と後期前葉の遺構が混在しており、Ⅲ層上部が削平されたことがうかがえる。

第 2 節 微地形と層序

A 微 地 形

本遺跡が立地する中位段丘面は、東西 300m・南北 500m あまりの広がりをもつ。この段丘面は東に向かって緩やかに傾斜し、3% 前後の均一な斜度をもって段丘崖に至る。段丘崖は 50° 前後の急傾斜をなしており、沖積地との比高は 10m ほどを測る。

調査地は、段丘崖線から 50m ほど山寄りにあたる。傾斜変換点との高低差は 2.5m を測り、50cm ほどの落差をもった平坦面が 2 面にわたり形成されている。地表面での調査地の標高は、南西部で 21.3m・北東部で 20・6m を測り、ほぼ平坦な地形をなしていた。

遺物包含層にあたるⅢ層は、上面の標高が南西部で 20.8m、北東部で 20.1m を測り、北東に向かい 6% ほどの斜度をもって傾斜する。基盤層にあたるⅣ層上面の標高は南西部で 20.7m、北東部で 20.0m を測り、Ⅲ層上面と同様の地形をなしている。1 区の南に隣接する 2 区は高度が高いため、Ⅳ層上部まで削平されていた。

B 層 序

図版 5 に 2 区壁面の層序、図版 4 下段に 1m 間隔で作成した柱状図を示す。遺物包含層が良好な状態で保存される 2 区・3 区の層序は、次のようなⅠ～Ⅳ層に大別できる。

Ⅰ層 調査地全域に 10～30cm の厚さで堆積する表土層。灰褐色（7.5YR4/2）を呈する硬質な粘質土で、緻密な状態で堆積する。層内には縄文時代から現代に至るまでの遺物が含まれる。

Ⅱ層 灰褐色（7.5YR6/2）を呈する腐植土。Ⅰ層に較べて軟質で、しまりに欠ける。本層は高度が低い北東部を中心に堆積する。北東コーナー付近で 20cm の最大厚をもつが、南東部では欠落し、Ⅲ層上に表土が堆積する。本層は平坦地化を目的とした盛土層で、多量の縄文時代遺物と共に近世以降の陶磁器が含まれる。

Ⅲ層 縄文時代中期前葉の遺物を多量に含む腐植土。全体に黒褐色（7.5YR3/2）を呈し、Ⅱ層に較べて硬質かつ緻密な堆積土である。本層は、上部が削平されるため、Ⅱ層とは明瞭に区分できる。層内には比較的軟質な褐色土（7.5YR4/2）と黒褐色を呈する 2～4cm 台の硬質ブロックが混じり合い、マンガンが付着する砂粒が定量含まれる。本層最下部にはⅣ層への漸移層が不連続な状態で薄く堆積するが、明確な線引きが困難なことから分

層は行わなかった。

Ⅳ層 本遺跡の基盤層。黄橙(10YR8/6)を呈する硬質粘土層である。本層の表面には乾燥によって生じた多数のクラックが見られ、漸移層が筋状に浸透する。発掘調査地に近い段丘斜面ではⅣ層直下に砂礫層が厚く堆積するが、時間的な制約により深度80cmまでの間で本層の基底を確認することはできなかった。

第3節 遺 構

A 概 要

本次調査で確認した遺構は、竪穴住居址状遺構1箇所・袋状土坑2基・砂集積土坑9基・皿状土坑22基・ピット241基である。このうちピットの配列に基づき、18棟の掘立柱建物を想定した。主要調査区にあたる2区ではⅢ層上面とⅣ層上面で遺構調査を行い、前者から袋状土坑2基・砂集積土坑8基・皿状土坑20基・ピット81基、後者から砂集積土坑1基・皿状土坑2基・ピット143基を確認した。調査区壁面での知見に基づけば、これらはⅣ層直上の漸移層から掘り込まれる一部のピットを除き、Ⅲ層上面を確認面とする遺構と考えられる。南部1区はⅢ層が削平されており、Ⅳ層上面から竪穴住居址状遺構1箇所、皿状土坑2基・ピット24基を確認した。北部3区は、砂集積土坑2基・ピット11基からなる。砂集積土坑はⅢ層上面を掘込面とする。

所属時期は、中期前葉・後期前葉・後期中葉である。大半が後期前葉後半の南三十稲場式期に属し、中期前葉と特定できる遺構は砂集積土坑1基のみである。後期中葉はピット1基に限定される。

これらの中で特筆されるのは、類例が乏しい9基の砂集積土坑である。いずれも皿状土坑の中に多量の砂粒が堆積するもので、砂粒のあり方から破碎石英が大半を占める1基と磨耗砂を主体とする8基に分けられる。後者の中には砂の総重量が8kgにおよぶものがあり、遺跡の外部から搬入・保管した施設と考えられる。

B 遺 構 の 区 分

1) 土 坑 (SK)

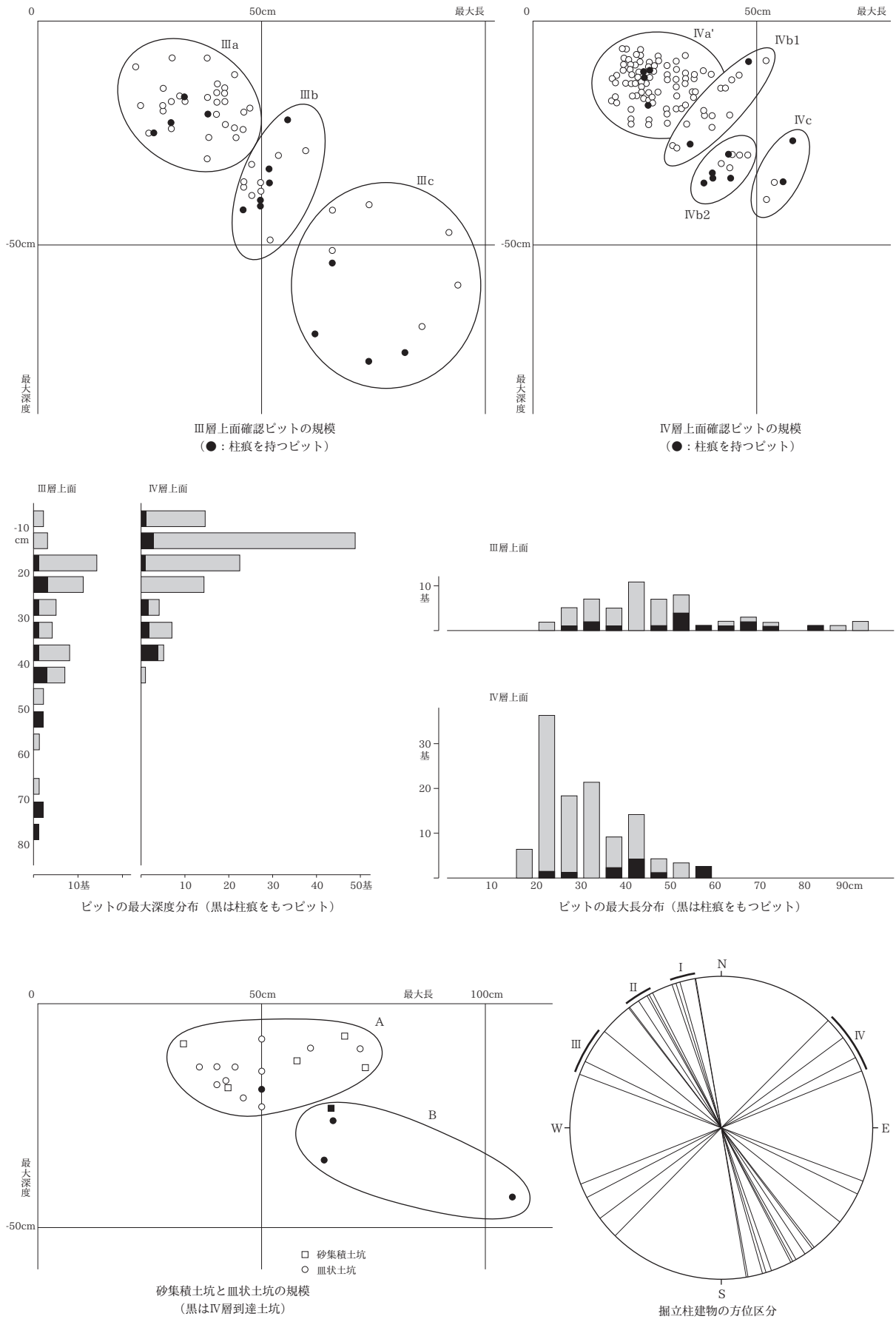
柱穴とは見なし難い落込みを土坑とした。これらは、下端が張り出す「袋状土坑」と深度50cmに満たない「皿状土坑」に大別できる。第6図のように、後者は深度25cm未満のAとそれ以上のBに区分する。下底面がⅣ層に到達するものはAの1基とBの4基に限定される。皿状土坑の中には多量の砂粒が堆積するものがある。堆積砂には、破碎した石英・長石からなるものと磨耗砂が大半を占めるものの別があり、ともに人為的に集積された砂粒と考えられることから「砂集積土坑」として分離する。

平面形・断面形は第7図のように区分する。覆土の堆積状況としては、単一層をなすA、水平ないしはレンズ状に堆積するB、ブロック状のCに分けられる。

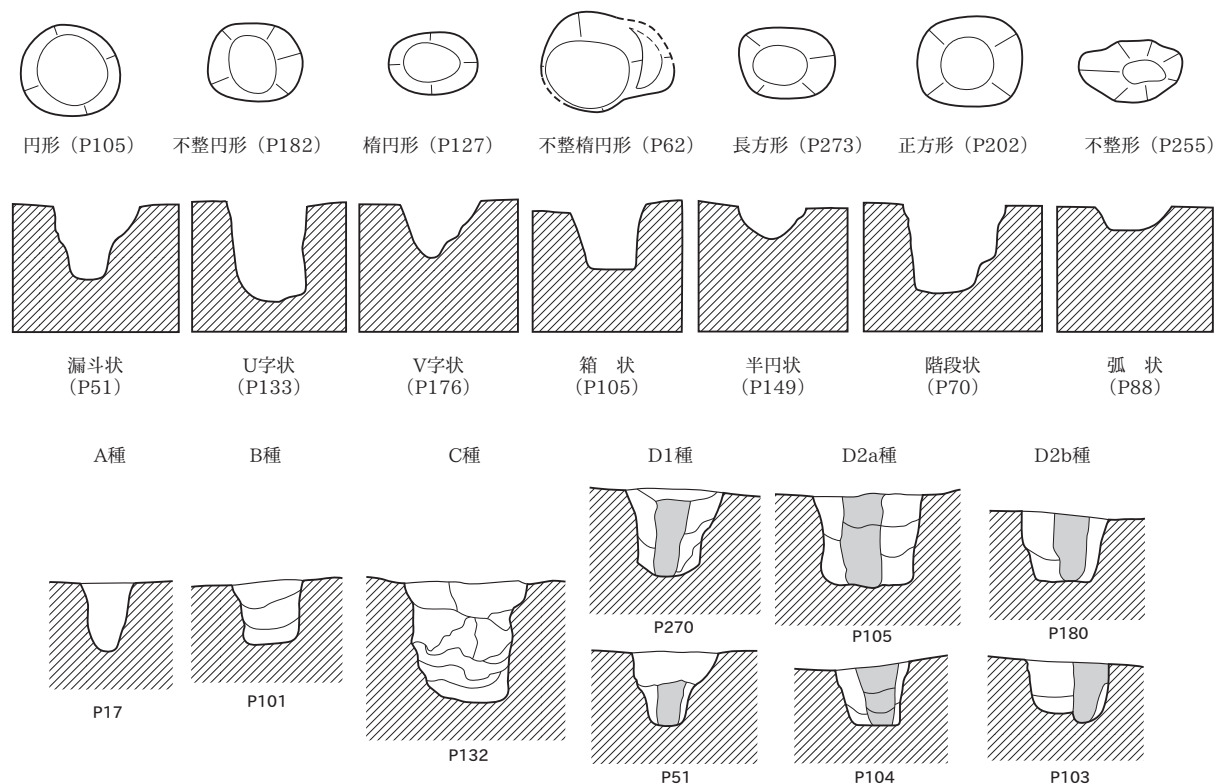
2) ピ ッ ト (Pit)

柱穴の可能性のある落込みを「ピット」とした。前述のように、本次調査ではⅢ層上面とⅣ層上面で遺構調査を行った。このうちⅢ層上面確認遺構の所属時期は中期前葉と後期前葉が混在し、遺構構築面が削平されているものと判断できた。調査区壁面での観察によれば、Ⅲ層上面から掘り込まれる遺構が大多数を占めており、Ⅳ層上面確認遺構の大半は下部のみの把握に留まると考えられる。ピットの認定にあたっては深度10cm以上を目安としたが、そうした状況を考慮して10cmに満たない場合もピットとみなした。

最大幅と最大深度に基づくピット規模を第6図に示す。Ⅲ層上面のピットは、小型のⅢa、中型のⅢb、大型のⅢcに区分できる。Ⅳ層上面では大型ピットが欠落し、小型ピットに偏る。Ⅳ層上面確認ピットの最大深度がⅢ層に較べて明らかに浅い点は、包含層掘削の過程で上部が失われたためと判断できる。Ⅳ層上面確認ピットは、Ⅲaの分布域に含まれるⅣa1、Ⅳbが小型化したⅣa2、ⅢaとⅢbの中間域に分布するⅣb、Ⅲbの分布域と重なるⅣcに分かれる。Ⅳ層上面確認ピットの本来的な規模としては、Ⅳa1が小型、Ⅳa2とⅣb種が中型、Ⅳc



第6図 土坑・ピットの規模と掘立柱建物の方位



第7図 ピットの形状と覆土の区分 (トーンは柱痕)

種が大型ピットに対応するものとみられる。

平面および断面形は、第7図のように区分する。覆土は、単一層をなすA、レンズ状もしくは水平堆積するB、土壌ブロックが集合堆積するC、柱痕が残るDに大別する。Dの覆土はバラエティーに富む。レンズ状の堆積土が柱痕上面を覆うD1と柱痕が確認面まで立ち上がるD2に区分でき、後者については柱痕内の覆土が水平またはレンズ状に堆積するD2aと単層のD2bに細分する。

3) 掘立柱建物 (SB)

Ⅲ層上面とⅣ層上面確認ピットの中には柱痕が残るものがあり、掘立柱建物の存在を予想させた。建物の想定にあたっては、Ⅲ層・Ⅳ層の別に関わらず覆土出土土器の下限と類似規模のピットをもとに有意な配列を示す柱穴を求めた。

18棟のうち14棟は調査区外への広がりを想定したものであるが、平面形の上で亀甲形と正方形～長方形をなしており、図版9左上のような区分を行った。Aは亀甲形建物で、本次調査区では大型に属すグループである。B～Fは正方形～長方形をなし、大型(B)・中型(C・D)・小型(E・F)に区分する。Bは正方形に近い平面形をもつ。中型建物は桁行3m前後を有するが、梁間2.5mほどのC類と幅が狭く長方形をなしたD類に二分する。桁行2.6m以下の小型建物は、梁間2m以上のE類と2mに満たないF類に細分する。

18棟は主軸方向にバラエティーがあり、第6図右下のように区分する。Ⅰは北北西10°～20°、Ⅱは北北西28°～39°、Ⅲは北北西53°～70°、Ⅳは北北東43°～66°の間に主軸をもつグループとする。

C 遺構各説

1) 竪穴住居址状遺構

S18 (図版10)

1区の南西コーナーに位置する。最大深度34cmの大規模な掘込みが弧を描きながら調査地外に広がる遺構

である。覆土には下部に多量の炭化物を含む灰黄褐色土、上部に多量のIV層ブロックが混じる黒褐色土が堆積する。両層から南三十稲場式土器が出土しており、後期前葉後半の遺構と判断できる。本遺構については周溝や柱穴・炉址が確認できず、下底面がフラットでない点に問題があるが、本次調査地の遺構の中で破格の規模をもち、平面形が竪穴住居に類似することから竪穴住居址状遺構とした。

2) 袋状土坑

2区から2基確認した。ともに、後述の亀甲形掘立柱建物に隣接する点の特徴である。

SK109 (図版 10)

SB402の北西コーナーに隣接する。平面形は最大長1m弱の不整円をなし、最大深度71cmを測る。本土坑は側壁が崩落して原形を失っているが、南西部の下底付近に張り出しが確認できる。断面図に示す4層・6層はIV層ブロックを多量に含む崩落土で、下底部に炭化物を多量に含む黒褐色土が堆積する。最下部7層から南三十稲場式土器が出土しており、後期前葉後半の遺構とみなされる。

SK251 (図版 10)

SB401の北東コーナーに隣接する。本遺構はⅢ層上面で平面形が不明瞭なため、5cm掘り下げた段階で全体形が明らかになった。平面形は最大長66cmの楕円、最大深度は48cm。側壁は西側で弱くオーバーハングする。下底面は平坦で、下部層に淡色土、中位層に側壁の崩落土、上部層に炭化物を多量に含む黒褐色土が堆積する。トレンチから三十稲場式新段階の土器が出土しており、これを上限とする遺構とみなされる。

3) 砂集積土坑

2区の北東部から3区にかけて9基確認した。Ⅲ層上面地形で見ると、これらは標高20.6m以下に分布し、2区北東部に集中する傾向がある。確認面はSK277がIV層上面、これ以外がⅢ層上面である。所属時期は中期前葉と後期前葉の二時期にまたがる。

SK66 (図版 10)

2区の北西部に位置し、Ⅲ層上面で確認した砂集積土坑の中では最も高域部にあたる。最大長33cm・深さ9cmたらずの小規模な皿状土坑Aで、上部に砂粒が密に堆積していた。採取砂粒は49gにとどまるが、磨耗砂が大半を占める。本土坑付近のⅢ層は層厚10cmにすぎず、削平によって主要部分が失われたことも考えられる。

SK93 (図版 10)

2区の北東部に位置する。平面は最大長74cmの楕円形をなし、最大深度16cmを測る皿状土坑である。覆土は全体にレンズ状に堆積するが、一部に赤褐色粘土粒を含む黒褐色土ブロックが混じる。覆土全体に砂粒が堆積しており、磨耗砂を主体とする1,350gあまりの砂粒を回収した。本土坑の坑底では、中期前葉3期の小型深鉢形土器が横転状態で出土した。土器の内部には砂が充満しており、覆土堆積砂と類似組成をもつ288gの砂粒がえられた。本土坑ではトレンチ内から後期前葉の南三十稲場式土器1点が出土しているが、出土層位が明らかでなく、混在資料の疑いがある。

SK94 (図版 10)

SK93の北に隣接する。平面は最大長66cmの不整楕円形、最大深度23cmの皿状土坑Aである。覆土はレンズ状に堆積する。砂粒の堆積量が最も多い土坑で、1層から259g、2層から317g、3層から7,512gを回収した。砂粒は磨耗砂が大半を占めるが、他の遺構と比較して5mm以上の小礫が多い。所属時期が特定できる土器は出土しなかった。

SK114 (図版 10)

SK94の北に隣接する。平面は最大長58cmの不整楕円形をなし、深度13cmたらずの皿状土坑Aである。単層覆土から、磨耗砂を主体とする2,203gの砂粒を回収した。所属時期が特定できる土器が中期前葉に限定されており、中期に属す可能性がある。

SK218 (図版 10)

調査地外周で行ったトレンチ調査の過程で、東壁下から確認した土坑である。砂層面で見出したため、掘込深度や本来的な形状・規模は明らかでない。1層・2層から、磨耗砂を主体とする113gの砂粒を回収したにとどまる。微細な後期前葉土器が出土した。

SK277 (図版 10)

IV層上面で確認した唯一の砂集積土坑で、SK66の南方10mほどに位置する。最大深度は15cmたらずであるが、皿状土坑Bにあたる遺構である。包含層掘削の過程で上部が失われるため、磨耗砂を主体とする砂粒が1層から300g、2層から287g回収できたのみである。

SK302 (図版 10)

2区の北壁で確認した。III層上面から掘り込まれる幅28cm・深さ9cmの土坑下部に5cmほどの厚さで砂粒が堆積していた。調査区外周のトレンチ掘削で主要部分を失っており、北壁内10cmの間に砂粒が残存していた。回収した砂粒は32gにとどまる。他の土坑と異なり、大半が破碎した石英・長石からなる。

SK310 (図版 10)

3区のIII層掘下げ中に砂粒が密に堆積することから明らかになった遺構である。調査地北部に広がることから、北壁での層序記録後調査区を拡張して全体を把握した。平面形は最大長69cmの楕円形、断面形は深さ7cmの弧状をなし、下部の2層内に砂粒が密に堆積していた。回収した砂粒は621gで、磨耗砂を主体とする。土壌水洗をつうじ、微細な中期前葉土器を確認した。

SK318 (図版 10)

SK310の広がり把握する過程で、これに切られた状態で確認した。北に広がるため、全体規模は明らかでない。壁面での最大幅は43cm、最大深度14cmを測る。113gの砂粒を回収した。

4) 皿 状 土 坑

1区のIV層上面で3基、2区のIII層上面で20基、2区のIV層上面で2基確認した。

1 区 (図版 17)

東側と西側に1基ずつ分布する。ともに深さ15cmほどの浅い土坑であるが、IV層上部まで削平されることから、皿状土坑Bにあたる遺構とみられる。SK28から中期前葉土器が出土した。

2 区 III層上面 (図版 11)

北西部を除き全域に分布しており、図版11に16基を示す。20基の中で最も大きい土坑は、長さ106cm・深度43cmを測るSK74である。これを含めて25cm以上の深度をもち、底面がIV層まで達する土坑は6基にとどまる。埋積土は単層をなすものが15基を占め、SK113・SK119・SK125で多量の炭化物を含む。SK77・SK160はレンズ状堆積、SK74はブロック状に堆積する少数例である。土器を伴う土坑は18基あり、うち14基から時期を特定できる資料が出土した。内訳は、後期前葉土器が出土したもの8基、中期前葉土器に限定されるもの6基である。

2 区 IV層上面 (図版 11)

中央付近と南西コーナー付近に1基ずつ分布する。ともに最大深度は20cmに満たない。時期が特定できる土器は出土しなかった。図版11に示すSK243は、単層覆土に多量の炭化物が含まれる。

5) 掘立建柱建物

1区で2棟、2区で16棟が想定できた。重複が著しく、単独で存在するものは1棟に限られる。

SB401 (図版 12)

2区の北東部に位置し、一部が調査地の東に広がる。主軸IIIの亀甲形建物で、SB404～406・411～417の10棟と重複する。本次調査区の中では最も規模が大きく、梁間3.2m・桁行3.9mを測る。床面積は推定13.5m²。柱穴規模は、東西2本の妻柱が大型のC種、他の3本が中型のB種である。柱穴覆土はC類1基(Pit95)・

D1 類 1 基 (Pit95)・D2a 類 2 基 (Pit84・133)・D2b 類 1 基 (Pit80) からなり、D2a 類の 2 基では柱痕内に多量の炭化物を含む。本建物では、Pit133 を中心に計 70 点、総重量 2,839g の搬入礫が出土した。特殊な遺物としては、Pit56 の下部 4 層と Pit133 の埋土 4 層下部からアスファルト塊が出土した。Pit56・80 から南三十稲場式土器、Pit95・133 から後期前葉土器が出土しており、後期前葉後半の建物とみなされる。

SB402 (図版 12)

SB401 の南西に隣接し、一部が調査地の南に広がる。主軸 I の亀甲形建物で、SB404・406・412・417・418 の 5 棟と重複する。全体規模は SB401 に較べやや小さく、梁間 2.8m・桁行 3.7m を測る。床面積は推定 11.1m²。柱穴規模は妻柱が大型、他の 3 本が中型で、SB401 と同様のあり方を示す。柱穴覆土は D1 類 2 基と B 類 2 基からなる。このうち D1 類の 2 基では、Pit82 の柱痕内に多量の炭化物、Pit159 の柱痕上堆積土に IV 層ブロックと炭化物を多量に含む。Pit82 を中心に計 34 点、総重量 869g の搬入礫が出土した。Pit82・108・159 から南三十稲場式土器が出土しており、後期前葉後半の建物とみなされる。

SB403 (図版 13)

2 区の東壁寄中央に位置する。主軸 I の大型方形建物 B で、SB401・402・404～406・412～414・416・418 の 10 棟と重複する。全体形は正方形に近く、長軸 3.7m・短軸 3.3m を測る。床面積は 12・2m²。柱穴規模は、全体形がわかる 3 基すべてが大型に属す。柱穴覆土は、B 類 1 基・D2a 類 3 基からなり、前者の各層内や後者の柱痕内に多量の IV 層ブロックを含む。Pit55 を中心に計 64 点、総重量 3,433g の搬入礫が出土した。Pit55・78 から南三十稲場式土器が出土しており、後期前葉後半の建物とみなされる。本建物の Pit55 は SB405Pit123 を切っており、掘立柱建物の先後関係が把握できる唯一の事例となる。

SB404 (図版 13)

2 区の南東コーナーに位置する。一部が調査区南に広がる。主軸 II の大型方形建物 B で、SB401～403・412・418 の 5 棟と重複する。全体形は正方形に近く、長軸 3.1m・短軸 3.0m を測る。床面積は 9.3m²。全体形がわかる 2 基の柱穴規模は、西側の Pit70 が大型、東側の Pit98 が中型に属す。柱穴覆土はともに D1 類。2 基の柱痕内には多量の IV 層ブロックを含み、Pit70 の柱痕上堆積土には多量の焼土や炭化物を含む。Pit70 を中心に計 20 点、総重量 1,091g の搬入礫が出土した。Pit70 から南三十稲場式土器が出土しており、後期前葉後半の建物とみなされる。

SB405 (図版 13)

2 区の北東コーナー付近に位置する。主軸 III の中型方形建物 D で、SB401・403・411・413・415 の 5 棟と重複する。全体形は長方形をなし、長軸 3.1m、単軸 2.0m を測る。床面積は 6.2m²。柱穴規模は、すべてが中型に属す。覆土は、B 類 2 基・D2a 類 1 基・D2b 類 1 基からなる。B 類の 2 基では多量の IV 層ブロック、D2a 類の Pit193 柱痕下部では多量の炭化物を含む。Pit123・193 から南三十稲場式土器が出土しており、後期前葉後半の建物とみなされる。

SB406 (図版 14)

SB405 の南に隣接する。主軸 III の中型方形建物 D で、SB401・402・417 の 3 棟と重複する。長軸 2.9m、単軸 2.0m を測り、SB405 と類似した形状・規模をもつ。床面積は 5.8m²。柱穴は 2 基が III 層上面、2 基が IV 層上面で確認した。規模はいずれも中型である。柱穴覆土は D1 類 2 基・D2b 類 2 基からなる。4 基の柱痕内に炭化物を少量含み、Pit107 の柱痕上堆積土には IV 層ブロックが混じる。Pit103 から南三十稲場式土器が出土しており、後期前葉後半の建物とみなされる。

SB407 (図版 14)

SB405・406 の西に隣接する。柱穴は 1 基が III 層上面、3 基が IV 層上面で確認した。主軸 II の中型方形建物 D で、SB415 の一部と重複する。長軸 3.1m・短軸 1.7m を測り、SB405・406 に較べてやや北寄りの主軸をもつ。床面積は 5.3m²。いずれも柱穴規模は小型に属すが、III 層上面からの最大掘込深度は 31cm である。覆土は、A

類3基とD2b類1基。前者にあたるPit172では多量の炭化物、他の2基ではIV層ブロックが混じる。Pit183から南三十稲場式土器が出土しており、後期前葉2期の建物とみなされる。

SB408 (図版14)

2区の北西コーナー付近に単独で存在する小型の長方形建物で、調査区の西部に広がる。主軸はIで、長軸2.5m・短軸1.5mを測る。床面積は推定3.1m²。柱穴規模は、すべてが中型である。覆土はA類・B類・D2b類に分散するが、いずれの柱穴も多量の炭化物を含む。土器の出土量は総じて少なく、所属時期が明らかな資料は中期前葉3期の1点に限られる。

SB409 (図版14)

1区の中央部に位置し、竪穴住居SI408の北東に隣接する。長軸2.4m・短軸1.7mを測る小規模な長方形建物Fで、主軸IIのSB410と類似方向で重複する。床面積は推定4.1m²。本建物が構築される1区はIV層の上部が削平されているが、柱穴規模はいずれも中型に該当する。覆土はすべてA類に属し、IV層ブロックを含む。Pit38で南三十稲場式土器の小片が出土しており、後期前葉後半の建物とみなされる。

SB410 (図版15)

SB409と西側が一部重複する。長軸2.2m・短軸1.5mの小型建物Fで、北東部が調査地外に広がる。床面積は推定3.3m²。柱穴規模は、いずれも中型。Pit10・P17から南三十稲場式土器が出土しており、後期前葉後半の建物とみなされる。

SB411 (図版15)

2区の北東部に位置し、SB401・405・407・413の4棟と重複する。主軸IVに属し、長軸2.9m・短軸2.5mの中型長方形建物C種である。床面積は7.3m²。柱穴規模は2基が中型、1基が小型に該当する。覆土はB類1基・D1類1基・D2b類1基に分かれ、B類のPit275下部でIV層ブロック、D1類のP51柱痕上堆積土で多量の炭化物を含む。Pit275・182を中心に計20点、総重量13,041gの搬入礫が出土した。Pit51の柱痕上堆積土から南三十稲場式土器が出土しており、後期前葉後半の建物とみなされる。

SB412 (図版15)

2区の東壁側中央部に位置し、SB401・403・404・413・414・416・417の7棟と重複する。長軸2.9m・短軸2.4mを測り、主軸IIの中型長方形建物C種である。床面積は6.9m²。推定全体形が明らかな3基の柱穴は、いずれもIV層上面で確認した。柱穴規模は小型のA類であるが、III層上面からの最大掘込深度は27cmを有する。覆土はいずれもA類で、多量の炭化物を含む。Pit268から南三十稲場式土器の細片が出土しており、後期前葉後半の建物とみなされる。

SB413 (図版15)

2区の北東コーナー付近に位置する。一部が調査区外の東に広がり、SB401・403・405・414・416の5棟と重複する。主軸Dの小型方形建物V種で、長軸2.4m・短軸2.2を測る。床面積は推定5.3m²。調査区内の柱穴3基はIV層上面で確認した。いずれも規模は小型に該当するが、III層上面からの最大掘込深度は36cmを有する。覆土はすべてがA類で、このうち2基で多量の炭化物を含む。土器の出土量は少なく、時期の特定が可能な資料は中期前葉の小片1点のみである。

SB414 (図版16)

2区の東壁側中央部に位置する。東側のコーナーが調査地外に広がり、SB401・403・412・413・416の5棟と重複する。主軸Iの小型方形建物E種で、長軸2.5m・短軸2.2mを測る。床面積は推定5.5m²。調査地内の柱穴3基は、IV層上面で確認した。いずれも小型であるが、III層上面からの最大掘込深度は24cmを測る。覆土はA類1基とD2b類2基からなり、柱痕内や単層覆土に多量の炭化物を含む。土器の出土量は僅少で、時期の特定が可能な資料は中期前葉の小片1点のみである。

SB415 (図版16)

2区の北東コーナー付近に位置する。調査地北側に一部が広がり、SB401・405・411の3棟と重複する。方位Ⅳの小型長方形建物E種で、長軸2.5m・短軸2.1mを測る。床面積は推定5.3m²。調査地内の3基の柱穴はいずれもⅣ層上面で確認した。柱穴規模はすべてが小型であるが、Ⅲ層上面からの掘込最大深度は31cmを有する。覆土はいずれもA類で、Pit226では多量の炭化物を含む。所属時期が明らかな土器は出土しなかった。

SB416 (図版16)

2区の東壁中央部に位置する。東側の一部が調査地外に広がり、SB401・405・412～414の5棟と重複する。方位Ⅱの小型方形建物E種で、長軸2.3m・短軸2.1mを測る。床面積は推定4.8m²。調査地内の柱穴3基はいずれもⅣ層上面で確認した。柱穴規模はすべて小型であるが、Ⅲ層上面からの掘込最大深度は31cmを有する。覆土はA類・D1類・D2b類に分散する。このうち、D1類のPit220とD2b類のPit211では、柱痕内から多量の炭化物が出土した。土器の量は僅少で、時期が特定できる土器は中期前葉の細片1点のみである。

SB417 (図版16)

2区の中央部に位置し、SB401～403・406・412の5棟と重複する。方位ⅡもしくはⅣの小型方形建物Eで、長軸2.2m・短軸2.1m。床面積は4.6m²。4基の柱穴はⅣ層上面で確認した。いずれも柱穴規模は小型であるが、Ⅲ層上面からの最大掘込深度は31cmを有する。覆土はA類3基とB類1基からなる。このうち前者の3基では多量の炭化物を含む。時期の特定が可能な資料は中期前葉の細片1点のみである。

SB418 (図版16)

2区の南壁側中央部に位置する。南の一部が調査区外に広がり、SB401・402の2棟と重複する。方位ⅠもしくはⅣの小型方形建物F種で、長軸1.9m・短軸1.8m。床面積は3.4m²。3基の柱穴はⅣ層上面で確認した。いずれも小型の柱穴で、Ⅲ層上面からの最大掘込深度は31cmを有する。覆土はA類2基とB類1基。前者のPit178でⅣ層ブロックが混じり、後者のPit248で多量の炭化物を含む。出土土器は2点のみで、うち1点が中期前葉に属す。

6) ピ ッ ト (図版17・18)

掘立柱建物が想定できなかったピットは173基を数える。

1区 (図版17-Pit7～Pit41)

18基からなる。本地区はⅢ層が削平されるため、Ⅳ層上面から確認した。このうち7基から後期前葉土器が出土した。規模はⅣa種14基・Ⅳc種1基・不明3基、覆土はA種15基・B種2基・D1種1基である。

2区Ⅲ層上面 (図版17-Pit52～Pit121・図版18-Pit127～Pit157・Pit290)

60基からなる。規模は、Ⅲa種33基・Ⅲb種8基、Ⅲc種5基・不明14基。覆土はA種29基・B種20基・C種3基・D2a種2基、D2b種5基、不明1基。共伴土器の内訳は、中期前葉のみが9基、後期前葉を伴うもの18基。図版17・18に23基を示す。このうち、Pit52・63・81・97・101・115はⅣ層ブロックを多量に含む。D2a種のPit72・104は、柱痕内に多量のⅣ層ブロック、D2b種の柱痕ではPit148で多量の炭化物、Pit290で多量のⅣ層ブロックを含む。Pit62・81・124・290から総重量1kgを上回る搬入礫が出土した。

2区Ⅳ層上面 (図版18-Pit161～Pit288)

96基からなる。規模はⅣa1種77基・Ⅳa2種8基・Ⅳb種3基・Ⅳc種3基・不明5基。覆土はA種68基・B種18基・C種1基・D1種1基・D2a種1基・D2b種7基である。このうち、Pit161・162・169・214・217・255・257・258・264は多量の炭化物を含む。D2a種のPit209とD2b種のPit221・Pit249の柱痕内には多量の炭化物、Pit267の柱痕内には多量のⅣ層ブロックを含む。共伴土器は、19基が中期前葉に限定され、18基が後期前葉を伴う。Pit221・269・270・288から総重量1kgを上回る搬入礫が出土した。

3区

10基からなる。確認面は、Ⅲ層上面1基、Ⅳ層上面9基。規模はⅣa種5基・不明5基。覆土はいずれもA種である。

第V章 遺 物

第1節 概 要

縄文時代前期前葉から弥生時代後期までの遺物が出土した。土器の出土量は総重量で71.18kgを測る。このうち8割を占めるのは中期前葉で、3時期に区分できる。これに次いで多いのは後期前葉で、後半の南三十稲場式が大半を占める。1次調査で多量に出土した三十稲場式は新段階の資料が若干確認できたのみである。このほか縄文時代前期前葉・前期終末・後期中葉・晩期後半、弥生時代後期土器が少量えられた。中期前葉以前と後期中葉以降の遺物は本遺跡で新たに確認できた資料である。

石器類は237点出土した。定型石器は75点を数え、食料の調達・加工に関わるA群5種と工具類のB群3種、非実用的なC群1種に分けられる。これらの多くは中期前葉に属す資料と見られる。A群石器の主体を占めるのは植物質食料の加工に関わる磨石・敲石類で、遺構覆土で実施した土壌水洗をつうじ5種の炭化種実が検出された。B群石器で最多を占める磨製石斧は、樹木の伐採・加工に使用された用具である。炭化材の樹種同定によれば、クリが主体を占め、建築材や燃料材としての重要な役割を物語る。

土製品は土偶・土製円盤が出土した。土偶の中には、全形を留める中期前葉の極小土偶が含まれる。このほか、土器製作の過程で生じた可能性が高い焼成粘土塊が82点出土した。

新津丘陵の地理的特性にちなんだ遺物として、アスファルト塊とアスファルト付着土器が出土した。前者の中には不純物を含み精製滓とみなされる資料が含まれる。後者は中期初頭と後期前葉に属し、新津丘陵におけるアスファルトの利用時期を考える上で重要な資料となる。

第2節 縄文時代の遺物

縄文土器・土偶・土製円盤・焼成粘土塊・各種石器・石核剥片類・搬入礫・炭化種実・焼骨・アスファルト塊が出土した。

A 縄 文 土 器

前期前葉から晩期後半までの縄文土器が総重量にして70.98kg出土した。遺構内出土資料は、Ⅲ層上面確認遺構が19.59kg、Ⅳ層上面確認遺構が8.43kg。所属時期が明らかな資料は前者で5.92kg、後者で1.74kgあり、Ⅲ層上面確認遺構では前期0.1%・中期67.9%・後期32%。Ⅳ層確認遺構は地区によって異なり、1区が中期15%・後期85%、2区と3区が前期1.9%・中期73%・後期25.1%となる。遺構外では、Ⅰ・Ⅱ層から28.53kg、Ⅲ層から14.63kg出土した。時期が明確な資料はⅠ・Ⅱ層で7.28kg、Ⅲ層で5.59kg。所属時期の内訳は、Ⅰ・Ⅱ層が前期0.9%・中期86%・後期13%・晩期0.1%、Ⅲ層が中期89%・後期11%である。

1) 区 分

① 所属時期に基づく大別と分類

所属時期から次のような計7群に大別する。

I 群土器

植物繊維を多量に含み、前期前葉に属す土器。小破片が1点出土したのみである。表面の劣化が著しく、細別時期は明らかでない。

Ⅱ 群土器

東北南部を中心に分布する前期終末の大木6式系土器。4点の出土にとどまる。いずれも隆帯を配し、中段階から新段階の資料と見られる。出土量が乏しいため、粘土紐を用いた浮線文土器は確認できなかった。

Ⅲ 群土器

中期前葉土器群。全体の8割を占める主体資料である。北陸系(A)・関東系(B)・東北系(C)からなり、3時期に区分する。北陸編年〔能都町教委1986〕に照らせば、1期は新保式Ⅱ期、2期は新保式Ⅲ期、3期は新崎式Ⅰ期に平行する。以下の区分名称は、大別群・系列・時期・分類の順に表す。第8図に竹管文施文幅を示す。

ⅢA1群(第9図1~8)

1期の北陸系土器。本段階の竹管文は、幅4mm台に中心をもつ。

- a種(1~3) 口縁部に設けた幅広い文様帯に斜行格子目文(1~3)を施すグループ。文様帯の下端には隆帯を設けるケースが一般的である。口端や隆帯には施文の有無と文様にバラエティーが見られ、縦位撚糸文(1)・連続爪形文(2)・無文(3)の別がある。
- b種(4~6) 口縁部文様帯が欠落するグループで、口端の横位竹管文下に縦位竹管文を等間隔に施す4・5とU字竹管文を配す6からなる。端部には、連続爪形文(5・6)・無文(4)の別がある。
- c種(7・8) 体部に縄文以外の文様を欠くが、口端に縦位撚糸文(7)や刻目(8)を加えるグループである。

ⅢA2群(第9図9~20)

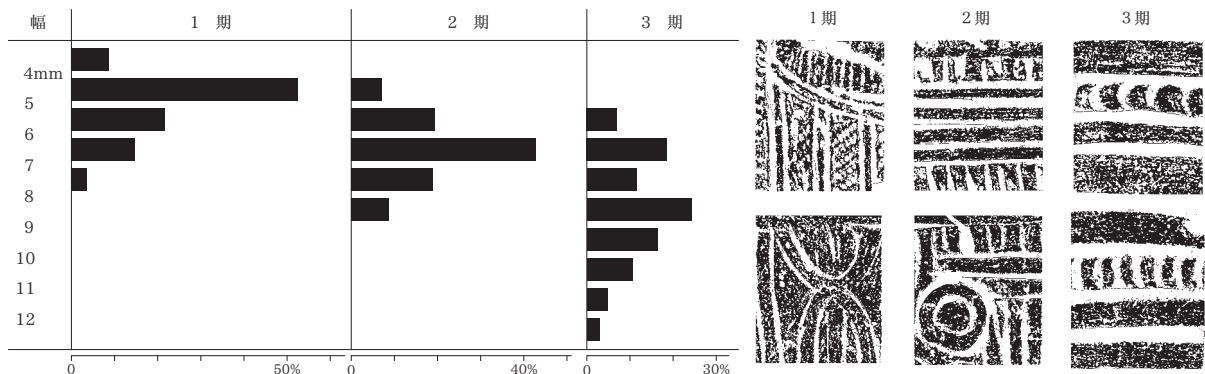
2期の北陸系土器。本段階の竹管文は、幅6mm台に中心をもち幅広化する。

- a種(9~15) 口縁部に設けた区画内に彫刻蓮華文(9~11)・三角形彫去文(12)・軌軸文(14)・六角形鋸歯文(13)・細線文(15)を単独または複合施文するグループ。彫刻蓮華文は、三角形彫去の部位から正位(9)・逆位(10)・正逆共存(11)の別がある。
- b種(16・17) 口縁部に設けた区画内に縦位竹管沈線を充填するグループ。縦位沈線は密集施文されておらず、僅かな間隔をおいて施す場合が一般的である。
- c種(18) a種・b種の横位区画内に刺突文を複合施文するもの。
- d種(19・20) 口縁部に設けた区画内に撚糸文や縄文を施したり無文帯とするグループ。

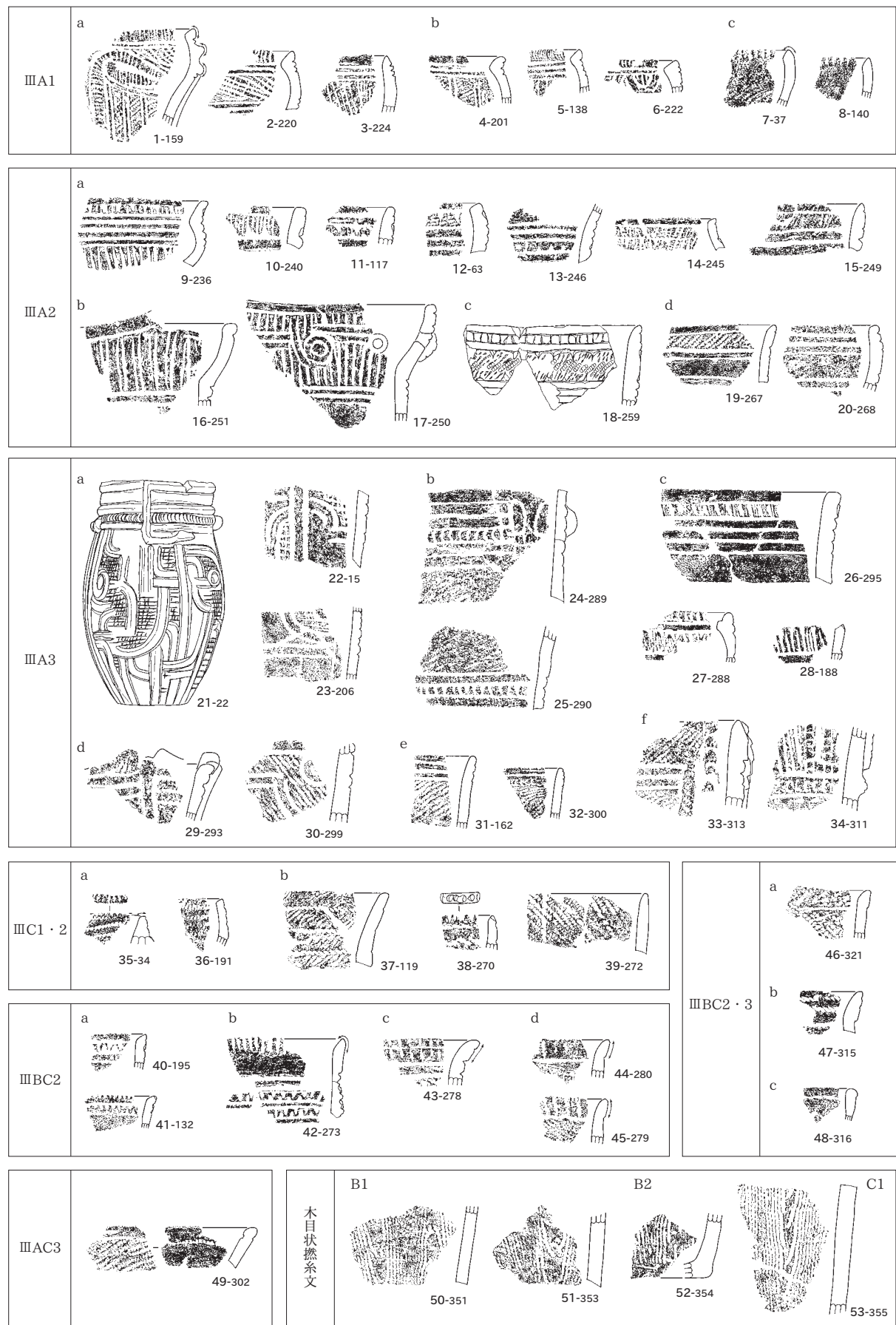
ⅢA3群(第9図21~34)

3期の北陸系土器。本段階の竹管沈線はさらに幅広化し、5mm~12mm台の間に分散する。

- a種(21~23) 縄文が欠落し、竹管文・連続爪形文・格子目沈線によって器面をうめるグループ。格子目沈線は単沈線からなり、縦位→横位の順に施される。
- b種(24・25) a種と同様の竹管文や連続爪形文をもつが、体部に縄文を施すグループ。細片化した場合a種との区分が困難になるため、観察表ではa・bと表記する。
- c種(26~28) 口縁部に設けた区画内に蓮華文を施すグループ。蓮華文には二種の別があり、彫去が簡略



第8図 Ⅲ群土器の竹管文施文幅



第9図 III群土器の区分

化された粗大彫刻蓮華文(26)と竹管先端刺突による狭義の蓮華文(27・28)に分かれる。

d種(29・30) 器面上半の文様が竹管文に限定され、体部に縄文を施すグループ。

e種(31・32) 体部に広く縄文を施し、口端にのみ竹管文や連続爪形文を加えるグループ。

f種(33・34) 爪形刺突を加えた隆帯を器面上部に配すもの。体部には縄文を施す。

ⅢC1・2群(第9図35～39)

東北系列に属す1期から2期の土器である。2種に区分する。

a種(35・36) 口縁部に設けた幅の広い肥厚帯に絡条体を押圧するグループ。

b種(37～39) 器面全体に縄文を施し、口縁部に単節の縄側面を押圧するグループ。

ⅢBC2群(第9図40～45)

2期に属す関東・東北系土器である。4種に区分する。

a種(40・41) 口縁部に設けた幅の狭い区画内に交互刺突文を施す五領ヶ台Ⅱ式系土器。

b種(42) a種の口端に東北的な縦位撚糸文が加わる折衷土器。

c種(43) 口端に縦位撚糸文と竹管沈線を施すが、交互刺突文が欠落するもの。

d種(44・45) 口端の肥厚帯に縦位撚糸文、体部に縄文を施すグループ。

ⅢBC2・3群(第9図46～48)

2期から3期に属す関東北部・東北南部系列の土器。口縁部に幅の狭い肥厚帯を設けるグループで、肥厚帯の文様から3種に区分する。

a種(46) 肥厚帯に斜縄文を施すもの。

b種(47) 肥厚帯もしくは肥厚帯下に単節縄文原体の側面を押圧するもの。

c種(48) 肥厚帯を無文とするもの。

ⅢAC3群(第9図49)

ⅢA3e種の口端内面に角押文を施す浅鉢で、北陸系と関東系の折衷土器である。1例に限定される。

木目状撚糸文(第9図50～53)

縄文が施される体部資料の中で、木目状撚糸文・結束羽状縄文・結節縄文は本群に限定できる。このうち越後平野の周辺に見られる木目状撚糸文は、次のような5種からなる。

単軸に2孔を穿ち、2本の縄を左右同一方向に巻くものをA種とする。前期終末～中期初頭に限定され資料で、本遺跡では確認されていない。単軸に穿った1孔に2本の縄を深く挿入するものをB種とする。左右同一方向に巻くB1種(50・51)と左右異方向に巻くB2種(52)に分かれ、1期～2期に属す可能性が高い。単軸に穿った1孔に1本の縄を入れるものをC種とする。右同一方向に巻くC1種(53)と異方向に巻くC2種に分かれる。本遺跡では前者が出土しており、3期に属す可能性が高い。

Ⅳ群土器

後期前葉土器で、全体の2割を占める。良好な資料が乏しいため、新旧2段階に大別するにとどめる。在地土器(A)と関東系土器(B)からなる。

ⅣA1群

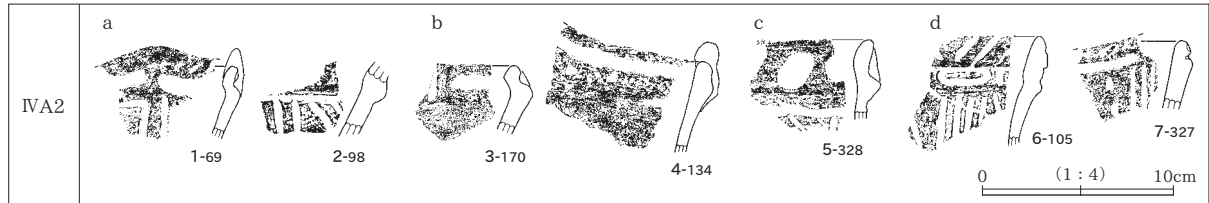
後期前葉前半の三十稲場式土器で、深鉢・鉢・蓋からなる。橋状把手の形態や刺突文の特徴などから、新段階の資料とみなされる。

ⅣA2群(第10図)

後期前葉後半の南三十稲場式土器である。以下の4種に区分する。古段階から中段階の資料が大半を占めており、新段階の指標となる多条細沈線文土器は見られない。

a種(1・2) 口縁下に2条一単位の平行沈線を施すもの。

b種(3・4) 口縁下に幅広い無文帯を配すもの。



第10図 IVa2群土器の区分

c種(5) 口縁部の肥厚帯に指頭圧痕を施すもの。

d種(6・7) 体部に間隔の狭い数条の並走沈線を施すグループ。口端に斜位沈線を加えるものも多く、口縁部肥厚帯の文様は、凹線・1～2条の沈線・列点などのバラエティーがある。本群の中で新要素をもつ土器である。

IVb群

関東の堀之内Ⅱ式系土器である。

V群土器

関東の加曽利B式に並行する後期中葉土器。深鉢頂部の大型突起、横位沈線間に沈線区切文や沈線・縄文を施す資料が見られるが、総数5点の出土にとどまる。

VI群土器

晩期中葉末もしくは後葉前半に属す微細な浅鉢口縁部破片が1点出土したのみである。

② 含有物

本遺跡の土器の中には多種にわたる粒子が含まれており、6倍ルーペを使用して観察を行った。確認できた含有物は、①石英・長石、②角閃石、③雲母、④流紋岩・チャートなどの硬質岩石、⑤泥岩・凝灰岩などの軟質岩石、⑥軽石、⑦透明度の高いガラス状粒子、⑧微細な土器片、⑨赤色粒子、⑩海綿骨針に大別できる。

石英・長石は、両者の峻別が困難な微細粒子を含むため一括する。石英・長石や岩石類は、表面が明瞭に磨耗したものと破碎状態にあるものからなるため、観察表では前者を○、後者を□で示す。軽石は角閃石を含み、福島県沼沢火山起源と見なされる。ガラス状粒子は破碎粒子と表面が平滑なものからなり、前者を□、後者を○で示す。赤色粒子は粘土内に含まれる酸化第二鉄が焼成時に発色したものである。①～⑩の含有量については、1cm四方に5点以上の粒子が確認できたものを黒で示す。

本書掲載資料366点での出現頻度は、①磨耗粒子25%・①破碎粒子86%、②67%、③8%、④磨耗粒子83%・④破碎粒子45%、⑤17%、⑥7%、⑦54%、⑧2%、⑨59%、⑩52%である。以下の区分は、混和材と見なされる①～⑧に基づく。土器の含有物は必ずしも均一に含まれるわけではない。本書掲載資料は小破片が多いことから多分に不確定な面があり、多量含有粒子をもとに次のような区分を行う。

I種(写真図版25-1～7)

磨耗した石英・長石と硬質岩石の両者または一方を含むグループである。これに付随する多量含有物から6種に区分し、磨耗した石英・長石を含む1と磨耗岩石に限定される2に細分する。

Ia種(1・2) 多量含有粒子が磨耗した石英・長石および硬質岩石・角閃石・破碎硬質岩石に限定されるもの。磨耗石英・長石を含むIa1種(1)とこれが欠落するIb2種(2)に細分する。

Ib種(3・4) Ia種に多量の破碎石英・長石が加わるもの。雲母の含有率が高い傾向にある。磨耗石英・長石を含むIb1種(3)とこれが欠落するIb2種(4)に細分する。

Ic種(5) 破碎した軟質岩石を多量に含むもの。Ia・b種と同様に、Ic1種とIc2種(5)に細分する。

Id種 多量の軽石を含むもので、磨耗石英・長石が欠落するId2種に限定される。

Ie種(6) ガラス状粒子を多量に含むもの。Ie1種(6)と磨耗石英・長石が欠落するIe2種に細分する。

If種(7) 微細な土器片を多量に含むもの。If1種と磨耗石英・長石が欠落するIf2種(7)に細分する。

II種 (写真図版 25-8～11)

磨耗粒子が欠落するグループである。多量含有物のあり方から5種に区分する。

IIa種 (8) 破碎した石英・長石を多量に含むもの。雲母の含有率が高い傾向にある。

IIb種 (9) 破碎した軟質岩石を多量に伴うもの。

IIc種 (10) 破碎した軽石を多量に含むもの。

IId種 (11) 微細な土器片を多量に含むもの。

IIe種 (12) 多量含有粒子が角閃石に限定されるもの。

2) 遺構内出土土器

所属時期が特定できる資料と口縁部・底部資料を図版 19～23 に示す。本次調査で出土した縄文土器は8割が中期前葉に属す。その一方で、遺構の構築時期は後期前葉が主体を占める。遺構出土土器の多くは中期前葉に属す資料によって占められており、良好な一括資料は得られなかった。

a 竪穴住居址状遺構

SI8 (図版 19-1～8)

合計 960g (口端遺存 6 個体) 出土した。1～4 は 1 層、5～7 は 2 層からの出土である。

IV群 1～7 は南三十稲場式土器。2～4 は A2a 種の体部資料にあたり、各資料の沈線間には、2・3 が縄文、4 が円形刺突を施す。1・5～7 は A2d 種で、7 は注口土器の体部資料。8 はこれらと同時期とみられる口縁部資料である。3 は多量のガラス状粒子を含む。

b 袋状土坑

SK109 (図版 19-9～17)

合計 702g (口端遺存 4 個体) 出土した。図示した 9 点のうち、9・12・14・15・17 は上部 1～3 層、16 は最下部 7 層からの出土。

III群 (9～15) 1 期から 3 期までの幅がある。9 は 1 期の A1a 種で、斜行格子目文内の隆帯上に連続爪形文を施す。10・11 は 2 期の資料。前者は逆位の彫刻蓮華文を施す A2a 種、後者は BC2a 種もしくは 2b 種で、体部に結束羽状縄文を縦位施文する。10 は多量の微細土器片を含む。12～15 は 3 期の資料。14・15 は A3a 種、12・13 は 3a 種もしくは 3b 種である。15 は軽石を含む。

IV群 (16・17) とともに南三十稲場式土器で、A2d 種にあたる。本遺構の所属時期を明示する資料である。

SK251 (図版 19-18～21)

合計 358g (口端遺存 2 個体) 出土した。18・20 は上部 1 層からの出土。

III群 (18) 18 は中期前葉 3 期の A3b 種もしくは A3d 種の体部資料。

IV群 (19～21) 19 は三十稲場式新段階の深鉢。波状口縁の頂部から口縁部にかけて隆帯を配し、後者に刺突を加える。沈線文を施す 20 は多量のガラス状粒子を含む。21 は縄文施文土器。

c 砂集積土坑

SK93 (図版 19-22～28)

556g (口端遺存 2 個体) 出土した。図示 7 点の中で、22 は坑底から横転した状態で出土した (写真図版 6)。

III群 (22～27) 22・23 は中期前葉 3 期に属す。22 は口縁部が欠損するが、それ以下が完存する高さ 16cm 最大径 10cm の小型深鉢である。器面に描かれる文様は、連続爪形文を施す横位竹管を境にして頸部文様帯と体部文様帯に分かれる。前者は隆帯・無文帯・竹管文からなり、文様帯の上端から垂下する L 字形の隆帯とその中間に配す楕円形突起によって四分割される。体部文様帯は、突起下から垂下する竹管文によって二単位に分かれ、幾何学的な竹管文様の中に格子目沈線を充填する。24～27 は中期前葉の大椀で捉えられる縄文施文資料。24・25 は横位施文による結束羽状縄文と結節縄文を施す。27 は底径 6.5cm の底面にスダレ状圧痕が残る。縦糸・横糸の間隔は、前者 14mm・後者 8mm。24・25 は多量のガラス状粒子、26 は軽石を含む。

Ⅳ群(28) 28はガラス状粒子を多量に含む南三十稲場式土器で、A2d種にあたる。トレンチから出土したため層位が明らかでなく、混在資料の疑いがもたれる。

SK114 (図版19-29・30)

54g出土した。所属時期が明らかな土器は、中期前葉に限られる。

Ⅲ群(29・30) 29はA1a種の体部資料で、斜位の集合竹管沈線を施す。縦位回転によって撚糸文を施す30は、中期前葉1期ないしは2期の土器。

d 皿状土坑

SK49 (図版19-31)

90g出土した。所属時期が明らかな土器は中期前葉のみである。

Ⅲ群(31) 31は1期に属す。A1a種の体部破片で、上端部に連続山形文を横位に施す。

SK50 (図版19-32・33)

58g(口端遺存1個体)出土した。中期前葉と後期前葉土器が混在する。

Ⅲ群(32) 32は2～3期の東北・関東系土器。肥厚した口縁下に単節の縄側面を押圧するBC2・3種である。

Ⅳ群(33) 33は南三十稲場式土器の体部資料。小破片ではあるが、A2a種とみられる。

SK59 (図版19-34・35)

64g(口端遺存4個体)出土した。所属時期が明らかな土器は中期前葉のみである。

Ⅲ群(34・35) 35は細身の竹管沈線を等間隔に垂下させる1期もしくは2期の体部資料。34は口縁部肥厚帯に絡条体を3条押圧し、端部に縦位の撚糸文を施すC1・2a種である。

SK64 (図版19-36)

本土坑から唯一出土した土器である。

Ⅲ群(36) 36(写真図版25-2)はA3a種もしくは3b種の口縁部。

SK74 (図版19-37～42)

合計1,060g(口端遺存7個体)出土した。中期前葉土器と後期前葉土器が混在する。

Ⅲ群(37～40) 37は縄文で覆われる口縁部の端部に撚糸文を縦位施文するA1c種。39は縄文を地文とし、体部に垂下沈線とB字文を施す2期の土器。体部資料の40は、撚糸文を斜位施文し、竹管沈線を垂下させる2期の土器である。38は端部に竹管沈線、それ以下に縄文を施すA3e種。

Ⅳ群(41・42) 41は内傾した口縁下に凹線と刻目を加えた隆帯をめぐらし体部に縄文を施す三十稲場式土器。軽石を少量含む。42は南三十稲場式土器で、A2d種にあたる。

SK83 (図版19-43・44)

合計197g(口端遺存1個体)出土した。中期前葉土器を主体とするが、Ⅰ群とⅣ群土器が1点ずつ含まれる。

Ⅰ群(43) 本次調査で新たに確認された唯一のⅠ群土器である。文様の判別が困難なため細別時期は不明であるが、多量の磨耗岩石を含むことから、新津丘陵で製作された前期前葉土器と考えられる。

Ⅲ群(44) 44は木目状撚糸文を地文とし、口縁部に設けた横位区画下段に三角形彫去を施す2期の土器である。A2a種と2d種の特徴を合わせもった資料と言える。

SK113 (図版19-45)

本土坑から唯一出土した土器である。

Ⅲ群(45) 端部に結節をもつ縦位施文の縄文を地文とし、細い竹管沈線を垂下させる1期の資料である。

SK119 (図版19-46)

84g出土した。所属時期が明らかな土器は中期前葉のみである。

Ⅲ群(46) 幅広い竹管沈線に連続爪形文を施すA3a種もしくは3b種で、ガラス状粒子を多量に含む。

SK120 (図版 19-47)

本土坑から唯一出土した土器である。

Ⅲ群 (47) 47 は横位施文による結節縄文をもつ土器で、1期～2期の資料とみられる。

SK125・126 (図版 19-48)

SK125 から 51g、SK126 から 119g の土器が出土した。ともに中期前葉土器と後期前葉土器が混在する。

Ⅳ群 (48) 48 は両土坑出土資料が接合した三十稲場式新段階の鉢形土器である。推定最大径 28cm を測り、4 単位の大波状口縁をもつ。頂部から口縁下にキャタピラ状の刻目を加えた隆帯を配し、口端下に沈線と楕円形凹線を添える。体部には斜位・横位回転による縄文を施す。

SK160 (図版 19-49)

64g 出土したが、所属時期が明らかな土器は 49 のみである。

Ⅲ群 (49) 太い竹管沈線を垂下させる土器で、A3a 種の体部資料。

e 掘立柱建物

SB401 (図版 20-50～65)

5 基の柱穴から 2,362g (口端遺存 8 個体) 出土した。このうち 4 基から出土した 16 資料を示す。

Ⅲ群 (50～54・56・57・60・61・63・64) 1期から3期の土器からなり、本遺構出土資料の主体を占める。50・51 は 1 期の A1a 種である。前者は口縁部文様帯の下端に連続山形文、それ以下に縦位施文による撚糸文を施す。後者は区画内に斜行格子目文を施す資料である。縄の側面圧痕をもつ 57 は 1 期から 2 期の東北系土器 C1・2b 種で、軽石を含む。53・56・60・63 は 2 期の土器である。56・60・63 は口縁部の横位区画内に各種文様を充填する。63 は三角形彫去文を施す A2a 種。56・60 は縦位竹管を密に施す A2b 種で、前者は多量の微細土器片を含む。53 は口縁部に地文帯と無文帯を設け、口縁部・体部に木目状撚糸文 C1 種を縦位施文によって施す A2d 種で、推定径は 24cm を測る。

52・54・61・64 は 3 期の土器である。格子目沈線を施す 61 は A3a 種、56 は A3a 種もしくは 3b 種。54 は口縁部が外反する推定径 20.5cm の深鉢。竹管沈線が口端に限定され、口縁下に縄文を施す A3e 種である。52 は、肥厚口縁と体部に横位・縦位施文による縄文を施す東北・関東系の C2・3a 種。

以上の中で、50b・54b は隣接グリッドのⅢ層上面から出土した。Ⅲ層上部が削平された際、本遺構内の土器が周囲に拡散した資料とみられる。

Ⅳ群 (55・58・59・62) 55・58 は南三十稲場式土器。58 は A2a 種にあたり、55 も同種の可能性がある。59・62 は櫛歯条線を施す後期前葉土器である。口端がやや肥厚する 65 は、同時期とみられる無文土器。

SB402 (図版 20-66～78)

4 基の柱穴から 1,649g (口端遺存 14 個体) 出土した。このうち 3 基からの 13 資料を示す。

Ⅱ群 (75) 75 は前期終末の口端隆帯貼付土器。左の欠損部に一對の突起を有する資料とみられる。

Ⅲ群 (66・67・71・76) 71 は木目状撚糸文 B1 種を施す 1～2 期の土器。66・67 は 3 期に属す。前者は A3a もしくは 3b 種で、軽石を含む。後者は東北・関東系の BC2・3c 種である。76 は底面にスダレ状圧痕が残る。縦糸・横糸間隔は、前者 13mm・後者 6mm。

Ⅳ群 (68～70・72・73・77・78) 68～70 は A2a 種。73 は A2b 種の無文帯下端にあたる小破片。78 は単節縄文 LR を斜位施文した地文土器で、櫛歯条線をもつ 72 とともに後期前葉の資料である。

SB403 (図版 20-79～85)

3 基の柱穴から 1,619g (口端遺存 12 個体) が出土した。このうち Pit55・78・105 出土の 7 点を示す。

Ⅲ群 (83・84) 84 は 1 期、83 は 2 期の土器。前者は A1a 種の体部資料である。83 は口端が欠損するが、区画内に正位の彫刻蓮華文を施す A2a 種。

Ⅳ群 (79～82・85) 79・82・85 は南三十稲場式土器。79 は A2c 種、82 は A2d 種にあたり、後者の裏面

と破断面にはアスファルトが付着する。85は口縁部肥厚帯に太い沈線を施す。80・81はこれらと並行する関東地方の堀ノ内Ⅱ式系土器である。

SB404 (図版 21-86～91)

2基の柱穴から 1,368g (口端遺存 5 個体) 出土した。このうち Pit70 出土資料を示す。

Ⅳ群 (86～91) 86～89は南三十稲場式土器。87はA2c種で、軽石を含む。86・89はA2d種。前者の凹線内には円形刺突を加える。89の推定径は28cm。体部全体に縄文を施し口端に左右非対照の小突起をもつ90、下部に無文帯が広がる91は近似した時期の土器とみられる。

SB405 (図版 21-92～95)

4基の柱穴から 843g (口端遺存 1 個体) 出土した。このうち Pit273 出土資料を示す。

Ⅲ群 (92・93) 92は2期、93は3期の土器。前者は正位の彫刻蓮華文を施すA2a種、後者は幾何学的な竹管区画内に格子目沈線を充填するA3a種にあたる。

Ⅳ群 (94・95) 95は底面に網代圧痕が残る。94は口端が肥厚する無文土器。ともに後期前葉の資料であるが、細分時期は明らかでない。

SB406 (図版 21-96～98)

4基の柱穴から 352g 出土した。このうち Pit103・286 出土土器を示す。

Ⅲ群 (96・97・99・100) 99は口縁下の縄文上に単節の縄側面を押圧する東北系のC1・2b種。96は縄文上に横位竹管沈線を施すA2d種、100は三角形彫去文と捺糸文Lを施すA2a種。97は竹管沈線の区画内を縄文帯とするA3b種もしくはA3d種、99は粗大蓮華文を施すA3c種である。

Ⅳ群 (98) 98は南三十稲場式土器で、2条一単位の沈線を体部に施すA2a種。

SB407 (図版 21-101・102)

3基の柱穴から 105g (口端遺存 1 個体) 出土した。Pit149・287 出土の2点を示すが、このほPit183で微細な後期前葉土器がえられている。

Ⅲ群 (101・102) 102は1期、101は3期に属す。前者は口端が欠損するが、口縁部文様帯が省略されたA1b種。後者はA3a種もしくは3b種の口縁部で、軽石を含む。

SB408 (図版 21-103)

3基の柱穴から 78g が出土したにとどまる。このうち Pit171 出土の1点を示す。

Ⅲ群 (103) 竹管区画内に格子目沈線を充填する3期のA3a種である。

SB410 (図版 21-104～108)

3基の柱穴から 286g (口端遺存 2 個体) 出土した。3基出土の5点を示す。

Ⅳ群 (104～108) 104～107は南十稲場式土器。いずれもA2d種である。104はガラス状粒子を多量に含む。108は曲線的な沈線区画の中に繊細な縄文を充填する同時期の土器。

SB411 (図版 21-109・110)

3基の柱穴から 514g (口端遺存 3 個体) 出土した。このうち Pit51 出土の2点を示す。

Ⅲ群 (109) 109は肥厚した口縁下に竹管沈線、端部に縦位の捺糸文を施す。2期に属すBC2a種もしくはBC2b種。

Ⅳ群 (110) 110は2条の縦位沈線内に列点を施す南三十稲場式のA2a種である。

SB413 (図版 21-111)

2基の柱穴から 39g が出土したにとどまる。このうち Pit236 出土の1点を示す。

Ⅲ群 (111) 111は木目状捺糸文B1種を施す体部資料。1期から2期に属す土器である。

f 1 区 ピ ッ ト (図版 22-112～118)

16基から総重量 1,193g (口端遺存 5 個体) が出土した。6基出土の7点を示す。

Ⅲ群 (116・117) 117は2期、116は3期に属す。前者は口縁部に設けた区画内に正位・逆位の彫刻蓮華文を施すA2a種。後者は器面上部に連続爪形文を加えた横位竹管を施し、下部の縄文帯に竹管沈線を垂下させるA3b種である。底面にはスタレ状圧痕が残る。

Ⅳ群 (112～115・118) 112・114・115・118は南三十稲場式土器。口縁部の肥厚帯に指頭圧痕を施す112はA2c種で、軽石を含む。縁帯文下に平行沈線を施す118はA2d種、114・115はその体部資料。118はガラス状粒子を多量に含む。113はこれらに平行する関東の堀之内Ⅱ式系土器である。

g 2区Ⅲ層上面確認ピット (図版22-119～163・図版23-164～177)

42基から総重量7,534g(口端遺存32個体)が出土した。このうち23基出土の58点を示す。

Ⅱ群 (130) 130は口端が欠損するが、縦位隆帯の両側に左右対称形をなした横位隆帯を配す。胎土には軽石を含む。本群の中では古様相をもつ土器とみられる。

Ⅲ群1期 (124・138～140・159・160・163・176) 口端および口端下の隆帯上に連続爪形文を施す124・139、斜格子目文施文土器の端部に縦位捺糸を施す159はA1a種にあたる。縦位の竹管沈線を等間隔に施す160・163、U字文と垂下沈線を施す176は、A1a種もしくは1b種の体部資料である。138は口縁部の横位竹管沈線下から等間隔に竹管文を垂下させるA1b種。140は口縁部の無文帯端部に刻目を加えるA1c種で、軽石を含む。以上の資料の中で、159bと159c(図版24)は隣接グリッドのⅡ層下部から出土した。Ⅲ層削平時に出土した土器がⅡ層に混入した資料とみられる。

Ⅲ群1期～2期 (119・166・168) 119は東北系のC1・2b種で、縄文上に単節の縄側面を等間隔に押圧する。168は木目状捺糸文B1種を施す。端部結束原体を縦位に施文する166も本時期の資料である。

Ⅲ群2期 (126・131～133・141・149・153・161・172) 彫刻蓮華文を正位に施す133・153・161・172、逆位に施す149、軌軸文と六角形鋸歯文を複合する126はA2a種にあたる。口縁部区画内に縦位竹管を施す131はA2b種。132は刻目を加えた口端下に交互刺突文を加える五領ヶ台Ⅱ式系土器である。141はA2d種の体部資料で、横位区画沈線に鈍角的な角度で連続爪形文を施す。

Ⅲ群2期～3期 (120・121・128・136・142・143・150・155・157・158・162・164・165・173) 区画内に格子目沈線を充填する121・136はA3a種、155・157・173はA3a種もしくは3b種、143は蓮華文を施すA3c種である。細片ではあるが、158はA3d種の可能性があり、162はA3e種にあたる。164・165は、口端が肥厚する2～3期の東北・関東系土器。前者は肥厚帯に縄側面を押圧するBC3b種、後者は肥厚部を無文帯とするBC3c種である。このほか、結節羽状縄文を縦位に施す128は本時期に属す可能性が高く、底部にスタレ状圧痕が残る150も中期前葉の大枠で捉えられる。後者は胎土内に微細な土器片を含む。

Ⅳ群1期 (177) 177は、単節縄文の地文上にS次状沈線を施す。三十稲場式新段階の深鉢体部である。

Ⅳ群2期 (134・144・148) 134・144は、口縁下に無文帯をもつ南三十稲場式A2b種である。

Ⅳ群 (151・152) 152は所属時期が判然としない口縁部破片であるが、口端内面にアスファルトが付着する。本資料が出土したPit97では櫛歯条線を施す151を伴うことから、後期前葉に属す資料とみられる。

h 2区Ⅳ層上面確認ピット (図版23-178～216)

68基から総重量3,672g(口端遺存13個体)が出土した。Ⅲ層上面確認ピットに較べ土器の出土量が少ない点は、小規模ピットが大半を占めることに加え、Ⅲ層掘下げ時に遺構上部が失われたことが要因と考えられる。

Ⅲ群1期 (180・181・185・201・203・205・210) 斜行格子目文や斜位集合沈線を施す181・205はA1a種の口縁部文様帯、縦位集合沈線を施す185は文様帯下端の土器。201はA1b種の典型資料である。口端に連続爪形文を施す180は、A1a種もしくは1b種の細片である。縦位竹管を等間隔に施す203・210も本時期に属す。

Ⅲ群1・2期 (179・191・192) 191は口縁部に3条の絡条体圧痕を施すC1・2a種。179は木目状捺糸文B1種のみを施す口縁部資料である。端部に結節をもつRL原体を縦位施文する192も本時期に属す可能性が高い。

Ⅲ群2期(195・198・200・207・216) 198・200は正位彫刻蓮華文を施すA2a種、207は縦位集合沈線を施すA2b種。交互刺突を施す口縁部資料の195はBC2a種、216はBC2a種もしくは2b種である。

Ⅲ群2・3期(178・215) 178・215は口縁部肥厚帯に縄文を施す東北・関東系のBC2・3a種である。

Ⅲ群3期(188・196・199・202・204・206・213・214) 口端突起下の小区画や体部の曲線的な区画内に格子目沈線を充填する202・206はA3a種、199・204はA3a種もしくは3b種にあたる。蓮華文を施す188はA3c種にあたる。213はA3d種の可能性がある口縁部資料。

Ⅳ群2期(182・184・186・187) 184は口縁部の横位沈線下に斜位の太い沈線を施す南三十稲場式A2a種。186はA4d種の口端資料で、並走沈線を施す182・187も同種の体部資料である。

Ⅴ群(212) 遺構内から出土した唯一の後期中葉土器である。横位の区画沈線間に曲線的な仕切沈線を施す加曽利B2式段階の資料。

3) 遺構外出土土器

第Ⅳ章で述べたように、2区で確認した遺構の大半はⅢ層上面から掘り込まれる。そのため、遺構外出土土器として図版24～26に示す資料の中でⅢ層出土資料については、Ⅳ層上面確認遺構の覆土資料が少なからず含まれると考える必要がある。北東部で行ったⅢ層の分層調査では下部でⅢ群1期・2期の土器が多い傾向にあったが、良好な層位データを得るには至らなかった。

Ⅱ群(図版24-217・218)

前期終末の東北系土器である。217は湾曲しながら立ち上がる口縁部の端部に逆U字形の隆線を貼付する。218は口縁に横位隆帯がめぐり、一端に縦位隆帯を配し、隆帯上に細い沈線を施す。多量の微細土器片を含む。

Ⅲ群1期(図版24-219～235)

220・224～228は、A1a種の口縁部もしくは口縁部文様帯の資料である。いずれも斜行格子目文を施すが、先行時期に較べラフなタッチで文様が描かれる。横位竹管沈線に接して連続山形文を施す229・230、Y字文やU字文を施す231～235はA1a種もしくは1b種の体部資料。

219・221は口縁部の横位竹管沈線下に縦位沈線を等間隔に施すA1b種である。口縁下にU字文を施す222も本グループとみられる。このうち221は、口端内面に縄文を施す数少ない事例である。

口端や隆帯上には、連続爪形文(220～223・229)・縦位撚糸文(219)・無文(224～226)の別があり、連続爪形文の割合が高い点が特徴である。以上の中で、228の内面にはアスファルトが付着する。

Ⅲ群1期～2期(図版24-270～272)

単節の縄原体を用い、270・271は横位、272は縦位・斜位に側面押圧するC1・2群である。270の端部には刻目を施す。272は軽石を含む。

Ⅲ群2期(図版24-236～269・273～280)

236～249は、A2a種の口縁部もしくは口縁部文様帯の資料である。236～239・241～243は正位の彫刻蓮華文、240は逆位の彫刻蓮華文、244・245・247は軌軸文、246は軌軸文と六角形鋸歯文、248・249は細線文を施す。集合沈線文・U字文・B字文を施す260～265は、A1a種の体部資料である。このうち238の横位竹管上には、鈍角的な角度から連続爪形文を施す。以上の中で、246・248は微細土器片を含む。

口縁部や口縁下に設けた区画内に縦位竹管沈線を垂下させる250～258はA2b種にあたり、縦位沈線間に僅かな隙間をもつ。258の横位竹管上には238と同様の連続爪形文が施される。以上の中で、251(写真図版25-6)は表面が球状をなした多量のガラス状粒子、255は軽石を含む。

259は、本次調査で出土した唯一のA2c種。縦位竹管を充填した口縁部文様下に縄文施文がなされた区画を設け、上下の区画沈線に接して三角形彫去、区画内に斜位の刺突文を加える。A2a種とA2d種の特徴を合わせもった特異な土器である。

266～269は口縁部に横位区画を設け、縄文帯や無文帯とするA2d種。縄文には縦位施文による撚糸文(266)

と横位施文による斜縄文(267・268)の別がある。266は軽石、268は多量のガラス状粒子を含む。

口端に縦位撚糸文を施す273～280はBC2群土器。竹管沈線上に交互刺突文を施す273・274はBC2a種にあたり、口端のみを遺存する275～277は2b種もしくは2c種とみられる。275・276は軽石を含む。竹管文下に縄文を施す278は唯一のBC2c種。279・280は口縁部肥厚帯下に縄文を施すBC2d種にあたる。以上の資料に施される縦位撚糸文は、1期に較べて間隔が広く、すべての土器で縄Lを用いる点が特徴である。

Ⅲ群 2期～3期 (図版25-315～322)

315～322は、口縁部に幅の狭い肥厚帯をもつ BC2・3群土器。肥厚帯には、斜縄文を施す319～322、縄の側面を押圧する315・318、無文帯とする316・317の別がある。315・320は軽石、321は微細土器を含む。

Ⅲ群 3期 (図版25-281～314)

Ⅲ群土器の主体を占める資料である。281～292は、竹管沈線上に鋭角的な角度から連続爪形文を加える。

283・284は口縁部の突起下に区画内に格子目沈線を充填し、A3a種とみられる。体部に縄文帯をもつ289・290はA3b種。口縁部区画内に蓮華文を施す288はA3c種にあたり、軽石を含む。このほかの資料は、A3a種もしくはA3b種の資料である。口縁部や体部の区画内に格子目沈線を充填する304～307・310や体部下端に竹管沈線を施す308・309はA3a種。304は多量のガラス状粒子、309は軽石を含む。294・295はA3c種にあたり、口縁部の区画内に簡略化された彫刻蓮華文を施す。後者は下段の無文帯下にも彫刻蓮華文を伴う文様帯を配す。3期の彫刻蓮華文は施文手法が一様でなく、2期に近い端正な294と縦位沈線に類した295の別がある。293・296～301は体部に縄文帯をもち、連続爪形文が欠落すると見られる土器である。293は多量のガラス状粒子を含む。295・296は口端の小突起から隆帯を垂下させ、前者は口縁部の区画内に縦位沈線を充填する。体部資料の297も縦位隆帯をもち、隆帯上には縄文を施す。

300・301は竹管沈線が口端に限定されるA3e種。前者は沈線下に爪形刺突を加える。ともに体部全体を縄文で覆う土器である。302はB3群。外面は301に類似するが、内面に一条の角押文を施す。関東と北陸的な要素を合わせもつ折衷土器である。311～314は、爪形刺突を加えた縦位・横位の隆帯を突起下と体部文様帯下端に配す。図示の4個体が出土した。このうち311は胎土内に破碎した軽石を多量に含む特異な資料である(写真図版25-10)。314も多量のガラス状粒子と共に軽石を含む。

Ⅳ群 1期 (図版26-323～325)

図示した3個体が出土したのみである。波状口縁をなす深鉢323は、縄文を加えた隆帯を無文帯下にめぐらす。324は深鉢体部で、縄文上にS字状の沈線を施す。325は蓋。端部に返しを作出し、外面に縄文を施す。

Ⅳ群 2期 (図版26-326～333)

8点を図示した。332・333は口縁下に広い無文帯をもち、前者の口端には円形刺突を施す。326は小波状口縁の頂部下に円形の指頭圧痕を加え、両サイドに凹線をめぐらす。328は口縁部肥厚帯に楕円形の指頭圧痕を加え、体部に縦位・斜位の沈線を施す。331は小突起に孔を設け、端部内面に沈線を施す。327・329・330は本時期土器群の主体をなすグループで、口端に斜位沈線を加え、口端下に凹線を施す。以上の中で、326は軽石、330・331は多量のガラス状粒子を含む。

Ⅴ群 (図版26-334～337)

本群と特定できる資料は、図示した4点がすべてである。334は頂部が皿状をなした大型把手の頂部破片。内外面に入念な研磨を行う。335～337は、横位沈線を施す口縁部～体部資料。335・337は繊細な縄文、336は横位の櫛歯条線を充填する。337は軽石を多量に含む。

Ⅵ群 (図版26-338)

1点の出土にとどまる。338は浅鉢の口縁部破片。端部が肥厚し、口端下に隆帯がめぐる。細片のため、晩期後半に属す土器として捉えておく。

縄文施文土器 (図版 26-340～357)

縄文のみを施す口縁部資料を 340～345 に示す。340～342 は 2 種の異撚り原体を使用する非結束羽状縄文。343～345 の斜縄文は、343 が単節 LR、344 が端部を結縛した LR、345 が RL を横位施文する。357 は体部資料であるが、結束羽状縄文を縦位施文する。340・344・345・357 は軽石を含む。以上の中で、340～342・344・357 は中期前葉土器とみなされる。

346～355 は木目状撚糸文で、いずれも縦位に施文する。346～353 は B1 種、354 は B2 種、355 は C1 種。使用原体は R が優勢である。356 は繊細な網目状撚糸文を施す。以上の資料は中期前葉に属す。

小型無文土器 (図版 26-358・359)

358 は推定径 10cm の小型無文土器。体上部から外傾する器形をもち、中期前葉の資料とみなされる。359 は底径 4.2cm を測る。所属時期は明らかでない。

底部 (図版 26-360～366)

底面に組織圧痕が明瞭に残る資料を図版 26 に示す。360～364 はスダレ状圧痕をもつ中期前葉土器。360 は軽石、363 は多量のガラス状粒子を含む。365・366 は、網状圧痕をもつ IV 群もしくは V 群土器。ともに二本越え二本潜り一本送りの編物である。365 は多量のガラス状粒子を含む。

B 土 製 品

土偶と土製円盤が出土した。被熱によって生成した「焼成粘土塊」についても本項でとりあげる。

1) 土 偶 (図版 26-367～369)

図版 24 に示す 3 点が出土した。

367 は 2 区 III 層から出土した。整理作業の過程で存在が明らかになったため、出土状況は不明である。頭部正面が欠損するが、欠損面に風化が見られないことから、発掘時の損傷と判断できる。本資料は体長 3.9cm、最大幅 2.6cm、最大厚 2.2cm を測る中期前葉の完形土偶である。全体のプロポーシオンは頭部 32%・体部 42%・脚部 26% からなり、頭部の比率が高い数値を示す。頭部の側面観は台形を呈す。平坦な頭頂部の縁辺に頭髪を表現した縦長の凹凸を施す。体部の正面観も台形を呈する。両腕を表現した隆帯が腹部に添えるような形状に成形される。側面観は正面側が大きく突出する。背面下部には逆ハート形の臀部が表現される。脚部は筒形を呈し、横位の玉抱三叉文を腹部下端に配す。胎土内には磨耗した岩石粒子とともに多量の石英・長石・角閃石を含み (写真図版 25-13)、前述のような土器の含有物分類に従えば I b2 種に該当する資料である。

369 は 2 区 II 層から出土した。最大幅 3.5cm、最大厚 4.5cm を測る大型土偶の右脚で、股下長は 3cm 弱。底の形状は、踵が尖った楕円形を呈する。磨耗した岩石粒子と共に微細な土器片を含み、土器の含有物分類 I a2 種にあたる。中期前葉の土偶である。

368 は 2 区 III 層から出土した後期の土偶である。肩から手先までが残る右腕で、下端に刻目を加え三本指を表現する。現存長 4.5cm、腕の最大径 1.4cm を測る。前述のように、2 区 III 層は中期前葉に形成された遺物包含層である。本資料が出土したグリッドには IV 層上面確認ピットが 8 基あり、これらの上部覆土に包含された資料とみなされる。

2) 土 製 円 盤 (図版 25-303)

III 群 3 期の土器片を再利用し、円形に加工したものである。4.8cm×4.5cm を測る本例に限定される。全周に打欠き成形を行うが、加工面に磨耗は見られない。

3) 焼 成 粘 土 塊 (図版 26-370～378)

82 点出土した。図版 26 に 9 点を示す。最大の資料は、長さ 3.7cm を測る 378 である。重量は 1g 未満から 13g 台の範囲に分布し、全体の 76% が 4g に満たない小型品によって占められる。形状はバラエティーに富み、丸味を帯びる a 種 (370～372)、一部が平坦な b 種 (373・375)、扁平な c 種 (376・377)、竹管状の工具痕が

残る d 種 (374・378) などに分かれる。含有物は総じて少なく、混和材とみなされる粒子が確認できる資料は 19 点 (23%) にとどまる (写真図版 25-14・15)。これらの大半は生地状態で被熱した資料とみられ、土器製作との関連性を具体的に検討することはできなかった。

C 石 器

石核・剥片類 101 点と定型石器 75 点が出土した。後者は、主として食料の調達・加工に関わる A 石器群、工具的な性格をもつ B 群石器、非実用的な用具の可能性が高い C 群石器に区分する。

1) 石核・剥片類・原石 (図版 27-9～27)

石核 10 点・剥片 91 点が出土した。使用石材は、流紋岩 64 点・黒曜石 13 点・頁岩 12 点・玉髓 4 点・チャート 3 点・鉄石英 3 点・石英 1 点・安山岩 1 点からなり、全体の 64% を流紋岩が占める。黒曜石は透明度が高い I 群とやや濁った II 群に大別できる。前者は信州星ヶ塔産と見られ、黒色の雲状晶子が混じる Ia 種、淡色の筋状晶子が混じる Ib 種、晶子を含まない Ic 種に分かれる。後者は産地同定によって新津丘陵産と判明した。このほか、新津丘陵産黒曜石の原石 10 点と玉髓の原石 2 点が出土した。

石核 (12～15・22・23)

石材の内訳は、流紋岩 4 点・黒曜石 4 点・鉄石英 1 点・チャート 1 点である。このうち黒曜石と流紋岩を石材とする 5 点を示す。14・15 は黒曜石 I 群 c 種、12・13 は黒曜石 II 群、22・23 は流紋岩を石材とする。12 の自然面に磨耗の形跡はなく、一般に認識される新津丘陵産黒曜石とは特徴を異にする点が留意される。

14 は B 面上部と D 面全体に自然面が残り、厚さ 5mm 以上の扁平な原石を素材とすることがうかがえる。上下二つの打点もち、A 面→B 面→C 面の順序で剥離する。12 は扁平な玉砂利状原石の一部に剥離を認めるもので、偶発的な欠損のおそれもある。13 は上端部から剥離する。ピンポイントの打点から剥離が行われるため、半円状のリングが広がる。15 は 5 つの剥離面もち、D 面と E 面は A、B 面は C を打面とする。

22・23 は不整形な流紋岩円礫を素材とする。22 は小型礫の 5 箇所を打点とした小剥離、23 は大型礫の先端・側面を打点とした 3 回の剥離が行われる。後者は平坦な右面に磨耗痕と線状痕が見られ、砥石としても使用した資料である。右面のトーンは磨耗範囲を表す。

剥片類 (16～21・24～27)

16～21 は黒曜石、24～27 は流紋岩を石材とする。前者の石質は、21 が I 群 a 種、14・15・17・18・20 が I 群 c 種、16 が II 群である。

7 点の黒曜石製剥片はいずれも自然面を残すが、頻繁な打面転移が行われる。17・19 の右面は、両極打法で剥離する。21 はバルバースカーをもつ唯一の剥片である。4 点の流紋岩製剥片の中で、24・25 は両極打法で作出された典型的な資料である。

原石 (9～11)

黒曜石 10 点・玉髓 2 点が出土した。玉髓の 1 点は大型の母岩、これ以外は玉砂利状の円礫である。図版 27 に黒曜石原石 3 点を示した。黒曜石は総てが新津丘陵産。重量をもとに 3g 未満を小型、3g～4g 台を中型、それ以上を大型とすると、小型 5 点 (10・11)、中型 4 点、大型 1 点 (9) となる。このうち石鏃などの石器素材となりうる原石は、大型の 9 のみである。

2) A 群 石 器 (図版 27-1～8・図版 28-28～38・図版 29-39～42)

石鏃、礫石錘、打製石斧、磨石・敲石類、石皿・台石からなる。

石鏃 (図版 27-1～5)

完成品 2 点と未成品 3 点が出土した。使用石材は、1 が黒曜石 I 群 b 種、2・5 が鉄石英、3・4 が流紋岩である。

1 は Pit263 からの出土。入念な押圧剥離によって端正な形状に作出される。両側縁は丸みを帯び、基部の挟りが最大幅比 20% 以下の弱度凹基鏃である。2 は掘立柱建物 SB401 の柱穴 Pit56 からの出土。長さ 1.4cm た

らずの小型品で、縦長剥片の縁辺にのみ成形加工を行う。側縁・基部が丸味をもった円基無茎鏃である。

越後平野周辺における中期前葉の石鏃は、縦長で最大幅比 30% 以上の強度円基鏃が主体を占める。1 はそれと形態を異にするが、この時期には弱度円基鏃も定量存在する。本例と類似した信州産黒曜石の使用率も高いところから、中期前葉の所産と考えられる。後期になると石鏃が小型化するとともに円基鏃も増加する。2 はそうした特徴を備えた後期前葉の資料である。

3～5 は未成品。3 は Pit65、4 は 1 区Ⅱ層、5 は SK109 から出土した。3 は分厚く作出された平基鏃で、欠損部をトーンで示す。4・5 は剥片の縁辺に成形加工を行う円基鏃である。いずれも後期前葉の形態をもち、遺構内出土の 3・5 は構築時期の推定資料になる。

礫石錘 (図版 29-35・図版 27-39～42)

完成品 3 点と未成品 4 点出土した。

39 は花崗岩、40 はチャートを石材とする完成品。前者は 3 区、後者は 2 区のⅢ層から出土した。ともに小型扁平円礫の長軸端部に抉りをもつ。表裏両面から加工を行うが、抉りが局所にとどまる点の特徴である。

41 は流紋岩、42 は片麻岩、35 は花崗岩を石材とする未成品。41・42 は 2 区Ⅲ層、35 は SK126 から出土した。41・42 は右側長軸端部に二面からの抉り加工を行うが、左側の加工が片面からの剥離にとどまる。35 は、小型扁平円礫を使用する磨石・敲石類との複合例。この資料も一端の抉り加工が片面剥離にとどまる。左側の抉り部が長軸端部から外れることから未成品と判断した。

越後平野周辺における中期前葉の礫石錘は、200g を超える大型品が主体を占める。Ⅲ層出土の 4 点は中期前葉に属す可能性が高いが、この時期としては小型品の部類に入る資料である。SK126 出土の 35 は、中期前葉と後期前葉土器が共伴した。新潟県内では内陸部の後期前葉遺跡で小型礫石錘が残存しており、本遺跡 1 次調査でも 6 点出土した。本例の所属時期は特定できず、後期前葉に下降することも考えられる。

打製石斧 (図版 27-8)

8 は 2 区Ⅱ層から出土した唯一の打製石斧。粘板岩を石材とする。刃部・基部が欠損する中間部の小破片で、撥形の小型石斧とみられる。左は自然面、右は剥離面で、縦長剥片を素材とした可能性が高い。上部は自然面、下部は剥離面からの衝撃で欠損する。

磨石・敲石類 (図版 28-28～36)

磨石・敲石・凹石の総称として磨石・敲石類と呼称する。合計 43 点出土した。このうち、遺構内からの出土資料は 60% を占める。礫の形状から、楕円形を呈し肉厚な A 種、楕円～不整楕円形で扁平な B 種、狭長で扁平な C 種、狭長で肉厚な D 種に大別する。部位別にみた使用痕は、平坦面磨耗率 77%、平坦面敲打 (凹) 率 40%、側面敲打率 40%、先端敲打率 16% である。

30 は花崗岩を石材とする A 種。右側面が敲打によって平坦化し、表裏両面が強く磨耗する唯一の資料である。強い被熱によって欠損する。

28・31・35 は花崗岩、29 は流紋岩、36 は砂岩を石材とする B 種。31 は一平面にのみ磨耗痕を認める。29 は表裏二面に磨耗痕、片面中央に敲打痕を合わせもつ。これ以外は磨耗痕がなく、28 は先端と側面、35 は先端・側面・一平面の中央に敲打痕をもつ。以上の中で、29 は被熱する。

33 は流紋岩、34 は砂岩を石材とする C 種。前者は表裏両面に磨耗痕と敲打痕、一側面に敲打痕をもつ。後者は一平面に敲打痕のみをもつ資料。

32 は流紋岩を石材とする唯一の D 種。断面三角形をなす重厚な礫の三側面に強い磨耗痕、側面の稜に連続的な敲打痕をもつ。先端と下底部には敲打痕をもち、前者の周囲には強い衝撃によって剥離が生じる。

以上のような磨石・敲石類は、側面に連続的な敲打を加え石鱗形をなした資料や強度の磨耗を認める資料が皆無に等しく、平面・側面・先端に敲打痕をもつ資料が多数を占める点にも特徴がある。32 はいわゆる「特殊磨石」に類似し、越後平野周辺では数少ない出土例となる。以上の所属時期については、後期の遺構内出土例が多数を

占めるが、大半の遺構で中期前葉土器が主体をなすことから、中期前葉を中心とした資料と考えられる。

石皿・台石 (図版 28-37・38)

6点出土。うち3点が遺構内から出土しており、磨石・敲石類と似たあり方を示す。使用石材は、花崗岩1点、安山岩5点からなる。このうち4点が欠損しており、全体形がうかがえる2点を図版28に示す。

37は花崗岩を石材とする。不整形な形状をなし、表裏両面に強い磨耗痕、長軸両端に敲打痕をもつ。38は安山岩を石材とする。不整形な形状をなし、表裏両面に強い磨耗痕をもち、被熱によって長軸一端が欠損する。所属時期は、磨石・敲石類と同様に中期前葉の可能性が高い。

3) B 群 石 器

磨製石斧・石錐・砥石からなる。定型的な石器ではないが、使用・加工痕をもつ剥片、磨耗・敲打礫、アスファルト付着礫についても本項で記述する。

磨製石斧 (図版 29-43～48)

完成品6点と未成品1点が出土した。このうち完成品3点と未成品が遺構内からの出土。使用石材は、蛇紋岩3点・砂岩3点・流紋岩1点からなる。

43は3区Ⅲ層、44は2区2層からの出土。ともに蛇紋岩(透閃石)を石材とする中型品で、前者は基部、後者は刃部破片。43は側面からの衝撃で折損し、「縦斧」として使用したことを物語る。基端に横方向、平面・側面に右下りの研磨痕が残り、側面は平滑に研磨される。44は刃部を横方向、上部を右下りの方向に研磨し、側面は平滑に作出される。刃先には、使用によって微細な欠損が生じ、縦方向の線状痕が残る。上端破損面のエッジに部分的な研磨が行われ(矢印範囲)、何らかの再利用を意図したことをうかがわせる。

45はPit62からの出土。流紋岩を石材とする。長さ5.6cm・幅3.7cmを測る小型品で、主面と側面を右下りの方向に研磨する。刃先には、使用によって生じた微細な欠損が見られる。本資料はすづまりな形状をなしており、刃部再生が行われたことをうかがわせる。

46はPit252から出土。砂岩を石材とする大型品である。成形時の敲打痕が側面や主面に残り、右下りの研磨痕が不明瞭ではあるが観察できる。左主面の下端に破損時に生じた可能性がある剥離が見られ、刃部再生を意図した剥離が左主面側から行われる。

47はPit56、48はPit252からの出土。ともに製作時の擦切痕が残る資料である。前者は蛇紋岩、後者は砂岩を石材とする。47は側面に擦切痕が残る完成品の一部で、擦切面に研磨整形は行われない。48は深い擦切溝が残る小破片。擦切石斧の製作時に生じた分割残余である。

石錐 (図版 27-6・7)

図版27に示す2点が出土した。

6はPit65から出土した。黒曜石I群b種を石材とする。縦長剥片の両側縁に鈍角的な角度で剥離を加え、端部を先鋭に作出する。肉眼的な観察が可能な使用痕は見られない。

7は1区I層からの出土で、流紋岩を石材とする。幅広い剥片の背面からラフなタッチで成形剥離を行う。先端に回転線状痕が明瞭に残り、主剥離面の一部にも磨耗痕が観察できる。トーンは使用痕の範囲を表す。

二次加工痕・使用痕をもつ剥片 (図版 27-18・26・27)

使用痕をもつ剥片8点と二次加工剥片3点が出土した。このうち前者2点と後者1点を図版27に示す。

18は黒曜石I群c種を石材とする。主剥離面(B面)のエッジに微細な剥離と横方向の擦痕、中央に縦方向の擦痕が残り、擦痕範囲をトーンで示す。26・27は流紋岩を石材とする。26は横長剥片で、下端の背面エッジに使用で生じた微細剥離がみられる。27は縦長剥片の一側縁に二次加工が行われる。部位によって剥離面を異にし、中央部では主剥離面、下部では背面側からの加工が行われる。

砥石 (図版 27-23・図版 29-49～51)

12点出土した。石材別の内訳は、砂岩11点・泥岩1点。このほか、砥石の可能性が高い粗粒砂岩の破片が

15点(294g)出土した。図版29には、使用痕が明瞭に観察できる3点を示す。いずれも遺構外からの出土である。

49は厚さ8cm以上の分厚い砥石で、先端の一部が上部に残る。表裏二面が強く磨耗し、右主面の上端に縦方向の線状痕が観察できる。50・51は厚さ3cm台の扁平な砥石。50は中間部の資料で、側面が磨耗して明瞭な稜を形成する。51は頂部が尖る先端部破片。側縁片側が緩やかな段をもって磨耗し、擦切石斧の分割時に使用した石鋸の可能性が高い。

磨耗・敲打礫 (図版29-53～57・60)

磨耗痕や敲打痕をもつ搬入礫のうち、磨石・敲打類の範疇に含めがたい資料をこれとする。合計41点出土した。このうち小型礫4点、軽石1点、磨耗・敲打痕をもつ大型礫1点を図版29に示す。

53～56は小型の磨耗礫で、いずれも遺構外から出土した。53・55・56は流紋岩、54は粘板岩を石材とする。53・54は厚さ4cm台の扁平な資料で、表裏両面に顕著な磨耗痕が見られる。55はやや厚手の扁平礫で、表裏両面に磨耗痕をもつ。上端の欠損は偶発的な要因の可能性もある。これら3点は土器の内面整形に使用された可能性があり、加茂市陣ヶ峰北遺跡で類例が出土している〔小熊・立木2016〕。56は全面に磨耗痕が観察できる資料。狭長な形状をなし、磨耗の進行によるためか上半部が薄手化する。

57は角閃石を多量に含む軽石。側面と平面が平滑な形状をなしており、使用によって磨耗した可能性が高い。このほか、使用の有無は明らかでないが、調査区全体で合計12点(30g)の軽石が出土した。

60はPit124から出土した最大長27.5cm、5,031gの大型円礫である。平面右側から側面にかけて磨耗し、頂部付近で顕著な磨耗が観察できる。平面中央には敲打痕も残る。下端の窪み内部には粗粒砂が付着し、段丘礫層から入手したことがうかがえる資料である。

アスファルト付着礫 (図版29-58・59)

58・59はPit124から出土した。前者は不整形円形をなした扁平円礫の平面中央、後者は狭長な不整形円礫の中央に黒色のアスファルトが不連続ながらも帯状に付着する。秋田県八木遺跡ではアスファルトが付着する小型礫石錘と扁平礫が多数出土している。ともに短軸を緊縛する点に特徴があり、漁網錘と見なされている〔秋田県埋蔵文化財振興会1989〕。これに対し本遺跡の礫石錘は長軸に抉りをもち、礫の形状も異なることから、二点のアスファルト付着礫は「編物石」として使用した可能性を指摘したい。後期前葉土器が共伴しており、同時期の資料と考えられる。

4) C 群 石 器

非実用的な用具とみられる資料を本群とする。下記の石製円盤1点が出土したのみである。

石製円盤 (図版29-52)

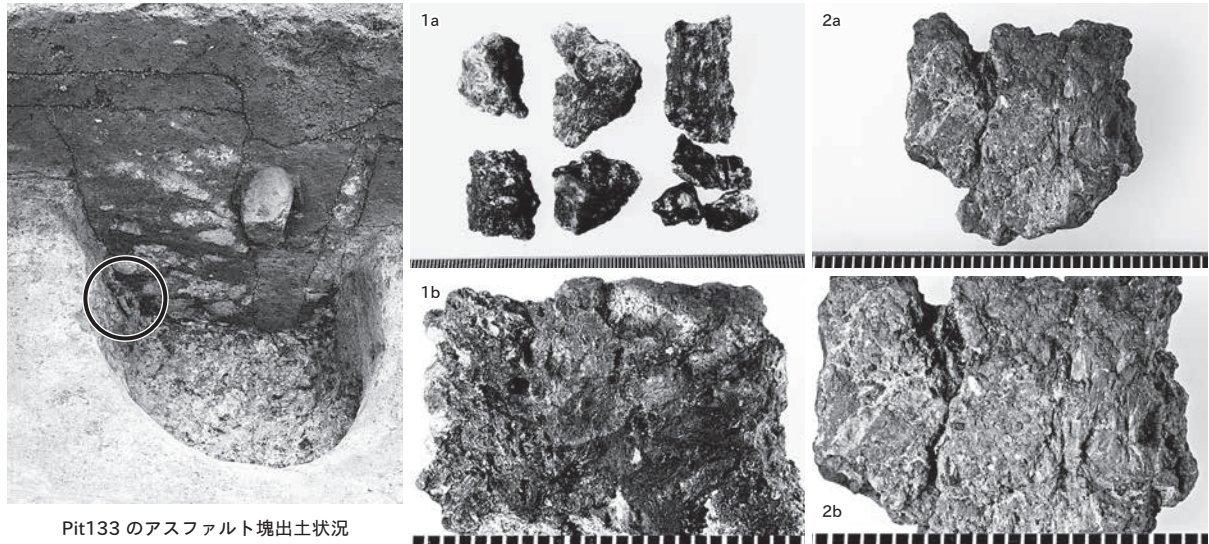
52は掘立柱建物SB403の柱穴Pit55から出土した。本例は欠損資料であるが、正円形をなす製品とみられ、全面が平滑に研磨整形される。安山岩を石材とし、推定径3.3cm、厚さ2.3cmを測る。後期前葉土器が共伴しており、同時期の所産と考えられる。

D 搬 入 礫

人為的な磨耗痕や敲打痕が確認できない搬入礫のうち、粗粒砂岩・軽石を除く資料は1,856点(117,751g)にのぼる。流紋岩・安山岩・チャート・花崗岩などの多様な石材からなり、最大幅5cm以上の635点に基づけば全体の18%が被熱する。花崗岩は73点(9,489g)を数える。阿賀野川ないしは早出川で採取した可能性が高いもので、このうち57%が何らかのかたちで欠損する。

E アスファルト塊

掘立柱建物SB401の柱穴にあたるPit56とPit133から2点のアスファルト塊が出土した。ともに後期前葉南三十稲場式期の資料とみなされる。



Pit133のアスファルト塊出土状況

第 11 図 アスファルト塊

1 は Pit133 の 4 層最下部から出土した。同層はIV層ブロックを多量に含む柱穴覆土で、第 11 図左に出土状況を示す。発掘時に破損したため本来の形状は不明であるが、総重量 7.4g を測り、最大幅 3cm 以上の塊をなしたとみられる。純度が高い黒色 (7.5YR2/1) アスファルトで、精製後の資料と考えられる。本例はアスファルト分析 (第VI章第 5 節) に供した試料 1 にあたり、新津丘陵産原油の組成に近似する、との所見が示された。

2 は Pit56 下部の 4 層から出土した。最大長 2.7cm・厚さ 0.9cm、重さ 2.4g の不整形かつ扁平な塊で、灰褐色 (7.5YR4/2) を呈する。微細な石英・角閃石・岩石粒子を多く含み、シルト層から湧出した原油に由来するアスファルト塊とみられる。類似資料が南西 5km に位置する大沢谷内遺跡 (晩期中葉) から大量に出土しており [新潟市教委 2012]、本遺跡内での精製作業を示す残滓と考えられる。本例はアスファルト分析に供した試料 2 にあたり、試料 1 と類似した成分組成が確認された。

F 炭化種実

8 基の遺構内から総重量 2.7g の炭化種実が出土した。いずれも土壌水洗をつうじ 1mm メッシュ篩から採取した微細な資料である。このうち SK109 (袋状土坑) と Pit78 (掘立柱建物 SB403 柱穴) は炭化物の採取を目的とした土壌サンプルから見出したもので、前者は最下部 7 層、後者は柱痕上部の 1 層・2 層で多量の炭化材とともに遺存していた。他の 5 基は砂集積土坑で採取した砂粒の中から抽出したものである。所属時期は SK93 が中期前葉 3 期、SK78・SK109 が後期前葉である。他の 5 基出土資料については明確でない。

このうち種の特定が可能な資料は、堅果類 4 種 (クリ・トチ・クルミ・ヒシ) と漿果類 1 種 (カラスザンショウ) からなり、第 2 表に内訳を示す。

第 2 表 炭化種実一覧

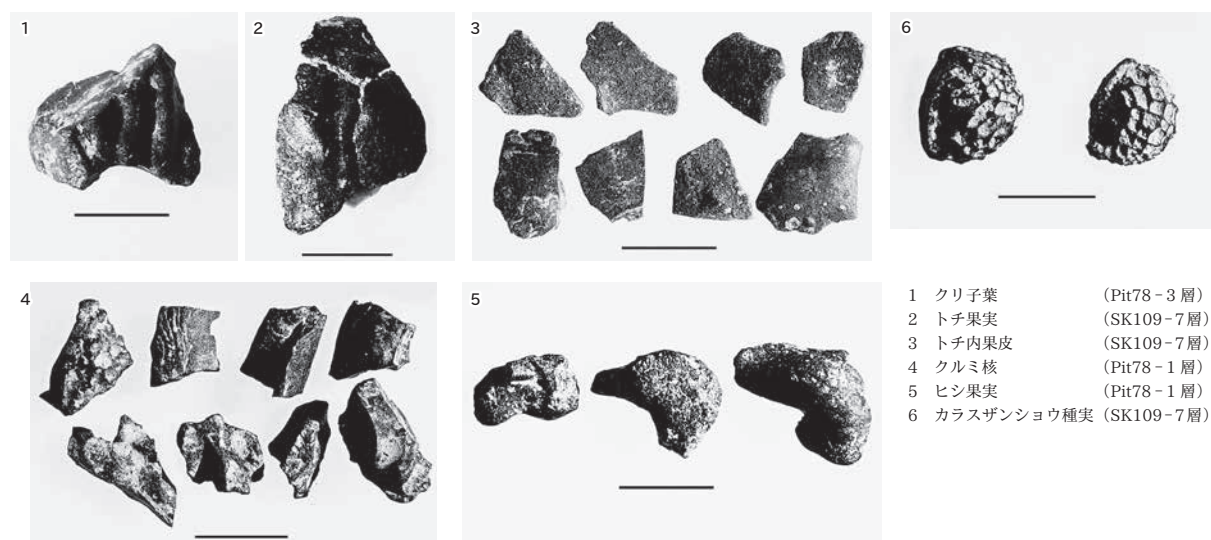
遺構 (時期)	クリ子葉	トチ		クルミ核	ヒシ果実	カラスザンショウ種実
		内果皮	果実			
SK 93 (中期前葉)	—	3 (0.1g)	4 (0.2g)	11 (0.3g)	1 (0.1g)	—
SK 94	—	—	—	1 (0.1g)	—	—
SK 114	—	—	—	2 (0.1g)	—	—
SK 218	—	2 (0.1g)	—	3 (0.1g)	—	—
SK 277	—	—	—	1 (0.1g)	—	—
SK 310	—	—	—	4 (0.1g)	—	—
SK 109 (後期前葉)	—	29 (0.3g)	3 (0.1g)	31 (0.4g)	—	2 (0.1g)
Pit 78 (後期前葉)	1 (0.1g)	9 (0.1g)	—	16 (0.2g)	2 (0.1g)	—

ク リ (第 12 図 1)

Pit78 からクリ特有の皺をもつ微細な子葉破片が 1 点出土した。第VI章第 2 節で報告されるように、本次調査で出土した炭化材はクリが主体を占めており、主食料として利用された可能性が高い。

ト チ (第 12 図 2・3)

SK93・SK218・SK109・Pit78 から内果皮破片 43 点、SK93・SK109 から果実破片 7 点が出土した。後者



1	クリ子葉	(Pit78-3層)
2	トチ果実	(SK109-7層)
3	トチ内果皮	(SK109-7層)
4	クルミ核	(Pit78-1層)
5	ヒシ果実	(Pit78-1層)
6	カラスザンショウ種実	(SK109-7層)

第12図 炭化種実 (スケールは5mm)

は球状をなした表面が遺存しており、内果皮を除去した状態で炭化した資料と考えられる。前者は7割にあたる29点がSK109から出土した。

以上の中で、SK93の7点は中期前葉に属す資料である。新潟県内では前期終末の新発田市ニタ子沢A遺跡(古環境研究所2003)に次いで古い出土例となるが、断片的な資料のため、食料資源としての位置づけは明確でない。

SK109・Pit78の41点は後期前葉に属す。新潟県内では後期前葉に入りトチの実出土遺跡が増加する。この時期は堅果類利用の画期をなしており、本遺跡においても重要な食料資源として利用された可能性が高い。

オニグルミ (第12図4)

7基の遺構から微細な核破片69点が出土した。全体の過半数を占めるが、核が堅緻で遺存しやすいことが主たる理由と考えられる。本遺跡の南5kmに位置する新田遺跡では、自然流路の中期終末相当層準で新津丘陵の林縁部から流されてきたと考えられるクルミが多数出土しており(パリノサーヴェイ2004)、本遺跡の周辺でも容易に採集できた種実とみられる。

ヒシ (第12図5)

SK93から1点、Pit78から2点出土した。表面が平滑で湾曲しており、刺針に接した箇所とみられる。ヒシは8月から10月にかけて結実する水生植物で、眼下に広がる現在の沖積地で採集したとみられる。越後平野周辺の縄文時代遺跡では、近年ヒシの実の出土例が次第に増加している。本次調査で確認された資料は、阿賀野川低地周辺において晩期終末の阿賀野市山口野中遺跡(パリノサーヴェイ2015)に続き二例目となる。

カラスザンショウ (第12図6)

片面が欠損する2点の種実がSK109から出土した。不整半円形をなし、網状の窪みが観察できる試料である。カラスザンショウは角田山麓の干納遺跡(前期後葉)で多量の種実が出土している。防腐効果をもつとされ(パリノサーヴェイ2019)、本遺跡で利用された漿果類の一端を示している。新潟県内の内陸部に分布する遺跡では、漿果類の報告例が皆無に等しい状況にある(前山2019)。こうした中で検出された本遺跡のカラスザンショウは、微細な炭化物の精査をつうじ内陸部での資料増加を予測させる意味で重要である。

G 動物遺体

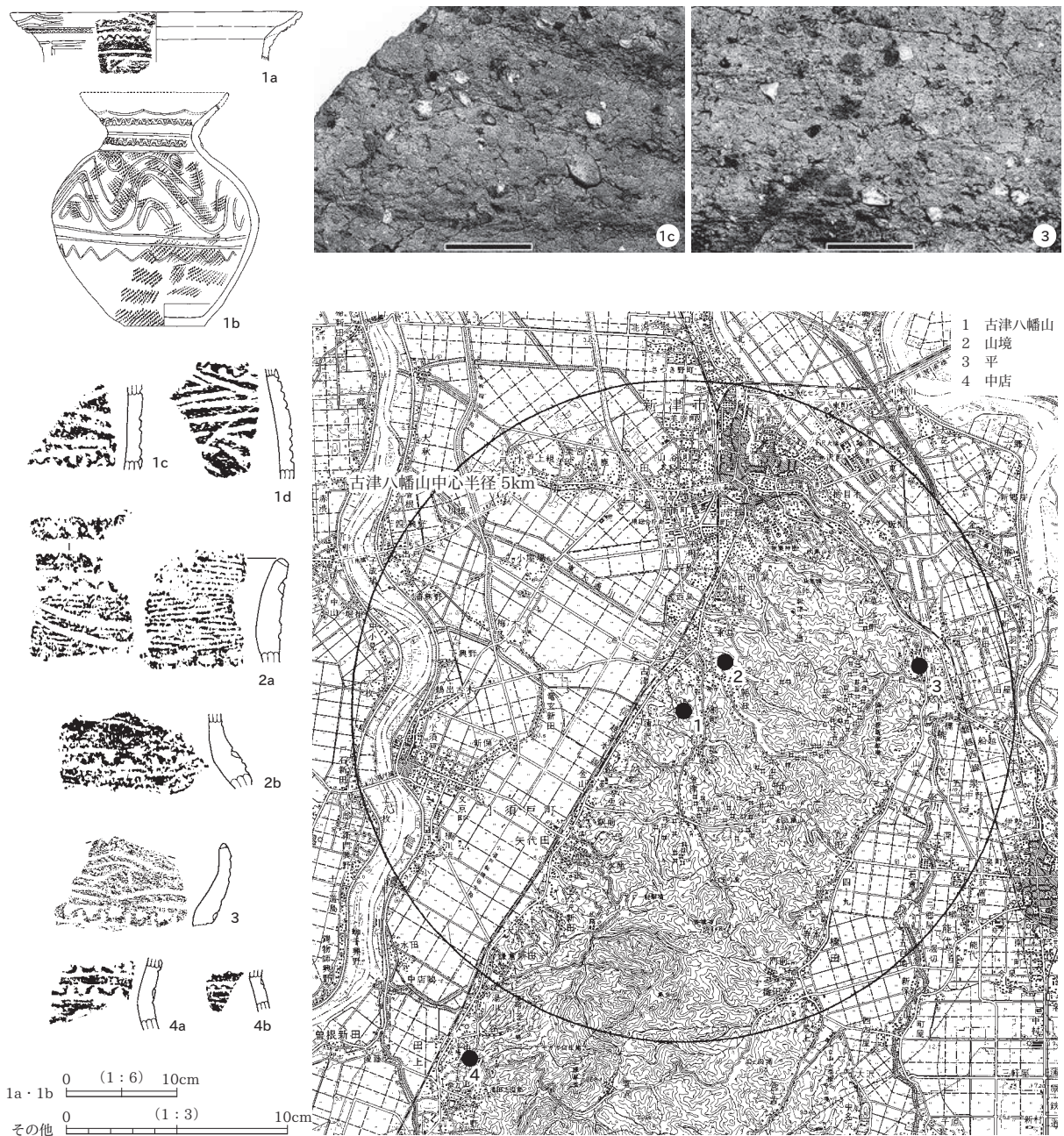
砂集積土坑SK94の2層で行った土壌水洗資料から微細な焼骨2点を確認した。哺乳類に類似したスポンジ状の組織をもち、強い加熱によって白色化する資料である。

第3節 弥生時代の遺物

弥生土器 (図版 26-339)

2区12V9のI層から弥生時代後期前葉の天王山式土器が単独で出土した。図版26-339は、湾曲しながら立ち上がり、小波状口縁をなす壺である。波状口縁頂部に刻目を加え、口縁部には弧状沈線下に交互刺突文を施す。内面には、整形時の擦痕が明瞭に残る。胎土には磨耗岩石と多量の高温石英粒子を含む。

新津丘陵において天王山式土器が多量に出土した遺跡としては、西約4kmに位置する古津八幡山遺跡があげられる。この遺跡の土器は、本例と同様に多量の高温石英を含む点が特徴である。本資料は新津丘陵の東麓部では初の出土例であり、古津八幡山遺跡の活動を示す資料となる。



第13図 新津丘陵の天王山式土器出土遺跡と土器の混和材 (写真内のスケールは5mm)

第VI章 自然科学分析

第1節 概要

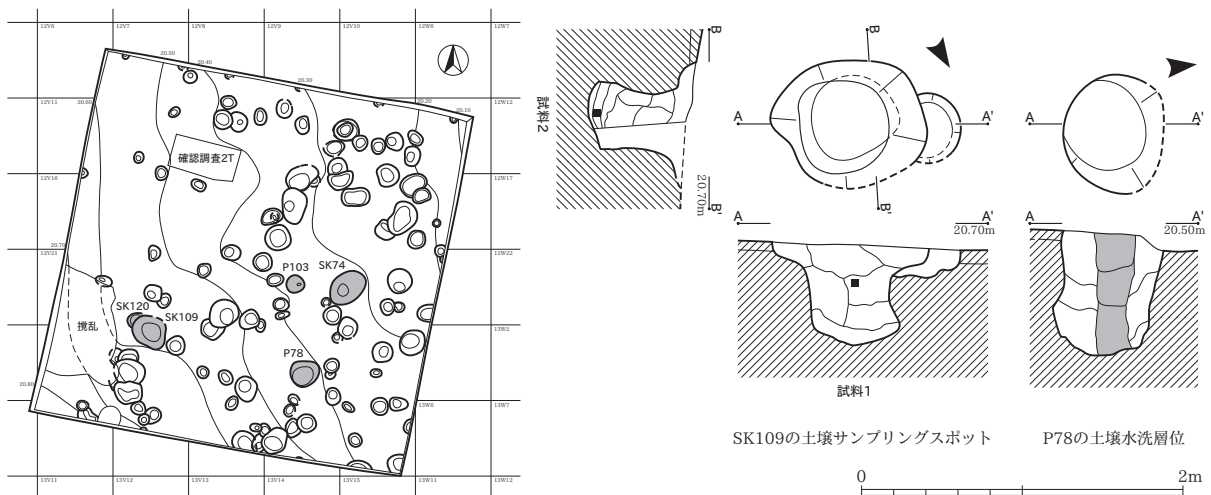
花粉分析・樹種同定・黒曜石産地推定・アスファルト成分分析を行った。前二者の試料採取地は第14図のとおりである。

花粉分析は、後期前葉に属す袋状土坑 SK109 の覆土最下部7層と上部2層から採取した二つの土壌サンプルで実施した。ともに花粉の保存状態が良好でなく、貯蔵物の推定や遺跡周辺植生を具体的に復元するには至らなかったが、下部層では乾燥した環境を好む草本植物が周囲に生育していたと推定された。これに対し上部層では、木本花粉が増加する傾向にあることから、集落廃絶後に遺跡内が次第に森林化した可能性が指摘された。

第V章で述べたように、本次調査では炭化物の中に4種の木本有用種実(トチ・クリ・クルミ・カラスザンショウ)が確認された。これに関連し、掘立柱建物 SB403 の柱穴 Pit78 の柱痕1～3層、掘立柱建物 SB406 の柱穴 Pit103、袋状土坑 SK109 の最下部7層、皿状土坑の SK74・SK120 から出土した計7点の炭化材で樹種同定を行った。SK120 以外の所属時期は、後期前葉後半と推定できる。同定された樹種と点数の内訳は、クリ6点・サクラ1点で、当地の縄文集落で多用されるクリ材の卓越を示す結果となった。

本次調査では、24点の黒曜石が出土した。このうち、肉眼的に長野県星ヶ塔産と判断できた資料以外の原石3点・石核1点・剥片2点(図版27-9・10・12・13・16・19)について産地推定を行った。結果はすべて新津産黒曜石と推定された。ただし、図版27-12・19の2点については自然面が磨耗しておらず、一般に新津産黒曜石と認識されるものとは特徴を異にする点が留意される。

本次調査で特筆される出土遺物の一つとして、アスファルトがあげられる。今回の分析では、①中期前葉1期の土器内面に認めるアスファルト状の黒色付着物(図版24-228)、②後期前葉の掘立柱建物 SB401 の柱穴 P133 から出土した純度の高いアスファルト塊(第11図1)、③SB401 の柱穴 Pit54 から出土した精製滓の可能性があるアスファルト塊(第11図2)の3点でイオウ同位体比分析を行った。①はアスファルトと判明し、新津丘陵での利用上限を知る上で重要な資料となった。これら新津丘陵の鎌倉新田・天ヶ沢新田と南阿賀・東新潟の原油データと比較すると、①・②は前者、③は前者の一部または後者を産地とする可能性が高いと推定された。



第14図 自然科学分析試料の採取地

第2節 花粉分析

株式会社古環境研究所

1) 試料

分析試料は、袋状土坑 SK109 の覆土より採取された試料で、上部にあたる 2 層（試料 1）、最下部にあたる 7 層（試料 2）の 2 点である。

2) 分析方法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- (1) 試料から 1cm³ を採取
- (2) 0.5% リン酸三ナトリウム（12 水）溶液を加え 15 分間湯煎
- (3) 水洗処理の後、0.25mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈殿法で砂粒を除去
- (4) 25% フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置
- (5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アストリシス処理（無水酢酸 9：濃硫酸 1 のエルドマン氏液を加え 1 分間湯煎）を施す
- (6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- (7) 沈渣にチール石炭酸フクシン染色液を加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製
- (8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300 ～ 1000 倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の段階で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、島倉（1973）、中村（1980）を参照して行った。イネ属については、中村（1974・1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。なお、花粉分類では樹木花粉（AP）および非樹木花粉（NAP）となるが非樹木花粉は草本花粉として示した。

3) 結果

(1) 分類群

産出した花粉群は、樹木花粉 10、樹木花粉と草本花粉を含むもの 1、草本花粉 4、シダ植物孢子 2 形態の計 17 分類群である。これらの学名と和名および粒数を第 3 表に示し、密度は低いが周辺の植生を復元するために、定量に換算したダイアグラムを第 16 図に示す。主要な分類群は顕微鏡写真を第 15 図に示した。同時に寄生虫も観察したが検出されなかった。

(2) 花粉群集の特徴

花粉構成と花粉組成の特徴を記載する。

SK109 の上部 2 層（試料 1）と最下部 7 層（試料 2）では、花粉密度は非常に低い。最下部の 7 層（試料 2）では、樹木花粉のトウヒ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、ハンノキ属、樹木・木本花粉のクワ科-イラクサ科、草本花粉のイネ科、アカザ科-ヒユ科、セリ亜科、ヨモギ属がわずかに産出する。上部の 2 層（試料 1）では、樹木花粉のマツ属複雑管束亜属、スギ属、クルミ属、ハンノキ属、クマシデ属-アサダ、クリ、コナラ属コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキがわずかに産出する。

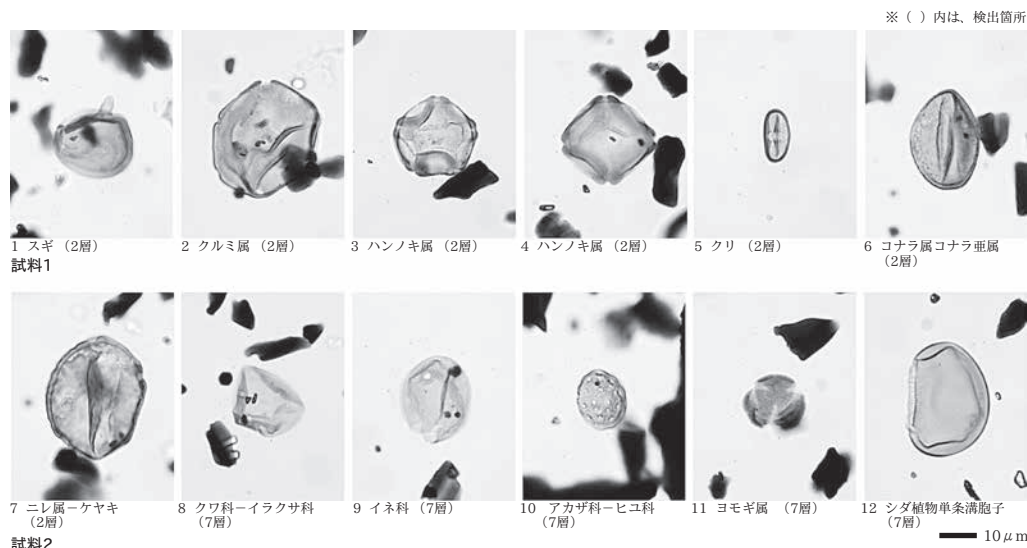
(3) 花粉分析から推定される植生と環境

SK109 の上部 2 層、最下部の 7 層は、いずれも花粉密度が低いことから、花粉などの有機質遺体が分解された堆積物であったとみなされる。

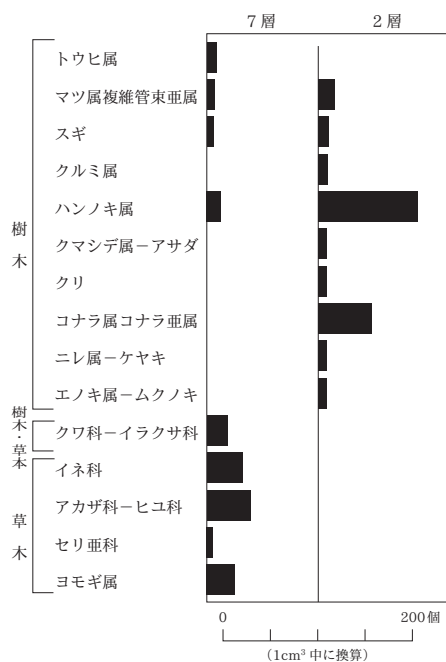
最下部の 7 層では、イネ科、アカザ科-ヒユ科、セリ亜科、ヨモギ属が産出する。いずれも陽当たりのよい

乾燥した環境を好む人里植物である。クワ科-イラクサ科は、路傍や荒地に生育するカラムシ・カナムグラなどの草本が考えられる。これらの植物が土坑の周囲に生育していたと推定される。樹木花粉は少なく、土坑周辺は人為活動により樹木が減少していたとみなされる。

上部2層の時期は、草本はなくなり樹木が増加する。二次林性のハンノキ属とコナラ属コナラ亜属が多くなり二次林化する。土坑および周囲は、ハンノキ属とコナラ属コナラ亜属の二次林が増加し覆われていたと推定される。草本の優勢な下部7層の時期は、人為活動により樹木が減少し草本が多かったが、上部2層では人的干渉がなくなり、ハンノキ属とコナラ属コナラ亜属の二次林経と遷移し、土坑も使われず廃絶したと考えられる。



第15図 花粉顕微鏡写真



第16図 平遺跡における花粉ダイアグラム

第3表 花粉一覧

学名	分類群	和名	2層	7層
			試料1	試料2
Arboreal pollen		樹木花粉		
Picea		トウヒ属		1
Pinus subgen. Diploxylon		マツ属複雑管束亜属	2	1
Cryptomeria japonica		スギ	1	1
Juglans		クルミ属	1	
Alnus		ハンノキ属	13	2
Carpinus-Ostrya japonica		クマシデ属-アサダ	1	
Castanea crenata		クリ	1	
Quercus subgen. Lepidobalanus		コナラ属コナラ亜属	7	
Ulmus-Zelkova serrata		ニレ属-ケヤキ	1	
Celtis-Aphananthe aspera		エノキ属-ムクノキ	1	
Arboreal · Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉		
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科		3
Nonarboreal pollen		草本花粉		
Gramineae		イネ科		5
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒユ科		6
Apiodeae		セリ亜科		1
Artemisia		ヨモギ属		4
Arboreal pollen		樹木花粉	28	5
Arboreal · Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	0	3
Nonarboreal pollen		草本花粉	0	16
Total pollen		花粉総数	28	24
Pollen frequencies of 1cm ²		試料1cm ² 中の花粉密度	0.2 × 10 ³	0.2 × 10 ³
Unknown pollen		未同定花粉	2	0
Fern spore		シダ植物胞子		
Monolate type spore		単条溝胞子	3	2
Trilate type spore		三条溝胞子	1	2
Total Fern spore		シダ植物胞子総数	4	4
Parasite eggs		寄生虫卵	(-)	(-)
Stone cell		石細胞	(-)	(-)
Digestion remains		明らかな消化残渣	(-)	(-)
Charcoal · woods fragments		微細炭化物・微細木片	(+)	(+)
微細植物遺体 (Charcoal · woods fragments)		(×10 ³)		
未分解遺体片				
分解質遺体片			11.7	19.6
炭化遺体片 (微粒炭)				0.4

第3節 樹種同定

株式会社古環境研究所

1) 試料

同定試料は、SK74の4層(試料1)、P78の1層(試料2)・同2層(試料3)・同3層(試料4)、P103の4層(試料5)、SK109の7層(試料6)、SK120の1層(試料7)から出土した7点である。

2) 分析方法

以下の手順で行った。

- (1) 炭化材を自然乾燥
- (2) 横断面(木口)・放射断面(柾目)・接線断面(板目)の3断面の割断面を作製し、アルミ合金製の試料台にカーボンテープで固定する
- (3) 炭化材の周囲を樹脂でコーティングして補強する
- (4) 走査型電子顕微鏡(低真空)で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)を参考にする。また、日本産木材の配列組織は、林(1991)や伊東(1995・1996・1997・1998・1999)を参考にする。

3) 分析結果

広葉樹2分類群(サクラ属・クリ)からなり、試料1がサクラ属、試料2～7がクリと同定された。

サクラ属 *Rrunus* バラ科

散孔材。道管は単独または2～6個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状となる。道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～4細胞幅、1～30細胞高。

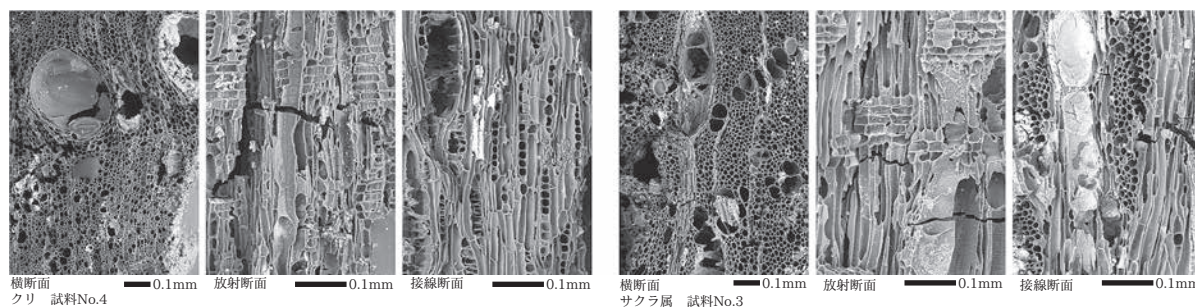
クリ (*Castanea crenata* Sieb., et Zucc.)

環孔材。孔部は2～3列、外圏外で急激に道管径を減じたのち、小径の道管が多数集まって火炎状に配列し、年輪界に向かって径を漸原減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状になる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

4) 考察

7点の炭化材は、クリを中心としてサクラ属が混じる結果となった。サクラ属とクリは、山地・丘陵等に生育する落葉高木であり、いずれも遺跡周辺に現在も生育している。サクラ属の木材は重硬・緻密で強度が高い。クリの木材は、重硬で強度と耐朽性が高い。

伊東・山田のデータベース〔伊東・山田2012〕によれば、中越地方では縄文時代の中期から晩期にかけてクリの利用が多い傾向にある。今回の結果は、既存の結果とも整合的と言える。



第17図 炭化材顕微鏡写真

第4節 黒曜石産地同定

株式会社古環境研究所

1) 試料

同定試料は、SK109出土の原石1点、Ⅲ層出土の原石1点・石核2点・剥片2点・Ⅱ層出土の石核1点である。時期は縄文時代中期前葉とみられる。

2) 分析方法

測定前に超音波洗浄器やメラミンフォーム製スポンジを用いて測定面表面の洗浄を行った。装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム(Rh)、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50KV、電流1000 μ A、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である班別図法を用いた(望月1999など)。本方法では、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素のX線強度(cps count per second)について、以下に示す指標値を計算する。

$$(1) \text{Rb分率} = \text{Rb強度} \times 100 / (\text{Rb強度} + \text{Sr強度} + \text{Y強度} + \text{Zr強度})$$

$$(2) \text{Sr分率} = \text{Sr強度} \times 100 / (\text{Rb強度} + \text{Sr強度} + \text{Y強度} + \text{Zr強度})$$

$$(3) \text{Mn強度} \times 100 / \text{Fe強度}$$

$$(4) \log(\text{Fe強度} / \text{K強度})$$

そして、これらの指標値を用いた2つの判別図(横軸Rb分率-縦軸Mn強度 \times 100Fe強度)の判別図を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定する。この方法は、できる限り蛍光X線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせるため、形状・厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。風化試料の場合、 $\log(\text{Fe強度} / \text{K強度})$ の値が減少する[望月1999]。試料の測定面には、なるべく平滑な面を選んだ。

原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させたうえで産地推定対象試料と同様の条件で測定した。

第5表に判別群一覧とそれぞれの原石採集地点および点数を、第18図に産地分布図を示す。

3) 分析結果

第4表に同定試料の測定値および算出した指標値、第19図に黒曜石産地の判別図に同定試料の指標値をプロットした。視覚的にわかりやすくするため、図では判別群を楕円で取り囲んだ。

分析の結果、6点すべてが金津群(新潟県新津エリア)の範囲にプロットされた。

第4表 黒曜石の測定値と推定産地

試料番号	種別	報告番号	K強度(cps)	Mn強度(cps)	Fe強度(cps)	Rb強度(cps)	Sr強度(cps)	Y強度(cps)	Zr強度(cps)	Rb分率	$\frac{\text{Mn} \times 100}{\text{Fe}}$	Sr分率	$\log \frac{\text{Fe}}{\text{K}}$	判別群	エリア
1	原石	図版27-11	264.0	67.3	2171.6	779.5	380.4	426.8	1202.5	27.95	3.10	13.64	0.92	金津	新津
2	原石	図版27-10	304.7	80.9	2498.6	951.0	459.2	523.1	1479.7	27.86	3.24	13.46	0.91	金津	新津
3	石核	図版27-12	139.6	31.2	1123.4	337.3	155.2	175.2	491.3	29.10	2.77	13.39	0.91	金津	新津
4	石核	図版27-13	167.1	43.6	1426.2	526.0	248.7	289.4	816.4	27.97	3.05	13.23	0.93	金津	新津
5	剥片	図版27-19	275.2	72.1	2267.7	847.4	403.8	468.4	1316.8	27.91	3.18	13.30	0.92	金津	新津
6	剥片	図版27-16	174.7	42.5	1516.3	539.7	252.7	291.7	823.3	28.29	2.80	13.25	0.94	金津	新津

第5節 アスファルト分析

上條信彦（弘前大学人文社会科学部）

高橋和也（理化学研究所）

1) 本分析の目的

新潟市平遺跡からアスファルトとみられる黒色物質が出土した。アスファルトは高い粘性と撥水生を有し、熱を加えると容易に融解する性質をもつため、縄文時代には接着剤・防腐剤・防水剤などに使用されてきた。本遺跡周辺には複数の産出地があり、アスファルトの採取地も予測されることから、アスファルトの産地と交易ルートを知るうえで重要な知見をもたらす。そこで、本遺跡出土の試料について成分分析を行い、産地推定を試みたい。

2) 分析試料と分析方法

対象試料は、第6表に示す3点である。試料1・2は後期前葉、3は中期初頭に属し、各試料から微量採取したものである。

イオウは原油中において炭素・水素に次いで多く含まれ、その含有量は産地によって大きく異なる。それは原油の根源岩の質（堆積環境）の違いを反映するためである。硫黄分は水触によって $\delta^{34}\text{S}$ が重くなる一方、原油の熱成分が高くなると軽くなる傾向がある。原油のイオウ同位体組成は1950年代末ごろから測定され始め、日本においても油田地区ごとの $\delta^{34}\text{S}$ の違いが見出された〔加藤・梶原ほか1997〕。

分析手順は、酸素（高純度）共存下で燃焼させ、酸化反応管（酸化タングステン）と還元管（純銅）で硫黄成分を二酸化硫黄として調整したのち精製カラムで分離し、IsoPrime100へ導き同位体分析を行った。朱の産地推定用いられている方法を応用し、微量分析を実現した〔Minami T. ほか2005〕。

なお、試料採取、表面・顕微鏡観察は上條、イオウ同位体比分析は高橋が実施した。

3) イオウ同位体比分析の結果と産地推定

分析試料のイオウ同位体分析の結果を第6表に示す。イオウ同位体比（ $\delta^{34}\text{S}$ ）は、標準物質の $^{34}\text{S}/^{32}\text{S}$ 比に対し ^{34}S が多いときプラスの δ 値がえられ、 ^{32}S が多いときにマイナスの δ 値が得られる。今回測定した3試料は、2.27%～5.91%の比較的まとまった δ 値が得られた。さらに、これらの値は2.27（試料2）・2.78（試料1）と、それよりやや高い5.91（試料3）に二区分できる。

原油成分のあり方を見ると、サハリンと新潟では δ 値が高く（プラス側にシフト）、北海道・青森・秋田では軽い（マイナス側にシフト）という地理的傾向が見出せる〔上條・高橋ほか2020〕。本遺跡のように、プラスの δ が得られる油田は、北海道・青森・秋田といった日本海側北部や石狩低地帯の油田に多い。また、新潟県域の場合、海側（阿賀沖）から山側（見附）へと重くなる傾向があるが〔加藤・梶原ほか1997〕、 δ 値はプラスの範囲にとどまる。本結果に近い遺跡周辺の原油データをあげると、新津油田は鎌倉新田で3.26～3.55、天ヶ沢新田で1.68～2.04、大入で7.26、北東に位置する南阿賀（阿賀野市京ヶ瀬）で5.88、東新潟（新潟市北区）で7.19を示す。また、付近の出土アスファルトと比較すると、新潟市大沢谷内遺跡（縄文晩期）では5.35・5.77、阿賀野市石船戸遺跡では2.79・3.28を示す。よって本遺跡から最も近い採取地を求めると、試料1・2は新津丘陵、試料3は新津丘陵の一部もしくは新潟市北部～阿賀野市域を産地とする可能性が高い。標本数が少ないながらも試料No.1・2と試料No.3は帰属時期や状態も異なっていることから、採取地や採取後の取り扱いに変化があったことも考えられる。

第6表 分析試料とイオウ同位体比

試料No.	出土位置	時期	状態	$\delta^{34}\text{S}$
1	12W21グリッドP133 3層	後期前葉	塊	2.78
2	12V19グリッドP54 4層	後期前葉	塊	2.27
3	12V2グリッドI層	中期前葉	土器付着物	5.91

第Ⅶ章 総 括

第 1 節 黒色土の遺構調査

平遺跡の一角で行った今回の調査は、113m² ならずの小範囲にとどまった。しかし得られた情報は多岐にわたり、いくつかの有益な知見が得られた。その一つは、2 区のⅢ層上面で試みた遺構探査である。こうした試みの発端は、先行して行った 3 区の調査にあたり、Ⅲ層上面から掘込む土坑の存在が明らかになったことによる。

Ⅲ層上面の遺構探査は、両刃鎌を用いて表面を薄く削り、土質の異なりから遺構を見出す作業から始まった。その過程で「しまりをもった粘質土」が多数存在することが明らかになった。この中にはⅣ層ブロックが入り混じり遺構の存在が予測できるものもあった。しかし、遺構の広がりをおのみに把握するのは困難で、粘質土の中央に設けた幅 15cm 前後のトレンチの断面観察によって遺構の是非を判断した。結果はきわめて良好で、確認できた遺構は土坑 29 基・ピット 52 基にのぼる。このうち 7 割がⅣ層内まで掘り込まれていたことは、遺構探査法の妥当性が視覚的に明らかになった点で重要である。

こうした手法によって遺構が把握できた要因は、Ⅲ層上部が削平され、遺構上部が露出状態にあったことが幸いしたと言える。遺構の埋積土に見られる「しまりをもった粘質土」の形成理由については、二つのケースが想定できる。遺構が開口した状態で自然堆積した場合、遺構内には雨水が溜まるとともに粒子の細かい土砂が流入する。人為的な埋め戻しが行われた場合は、周囲の堆積土に比べ緻密さに欠けることから雨水が浸透しやすいとめと考えられる。Ⅲ層上面での遺構調査をつうじて明らかになったことがらを以下に記す。

第一点は、黒色土の中に形成された遺構の実態である。Ⅲ層上面確認遺構は、基盤層（Ⅳ層）まで掘り下げた場合 17% が消失し、15% が痕跡化することが判明した。次節で述べる「砂集積土坑」は従来の調査法では把握が難しく、これまで遺構として認識されていなかったおそれがある。掘立柱建物の想定にあたり排除されがちな小ピットが本来的な姿で把握できた点もこの調査法の有効性を示す。

第二点は、遺構の所属時期についてである。Ⅲ層上面確認遺構の覆土に含まれる土器の 8 割以上は中期前葉に属していた。後期の遺構は、これに混じって出土した僅かな土器によって所属時期が判断できた。調査区壁面で確認した遺構の大多数はⅢ層上面から掘り込まれる。Ⅳ層上面確認遺構の多くが小規模ピットによって占められるのは、包含層調査の過程で上部が失われたことが一因となっている。Ⅲ層上面遺構の覆土内出土土器の平均重量は 179g を記録する。これに対しⅣ層上面遺構では 54g にとどまる。覆土内出土土器が中期前葉に限定される遺構はⅢ層上面で 40% を示すのに対し、Ⅳ層上面では 55% に上昇する。こうした数値は、数量的に乏しい後期の遺物が遺構内に混入する確率がⅣ層上面遺構で低下したことを示しており、基盤層確認遺構に基づくこれまでの所属時期推定の問題点が明らかになった。

第三点は、遺跡の形成過程についてである。本次調査地のⅢ層上面で確認した遺構は、中期前葉と後期前葉が混在していた。したがって、第Ⅲ層は中期前葉に形成された遺物包含層とみなされる。しかし、Ⅲ層上面での遺構調査終了後に行った包含層調査では、中期前葉土器に混じり後期前葉土器が 11% の割合で出土した。これらはⅣ層上面遺構の覆土に本来含まれていた遺物に他ならず、これまでの調査では遺物包含層の形成時期が正しく理解できないことを物語る。

以上のような遺構探査は、大沢谷内遺跡の 2009 年調査で会得した手法に基づいている。その後これを応用して視覚的な把握が困難な古代・中世の遺構探査を試みたが〔新潟市教委 2012・2015、前山 2013〕、いずれも第三者による検証が難しい、という問題が残った。今回の調査はその妥当性を確認する場になった点を付記しておく。

第2節 土坑内集積砂と土器の混和材

遺構の中で特筆されるのは、砂粒が堆積する9基の土坑である。土坑内の砂粒堆積層はいずれの遺構も硬質化し、後世の混入の疑いを否定できる状況にあった。SK93の坑底から出土した準完形土器の内部に砂粒が充満していたことから、人為的に集積した砂粒と判断できる(第21図3)。その位置づけを検討するため主要部分を採取し、3種(1mm・2mm・5mmメッシュ)の篩を用いて水洗選別を行った。

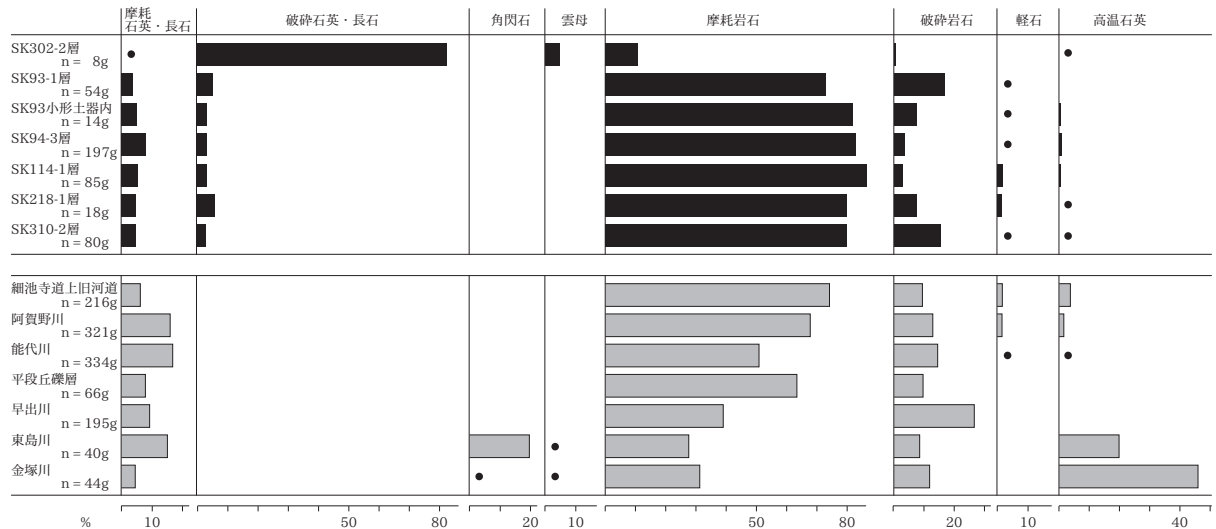
9基の土坑内に堆積する砂粒は、石英・長石の破碎粒子が大半を占めるA種と磨耗粒子が卓越するB種に分けられる。A種のSK302、B種のSK93・SK94・SK114・SK218・SK310とSK93坑底出土土器内の砂粒のあり方を第20図に示す。A種のSK302は北壁で確認したため主要部分が失われていたが、全体の88%が石英・長石・雲母によって占められ、花崗岩の鉱物組成に類似する。調査区から出土した花崗岩9,489gの57%が破損しており、A種の砂粒はこれを粉碎した可能性が高い。B種に属す遺構の砂粒は粒度によって組成が異なり、1mm未満の微細粒子の中には多量の角閃石が含まれる(第21図2)。第20図Aの数値は、SK310が1mm～2mm、これ以外は砂粒の区分が容易な2mm採取資料での数値に基づく。5基の砂粒は構成種と出現率の両面で類似度が高く、80%以上に上る磨耗岩石を主体としながら、破碎岩石が10%以下、磨耗石英・長石が5%前後、破碎石英・長石が5%未満で付随する。高温石英や軽石は微量にとどまるが、いずれの土坑でも安定的に存在する。軽石(第21図5)は微細な角閃石を多量に含む。福島県沼沢火山の噴火に由来する軽石で、これらが阿賀野川に大量に流入し、下流部の越後平野に広く供給されたことが明らかになっている〔卜部2018〕。

集積砂の比較資料として、阿賀野川下流の江南区小杉地区、阿賀野川の支流早出川、本遺跡の眼下に流れる能代川、阿賀野川河畔に位置する細池寺道上遺跡で2012年に確認された古代の旧河道〔新潟市教委2015〕、本次調査区付近の段丘礫層での砂粒組成を第20図Aに示す。細池寺道上遺跡の旧河道は、9世紀代の遺物を含む最下部砂層から採取したサンプルである。図のように、最も類似度が高いのは細池寺道上遺跡の旧河道堆積砂で、阿賀野川下流部がこれに次いで近似する。微量の軽石を含む能代川のサンプルは、本遺跡の南方5km地点から採取した。本遺跡の段丘下に所在する諏訪畑遺跡でも古代の遺物包含層下に堆積するシルト層から軽石が出土しており、本遺跡の至近距離で採取した砂粒の可能性もある。

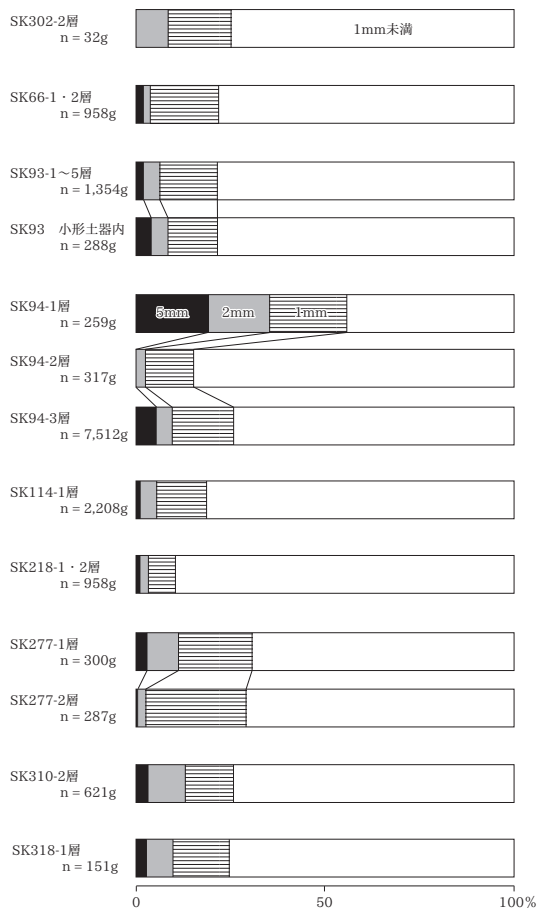
以上のような特徴をもつ土坑内集積砂の性格を考える上で、考慮すべき事例がある。東日本の各地に現存するクリの貯蔵法「砂グリ」である。その目的は冬季の保存と共に、甘味増加や食害防止にあるとされ〔渡辺1996〕、保存実験をつうじ食害防止の有効性が確認された〔荒川2014〕。前述のように、本遺跡ではクリの炭化子葉が出土し、樹種同定でクリ材が高い割合を示した。栃木県槻沢遺跡では10基の袋状土坑の底面に川砂が敷かれており〔池上1935〕、そうした保存法が存在した可能性がある。しかし、台地・丘陵上の遺跡での貯蔵物の遺存は期待できず、「砂グリ」の実証は困難と言わざるをえない。

一方、山梨県前付遺跡では、中期後葉の焼失住居から5.37kgの砂を貯蔵した深鉢土器が出土した。2.4km離れた笛吹川の河川砂と組成が一致し、土器や焼成粘土塊にも同様の粒子が含まれるところから、土器製作時の混和材貯蔵例であることが判明した〔河西2015〕。越後平野周辺に分布する縄文時代の集落では、土器の含有物が近隣河川の砂粒に近似するケースが一般的であり〔前山2021〕、こうした観点から土器との関係を検討する。

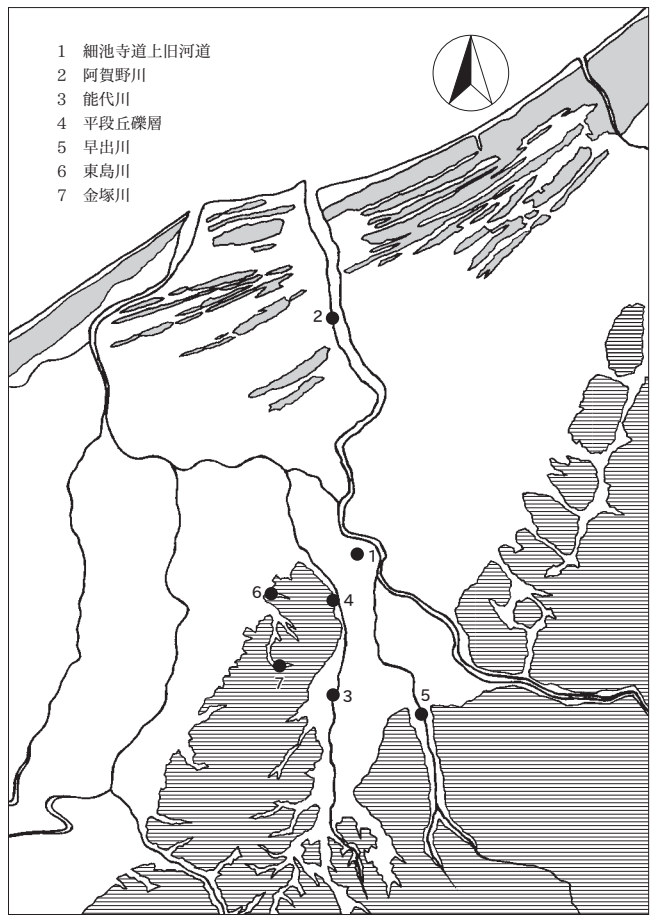
第20図Dに本次調査出土土器の混和材の在り方を示す。時期別に見ると、中期前葉1～2期でⅡa種(多量の破碎鉱物を含有)の出現率が高い傾向にある。中期前葉3期以後は、これと補完関係をなすようにⅠb種が増加するが、いずれの時期においてもⅠa種(磨耗した鉱物・岩石を多量に含む)とⅠa2種(Ⅰa種に多量の破碎鉱物加わる)が主体を占める。これらの中には軽石を含む資料が9%存在し、微細な角閃石の含有率は67%にのぼる。こうした特徴は阿賀野川の河川砂と共通しており、Ⅰa種はこれを混和材とした土器と考えられる。Ⅰb種は集積砂Aの破碎花崗岩をこれに混合したもの、磨耗砂が欠落するⅡa種は破碎花崗岩だけを加えたもの、Ⅰd種(磨



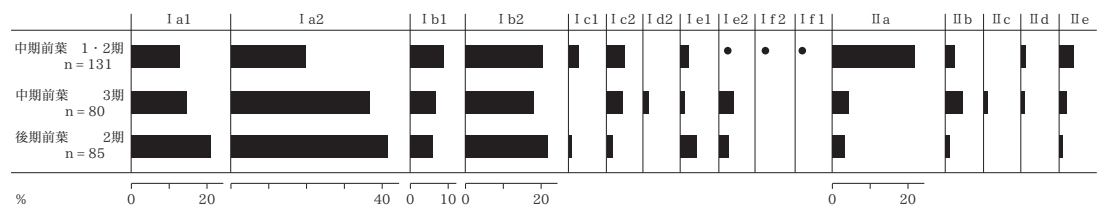
A 土坑内集積砂と河川砂の組成 (ドットは1%未満)



B 土坑内集積砂の粒度

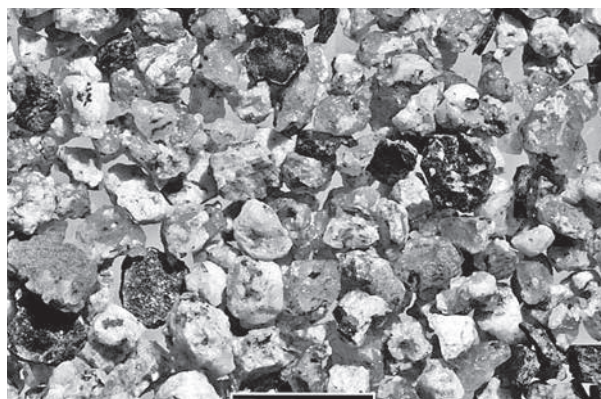


C 河川砂採取地

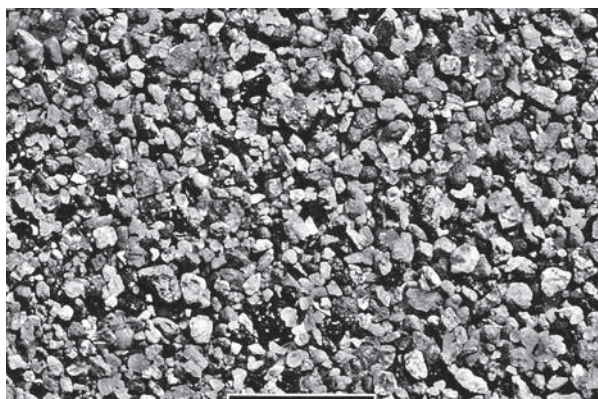


D 平遺跡の土器含有物 (ドットは1%未満)

第 20 図 土坑内集積砂・近隣河川の砂粒と土器の混和材



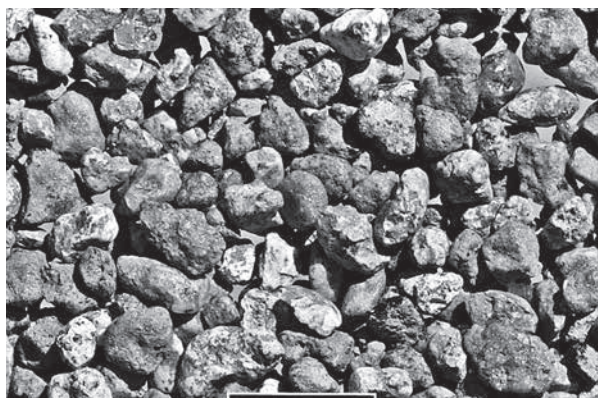
1 SK302 の破砕石英・長石と雲母



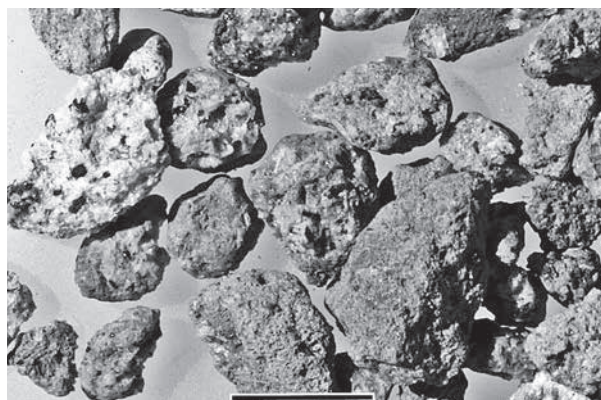
2 SK93 の1mm未満微粒子



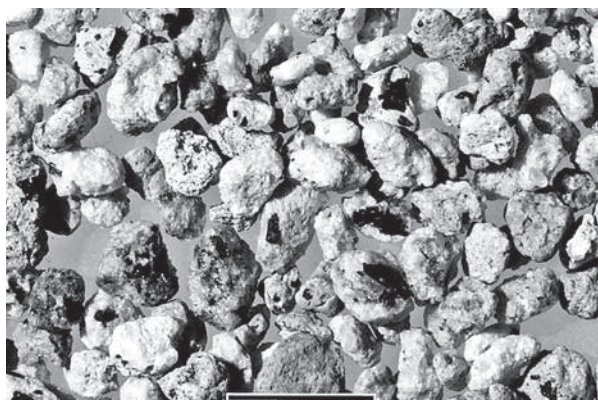
3 SK93 小形土器内の堆積土砂 (○は軽石)



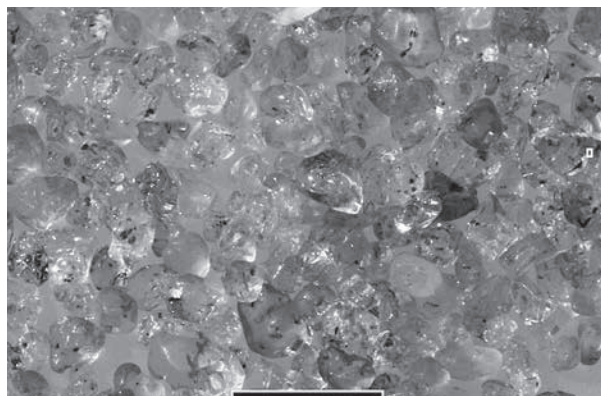
4 SK93 小形土器内の砂粒 (1mmメッシュ篩採取)



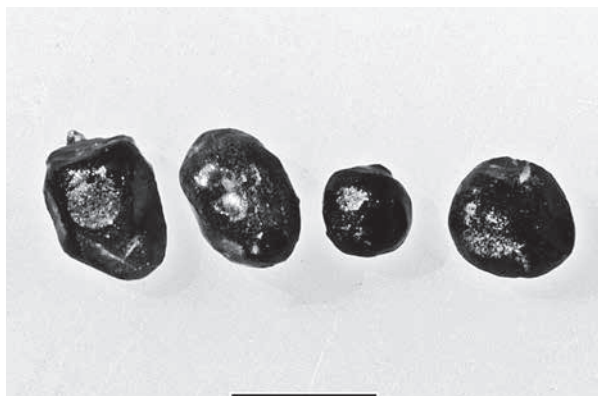
5 SK310 の軽石粒子



6 細池寺道上遺跡埋没流路の軽石粒子



7 金塚川の高温石英



8 金塚川の微細黒曜石

第21図 土坑内集積砂と近隣河川の砂粒 (スケールは5mm)

耗粒子と共に多量の軽石を含む)やⅡc種(多量含有物が軽石に限定される)は、粉碎した軽石の混合例とみられる。

その一方で、出土資料の中には阿賀野川の河川砂に稀薄なガラス状粒子が55%の高率で含まれる。中でもこれを多量に含むⅠe種は異なる供給源の存在を想定させる。砂粒組成図下段に新津丘陵北部の東島川と金塚川で採取した河川砂の組成を示した。前者は本遺跡の西方3km、後者は南西4kmに位置する。ともに高温石英(ガラス状粒子)の占有率が高いことが大きな特徴で(第21図7)、本遺跡の土器に含まれるガラス状粒子が新津丘陵の河川砂に由来することをうかがわせる。このうち東島川で高率を占める角閃石は極めて大型で、本遺跡の土器に含まれる角閃石とは特徴を異にする。新津丘陵北部の金津地区では第四紀海成層の兎谷層に玉砂利状の黒曜石が含まれており、これを源流とする金塚川の砂粒の中にも磨耗した黒曜石が混じる(第21図8)。本次調査では新津丘陵産黒曜石が出土しているが、石器石材としての利用は未だ確認できていない。新潟市文化財センターで行った加熱実験によれば、950°の加熱でも発泡に至らず、土器の混和材となりうることが判明した〔前山2021〕。ガラス状粒子の中には黒曜石が含まれる可能性が高い。

以上のように、本遺跡では阿賀野川や早出川の花崗岩、阿賀野川低地～能代川・早出川低地から採取した砂粒とともに新津丘陵の沢砂を土器の混和材として利用した可能性が高く、多様な資源利用の在り方がこれによってうかがえる。土器の含有物と河川砂の岩石学的な比較検討を今後の課題としたい。

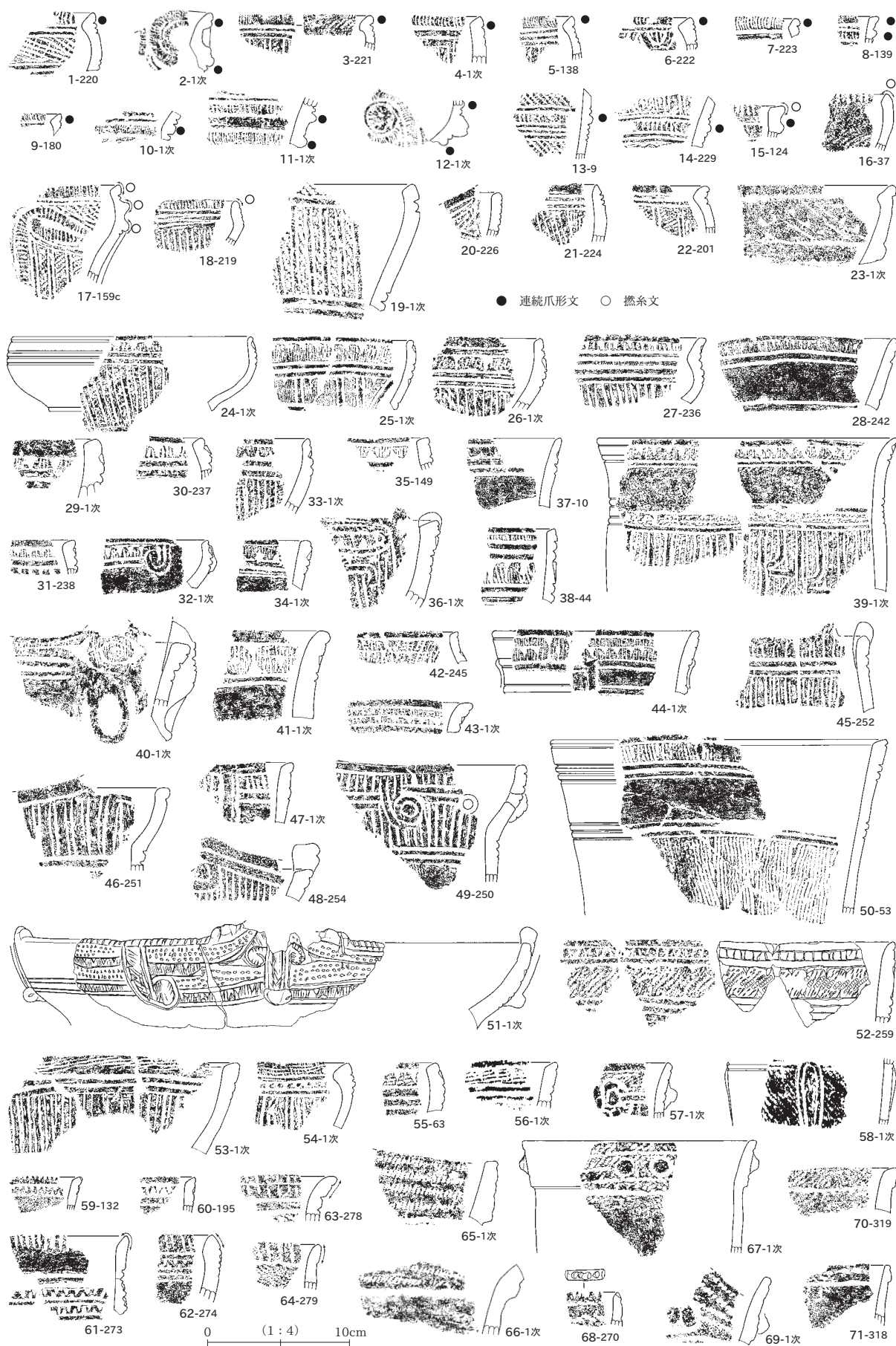
第3節 中期前葉土器群からみた平遺跡

今回の調査で出土した縄文土器の8割を占めるのは中期前葉土器群である。中でも1期・2期の土器は、これまで良好な資料に恵まれなかった新津丘陵にあって基準資料となるもので、その在り方から本遺跡の位置づけを考える。1次調査出土土器を加えた主要な資料を第22図に示す。

1期は北陸編年の新保式Ⅱ期に並行し、越後平野周辺では角田山麓の豊原遺跡〔小野・前山ほか1987〕と新発田市二夕子沢A遺跡〔新発田市教委2003〕で良好な資料が出土している。本遺跡では北陸系在地土器(A1群)が主体を占め、これに関東の五領ヶ台Ⅰb式系土器(23)や東北系のC1・2群(65～69)が付随する。A1群の口端および隆帯上の文様を見ると、本遺跡では連続爪形文(1～15)の施文率が67%にのぼる点が大きな特徴である。越後平野周辺に類例を求めると、豊原遺跡や二夕子沢A遺跡で同様の資料を見出すことができる。しかし、その割合は前者で2%、後者で11%にとどまる。新潟県内では本時期やこれに先行する新保式Ⅰ期平行段階において口端・隆帯上に縦位撚糸文を施す手法(15～18)が一般的で、その率は豊原遺跡で66%、二夕子沢A遺跡で80%に達する。

こうしたなかで、角田山麓の大沢遺跡A地区では、新保式Ⅰ期段階の土器の27%に連続爪形文を認め、特異な事例として留意されていた〔巻町教委1990〕。口端の連続爪形文は北陸の新保式Ⅰ期～Ⅱ期で一般的なもので、中でもⅡ期に盛行する手法である〔加藤1986〕。角田山の景観は日本海のランドマークをなしており、前期前葉以来北陸地方と緊密な関係にあった。前期終末における北陸集団の北上現象〔今村2006〕や石器石材および土器の混和材として利用された隠岐ノ島産黒曜石〔金山ほか1995〕・飛騨産石英質片麻岩〔小野ほか1994〕の出土は好例と言える。こうした地理的特性をふまえれば、大沢遺跡の連続爪形文が北陸集団との接触をつうじ生成した可能性は極めて高い。上記の土器群が出土した大沢遺跡1989年調査地では、1期の土器が僅少であった。そのため本遺跡との具体的な関係は明らかでないが、平遺跡の集落成立に大沢遺跡居住集団が関与したことは十分考えられる。時期は異なるが、北陸の中期後葉「串田新Ⅰ式土器」が弥彦・角田山麓に飛石的に伝播した後内陸部に浸透する現象が確認されており〔寺崎2005〕、上記のような見方を支持する事例となる。

2期は北陸の新保式Ⅲ期に平行する段階で、阿賀野川河畔の萩野遺跡、亀田砂丘の砂崩遺跡、角田山麓の豊原遺跡・松郷屋遺跡・大沢遺跡、新発田市域の狐森B遺跡、県北の村上市樋渡遺跡・大関上野遺跡などでまとまった資料が得られている。



第22図 中期前葉1期・2期の主要土器 (●連続爪形文・○撚糸文)

本遺跡のこの時期は、北陸系在土器（A2群）を主体としながら、関東の五領ケ台Ⅱ式（59・60）やこれに東北的な要素が加わるBC2群（61～64）、東北系のC1・2群（65～69）、北関東～東北南部系のC2・3群（70・71）が付随する。A2群は、彫去・細線文土器（a種）と縦位集合沈線文土器（b種）の主要二者からなる。a種の中では正位の彫刻蓮華文（24～32）が卓越し、軌軸文（40～44）も定量存在する点で角田山麓の大沢遺跡〔巻町教委1990〕や松郷屋遺跡〔前山1994〕と似た様相を示す。b種（45～49）は阿賀野川流域の萩野遺跡〔新潟県教委1994〕や新発田市狐森B遺跡〔新発田市教委2007〕・村上市大関上野遺跡〔村上市教委2000〕などで高率を示し、阿賀北地域から阿賀野川流域にかけて多用された土器である。関東の五領ケ台Ⅱ式系土器は阿賀野川中流域の大坂上遺跡でまとまった資料が出土している〔新潟県教委2008〕。この遺跡では五領ケ台系土器の口端に撚糸文を施すBC2b種も確認でき、本遺跡との近縁関係がうかがえる。

口縁部区画内に横位撚糸文を施す53～56、区画下端に突起を配す57、突起下に逆U字沈線を施す58は、角田山麓の豊原遺跡Ⅵ群土器と類似する土器である。しかし、口縁部区画内に三角形彫去を施す55・56や区画下に縦位沈線を複合させる53・54は、豊原遺跡での少数資料にとどまる。57・58は突起の位置や突起下の逆U字沈線に変形がみられ、総じて豊原遺跡とは疎遠な関係にある〔前山2009〕。豊原遺跡Ⅵ群土器の地文として多用される木目状撚糸文C種（50）が本遺跡で少数資料にとどまる点も上記のような特徴と整合的である。

口縁部文様帯に多数の刺突文を充填する51・52（A2c種）は他に類例のない土器である。上記の豊原遺跡Ⅵ群土器は同遺跡に偏在する個性的な土器で〔前山2009〕、本遺跡のA2c種もこれに似た資料とみることができる。北10kmに位置する亀田砂丘の砂崩遺跡は、本遺跡の活動を考えるうえで示唆的である。この遺跡は基本的な生活用具が完備されておらず、一般的な集落遺跡とは性格を異にする。主体を占める2期の土器は、混和材の在り方から三つのグループに分けられる。Ⅰ類は磨耗粒子、Ⅱ類は破碎石英、Ⅲ類は破碎岩石を指標とし、それぞれ新津丘陵・阿賀北・角田山麓から搬入した土器と考えられる〔前山2015〕。このうちⅠ類は本遺跡で製作された土器とみられ、平遺跡の活動領域が亀田砂丘まで及んでいたことを物語る。

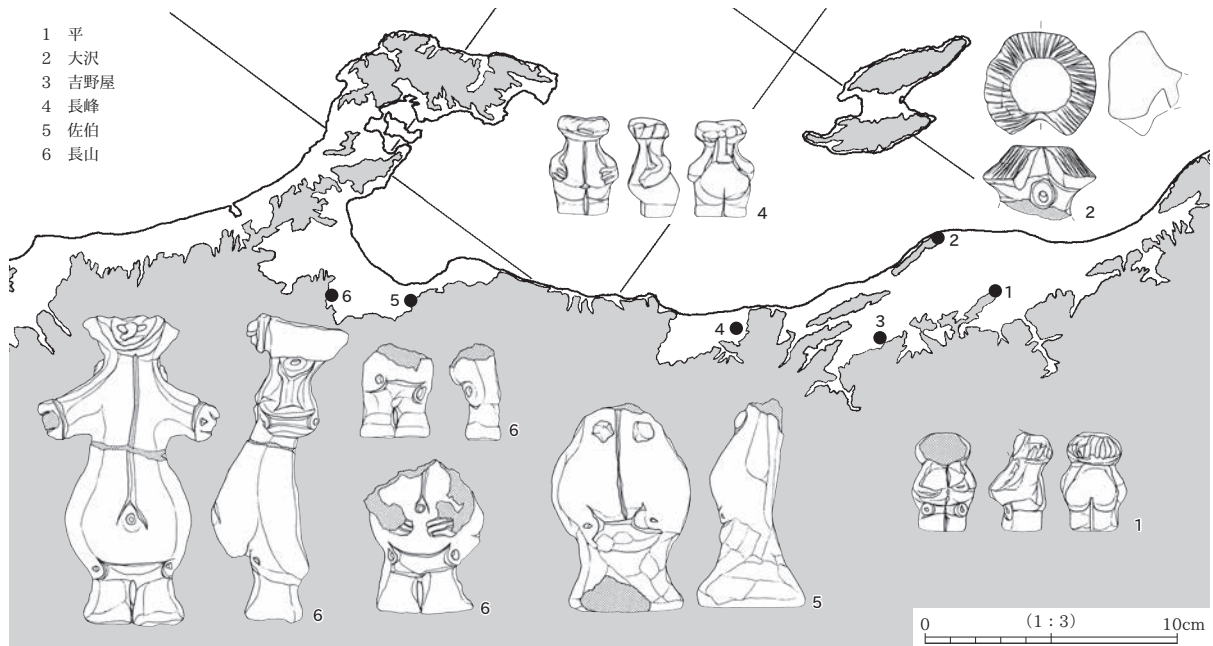
以上のように、本遺跡の2期土器群は多様な資料から構成される。この時期は、ひき続き角田山麓との関係を維持しながらも阿賀北地域や阿賀野川流域との結びつきを強める。定住性の高まりを背景に個性的な土器が生まれる点にもこの時期の特徴が見いだされる。

第4節 中期前葉の完形極小土偶

2区Ⅲ層から全長3.9cmたらずの土偶が出土した。頭部正面が欠損するが、発掘時の損傷と判断できることから、本来は完存状態にあった資料とみなされる。胎土には磨耗した岩石粒子とともに破碎石英・長石や角閃石を多量に含み（写真図版25-13）、前述のような土器の混和材区分に従えばIb2種にあたる。この種の含有物は中期前葉3期の土器の主要グループの一つをなしており、本遺跡で製作された可能性が高い土偶である。

同一サイズの完形土偶が上越市（旧吉川町）長峰遺跡から出土している〔吉川町教委1984〕。本例と同様腹部に両腕を回す「ポーズ土偶」で、頭髪表現、乳房の欠如、腹部の正中線などにも類似性を認める。この土偶は頭部背面に束ねた髪が北陸系、臀部の形態が中部高地系と位置づけられ〔佐藤2003〕、左右非対称に作出された脚部の形状も中部高地系の特徴とされる〔寺崎・宮尾2011〕。

これに対し本例は、髪を束ねない、臀部の張り出しが弱い、頭部の側面観が台形をなす、腹部下端に横位の玉抱三叉文を施す、といった相違点がある。このうち頭部の形態については、中期前葉の土偶が多数出土した三条市（旧栄町）吉野屋遺跡〔今井2013〕や角田山麓の大沢遺跡〔巻町教委1990〕で類似資料が出土しており、越後平野中央部の地域色とも考えられる。一方、腹部下端の横位玉抱三叉文は富山県長山遺跡で多用される文様で〔八尾町教委1985〕、「長山タイプ」の特徴を備えた土偶とみなされる。以上のような類似点と相違点を併せもつ二つの極小土偶は、新潟県内において類例が乏しい遠隔地要素を互いに取り入れるところに大きな特徴が見いだせる。



第23図 平遺跡の極小土偶と類似土偶

長峰遺跡の極小土偶は、1,200点以上にのぼる新潟県内の中期土偶の中にあつて数少ない完形品として注目されながら〔宮尾・寺崎 2013〕、出土以来40年あまりにわたり孤立状態にあつた。こうした中で出土した本遺跡の類似土偶は、同様の製作情報が広範囲にわたり共有されるとともに、壊されない小形土偶〔谷口 1990〕が少数ながらも普遍的に存在する可能性を予測させる意味で重要である。

同一サイズの完形土偶が長野県花上寺遺跡からも出土している〔岡谷市教委 1996〕。この土偶は土坑内の埋納例と見られるところから、特殊な能力をもった人物（シャーマン）の所持品とする解釈も示されている〔三上 2014〕。長峰遺跡は頸城平野の中期を代表する集落の一つである。花上寺遺跡では諏訪湖畔の地域特性を表す土器片鋸が多量に出土し同地の中核集落をなす点も、中期前葉の本遺跡の性格を考えるうえで示唆的である。

第5節 中期前葉の石器群

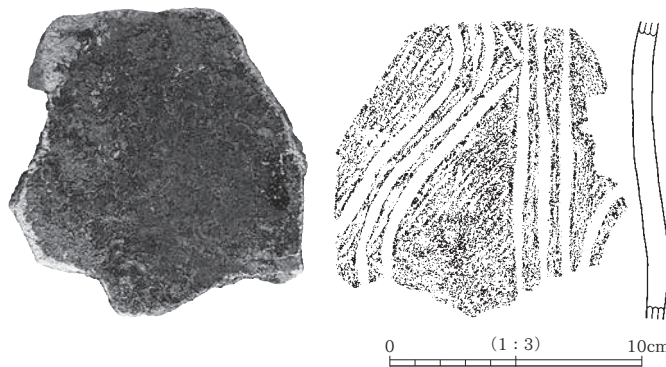
本次調査をつうじ75点の定型石器が出土した。この中には後期の石鏃も存在するが、土器と同様に大半が中期前葉に属す可能性が高く、新津丘陵の当該期の石器群を理解するうえで良好な資料となる。

前章で石器群をA～Cに大別した。食料の調達に関わるA群石器は磨石・敲石類が卓越し、これに少量の礫石錘・石鏃・打製石斧が付随する。新潟県内における縄文時代中期の石器組成は、第24図のように4つのエリアに分けられる。信濃川中流域や魚沼川流域（エリアⅢ）では打製石斧、柏崎平野以北の海岸・平野部や内陸部（エリアⅡ）では磨石・敲石類、佐渡（エリアⅠ）では石鏃が卓越し、上越および中越海岸部（エリアⅣ）では磨石・敲石類を主体としながら打製石斧が定量存在する。本次調査で出土した資料はエリアⅡの特徴と合致しており、本遺跡が置かれた地理的状況を表している。

石鏃は信州産黒曜石を使用する。石核・剥片類の中で黒曜石は流紋岩に次いで多い石材である。本章第3節に述べたように、角田山麓の大沢遺跡は本遺跡の集落成立に関わる遺跡の可能性が高い。この遺跡は信州産黒曜石が多量に出土する日本海側の北限にあたり〔金山ほか 1995・大工原 2002〕、黒曜石の流通に関わる中核的な役割を担っていた。本次調査地から出土した信州産黒曜石は、晶子が乏しい石材が主体を占める。大沢遺跡から出土した信州産黒曜石の半数強も類似石材であり、同遺跡から供給された可能性が高い。

工具的な性格をもつB群石器は、磨製石斧・石錐・砥石からなる。石匙や石篋の欠落は、この種の石器が卓

中期前葉～後期前葉土器に伴いアスファルト付着礫が出土し、中期の段階に利用が始まる可能性を示唆していた〔前山 2014〕。今回の調査で出土したアスファルト付着遺物の中には、時期の特定が可能な土器が2点ある。中期前葉1期（図版 24-228）と後期前葉2期（図版 20-82）の資料である。前者は新津丘陵におけるアスファルトの利用時期が中期初頭まで遡ることを確実にし、定住集落の成立期から晩期に至るまで



第 25 図 1 次調査出土のアスファルト付着土器

連綿とした利用を辿りうる数少ないフィールドとなること明らかにした。新潟県内でこれまで報告されたアスファルトの中で、最古の資料は阿賀町猿額遺跡から出土した前期終末のアスファルト付着石鏃とされる〔寺崎 2017〕。しかし理化学分析が行われておらず、その位置づけは確定していない。新津丘陵では、前期終末に至り定住化の兆しを見せる程島館跡や草水町 2 丁目窯跡が出現する。アスファルトの利用上限に関する新たな知見がえられることに期待したい。

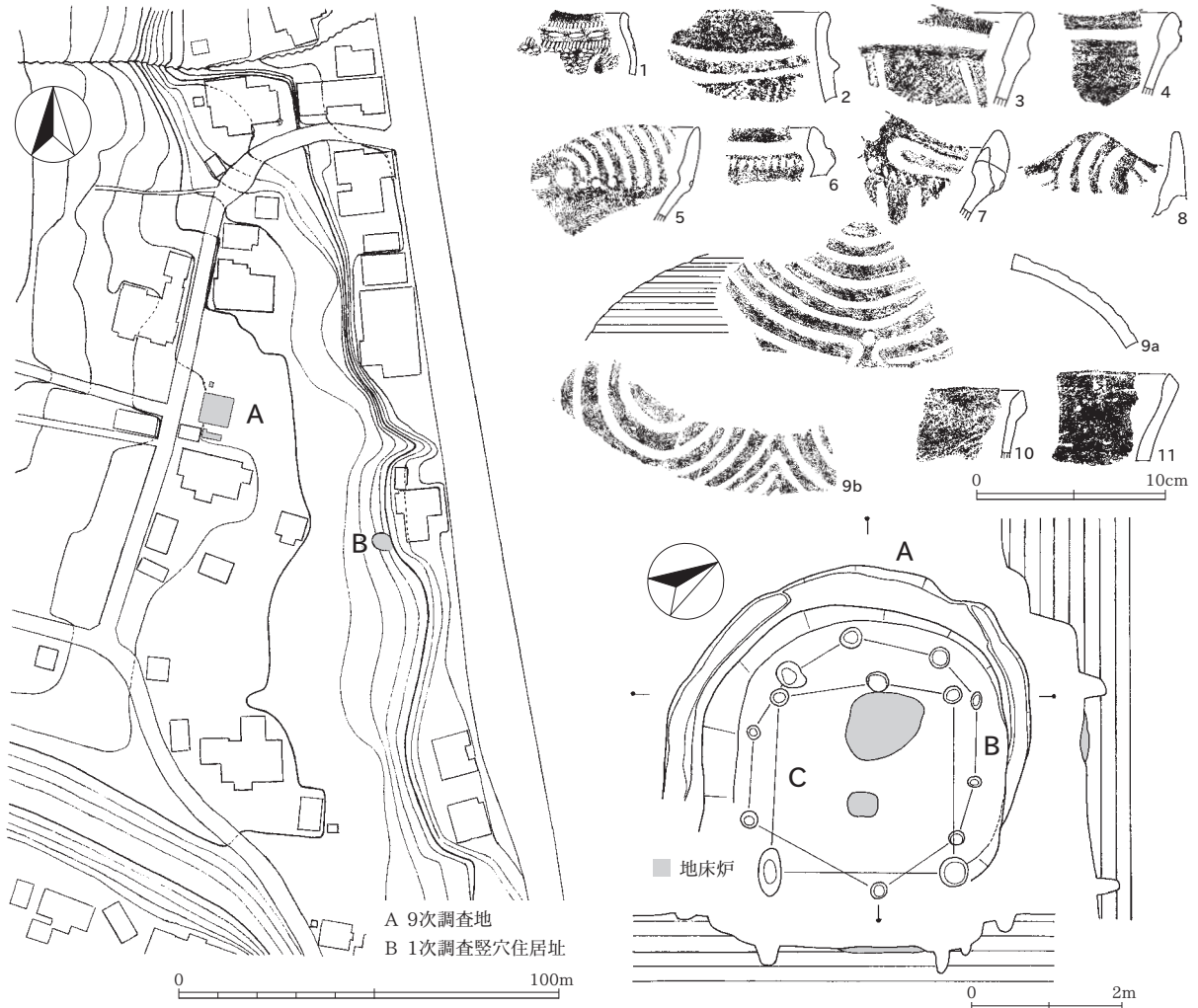
新津丘陵におけるアスファルトをめぐるもう一つの重要な問題は、流通の在り方である。角田山麓の大沢遺跡で 1989 年に出土した中期前葉の石鏃付着物〔巻町教委 1990〕がアスファルトであることが最近判明した。本遺跡との関連性を示唆する事例と考えられる。阿賀野市石船戸遺跡（晩期前葉主体）ではアスファルト塊や付着遺物が多量に出土し、付近に産出地が存在した可能性が想定されている〔阿賀野市教委 2018〕。しかし、今回行ったアスファルトのイオウ同位体比分析において、石船戸遺跡のアスファルトが新津丘陵産原油の領域に含まれるとの所見が示された（第 VI 章第 5 節）。新津丘陵の原遺跡は石船戸と時期的に平行し、大沢谷内遺跡の成立に主導的な役割を担った可能性が高い集落である〔前山 2016〕。2021 年に行われた確認調査に際し多量のアスファルトが出土しており、石船戸遺跡の位置づけにあたり、原遺跡との関連性の検討が課題となる。

第 7 節 縄文時代後期前葉の平集落

今回の調査では、113m² ならずの範囲から竪穴住居址状遺構 1 箇所、袋状土坑 2 基、砂集積土坑 9 基、皿状土坑 23 基、ピット 241 基を確認し、ピットの配列から 18 棟の掘立柱建物を想定した。これらの大多数は中期前葉の遺物包含層にあたる III 層上部から構築されており、大半が後期前葉の南三十稲場式期に属す可能性が高い。

一方、本次調査地の南東 50m あまりで行われた 1 次調査は段丘の崖線付近に位置し、円形プランの竪穴住居址が確認された〔新津市教委 1982〕。この住居は周溝がめぐる浅い掘込みの住居 A に小規模な柱穴が壁際に並ぶ住居 B と 5 本柱の支柱穴をもつ住居 C が重複するケースと考えられる。覆土から三十稲場式新段階～南三十稲場式古段階の土器が出土しており、B・C は後者を下限とする竪穴住居と見なされる（第 26 図）。本次調査地の竪穴住居址状遺構からは、南三十稲場式古段階の土器が出土した。これが竪穴住居であるとすれば、本遺跡のこの時期の集落には一辺 50m 以上に及ぶ居住域が存在した可能性がある。

本次調査で想定した 18 棟の掘立柱建物は、亀甲形 2 棟と方形～長方形 16 棟からなる。以上の中で調査地内でプランが完結するのは方形～長方形を呈する 4 棟の小型建物である。このうち SB406 ではすべてのピットで柱根が確認できた。これらは荒川隆史氏による掘立柱建物 A1 類・A2 類にあたる〔荒川 2008〕。同氏によれば新潟県内の後期集落では一般的な形態で、新津丘陵南部の川船戸遺跡 A 地区（後期後葉）で確認された 9 棟の建物もすべてがこれに該当する〔田上町教委 1996〕。時期は異なるが、晩期の新発田市青田遺跡〔新潟県教委 2004〕や新潟市西蒲区御井戸遺跡〔前山 2020〕では、床面積 8m² に満たない 4 本柱の長方形建物が木柱根に基づき把握



第 26 図 1 次調査の竪穴住居址と出土土器

されており、本遺跡での小型建物の存在を間接的ではあるが支持する事例となる。ただし、調査地外に柱穴の存在を想定した 14 棟については、可能性の指摘にとどめたい。

今回の調査で確認された 2 基の袋状土坑は、堅果類の貯蔵施設と考える見方が一般的である〔坂口 2003・塚本 2007〕。越後平野の周辺では、中期中葉の袋状土坑群が長岡市中道遺跡から確認されている〔長岡市教委 1998〕。しかし後期に入り袋状土坑は減少に転じ、小千谷市城之腰遺跡では南三十稻場式期に至り激減する〔新潟県教委 1991〕。本次調査地内の 2 基の袋状土坑は、ともに亀甲形の掘立柱建物 SB401 と SB402 に隣接する。二棟の想定が妥当であり、さらには袋状土坑との同時性が認められるとすれば、貯蔵穴の管理形態を考えるうえでの一資料になる。

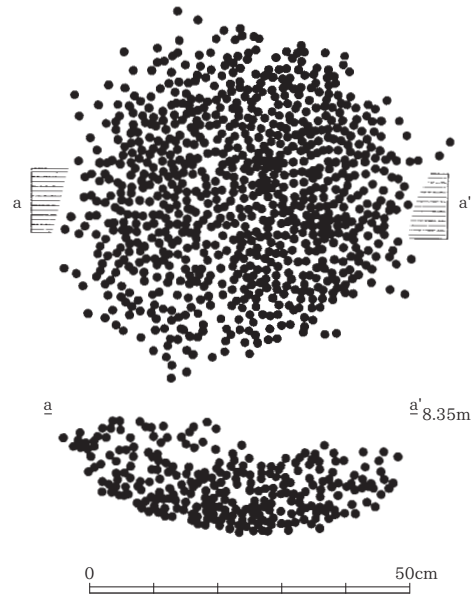
新潟県内では、近年植物性食料残渣の出土例が次第に蓄積されつつある。主体を占める堅果類は、後期に入りトチの実出土遺跡が増加する。トチの実多出遺跡が現われるのも後期前葉からで、この時期は堅果類利用における大きな画期をなしている〔前山 2019〕。トチの実を長期保存するためには、乾燥貯蔵が不可欠である〔渡辺 1980・名久井 2019〕。800 個あまりのトチが火災住居の一角から出土した長岡市中道遺跡 51 号住居〔長岡市教委 1998〕は、中期後葉における屋根裏貯蔵の好例である。この住居は平面形が長方形をなし、屋根裏利用に適した構造の家屋とされる〔渡辺 1980〕。しかし、こうした竪穴住居は後期に至り姿を消す。後期前葉における掘立柱建物の増加は竪穴住居の形態変化と連動する可能性があり、本遺跡での掘立柱建物の性格を考えるうえで留意すべきことがらと言える。

その一方で、穴貯蔵が必要な種実もある。外皮を腐らせるため一時的な貯蔵を要すクルミである。角田山麓の御井戸遺跡で確認した晩期中葉のクルミ集積〔巻町教委巻町教委 2002〕は断面形が皿状土坑と類似しており（第27図）、それらが同様の用途に充てられた可能性を示唆する。本章第2節で述べた砂集積土坑も含め、本次調査地に備わる貯蔵空間としての性格を想起させる。

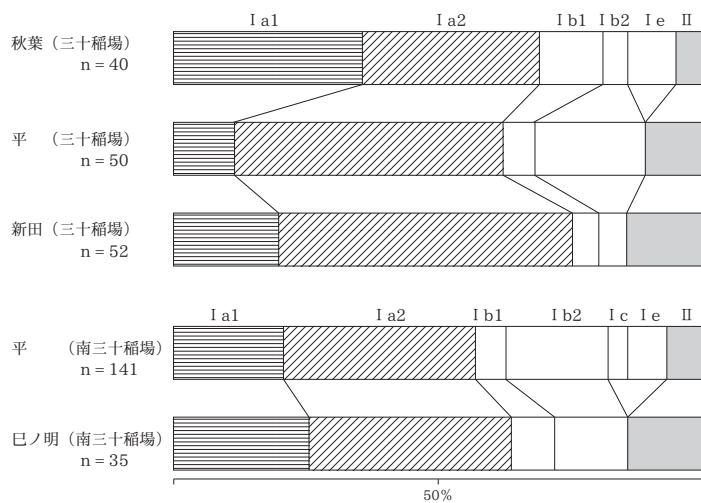
多数の後期前葉遺構が分布する本次調査地では、この時期の遺物が僅少であった。これに対し、1次調査地では後期前葉の捨場が形成され、三十稲場式新段階から南三十稲場式中段階に至る土器が多数出土した。しかし三十稲場式期の明確な遺構は本次調査を含め未だ確認されておらず、後期前葉集落の成立時期や空間構造については不明である。

視点を変えて、新津丘陵の北部周辺に分布する秋葉遺跡・新田遺跡・巳ノ明遺跡と本遺跡での土器含有物の在り方を第28図に示す。秋葉遺跡は中期中葉～後期前葉の拠点集落で、三十稲場式古段階をもって集落の機能を終える。新田遺跡と巳ノ明遺跡は本遺跡の南方5kmあまりに位置する小規模遺跡で、能代川河畔の沖積地に立地する。前者は三十稲場式古段階、後者は南三十稲場式古段階の短期間に形成された。ともに土器製作に伴う焼成粘土塊が出土しておらず、両遺跡から出土した土器は搬入品の可能性が高い。本遺跡の数値は、1次調査出土資料を加えた集計値である。

三十稲場式期の秋葉遺跡では、磨耗石英を多量に含むI a1種の割合が高い。多量のガラス状粒子を伴うI e1種が定量存在する一方で、破碎粒子に限定されるII種は低率にとどまり、本遺跡や新田遺跡と異なる様相を見せる。三十稲場式期の本遺跡と新田遺跡では、磨耗岩石を多量に含むI a2種が主体を占める。これに多量の破碎石英が加わるI b2種が本遺跡でいくぶん高い数値を示すが、この点を除けば類似度の高い内容と言って良い。軽石含有土器（第28図右）が新田遺跡で5%存在することも本遺跡との近縁関係を物語る。南三十稲場式期の巳ノ明遺跡は本遺跡との類似度が高い。I b2種以下に見られる若干の異なりは、巳ノ明遺跡での資料数の乏しさに起因するものであろう。土器の混和材に認める新田遺跡・巳ノ明遺跡との類似性は、これら二遺跡が本遺跡のワークキャンプとして機能した可能性を示唆している。遺跡間関係を考える上で土器の混和材は重要な指標となる。より詳細な胎土分析をつうじ、上記のような見方の妥当性を検証することが課題となる。



第27図 御井戸遺跡のクルミ集積
（〔巻町教育委員会 2003〕より）



新田遺跡の軽石含有土器

第28図 後期前葉遺跡の土器含有物

引用・参考文献

- ア 相澤裕子 2019 「程島館跡」『新潟市文化財センター年報』第6号
阿賀町教育委員会 2011 『屋敷島遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
阿賀野市教育委員会 2018 『石船戸遺跡』
秋田県埋蔵文化財振興会 1989 『八木遺跡発掘調査報告書』
荒川隆史 2008 「掘立柱建物と建材」『縄文時代の考古学 8 生活空間』 同成社
荒川隆史 2014 「堅果類の保存実験から見た新潟県青田遺跡の縄文時代晩期の貯蔵穴について」『新潟県立歴史博物館研究紀要』第15号
- イ 池上啓介 1935 「栃木縣那須郡狩野村槻澤石器時代住居跡発掘報告（其一）」『史前學雜誌』第7巻6號 史前學會
池谷信之 1994 「愛鷹・箱根山麓の縄文中期集落と石器保有」『地域と考古学』 向坂鋼二先生還暦記念論集刊行会
伊東隆夫 1995～1999 「日本産広葉樹林の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」『木材研究・資料』31～35 京都大学木質科学研究所
伊東隆夫・山田昌久（編）2012 『木の考古学—出土木製品用材データベース—』 海青社
今井哲哉 2013 「新潟県域における河童型土偶の成立と展開—その問題点と今後の展望—」『三条考古学研究会機関紙』第5号 三条考古学研究会
今村啓爾 1985 「五領ヶ台式土器の編年」『東京大学考古学研究室研究紀要』第4号 東京大学考古学研究室
今村啓爾 2006 「縄文前期末における北陸集団の北上と土器の動き」『考古学雑誌』第90巻第3・4号
- ウ Wheelar E,A,Bass and Gasson P,E. 1998 『広葉樹林の識別』 海青社
卜部厚志 2018 「縄文時代前期末における沼沢火山の噴火について」『新潟県考古学会第30回大会研究発表会発表要旨』 新潟県考古学会
- オ 岡谷市教育委員会 1996 『花上寺遺跡』
小熊博史・立木宏明 2016 「陣ヶ峰北遺跡」『加茂市史 資料編4 考古』
小野 昭・小熊博史 1994 「布目遺跡」『巻町史 資料編1 考古』
小野 昭・前山精明ほか 1987 「巻町豊原遺跡の調査」『巻町史研究』第4号
- カ 河西 学 2015 「前付遺跡出土貯蔵砂・粘土塊・土器の岩石鉱物分析」『前付遺跡・大詳寺遺跡』 公益財団法人山梨文化財研究所
柏崎市教育委員会 2011 『剣野』
加藤 進・梶原良通・中野孝教 1997 「東北日本油田地域における原油の硫黄分と硫黄同位体組成」『石油技術協会誌』62
加藤三千雄 1986 「第8群土器 新保式土器」『真脇遺跡』 能都町教育委員会
金山喜昭・前山精明・鈴木正男 1995 「日本海沿岸における黒曜石の交流」『日本考古学協会第61回総会研究発表要旨』 日本考古学協会
上條信彦・高橋和也・南 武志 2020 「硫黄同位体比分析による列島産アスファルトの原産地推定」『第37回日本文化財科学学会大会 研究発表要旨集』 日本文化財科学学会
神林村教育委員会 2003 『樋渡遺跡・堀下遺跡』
- コ 古環境研究所 2003 「出土種実の同定」『ニタ子沢 A 遺跡発掘調査報告書』 新発田市教育委員会
五泉市教育委員会 2001 『大蔵遺跡』
五泉市教育委員会 2004a 『新田遺跡』
五泉市教育委員会 2004b 『巳ノ明遺跡』
五泉市教育委員会 2004c 『寛下遺跡』
- サ 酒井和男・廣野耕造 2002 「新潟砂丘における居住の初源」『新潟考古』第13号 新潟県考古学会
坂口 隆 2003 『縄文時代貯蔵穴の研究』 株式会社アム・プロモーション
佐藤雅一 2003 「新潟県における土偶研究の視点」『新潟考古』第14号 新潟県考古学会
三条考古学研究会 2013 「吉野屋遺跡出土土偶の再整理」『三条考古学研究会機関誌』第5号 三条考古学研究会
- シ 新発田市教育委員会 2003 『ニタ子沢 A 遺跡発掘調査報告書』
新発田市教育委員会 2007 『狐森 B 遺跡発掘調査報告書』
島倉巳三郎 1973 「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然史博物館収蔵見目録』第7集 大阪市立自然史博物館

- 島地 謙・伊東隆夫 1982 『図説木材組織』 地球社
- タ 大工原豊 2002 「黒曜石の流通をめぐる社会—前期の北関東・中部地域—」『縄文社会論（上）』 同成社
- 田上町教育委員会 1976a 『中店遺跡』
- 田上町教育委員会 1976b 『古屋敷遺跡』
- 田上町教育委員会 1993 『保明浦遺跡』
- 田上町教育委員会 1996 『保明浦遺跡Ⅱ』
- 田上町教育委員会 1997 『川船河遺跡』
- 田上町教育委員会 2003 『保明浦遺跡Ⅲ』
- 田上町教育委員会 2004 『保明浦遺跡Ⅳ』
- 田中耕作・古沢妥史 2019 「第2章 縄文時代 第2節 土器 第5項 後期」『新潟県の考古学』Ⅲ 新潟県考古学会
- 谷口康浩 1990 「土偶のこわれ方」『季刊考古学』第30号 雄山閣
- ツ 塚本師也 2007 「乾燥型貯蔵穴」『縄文時代の考古学』 同成社
- テ 寺崎裕助 2005 「新潟県の串田新式土器・古串田新式土器」『新潟考古学談話会会報』第29号
- 寺崎裕助 2008 「新潟県における新崎式系土器」『新潟県の考古学』2 新潟県考古学会
- 寺崎裕助 2017 「新潟県におけるアスファルト利用—縄文時代を中心に—」『縄文時代のアスファルト利用』Ⅰ
- 寺崎裕助・宮尾 享 2011 『にいがたの土偶』 新潟県歴史博物館
- ナ 長岡市教育委員会 1981 『埋蔵文化財発掘調査報告書 岩野原遺跡』
- 長岡市教育委員会 1998 『中道遺跡』
- 中島栄一 1980 「大沢遺跡」『村松町史 資料編 第1巻 考古・古代・中世』
- 中島栄一 1983 「町内における遺跡」『小須戸町史』 小須戸町史編纂室
- 中島栄一・藤塚 明・金子正典 1980 「矢津遺跡」『村松町史 資料編 第1巻 考古・古代・中世』
- 中村 純 1967 『花粉分析』 古今書院
- 中村 純 1974 「イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として」『第四紀研究』13 日本第四紀学会
- 中村 純 1977 「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学』10 日本文化財科学会
- 中村 純 1980 「日本産花粉の標徴」『大阪市立自然史博物館収蔵品目録』第13集 大阪市立自然史博物館
- 名久井文明 2019 『食べ物の民俗考古学』 吉川弘文館
- ニ 新潟県教育委員会 1966 『新潟県遺跡目録』
- 新潟県教育委員会 1980 『新潟県遺跡地図』
- 新潟県教育委員会 1991 『城之腰遺跡』
- 新潟県教育委員会 1994 『萩野遺跡』
- 新潟県教育委員会 2003 『北野遺跡Ⅰ（下層）』
- 新潟県教育委員会 2004 『青田遺跡』
- 新潟県教育委員会 2008 『大坂上道遺跡Ⅱ・猿額遺跡Ⅱ』
- 新潟県教育委員会 2018 『六反田南遺跡Ⅵ』
- 新潟市教育委員会 2010 『大沢谷内北遺跡 第3次調査』
- 新潟市教育委員会 2012 『大沢谷内遺跡Ⅱ 第7・9・11・12・14次調査』
- 新潟市教育委員会 2013 『峰岡城山遺跡 第2次調査』
- 新潟市教育委員会 2015 『峰岡上町遺跡 第3次調査』
- 新潟市教育委員会 2015 『細池寺道上遺跡Ⅴ 第32・38・41次調査』
- 新潟市教育委員会 2021 『秋葉遺跡 第13次調査』
- 新津市教育委員会 1982 『平遺跡』
- 新津市教育委員会 1989 『新津市史 資料編 第1巻 原始・古代・中世』
- 新津市教育委員会 1997 『金津丘陵製鉄遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
- 新津市教育委員会 2001 『八幡山遺跡発掘調査報告書』
- 新津市小口町内会 2006 『小口の歩み』
- ノ 能都町教育委員会 1986 『真脇遺跡』
- ハ 林 昭三 1991 『日本産木材 顕微鏡写真集』 京都大学木質科学研究所
- バリノサーヴェイ株式会社 2004 「自然科学分析」『新田遺跡』 五泉市教育委員会

- バリノサーヴェイ株式会社 2015 「炭化種実同定および動物遺存体分析」『山口野中遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会
- バリノサーヴェイ株式会社 2019 「宝崎遺跡の自然科学分析」『宝崎遺跡』 燕市教育委員会
- マ 前山精明 1994 「松郷屋遺跡」『巻町史 資料編 1 考古』
- 前山精明 2004 「石器から見た生業」『火炎土器の研究』 同成社
- 前山精明 2009 「豊原遺跡Ⅵ群 3 類土器再考」『新潟県の考古学』Ⅱ 新潟県考古学会
- 前山精明 2013 「細池寺道上遺跡」『平成 24 年度新潟市遺跡発掘調査速報会』
- 前山精明 2014 「秋葉遺跡 第 9・10 次調査」『新潟市文化財センター年報』第 1 号
- 前山精明 2015 「新潟市江南区砂崩遺跡採集の縄文時代遺物」『新潟市文化財センター年報』第 2 号
- 前山精明 2016 「原遺跡 第 7・8 次調査」『新潟市文化財センター年報』第 3 号
- 前山精明 2018 「秋葉区大野中遺跡出土の縄文時代遺物」『新潟市文化財センター年報』第 5 号
- 前山精明 2019 「食料資源」『新潟県の考古学』Ⅲ 新潟県考古学会
- 前山精明 2020 「御井戸集落の営み」『新潟市遺跡発掘調査速報会 2019』 新潟市文化財センター
- 前山精明 2021 「信濃川最下流域における土器の混和材」『千曲川－信濃川流域の先史文化』 津南町教育委員会
- 前山精明・那須孝悌 2004 「付編・新潟県巻町中田割遺跡の調査」『火炎土器の研究』 同成社
- 巻 町 1995 『巻町史 資料編 1 考古』
- 巻町教育委員会 1990 『大沢遺跡』
- 巻町教育委員会 2002 『南赤坂遺跡』
- 巻町教育委員会 2003 『御井戸遺跡Ⅰ』
- ミ 三上徹也 2014 『縄文土偶ガイドブック』
- Minami T, Imai A, Bunno M, verill Kawakami K, Imazu S, 2005 「Using sulfur isotopes to determine the sources of vermillion in ancient burial mounds in japan」『Geoarchaeology』20
- MIHO MUSEUM 編 2012 『土偶・コスモス』 羽鳥書店
- 宮尾 享・寺崎裕助 2012 「新潟県の縄文時代中期土偶」『新潟県立歴史博物館研究紀要』第 13 号 新潟県立歴史博物館
- ム 村上章久 2021 「阿賀野市土橋遺跡の調査成果」『新潟県考古学会第 33 回大会研究発表会発表要旨』 新潟県考古学会
- 村上市教育委員会 2000 『大関上野遺跡・山崎遺跡』
- 村上市教育委員会 2015 『春木山遺跡Ⅱ』
- モ 望月明彦 1999 「上和城山遺跡出土の黒曜石産地推定」『埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書 2－上和城山遺跡篇－』 大和市教育委員会
- ヤ 八尾町教育委員会 1985 『長山遺跡発掘調査報告書』
- 安田町教育委員会 1974 『藤堂遺跡発掘調査概報』
- 安田町教育委員会 1980 『中道遺跡』
- 安田町教育委員会 1981 『横峯 A 遺跡・B 遺跡』
- 安田町教育委員会 1983 『ツベタ遺跡』
- ヨ 横越町 2000 『横越町史 資料編』
- 吉川町教育委員会 1984 『長峰遺跡Ⅱ』
- ワ 渡辺 誠 1980 「雪国の縄文家屋」『小田原考古学研究会会報』第 9 号 小田原考古学研究会
- 渡辺 誠 1996 「クリの穴貯蔵」『名古屋大学文学部研究論集』125

別表 1 竪穴住居址状遺構計測表

図版 No.	写真図版 No.	調査区	遺構	グリッド	時代	確認面	主軸方位	規模			底面標高 (m)	形態		覆土分類	切り合い関係	備考	
								区分	上端 (m)			深度 (cm)	平面				断面
									長軸	短軸							
10	6	1	SI 8	13V・16・17	後期前葉	(IV)	—	—	—	34	20.43	—	—	B	<SK6, Pit40・41・44・45		

別表 2 土坑計測表

図版 No.	写真図版 No.	調査区	遺構	グリッド	時代	確認面	主軸方位	規模				底面標高 (m)	形態		覆土分類	区分	切り合い関係	備考		
								上端 (m)		下端 (m)			深度 (cm)	平面					断面	
								長軸	短軸	長軸	短軸									
10	4・6	2	SK109	12V22, 13V2	後期前葉	III	N-47°-W	0.98	(0.80)	0.54	0.48	71	19.90	不整形	漏斗状	C	袋状土坑	>SK120		
10	4	2	SK251	12V14・15	—	III	N-90°	0.66	0.54	0.26	0.20	48	19.64	楕円形	箱状	C	袋状土坑	<SK113, Pit54		
10	6	2	SK66	12V12・17	—	III	N-22°-W	0.33	0.25	0.28	0.22	9	20.43	不整形	弧状	A	砂集積土坑	—		
10	6	2	SK93	12V20	—	III	N-85°-E	0.74	0.48	0.56	0.36	16	20.13	長方形	階段状	C	砂集積土坑	—		
10・12	7	2	SK94	12V19・20	—	III	N-72°-E	0.66	0.48	0.42	0.28	23	20.07	不整形	階段状	B	砂集積土坑	>Pit95		
10	6	2	SK114	12V14・15	(中期)	III	N-85°-E	0.58	0.40	0.40	0.30	13	20.15	不整形	楕円形	A	砂集積土坑	—		
10	6	2	SK218	12W16	—	III	N-80°-E	0.22	0.20	0.16	0.14	10	19.99	円形	V字状	B	砂集積土坑	—		
10	6	2	SK277	12V17	(中期)	(IV)	N-31°-W	0.42	0.38	0.22	0.18	15	20.31	不整形	階段状	B	砂集積土坑	—		
5・10	4	2	SK302	12V15	—	III	—	—	—	—	—	—	—	—	—	箱状	B	砂集積土坑	—	
10	4	3	SK310	11V22・23	—	III	N-58°-E	(0.69)	(0.44)	0.34	0.21	7	20.31	楕円形	弧状	B	砂集積土坑	>SK318・Pit314		
10	4	3	SK318	11V23	—	III	—	—	—	—	—	16	20.24	—	箱状	B	砂集積土坑	<SK310		
17		1	SK6	13V11・12・16・17	—	(IV)	N-4°-E	0.70	0.56	0.52	0.48	15	20.62	楕円形	弧状	A	皿状土坑A	>S18, Pit7・39・41		
		1	SK28	13V19	—	(IV)	N-13°-W	0.60	0.54	0.46	0.40	16	20.47	不整形	階段状	B	皿状土坑A	>Pit29 <Pit26		
11	7	2	SK49	12V20, 12W16	(中期)	III	N-55°-E	0.72	0.44	0.60	0.36	10	20.15	楕円形	弧状	A	皿状土坑A	<SK50		
11	7	2	SK50	12V20, 12W16	—	III	N-51°-E	0.50	0.36	0.38	0.28	8	20.17	不整形	弧状	A	皿状土坑A	>SK49		
11	7	2	SK57	12V13	—	III	—	0.50	0.50	0.36	0.28	23	20.18	円形	箱状	B	皿状土坑A	>Pit58		
11	7	2	SK59	12V18・19	(中期)	III	N-71°-E	0.61	0.42	0.46	0.30	10	20.25	不整形	楕円形	A	皿状土坑A	>Pit60		
11	7	2	SK64	12V15	—	III	N-4°-E	0.40	0.36	0.25	0.18	18	20.08	円形	弧状	A	皿状土坑A	—		
11	7	2	SK74	12V24・25	後期前葉	III	N-45°-E	1.06	0.68	0.32	0.30	43	19.89	楕円形	階段状	C	皿状土坑B	—		
11	7	2	SK77	13V2・7	—	III	N-81°-E	0.66	0.54	0.50	0.30	26	20.36	楕円形	箱状	B	皿状土坑B	>Pit132, SK134		
12		2	SK83	12V23, 13V3	—	III	N-28°-W	0.64	0.42	0.40	0.38	35	20.19	楕円形	—	A	皿状土坑B	<Pit82		
11	8	2	SK100	13V5・10	—	III	N-87°-E	0.42	0.34	0.24	0.20	18	20.14	不整形	V字状	B	皿状土坑A	—		
11	8	2	SK110	12V8・13	—	III	N-57°-E	0.36	0.34	0.28	0.23	14	20.27	円形	弧状	A	皿状土坑A	—		
11	8	2	SK113	12V15	—	III	N-4°-E	0.40	0.38	0.24	0.18	14	20.13	不整形	楕円形	A	皿状土坑A	>SK251		
11	8	2	SK117	12V13・14	—	III	N-2°-E	0.44	0.30	0.28	0.16	14	20.24	楕円形	半円状	A	皿状土坑A	—		
11	8	2	SK119	12V20, 12W16	(中期)	III	N-46°-E	0.56	0.46	0.38	0.36	15	20.11	不整形	楕円形	A	皿状土坑A	—		
10		2	SK120	12V22, 13V2	—	III	—	—	—	—	—	20	20.35	—	—	A	皿状土坑A	<SK109		
11	8	2	SK125	13V9	後期前葉	III	N-80°-E	0.50	0.45	0.32	0.30	19	20.28	円形	箱状	A	皿状土坑A	>SK126		
11	8	2	SK126	13V9	後期前葉	III	—	—	—	0.56	0.24	25	20.23	—	—	B	皿状土坑B	<SK125, Pit124		
11	8	2	SK134	13V1・2	—	III	—	—	—	—	—	8	20.54	—	弧状	A	皿状土坑A	<SK77, Pit132		
11	8	2	SK135	13V2	(中期)	III	N-88°-W	0.46	(0.24)	0.37	(0.14)	21	20.41	楕円形	—	A	皿状土坑A	>SK170 <Pit132		
5・11	4	2	SK160	13V8	(中期)	III	—	—	—	—	—	12	20.37	楕円形	箱状	B	皿状土坑A	>Pit249		
		2	SK170	13V1・2	—	III	—	—	—	—	—	28	20.33	—	—	—	皿状土坑B	<SK135, Pit132		
11	8	2	SK204	12V24	—	(IV)	N-12°-W	0.44	0.40	0.04	0.04	12	20.15	不整形	階段状	A	皿状土坑A	—		
11		2	SK243	13V1・2	—	(IV)	N-75°-W	0.56	0.42	0.48	0.48	15	20.40	楕円形	弧状	A	皿状土坑A	—		

別表 3 掘立柱建物計測表

遺構	グリッド	時代	分類	確認面	桁行	柱穴間	梁間	柱穴間	主軸長	柱穴間	突出部	主軸方位	重複		備考
													重複	備考	
SB401	12V14・15・19・20・23・24・25 12V16・21 13V5 13W1	後期前葉	A	III	1.98	P80-P84	1.60	P80-P95	2.34	P56・P133	北西に0.18	N-52°-W	SB403・404・405・406・411・412・413・414・415・416・417		
					—	P95	—	P84							
SB402	12V23・24 13V2・3・4・7・8・9・10・14	後期前葉	A	(III)	1.84	P188-P159	1.42	P108	—	P82	北に0.10	N-21°-W	SB403・404・406・417		
					—	P108	—	P159							
SB403	12V19・20・24・25 12W21 13V4・5 13W1	後期前葉	B	III	1.88	P105-P78	1.68	P105-P55	—	—	—	N-8°-W	SB401・402・404・405・406・411・412・413・414・416・417		
					—	P55	—	P78							
SB404	12V24・25 13V3・4・5・8・9・10・14	後期前葉	B	III	1.56	P98-P298	1.56	P70-P98	—	—	—	N-31°-W	SB402・403・412・418		
					—	P70	—	P298							
SB405	12V14・15・19・20 12W11	後期	D	(III)	1.57	P193-P112	1.03	P273-P193	—	—	—	N-73°-W	SB401・403・411・413・415・416		
					1.57	P273-P123	0.97	P123-P112							
SB406	12V18・22・23・241 3V3・4	後期前葉	D	(III)	1.48	P286-P103	1.00	P107-P150	—	—	—	N-62°-W	SB401・402・403・417		
					1.44	P107-P150	1.00	P150-P103							
SB407	12V7・8・12・13・17・18	後期前葉	D	(III)	1.58	P149-P183	0.85	P172-P149	—	—	—	N-30°-W	SB411		
					1.57	P172-P287	0.85	P287-P183							
SB408	12V6・7・11・12・16	不明	F	(III)	1.26	P147-P171	0.79	P292-P171	—	—	—	N-26°-W	—		
					—	P292	—	P147							
SB409	13V12・13・17・18・19	後期前葉	F	(III)	1.17	P13-P38	0.97	P38-P29	—	—	—	N-35°-W	SB410		
					—	P292	—	P13							
SB410	13V12・13・17・18	後期前葉	F	(III)	1.12	P43-P10	0.76	P10-P7	—	—	—	N-25°-W	SB409		
					—	P17	—	P43							
SB411	12V9・13・14・15・18・19・20	後期前葉	C	(III)	1.48	P257-P51	1.24	P182-P275	—	—	—	N-41°-E	SB401・403・405・407・413・415		
					—	P182	—	P51							
SB412	12V20・24・25 12W21 13V4・5 13W1	後期前葉	C	(IV)	1.46	P187-P232	1.24	P187-P210	—	—	—	N-41°-W	—		
					—	P210	—	P232							
SB413	12V15・20・25 12W11・16	不明	E	(IV)	1.23	P200-P236	1.12	P200-P268	—	—	—	N-66°-E	SB403・405・411・414・416		
					—	P268	—	P236							
SB414	12V25 13V5 12W16・21 13W1	不明	E	(III)	1.26	P212-P231	1.11	P212-P228	—	—	—	N-10°-W	SB401・403・412・413		
					—	P228	—	P231							
SB415	12V9・10・14・15・19	不明	E	(IV)	1.27	P196-P916	1.02	P192-P196	—	—	—	N-55°-E	SB401・405・411		
					—	P192	—	P226							
SB416	12V20・25 12W16・21 13V5	不明	E	(IV)	1.18	P211-P215	1.12	P211-P220	—	—	—	N-67°-E	SB401・403・405・412・413・414		
					—	P220	—	P215							
SB417	12V18・23・24 13V3・4	不明	E	(IV)	1.10	P154-P186	1.09	P259-P186	—	—	—	N-50°-E	SB401・402・403・406・412		
					1.13	P260-P259	1.08	P260-P154							
SB418	13V3・4・8・9	不明	F	(IV)	0.94	P262-P178	0.88	P248-P262	—	—	—	N-20°-W	SB402・404		
					—	P248	—	P178							

別表 4 掘立柱建物柱穴計測表

図版 No.	写真図版 No.	遺構	グリッド	時代	確認面	主軸方位	規模				底面標高 (m)	形態		覆土分類	ビット規模	切り合い関係	
							区分	上端 (m)		深度 (cm)		Ⅲ層上面深度 (cm)	平面				断面
								長軸	短軸								
12	9	Pit 56	12V19	後期前葉	Ⅲ	N-4°-E	Ⅲc	0.94	0.58	59	19.77	楕円形	漏斗状	C	Ⅲc	>Pit62	
12	5	Pit 80	12V23・24	後期前葉	Ⅲ	N-66°-E	Ⅲb	0.50	0.44	40	19.99	円形	箱状	D2b	Ⅲb	-	
12	9	Pit 84	13V5	-	Ⅲ	-	Ⅲb	0.56	0.54	22	20.09	円形	階段状	D2b	Ⅲb	-	
10・12		Pit 95	12V14・15	後期前葉	Ⅲ	-	(Ⅲb)	(0.54)	(0.45)	39	19.88	円形	階段状	C	(Ⅲb)	<SK94	
5・12	9	Pit 133	12W21	後期前葉	Ⅲ	-	-	-	-	41	19.76	-	U字状	D2b	-	-	
12	9	Pit 82	12V23, 13V3	後期前葉	Ⅲ	N-42°-E	Ⅲc	0.82	(0.72)	74	19.78	不整形	V字状	D1	Ⅲc	>SK83	
12	5	Pit 108	13V2	後期前葉	Ⅲ	N-40°-E	Ⅲb	0.50	0.42	36	20.25	楕円形	U字状	B	Ⅲb	-	
12	9	Pit 159	13V9	後期前葉	(Ⅳ)	N-23°-W	Ⅳb	0.44	0.42	35	38	20.04	不整形楕円形	箱状	D1	Ⅳb	-
12	9	Pit 188	12V24	-	(Ⅳ)	N-16°-W	Ⅳa	0.42	0.38	15	26	20.18	不整形	箱状	B	Ⅳa	-
13	9	Pit 55	12V20, 12W16	後期前葉	Ⅲ	N-30°-E	Ⅲc	0.92	0.62	47	19.80	不整形楕円形	箱状	B	Ⅲc	>Pit123	
13	5	Pit 78	13V4	後期前葉	Ⅲ	N-87°-E	Ⅲc	0.74	0.58	76	19.70	楕円形	U字状	D2a	Ⅲc	-	
13	5	Pit 105	12V19・24	後期前葉	Ⅲ	N-18°-W	Ⅲc	0.66	0.60	54	19.80	円形	箱状	D2a	Ⅲc	-	
13	5	Pit 70	13V3・8	後期前葉	Ⅲ	N-6°-W	Ⅲc	0.66	0.56	51	20.04	楕円形	階段状	D2a	Ⅲc	-	
13	9	Pit 98	12V24・25, 13V4・5	-	Ⅲ	N-10°-E	(Ⅲb)	(0.58)	0.50	36	19.99	楕円形	階段状	C	(Ⅲb)	>Pit99	
5		Pit 298	13V10	-	Ⅲ	-	-	-	-	-	20.24	-	箱状	A	-	-	
13	10	Pit 112	12V15, 12W11	-	Ⅲ	N-6°-W	Ⅲb	0.50	0.40	38	19.82	楕円形	漏斗状	B	Ⅲb	-	
13	10	Pit 123	12V20	後期前葉	Ⅲ	N-48°-W	Ⅲb	0.52	0.44	33	19.95	不整形楕円形	-	D2b	Ⅲb	<Pit55	
13	10	Pit 193	12V14	後期前葉	(Ⅳ)	N-75°-W	Ⅳb	0.40	0.34	35	44	19.84	円形	V字状	D2a	Ⅳb	-
13	10	Pit 273	12V19	後期前葉	(Ⅳ)	N-71°-W	Ⅳb	0.42	0.32	32	46	19.93	長方形	U字状	D1	Ⅳb	>Pit274
14	5	Pit 103	12V24	後期前葉	Ⅲ	N-70°-W	Ⅲb	0.50	0.46	41	19.99	不整形	階段状	D2b	Ⅲb	-	
14	5	Pit 107	12V22	-	Ⅲ	N-66°-E	Ⅲa	0.38	(0.38)	21	20.31	円形	半円状	D1	Ⅲa	<Pit106	
14	10	Pit 150	13V3・4	-	(Ⅳ)	N-40°-W	Ⅳb	0.38	0.36	36	44	20.06	不整形楕円形	U字状	D1	Ⅳb	>Pit151
14	10	Pit 286	12V18	後期前葉	(Ⅳ)	N-50°-W	Ⅳb	0.40	0.33	34	43	20.04	円形	箱状	D2b	Ⅳb	-
14	10	Pit 149	12V7・8	-	Ⅲ	-	Ⅲa	0.36	0.36	25	20.09	円形	半円状	D2b	Ⅲa	-	
14		Pit 172	12V12	-	(Ⅳ)	N-0°-W	Ⅳa	0.24	0.20	10	23	20.35	楕円形	箱状	A	Ⅳa	-
14	10	Pit 183	12V13・18	後期前葉	(Ⅳ)	N-62°-W	Ⅳa	0.32	0.28	20	23	20.06	円形	階段状	A	Ⅳa	-
14		Pit 287	12V18	-	(Ⅳ)	-	Ⅳa	0.30	0.30	13	31	20.17	不整形	弧状	A	Ⅳa	-
14	11	Pit 147	12V6・7	-	(Ⅳ)	N-60°-E	Ⅳa	0.40	0.34	21	30	20.23	不整形	階段状	A	Ⅳa	-
14	11	Pit 171	12V12	-	Ⅲ	N-25°-E	Ⅲa	0.30	0.26	23	20.19	円形	階段状	A	Ⅲa	-	
5・14	11	Pit 292	12V11・16	-	Ⅲ	-	-	-	-	13	20.38	-	U字状	B	-	-	
14		Pit 13	13V12・17	-	(Ⅳ)	-	-	-	-	10	20.62	-	弧状	A	-	-	
14	11	Pit 29	13V19	-	(Ⅳ)	-	(Ⅳb)	(0.32)	0.32	36	20.22	不整形	U字状	A	(Ⅳb)	<Pit24, SK28	
14	11	Pit 38	13V18	後期前葉	(Ⅳ)	N-48°-W	(Ⅳa)	(0.30)	0.24	25	20.37	-	箱状	A	(Ⅳa)	-	
15	11	Pit 10	13V17	後期前葉	(Ⅳ)	N-0°-W	(Ⅳa)	(0.34)	(0.26)	26	20.44	-	箱状	D2b	(Ⅳa)	-	
15	11	Pit 17	13V18	後期前葉	(Ⅳ)	-	Ⅳb	0.30	0.30	42	20.24	円形	弧状	A	Ⅳb	>Pit16	
15	11	Pit 43	13V12	後期前葉	(Ⅳ)	-	-	-	-	15	20.59	楕円形	弧状	A	-	<Pit7	
15	5	Pit 51	12V15	後期前葉	Ⅲ	-	Ⅲb	0.46	0.46	42	19.82	円形	漏斗状	D1	Ⅲb	-	
15	12	Pit 182	12V13	-	(Ⅳ)	N-87°-W	Ⅳa	0.48	0.42	9	37	20.17	不整形	箱状	D2b	Ⅳa	-
15	12	Pit 275	12V19	後期前葉	(Ⅳ)	-	Ⅳb	0.44	0.43	30	36	19.94	円形	箱状	B	Ⅳb	-
15	12	Pit 187	12V24	-	(Ⅳ)	N-73°-W	Ⅳa	0.26	0.24	19	27	20.12	不整形	箱状	A	Ⅳa	-
15	12	Pit 210	12V20	-	(Ⅳ)	N-40°-E	Ⅳa	0.18	0.14	13	22	20.06	楕円形	箱状	A	Ⅳa	-
15	12	Pit 232	13V5	後期前葉	(Ⅳ)	N-24°-W	Ⅳa	0.24	0.22	10	12	20.22	円形	箱状	A	Ⅳa	-
15	12	Pit 200	12V20	-	(Ⅳ)	N-52°-W	Ⅳa	0.26	0.22	10	24	20.03	楕円形	半円状	A	Ⅳa	-
15	12	Pit 236	12W11	-	(Ⅳ)	-	Ⅳa	0.25	0.25	17	36	19.79	円形	U字状	A	Ⅳa	-
15	12	Pit 268	12V25	-	(Ⅳ)	N-69°-W	Ⅳa	0.28	0.25	8	24	20.05	楕円形	弧状	A	Ⅳa	>Pit269
16	13	Pit 212	12V25	-	(Ⅳ)	N-88°-W	Ⅳa	0.28	0.26	9	18	20.14	円形	半円状	A	Ⅳa	-
5・16	13	Pit 228	12W16・21	-	Ⅲ	N-31°-W	Ⅲa	0.32	0.30	17	19.91	円形	U字状	D2b	Ⅲa	<Pit295	
16	13	Pit 231	13V5	-	(Ⅳ)	N-65°-E	Ⅳa	0.20	0.18	10	24	20.18	円形	半円状	D2b	Ⅳa	-
16	13	Pit 192	12V14	-	(Ⅳ)	N-38°-W	Ⅳa	0.24	0.24	16	26	20.06	円形	箱状	A	Ⅳa	-
16	13	Pit 196	12V19	-	(Ⅳ)	N-55°-E	Ⅳa	0.20	0.18	6	20	20.10	円形	弧状	A	Ⅳa	-
16	13	Pit 226	12V15	-	(Ⅳ)	N-72°-E	Ⅳa	0.26	0.22	12	31	19.90	円形	弧状	A	Ⅳa	-
16	13	Pit 211	12V25	-	(Ⅳ)	N-77°-W	Ⅳa	0.24	0.18	11	18	20.12	楕円形	弧状	D2b	Ⅳa	-
16	13	Pit 215	12V25, 13V5	-	(Ⅳ)	N-40°-E	Ⅳa	0.23	0.22	12	15	20.06	円形	弧状	A	Ⅳa	-
16	14	Pit 220	12V20, 12W16	-	(Ⅳ)	N-70°-W	Ⅳa	0.26	0.24	12	31	19.94	円形	箱状	D1	Ⅳa	-
16	14	Pit 154	13V3	-	(Ⅳ)	N-59°-E	Ⅳa	0.32	0.28	9	12	20.37	不整形楕円形	階段状	A	Ⅳa	-
16	14	Pit 186	12V24	-	(Ⅳ)	N-66°-E	Ⅳa	0.26	0.24	23	29	20.07	楕円形	箱状	A	Ⅳa	-
16	14	Pit 259	12V18	-	(Ⅳ)	N-18°-W	Ⅳa	0.44	0.24	13	18	20.17	円形	箱状	B	Ⅳa	-
16	14	Pit 260	12V23	-	(Ⅳ)	-	Ⅳa	0.26	0.26	22	31	20.22	円形	U字状	A	Ⅳa	-
16	14	Pit 178	13V9	-	(Ⅳ)	N-32°-E	Ⅳa	0.26	0.24	9	15	20.31	円形	弧状	A	Ⅳa	-
16	14	Pit 248	13V8	-	(Ⅳ)	N-83°-W	Ⅳa	0.32	0.24	15	27	20.34	楕円形	U字状	B	Ⅳa	-
16	14	Pit 262	13V3・4	-	(Ⅳ)	N-87°-E	Ⅳa	0.34	0.26	23	31	20.19	不整形	U字状	B	Ⅳa	-

別表 5 ビット計測表

図版 No.	写真図版 No.	調査区	遺構	グリッド	時代	確認面	主軸方位	規模				底面標高 (m)	形態		覆土分類	切り合い関係	備考
								区分	上端 (m)		深度 (m)		平面	断面			
									長軸	短軸							
17		1	Pit 7	13V11・12	後期前葉	(Ⅳ)	N-74°-E	Ⅳa	0.44	0.32	15	20.61	楕円形	箱状	A	<SK6 >Pit43	
17		1	Pit 9	13V12	後期前葉	(Ⅳ)	N-69°-W	Ⅳa	0.22	0.18	22	20.51	円形	箱状	A	-	
17		1	Pit 11	13V17	後期前葉	(Ⅳ)	N-5°-E	(Ⅳa)	(0.48)	0.42	24	20.46	円形	U字状	A	-	
		1	Pit 14	13V17	-	(Ⅳ)	N-17°-W	Ⅳa	0.24	0.18	15	20.54	円形	箱状	A	-	
17		1	Pit 15	13V12・13・17・18	後期前葉	(Ⅳ)	N-53°-W	Ⅳa	0.32	0.28	30	20.38	円形	U字状	D1	-	
		1	Pit 16	13V18	-	(Ⅳ)	N-70°-W	Ⅳa	0.34	0.28	10	20.55	楕円形	弧状	A	<Pit17	
		1	Pit 18	13V18	-	(Ⅳ)	-	Ⅳa	0.16	0.16	13	20.53	円形	半円状	A	-	
		1	Pit 22	13V18	後期前葉	(Ⅳ)	-	-	-	-	43	20.19	-	箱状	A	-	
		1	Pit 24	13V18・19	-	(Ⅳ)	N-66°-W	Ⅳa	0.64	0.22	12	20.50	楕円形	弧状	A	>Pit29	
		1	Pit 26	13V18・19	-	(Ⅳ)	N-69°-W	Ⅳa	0.24	0.18	9	20.54	楕円形	半円状	A	>SK28	
		1	Pit 31	13V19	-	(Ⅳ)	N-17°-E	Ⅳa	0.28	0.20	20	20.42	楕円形	箱状	A	-	
17		1	Pit 36	13V19	-	(Ⅳ)	-	-	-	-	38	20.14	-	B	-		
		1	Pit 39	13V11・16	-	(Ⅳ)	N-7°-E	(Ⅳa)	(0.34)	(0.28)	24	20.46	円形	U字状	A	<SK6	
		1	Pit 40	13V17	後期前葉	(Ⅳ)	N-3°-W	(Ⅳc)	(0.68)	(0.46)	23	20.50	不整形	弧状	B	>S18, Pit44	

別 表

図版 No.	写真 図版 No.	調査 区	遺構	グリッド	時代	確認 状況	主軸方位	規模			底面 標高 (m)	形態		覆土 分類	切り合い関係	備考		
								区分	上端 (m)			平面	断面					
									長軸	短軸								
14	1	Pit 41	13V16		後期前葉	(IV)	N-65°-E	(IVa)	(0.24)	(0.20)	23	20.53	円形	半円状	A	>S18 <SK6		
	1	Pit 42	13V17		—	(IV)	N-8°-W	(IVa)	(0.26)	(0.24)	16	20.40	円形	U字状	A	—		
10	1	Pit 44	13V17		—	(IV)	N-5°-W	(IVa)	0.36	0.32	16	20.47	不整形	半円状	A	>S18 <Pit40		
	2	Pit 45	13V11・16		—	(IV)	—	—	—	—	27	20.51	—	箱状	A	>S18		
17	2	Pit 52	12V15・20		後期前葉	III	N-38°-W	IIIb	0.60	0.58	29	19.96	不整形	箱状	B	—		
17	2	Pit 54	12V14・15		(中期)	III	N-46°-E	IIIa	0.42	0.32	15	20.09	不整形	箱状	A	>SK251		
11	2	Pit 58	12V13		(中期)	III	N-1°-W	IIIb	0.52	0.34	49	19.90	楕円形	U字状	B	<SK57		
11	7	2	Pit 60	12V19		—	III	N-11°-W	(IIIa)	(0.26)	0.14	30	20.04	楕円形	V字状	A	<SK59	
17	2	Pit 61	12V18		(中期)	III	N-64°-W	IIIa	0.40	0.24	14	20.35	楕円形	半円状	A	<SK59		
17	15	2	Pit 62	12V14・19		後期前葉	III	N-67°-E	IIIc	0.86	0.64	68	19.70	不整形	箱状	B	>Pit65 <Pit56	
17	15	2	Pit 63	12V14		後期前葉	III	N-29°-E	IIIb	0.46	0.40	37	19.96	不整形	箱状	B	—	
	2	Pit 65	12V19		—	III	—	—	—	—	8	20.24	—	—	A	<Pit62		
17	15	2	Pit 72	12V25		後期前葉	III	—	IIIc	0.62	0.66	70	19.57	円形	漏斗状	D2a	—	
17	15	2	Pit 75	12V24		—	III	N-76°-E	IIIa	0.38	(0.18)	26	20.16	楕円形	漏斗状	B	—	
17	15	2	Pit 76	12V24		(中期)	III	N-86°-W	IIIa	0.42	0.36	23	20.21	楕円形	階段状	B	—	
	2	Pit 79	12V24		—	III	N-73°-E	IIIa	0.44	0.32	12	20.27	楕円形	半円状	A	—		
17	15	2	Pit 81	13V5・13W1		後期前葉	III	N-40°-E	IIIc	0.74	0.58	41	19.88	楕円形	箱状	B	—	
	2	Pit 85	13V5		—	III	N-78°-W	IIIa	0.28	0.16	15	20.17	楕円形	箱状	B	—		
	2	Pit 86	13V9		—	III	N-28°-E	IIIa	0.30	(0.28)	8	20.42	楕円形	弧状	A	—		
	2	Pit 87	13V4・9		—	III	N-52°-W	(IIIa)	(0.32)	0.22	33	20.15	楕円形	U字状	C	—		
	2	Pit 88	13V7		—	III	N-70°-W	IIIa	0.42	(0.32)	16	20.46	楕円形	弧状	B	—		
	2	Pit 89	13V7		—	III	—	IIIa	0.25	0.24	25	20.34	円形	U字状	A	>Pit90		
	2	Pit 90	13V7		—	III	N-22°-E	IIIa	0.42	(0.22)	18	20.44	—	—	B	<Pit89		
17	15	2	Pit 91	13V4・9		後期前葉	III	N-1°-E	IIIa	0.46	0.36	20	20.20	楕円形	箱状	A	—	
	2	Pit 92	13V10		後期前葉	III	N-30°-W	IIIa	0.38	0.28	8	20.31	長方形	弧状	B	—		
17	15	2	Pit 96	12V24		—	III	—	(IIIa)	(0.26)	0.24	18	20.17	円形	箱状	A	—	
17	15	2	Pit 97	12V24・25		後期前葉	III	—	IIIb	0.48	0.48	39	19.96	不整形	箱状	B	—	
17	2	Pit 99	13V4・5		後期前葉	III	—	(IIIa)	(0.28)	(0.28)	22	20.14	—	箱状	A	<Pit98		
17	16	2	Pit 101	13V5・10		後期前葉	III	N-17°-W	IIIb	0.46	0.40	36	19.99	楕円形	箱状	B	>Pit266	
	2	Pit 102	13V3		(中期)	III	N-42°-W	IIIa	0.32	0.24	17	20.44	楕円形	箱状	A	—		
17	16	2	Pit 104	12V18・23		(中期)	III	N-82°-E	IIIb	0.52	0.40	36	20.04	不整形	箱状	D2a	—	
14	5	2	Pit 106	12V22		(中期)	III	N-49°-W	IIIa	0.46	(0.45)	24	20.28	円形	階段状	B	>Pit107	
17	16	2	Pit 111	12V15,12W11		(中期)	III	N-40°-W	IIIa	0.44	0.32	24	19.17	楕円形	U字状	A	—	
17	16	2	Pit 115	12V25		(中期)	III	N-80°-W	IIIa	0.38	0.34	31	19.97	円形	U字状	B	>Pit116	
17	16	2	Pit 116	12V25		—	III	N-47°-E	IIIa	0.28	0.24	20	20.07	円形	箱状	A	<Pit115	
17	2	Pit 118	12V14		(中期)	III	N-17°-E	IIIb	0.48	0.42	32	20.03	円形	V字状	B	—		
17	2	Pit 121	12V23・13V3		後期前葉	III	N-73°-E	IIIb	0.54	0.44	30	20.21	不整形	V字状	B	>Pit128		
	2	Pit 122	13V3		(中期)	III	N-35°-W	IIIa	0.38	0.28	17	20.39	不整形	U字状	B	—		
11	8	2	Pit 124	13V8・9		後期前葉	III	N-30°-E	IIIc	0.66	0.56	42	20.12	不整形	階段状	A	>SK126・Pit179・249・263	
18	16	2	Pit 127	13V3・8		—	III	N-35°-E	IIIa	0.40	0.27	16	20.40	楕円形	半円状	A	—	
	2	Pit 128	12V23・13V3・4		—	III	N-10°-W	(IIIa)	(0.26)	0.22	17	20.31	楕円形	—	D2b	<Pit121		
	2	Pit 129	12V21		後期前葉	III	N-65°-W	IIIa	0.44	0.26	26	20.31	楕円形	V字状	A	—		
	2	Pit 130	12V17・22		—	III	N-14°-E	IIIa	0.40	0.32	21	20.32	不整形	半円状	A	—		
	2	Pit 131	12V23		—	III	N-40°-E	IIIa	0.40	0.34	18	20.32	不整形	—	—	—	断面図無し	
11	8	2	Pit 132	13V2		後期前葉	III	N-89°-W	(IIIc)	(0.84)	(0.30)	70	19.93	楕円形	U字状	C	>SK134・135・170 <SK77	
	2	Pit 136	13V4		—	III	N-80°-E	(IIIa)	(0.39)	(0.34)	22	20.15	円形	弧状	A	>Pit137		
	2	Pit 137	13V4		(中期)	III	N-68°-W	IIIa	0.23	(0.18)	19	20.19	円形	—	A	<Pit136		
18	16	2	Pit 148	12V12		後期前葉	III	N-64°-E	IIIa	0.30	0.24	24	20.16	楕円形	U字状	D2b	—	
5	2	Pit 156	13V10		—	III	—	—	—	—	39	20.07	—	階段状	D2b	—		
18	16	2	Pit 157	13V10		(中期)	III	N-50°-W	IIIa	0.33	0.22	18	20.20	楕円形	U字状	A	—	
18	2	Pit 164	13V6		後期前葉	III	N-77°-W	IIIa	0.30	0.24	18	20.50	円形	箱状	A	>Pit165		
5・18	2	Pit 165	13V6		後期前葉	III	—	—	—	—	33	20.37	不整形	漏斗状	C	<Pit164		
5・11・18	4	2	Pit 249	13V8		(中期)	III	—	—	—	15	20.29	楕円形	U字状	D2b	>Pit124・263 <SK160		
	2	Pit 261	13V8		—	III	N-87°-W	IIIa	0.28	0.20	19	20.25	楕円形	V字状	A	>Pit263		
18	2	Pit 263	13V8・9		—	III	—	—	—	—	7	20.37	—	弧状	A	>Pit249 <Pit124・261		
5・18	16	2	Pit 290	13V10		後期前葉	III	—	—	—	37	19.96	—	—	D2b	—		
5	2	Pit 295	12W21		—	III	—	—	—	—	19	19.99	—	箱状	A	>Pit228		
5	2	Pit 299	13V9		—	III	—	—	—	—	20.34	—	U字状	A	—			
5	2	Pit 300	13V7		—	III	—	—	—	—	20.52	—	階段状	B	—			
5	2	Pit 301	12W11		—	III	—	—	—	—	19.82	—	U字状	A	—			
5	2	Pit 303	12V9		(中期)	III	—	—	—	—	—	—	U字状	A	—			
5	4	2	Pit 304	12V8		—	III	—	—	—	—	—	U字状	A	—			
5	2	Pit 305	12V7		—	III	—	—	—	—	—	—	U字状	B	—			
5	2	Pit 306	12V7		—	III	—	—	—	—	9	20.32	—	U字状	A	—		
	2	Pit 138	12V21		—	(IV)	N-0°	IVa1	0.30	0.26	20	20.45	円形	弧状	A	—		
	2	Pit 139	12V22		—	(IV)	N-70°-E	IVa1	0.36	0.26	12	20.37	楕円形	弧状	A	—		
	2	Pit 140	12V22		—	(IV)	N-35°-W	IVa1	0.22	0.20	14	20.34	円形	U字状	A	—		
	2	Pit 144	12V11・12・16・17		(中期)	(IV)	N-46°-E	IVa1	0.37	0.34	16	20.33	円形	半円状	A	—		
14	2	Pit 146	12V7		(中期)	(IV)	N-12°-E	IVa1	0.31	0.24	28	20.17	楕円形	階段状	A	—		
	2	Pit 151	13V4		後期前葉	(IV)	N-19°-W	IVa1	0.22	0.16	12	20.23	楕円形	半円状	A	<Pit150		
	2	Pit 152	13V4		—	(IV)	N-1°-W	IVa1	0.22	0.14	23	20.15	楕円形	V字状	B	>Pit153		
	2	Pit 153	13V4		—	(IV)	N-30°-W	IVa1	0.24	0.18	13	20.23	不整形	半円状	B	<Pit152		
	2	Pit 155	13V3		後期前葉	(IV)	N-57°-E	IVa1	0.32	0.16	17	20.29	楕円形	階段状	A	—		
	2	Pit 158	13V9・10		後期前葉	(IV)	N-71°-E	(IVa1)	(0.30)	0.24	20	20.17	楕円形	階段状	A	—		
18	2	Pit 161	13V7・8		後期前葉	(IV)	—	IVa1	0.32	0.32	13	20.39	円形	弧状	A	>Pit250		
18	17	2	Pit 162	13V8		後期前葉	(IV)	N-18°-W	IVb	0.48	0.42	30	20.23	楕円形	箱状			

図版 No.	写真 図版 No.	調査 区	遺構	グリッド	時代	確認 面	主軸方位	規模			底面 標高 (m)	形態		覆土 分類	切り合い関係	備考	
								区分	上端 (m)			平面	断面				
									長軸	短軸							
	2	Pit 176	13V9・10	—	(IV)	N-40°-E	IVa1	0.26	0.22	19	20.18	楕円形	V字状	A	—		
	2	Pit 177	13V9	—	(IV)	N-10°-E	IVa1	0.24	0.20	9	20.30	円形	弧状	A	—		
5・11		2	Pit 179	13V9	—	IV	—	—	—	22	20.18	—	U字状	B	<Pit124		
	2	Pit 180	13V9	—	(IV)	N-19°-W	IVa1	0.32	0.24	11	20.33	楕円形	弧状	B	—		
	2	Pit 181	12V7	—	(IV)	N-20°-W	IVa1	0.28	0.24	16	20.21	円形	半円状	A	—		
	2	Pit 184	12V12	後期前葉	(IV)	N-8°-E	IVa2	0.46	0.42	12	20.27	楕円形	弧状	A	>Pit185		
	2	Pit 185	12V12	(中期)	(IV)	N-55°-E	IVa1	0.38	0.30	11	20.29	楕円形	弧状	A	<Pit184		
	2	Pit 189	12V13	—	(IV)	N-22°-E	IVa1	0.22	0.20	10	20.23	楕円形	箱状	A	—		
18		2	Pit 190	12V13	(中期)	(IV)	N-51°-W	IVa1	(0.40)	(0.30)	11	20.15	不整形	弧状	A	—	
	2	Pit 191	12V13	—	(IV)	—	IVa1	0.20	0.20	11	20.12	円形	箱状	B	—		
	2	Pit 194	12V19	—	(IV)	—	(IVa1)	(0.18)	(0.16)	19	19.98	円形	U字状	B	—		
	2	Pit 195	12V14	—	(IV)	—	(IVa1)	(0.28)	(0.28)	16	19.95	円形	箱状	A	—		
	2	Pit 197	12V19	後期前葉	(IV)	N-63°-E	IVa1	0.21	0.20	14	20.06	円形	半円状	A	—		
18	17	2	Pit 198	12V15	(中期)	(IV)	N-12°-W	IVa2	0.32	0.28	29	19.70	円形	階段状	B	>Pit199	
18	17	2	Pit 199	12V15	—	(IV)	N-90°	IVa1	0.20	0.19	6	20.04	円形	箱状	A	<Pit198	
	2	Pit 201	12V25	—	(IV)	N-40°-E	IVa1	0.24	0.23	12	20.14	楕円形	箱状	A	—		
	2	Pit 202	13V5	—	(IV)	N-62°-E	IVa1	0.20	0.18	10	20.20	円形	半円状	A	—		
	2	Pit 203	13V4	—	(IV)	N-2°-W	IVa1	0.23	0.20	10	20.25	方形	弧状	A	—		
	2	Pit 205	12V24	—	(IV)	N-76°-E	IVa1	0.24	0.19	8	20.19	楕円形	弧状	A	—		
	2	Pit 206	12V23・24	(中期)	(IV)	N-52°-E	IVa1	0.40	0.26	12	20.21	不整形楕円形	弧状	A	—		
18		2	Pit 207	12V24	(中期)	(IV)	N-78°-W	IVa1	0.24	0.20	15	20.12	円形	U字状	B	—	
	2	Pit 208	12V24	—	(IV)	N-66°-E	IVa1	0.22	0.21	17	20.09	円形	U字状	A	—		
18	17	2	Pit 209	12V19・24	(中期)	(IV)	—	IVa2	0.35	0.35	28	19.99	不整形円形	U字状	D2a	—	
	2	Pit 213	12V25	—	(IV)	N-80°-E	IVa1	0.27	0.24	10	20.10	円形	弧状	B	—		
18		2	Pit 214	12V25	—	(IV)	N-88°-E	IVa1	0.20	0.16	10	20.11	円形	半円状	A	—	
18		2	Pit 216	12V25、13V5	(中期)	(IV)	N-78°-E	IVa2	0.52	0.30	9	20.15	不整形楕円形	弧状	A	<Pit217	
18		2	Pit 217	13V5	(中期)	(IV)	N-82°-E	IVa1	0.36	0.30	13	20.11	不整形円形	階段状	A	>Pit216	
	2	Pit 219	12W16	後期前葉	(IV)	N-9°-E	IVa1	0.34	0.26	8	19.94	楕円形	弧状	A	—		
18	17	2	Pit 221	12V15・20、 12W11・16	—	(IV)	N-33°-W	IVc	0.58	0.45	27	19.78	楕円形	箱状	D2b	>Pit222	
18	17	2	Pit 222	12W16	—	(IV)	N-17°-E	IVa1	0.36	(0.20)	18	19.87	—	—	A	<Pit221	
	2	Pit 223	12V20	(中期)	(IV)	N-89°-E	(IVa1)	(0.38)	(0.20)	13	19.97	楕円形	半円状	A	>Pit224		
	2	Pit 224	12V20	—	(IV)	—	(IVa1)	(0.22)	(0.18)	10	19.98	円形	弧状	A	<Pit223		
	2	Pit 225	12W11・16	—	(IV)	N-75°-W	IVa1	0.30	0.26	10	19.88	楕円形	弧状	A	—		
	2	Pit 227	12W16	(中期)	(IV)	N-50°-E	IVa1	0.22	0.20	10	19.95	円形	U字状	A	—		
	2	Pit 229	12V25、12W21	—	(IV)	N-54°-W	IVa1	0.23	0.21	17	20.00	円形	U字状	D2b	—		
	2	Pit 230	12W21	(中期)	(IV)	N-31°-W	IVa1	0.24	0.22	14	20.00	円形	弧状	B	—		
	2	Pit 233	12W11	(中期)	(IV)	N-82°-W	IVa1	0.24	0.22	11	19.88	楕円形	箱状	A	—		
	2	Pit 234	12W11	—	(IV)	N-35°-E	IVa1	0.18	0.16	12	19.83	円形	半円状	A	—		
	2	Pit 235	12W11	—	(IV)	N-27°-W	IVb	0.44	0.38	33	19.60	楕円形	箱状	B	—		
	2	Pit 237	12W11	(中期)	(IV)	N-60°-E	IVa1	0.24	0.18	8	19.84	楕円形	弧状	A	>Pit238		
	2	Pit 238	12W11	—	(IV)	N-58°-E	IVa1	0.18	(0.14)	18	19.76	円形	半円状	A	<Pit237		
	2	Pit 239	13V4	—	(IV)	N-81°-W	(IVa1)	(0.28)	0.24	19	20.18	円形	V字状	A	—		
	2	Pit 240	13V4	—	(IV)	N-76°-W	(IVa1)	(0.19)	0.15	14	20.15	—	—	A	>Pit289		
	2	Pit 241	13V3	—	(IV)	N-12°-W	IVa1	0.36	0.28	14	20.32	不整形楕円形	U字状	A	—		
	2	Pit 242	13V1	—	(IV)	N-83°-E	IVa1	0.22	0.20	17	20.41	円形	U字状	A	—		
	2	Pit 244	13V2・7	—	(IV)	N-20°-E	IVa1	0.33	0.24	20	20.34	楕円形	階段状	A	—		
	2	Pit 245	13V2・7	—	(IV)	N-68°-W	IVa1	0.34	0.30	14	20.37	不整形円形	弧状	A	—		
	2	Pit 246	13V7	—	(IV)	N-3°-E	IVa1	0.24	0.22	13	20.42	楕円形	階段状	D2b	—		
	2	Pit 247	13V3	—	(IV)	N-47°-E	IVa1	0.22	0.14	10	20.37	楕円形	U字状	A	—		
18		2	Pit 250	13V8	(中期)	(IV)	N-12°-W	IVa2	0.38	(0.32)	21	20.31	不整形	箱状	A	<Pit161	
	2	Pit 252	12W16	—	(IV)	N-45°-E	IVa1	0.26	0.24	10	19.94	不整形楕円形	箱状	A	—		
	2	Pit 253	12W16	(中期)	(IV)	—	IVa1	0.18	0.18	9	19.95	円形	半円状	A	—		
	2	Pit 254	12V23	後期前葉	(IV)	N-18°-E	IVa1	0.34	0.32	13	20.16	円形	弧状	A	—		
18		2	Pit 255	12V23	後期前葉	(IV)	N-44°-E	IVc	0.54	0.32	36	20.07	不整形楕円形	U字状	B	—	
	2	Pit 256	12V23	—	(IV)	N-90°	IVa1	0.26	0.20	11	20.28	楕円形	階段状	A	—		
18		2	Pit 257	12V23	—	(IV)	N-68°-W	IVa2	0.40	0.39	24	20.21	不整形楕円形	U字状	A	—	
18	17	2	Pit 258	12V18・23	後期前葉	(IV)	N-15°-W	IVa2	0.44	0.28	21	10.11	不整形	階段状	B	—	
18	17	2	Pit 264	13V5	後期前葉	(IV)	N-76°-W	IVc	0.52	0.48	40	19.84	不整形	階段状	B	>Pit265	
18	17	2	Pit 265	13V5	(中期)	(IV)	N-42°-E	(IVa1)	(0.36)	0.30	13	20.12	楕円形	弧状	A	<Pit264	
18	17	2	Pit 266	13V5・10	(中期)	(IV)	N-70°-E	(IVa2)	(0.42)	(0.27)	23	20.10	—	—	A	>Pit267 <Pit101	
18	17	2	Pit 267	13V5	(中期)	(IV)	N-85°-E	IVb	0.44	0.39	30	20.00	円形	箱状	D2b	<Pit266	
	17	2	Pit 269	12V20・25	—	(IV)	N-51°-W	IVb	0.46	0.38	30	19.83	楕円形	箱状	B	<Pit268	
18	17	2	Pit 270	12V25、12W21	後期前葉	(IV)	—	IVc	0.56	0.52	46	19.66	不整形円形	箱状	D1	>Pit271	
18	17	2	Pit 271	12V20、12W16・21	後期前葉	(IV)	—	—	—	—	17	19.91	—	—	A	<Pit270	
	2	Pit 272	12V14	—	(IV)	N-29°-E	IVa1	0.30	0.24	23	19.98	不整形円形	漏斗状	B	—		
13	10	2	Pit 274	12V18・19	後期前葉	(IV)	N-28°-E	IVa1	0.34	0.22	19	20.05	不整形楕円形	U字状	B	<Pit273	
	2	Pit 276	12V19・20	後期前葉	(IV)	N-18°-E	IVa1	0.30	0.22	21	19.99	楕円形	弧状	A	—		
	2	Pit 279	12V22	—	(IV)	N-28°-W	IVa1	0.26	0.24	17	20.30	円形	箱状	B	—		
	2	Pit 280	12V22・23	—	(IV)	N-90°	IVa1	0.36	0.28	16	20.32	楕円形	箱状	B	—		
	2	Pit 281	12V16	—	(IV)	N-50°-E	IVa1	0.34	0.26	12	20.41	不整形	半円状	A	—		
	2	Pit 282	12V16	—	(IV)	—	IVa1	0.30	0.30	12	20.38	円形	階段状	A	—		
18		2	Pit 283	12V16・17	(中期)	(IV)	N-11°-W	IVa1	0.24	0.22	11	20.41	不整形円形	半円状	A	—	
	2	Pit 284	12V22	—	(IV)	N-86°-E	IVa1	0.26	0.24	19	20.29	円形	漏斗状	D2b	—		
	2	Pit 285	12V22	—	(IV)	N-60°-W	IVa1	0.18	0.16	18	20.29	円形	U字状	A	—		
18		2	Pit 288	12V18	後期中葉	(IV)	N-42°-W	(IVa1)	(0.30)	0.26	19	20.10	—	箱状	A	—	
	2	Pit 289	13V4	—	(IV)	N-72°-W	(IVa1)	(0.24)	(0.21)	12	20.19	—	—	A	<Pit240		
	2	Pit 291	12V9・14	—	(IV)	N-80°-W	IVa1	0.25	0.20	14	20.05	不整形楕円形	V字状	D1	—		
5		2	Pit 293	12V9・14	—	IV	—	—									

図版 No.	写真図版 No.	調査区	遺構	グリッド	時代	確認	主軸方位	規模			底面標高 (m)	形態		覆土分類	切り合い関係	備考
								区分	上端 (m)			平面	断面			
									長軸	短軸						
5	2	Pit308	12V16		IV					5	20.50		箱状	A		
10	3	Pit311	11V22		III					11	20.14			A		
10	3	Pit312	11V23		IV					8	20.14			A	<Pit313	
10	3	Pit313	11V23		IV					23	19.97	不整形	V字状	A	>Pit312	
	3	Pit314	11V22		IV		(IVa1)	(0.22)	(0.22)	12	20.12	円形	箱状	A	<SK310	
	3	Pit315	11V22、12V2		IV	N-80°-W	IVa1	0.28	0.17	8	20.18	楕円形	弧状	A		
	3	Pit316	11V23、12V3		IV	N-9°-E	IVa1	0.30	0.24	10	20.12	不整形	弧状	A	<Pit322	
	3	Pit317	12V3		IV	N-85°-W	IVa1	0.24	0.20	10	20.16	不整形	階段状	A		
	3	Pit320	12V3		IV		IVa1	0.20		16	20.11	不整形		A	<Pit321	
	3	Pit321	12V3		IV					18	20.04			A	>Pit320	
	3	Pit322	12V3		IV	N-50°-E		0.12	0.10	7	20.13	円形	V字状	A	>Pit316	

別表6 遺構別遺物一覧表 (括弧内の数字は口端遺存資料に基づく個体数)

遺構	縄文土器					焼成粘土塊	石製品	石核・剥片	搬入礫	その他
	前期	中期	後期	不明	合計					
竪穴住居址状遺構	SI 8	-	13 g	211 g (2)	736 g (4)	960 g (6)	-	台石1	-	-
袋状土坑	SK109	-	158 g (3)	27 g (1)	517 g	702 g (4)	1	石織未成品1・磨石敲石類1・砥石1・磨石敲打礫1	剥片3	24 7280.6
	SK251	-	74 g	57 g (1)	227 g (1)	358 g (6)	-	-	剥片1	10 1253.7
砂集積土坑	SK93	-	105 g (1)	12 g (1)	439 g (1)	556 g (3)	-	-	-	2 12.2
	SK94	-	-	-	35 g	35 g	-	-	-	-
	SK114	-	12 g	-	42 g	54 g	-	磨石敲石類1・磨石敲打礫1	-	1 432.8
	SK218	-	-	2 g (1)	23 g	25 g	-	-	-	-
	SK277	-	6 g	-	12 g	18 g	-	-	-	6 83.8
	SK310	-	5 g (1)	-	4 g (1)	9 g (2)	-	-	-	-
1区土坑	SK6	-	-	-	-	-	-	-	-	3 27.3
	SK28	-	-	-	-	-	-	-	-	1 3.0
2区土坑	SK49	-	16 g	-	74 g	90 g	-	-	-	3 15.6
	SK50	-	25 g (1)	6 g	27 g	58 g (1)	2	-	-	1 51.4
	SK57	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	SK59	-	25 g (2)	-	39 g (2)	64 g (4)	1	-	-	1 77.4
	SK64	-	14 g	-	52 g	66 g	-	磨石敲石類1・磨石敲打礫1	-	1 4.3
	SK74	-	243 g (3)	120 g (2)	697 g (2)	1060 g (7)	1	磨石敲石類2・磨石敲打礫3	剥片1	34 537.2
	SK77	-	-	8 g	124 g	132 g	1	磨石敲石類1・台石1・砥石1・磨石敲打礫1	石核1	10 3227.6
	SK83	5 g	101 g (1)	5 g	86 g	197 g (1)	2	-	-	3 34.4
3区土坑	SK100	-	-	-	24 g	24 g	-	-	-	2 15.8
	SK110	-	-	7 g	50 g (1)	57 g (1)	-	-	-	2 18.6
	SK113	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	SK117	-	-	-	48 g	48 g	-	-	-	3 20.9
	SK119	-	35 g	-	49 g	84 g	-	-	-	9 758.8
	SK120	-	-	-	18 g	18 g	-	-	-	-
	SK125	-	9 g	33 g (1)	9 g	51 g (1)	-	礫石錘1・石錘1	剥片1	4 71.4
	SK126	-	18 g	76 g	25 g	119 g	-	磨石敲石類1	-	2 48.8
	SK135	-	17 g	-	35 g	52 g	-	-	-	7 730.8
	SK160	-	25 g	-	39 g	64 g	-	-	-	1 0.5
	SK204	-	-	-	8 g	8 g	-	-	-	-
	SK243	-	-	-	83 g	83 g	-	-	-	-
掘立柱建物 SB401	Pit56	-	383 g	71 g	777 g (1)	1231 g (1)	1	石織1・磨石敲石類2・磨製石斧1・磨石敲打礫1	剥片1	28 743.3
	Pit80	-	56 g (2)	25 g	117 g	198 g (2)	-	-	-	8 442.5
	Pit84	-	-	-	63 g	63 g	1	-	-	7 127.2
	Pit95	-	49 g (1)	6 g	410 g (1)	465 g (2)	1	-	-	14 188.6
	Pit133	-	60 g (2)	7 g	338 g (1)	405 g (3)	-	磨石敲石類3・磨石敲打礫2	剥片1	13 1338.2
	Pit82	-	63 g (1)	130 g (2)	819 g (5)	1012 g (8)	1	-	剥片2	19 869.5
	Pit108	-	27 g	18 g	190 g (1)	235 g (1)	-	磨石敲石類1	剥片1	9 128.9
	Pit159	21 g (1)	32 g	4 g	279 g (4)	336 g (5)	3	-	剥片1	5 191.6
SB402	Pit188	-	43 g	-	23 g	66 g	-	-	-	1 2.4
	Pit55	-	287 g (2)	131 g (5)	850 g	1268 g (7)	-	磨石敲石類2・磨製石斧1・磨石敲打礫2・石製円盤1	-	34 2037.3
	Pit78	-	36 g	143 g (1)	373 g (1)	552 g (2)	2	砥石1	剥片2	19 389.0
SB403	Pit105	-	145 g	52 g (2)	702 g (1)	899 g (3)	1	-	剥片3	11 1007.2
	Pit70	-	98 g	332 g (4)	896 g (1)	1326 g (5)	3	-	石核1・剥片2	19 1034.6
SB404	Pit98	-	14 g	-	28 g	42 g	-	-	-	1 56.9
	Pit112	-	116 g	-	13 g	129 g	-	-	剥片1	-
SB405	Pit123	-	74 g	38 g (1)	96 g	208 g (1)	-	-	剥片1	15 181.2
	Pit193	-	-	7 g	124 g	131 g	-	-	-	7 57.0
	Pit273	-	54 g (1)	42 g (1)	279 g (1)	375 g (3)	-	-	-	4 25.1
SB406	Pit103	-	42 g	24 g	113 g	179 g	-	-	-	6 23.0
	Pit107	-	-	-	6 g	6 g	-	-	-	2 14.5
	Pit150	-	6 g	-	46 g	52 g	-	-	剥片1	2 17.6
	Pit286	-	53 g	7 g	55 g	115 g	-	-	-	-
SB407	Pit149	-	7 g (1)	-	49 g	56 g (1)	-	-	-	8 20.7
	Pit183	-	-	7 g	17 g	24 g	-	-	-	-
SB408	Pit287	-	25 g	-	-	25 g	-	-	-	-
	Pit147	-	5 g	-	51 g	56 g	-	-	-	-
	Pit171	-	11 g	-	-	-	-	-	-	4 107.0
SB409	Pit292	-	-	-	11 g	11 g	-	-	-	1 8.1
	Pit29	-	-	-	5 g	5 g	1	-	-	-
	Pit38	-	-	12 g	17 g	29 g	-	-	-	2 20.3

遺構	縄文土器					焼成 粘土塊	石製品	石核・ 剥片	搬入礫		その他	
	前期	中期	後期	不明	合計				個数	重量(g)		
SB410	Pit 10	—	8 g	27 g	72 g	107 g	—	磨石礫石類1	—	5	54.7	
	Pit 17	—	—	83 g (2)	79 g	162 g (2)	1	—	—	6	88.1	
	Pit 43	—	—	2 g	15 g	17 g	—	—	—	1	9.1	
SB411	Pit 51	—	15 g (1)	15 g	129 g (1)	159 g (2)	—	磨製石斧製作工程資料1	—	3	6.2	
	Pit 182	—	26 g	—	116 g	142 g	—	—	剥片1	9	8793.0	
	Pit 275	—	47 g	14 g	152 g (1)	213 g (1)	—	—	剥片1	8	4242.7	
SB412	Pit 210	—	—	—	4 g	4 g	—	—	—	—	—	
	Pit 232	—	6 g	8 g	15 g	29 g	—	—	—	2	19.8	
SB413	Pit 200	—	—	—	5 g	5 g	—	—	—	—	—	
	Pit 236	—	34 g	—	—	34 g	—	—	—	1	1995.2	
SB414	Pit 268	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1.5	
	Pit 212	—	—	—	—	—	—	—	—	1	2.2	
SB415	Pit 228	—	2 g	—	11 g	16 g	—	—	—	—	—	
	Pit 192	—	—	—	9 g	9 g	—	—	—	1	4.6	
SB416	Pit 196	—	8 g	—	11 g	19 g	—	—	—	—	—	
	Pit 211	—	5 g	—	—	5 g	—	—	—	1	148.0	
SB417	Pit 215	—	—	—	12 g	12 g	—	—	—	1	238.4	
	Pit 154	—	6 g	—	—	6 g	—	—	—	1	5.0	
	Pit 186	—	—	—	16 g	16 g	—	—	剥片1	—	—	
SB418	Pit 259	—	—	—	23 g	23 g	—	—	—	4	12.2	
	Pit 260	—	—	—	6 g	6 g	—	—	—	—	—	
1区ビット	Pit 248	—	2 g	—	5 g	7 g	—	—	—	—	—	
	Pit 7	—	6 g	19 g (1)	5 g	30 g (1)	—	—	—	3	18.4	
	Pit 9	—	—	9 g	2 g	11 g	—	—	—	—	—	
	Pit 11	—	—	31 g	109 g	140 g	1	—	石核1	7	109.0	
	Pit 14	—	—	—	4 g	4 g	—	—	剥片1	—	—	
	Pit 15	—	—	49 g	115 g (1)	164 g (1)	—	—	—	6	49.2	
	Pit 16	—	—	—	—	—	—	—	石核1	—	—	
	Pit 22	—	—	21 g	198 g	219 g	—	—	—	3	18.0	
	Pit 36	—	—	—	—	—	1	磨石礫石類1・磨石礫打礫1	—	3	167.1	
	Pit 39	—	—	—	7 g	7 g	—	—	—	3	35.1	
	Pit 40	—	9 g	22 g	74 g	105 g	—	—	—	4	15.6	
	Pit 41	—	—	53 g	85 g	138 g	—	—	—	1	11.3	
	Pit 44	—	—	—	18 g	18 g	—	—	剥片1	2	16.0	
	Pit 45	—	—	—	9 g	9 g	—	—	—	—	—	
	2区Ⅲ層ビット	Pit 52	—	101 g (1)	27 g	290 g	418 g (1)	—	—	—	13	200.4
Pit 54		—	21 g (1)	—	178 g	199 g (1)	1	—	—	5	277.1	
Pit 58		—	84 g	—	149 g	233 g	1	—	剥片1	6	26.1	
Pit 60		—	—	—	28 g	28 g	—	—	—	—	—	
Pit 61		—	197 g (1)	—	188 g	385 g (1)	—	—	—	—	—	
Pit 62		—	151 g (2)	103 g (1)	790 g	1044 g (3)	—	磨石礫石類3・磨製石斧1	剥片2	29	2977.6	
Pit 63		—	169 g (3)	20 g	286 g (2)	475 g (5)	1	—	—	4	62.6	
Pit 65		—	—	—	—	—	—	石鏝未成品1・石鏝1	—	1	3.8	
Pit 72		—	31 g (1)	24 g	344 g	399 g (1)	1	磨石礫石類1・磨石礫打礫1	剥片2	21	569.2	
Pit 75		—	—	—	6 g	6 g	—	—	—	—	—	
Pit 76		—	34 g (2)	—	245 g	279 g (2)	—	—	—	9	597.5	
Pit 79		—	—	—	42 g	42 g	—	—	—	1	20.1	
Pit 81		—	204 g (2)	90 g	489 g	783 g (2)	—	—	剥片1	13	1021.9	
Pit 87		—	—	—	30 g	30 g	—	—	—	—	—	
Pit 89		—	—	—	4 g	4 g	—	—	—	—	—	
Pit 90		—	—	—	17 g	17 g	—	—	剥片1	—	—	
Pit 91		—	—	12 g	24 g	36 g	—	—	—	3	123.6	
Pit 92		—	—	6 g	—	6 g	—	—	—	—	—	
Pit 97		—	48 g (1)	18 g	243 g	309 g (1)	—	—	剥片1	1	3.8	
Pit 99		—	42 g	46 g	66 g	154 g	—	—	—	1	1.3	
Pit 101		—	47 g (1)	11 g	89 g (1)	147 g (2)	3	—	—	5	25.3	
Pit 102		—	2 g	—	3 g	5 g	—	—	—	2	68.9	
Pit 104		—	59 g	—	91 g	150 g	1	磨石礫石類1・磨石礫打礫1	—	1	13.0	
Pit 106		—	9 g	—	25 g	34 g	2	—	—	4	55.2	
Pit 111		—	54 g	—	40 g	94 g	—	—	—	—	—	
Pit 115		—	46 g (3)	—	63 g	109 g (3)	—	—	—	6	818.3	
Pit 116		—	—	—	36 g	36 g	—	—	—	1	646.6	
Pit 118		—	42 g	—	24 g	66 g	1	磨石礫石類1・磨石礫打礫1	—	3	7.5	
Pit 121		—	23 g	38 g	46 g	107 g	1	—	—	5	38.9	
Pit 122		—	26 g	—	52 g	78 g	—	—	—	4	286.7	
Pit 124	—	80 g	93 g (1)	353 g	526 g (1)	—	台石1・磨石礫打礫1	剥片1	21	3029.7	アスファルト付着礫2	
Pit 127	—	—	—	—	—	—	—	—	3	204.9		
Pit 128	—	—	—	—	—	—	—	—	7	145.0		
Pit 129	—	—	10 g	62 g	72 g	—	—	—	6	24.5		
Pit 131	—	—	—	203 g	203 g	—	—	—	1	78.1		
Pit 132	—	48 g	2 g	392 g (3)	442 g (3)	—	—	剥片1	19	219.3		
Pit 136	—	—	—	75 g	75 g	—	—	剥片1	1	5.9		
Pit 137	—	2 g	—	91 g	93 g	—	—	—	4	82.4		
Pit 148	—	23 g	16 g	88 g	127 g	—	—	—	1	0.3		
Pit 157	—	20 g (1)	—	63 g	83 g (1)	—	—	—	1	6.2		
Pit 164	—	—	30 g (1)	42 g (1)	72 g (2)	—	台石1	—	1	3.7		
Pit 165	—	10 g	14 g (1)	28 g (1)	52 g (2)	—	磨石礫石類1	—	5	31.3		
Pit 249	—	9 g (1)	—	2 g	11 g (1)	—	—	—	4	244.4		
Pit 263	—	—	—	—	—	—	石鏝1	—	—	—		
Pit 290	—	19 g (1)	1 g	86 g	106 g (1)	—	—	剥片1	7	1502.5		
Pit 140	—	—	—	6 g	6 g	—	—	—	—	—		
2区Ⅳ層ビット	Pit 144	—	7 g	—	78 g	85 g	—	—	—	1	15.4	
	Pit 146	—	14	—	9 g	23 g	—	—	—	1	13.6	
	Pit 151	—	—	27 g	5 g	32 g	—	—	—	—	—	

別 表

遺構	縄文土器					焼成 粘土塊	石製品	石核・ 剥片	搬入礫		その他
	前期	中期	後期	不明	合計				個数	重量(g)	
Pit 153	-	-	-	14 g	14 g	-	-	-	-	-	-
Pit 155	-	-	7 g	84 g	91 g	-	-	-	1	15.6	-
Pit 156	-	-	-	107 g	107 g	-	-	-	5	46.7	-
Pit 158	-	-	3 g	6 g	9 g	-	-	-	2	2.3	-
Pit 161	-	3 g	7 g	76 g	86 g	-	-	-	2	4.6	-
Pit 162	-	12 g	21 g	293 g	326 g	-	-	剥片1	12	53.1	-
Pit 167	-	-	-	-	-	-	-	-	1	417.1	-
Pit 169	-	8 g	13 g (1)	197 g (2)	218 g (3)	-	-	-	2	39.4	-
Pit 177	-	-	-	17 g	17 g	-	-	-	-	-	-
Pit 184	-	-	16 g	11 g	27 g	-	-	-	-	-	-
Pit 185	-	2 g	-	7 g	9 g	-	-	-	-	-	-
Pit 189	-	-	-	1 g	1 g	-	-	剥片1	1	5.3	-
Pit 190	-	5 g	-	102 g	107 g	-	-	-	-	-	-
Pit 197	-	7 g	8 g	10 g (1)	25 g (1)	-	-	-	2	84.9	-
Pit 198	-	58 g (1)	-	139 g	197 g (1)	-	-	-	-	-	-
Pit 201	-	-	-	6 g	6 g	-	-	-	-	-	-
Pit 202	-	-	-	3 g	3 g	-	-	-	-	-	-
Pit 206	-	5 g	-	6 g (1)	11 g (1)	-	-	剥片1	-	-	-
Pit 207	-	31 g	-	8 g	39 g	-	-	-	-	-	-
Pit 208	-	-	-	5 g	5 g	-	-	-	-	-	-
Pit 209	-	11 g	-	74 g	85 g	4	-	-	5	41.9	-
Pit 213	-	8 g	-	-	8 g	-	-	-	-	-	-
Pit 214	-	-	-	4 g	4 g	-	-	-	-	-	-
Pit 216	-	56 g	-	44 g	100 g	-	磨石礫石類1	-	1	3.6	-
Pit 217	-	3 g	-	24 g	27 g	-	-	-	1	2.6	-
Pit 219	-	-	-	11 g	11 g	1	-	-	2	33.6	-
Pit 221	-	15 g	21 g	218 g	254 g	-	-	剥片1	8	1751.4	-
Pit 223	-	3 g	-	-	3 g	1	-	-	-	-	-
Pit 224	-	-	-	-	-	-	-	-	1	8.6	-
Pit 225	-	-	-	7 g	7 g	-	-	-	-	-	-
Pit 227	-	10 g	-	5 g	15 g	-	-	-	-	-	-
Pit 229	-	-	-	6 g	6 g	-	-	-	-	-	-
Pit 230	-	11 g	-	39 g	50 g	-	-	-	-	-	-
Pit 233	-	2 g	-	79 g	81 g	-	-	-	-	-	-
Pit 235	-	-	-	66 g	66 g	-	-	-	-	-	-
Pit 237	-	4 g	-	17 g	21 g	-	-	-	-	-	-
Pit 238	-	-	-	-	-	-	磨石礫石類1	-	-	-	-
Pit 239	-	-	-	22 g	22 g	-	-	-	2	22.4	-
Pit 241	-	-	-	17 g (1)	17 g (1)	1	-	-	-	-	-
Pit 242	-	-	-	35 g	35 g	-	-	-	-	-	-
Pit 245	-	-	-	10 g	10 g	-	-	-	1	24.9	-
Pit 246	-	-	-	3 g	3 g	-	-	-	-	-	-
Pit 250	-	5 g	-	61 g	66 g	1	台石1	-	6	3790.0	-
Pit 252	-	-	-	11 g	11 g	-	磨製石斧1	-	1	5.8	-
Pit 253	-	2 g	-	6 g	8 g	-	-	-	-	-	-
Pit 254	-	1 g	4 g	38 g	43 g	1	-	-	6	11.3	-
Pit 255	-	19 g (2)	3 g	72 g	94 g (2)	1	-	-	5	27.0	-
Pit 256	-	-	-	37 g	37 g	-	-	-	1	20.0	-
Pit 257	-	-	-	32 g	32 g	-	-	-	2	25.3	-
Pit 258	-	-	8 g	74 g	82 g	1	-	-	-	-	-
Pit 264	-	3 g	28 g	133 g	164 g	-	-	-	3	32.9	-
Pit 265	-	29 g	-	68 g	97 g	-	-	-	-	-	-
Pit 266	-	37 g	-	-	37 g	-	-	-	-	-	-
Pit 267	-	14 g (1)	-	13 g (1)	27 g (2)	-	-	-	1	9.6	-
Pit 269	-	-	-	84 g (1)	84 g (1)	-	-	-	5	1930.5	-
Pit 270	-	6 g	6 g	219 g (1)	231 g (1)	1	磨石礫石類1・砥石1・磨耗敲打礫1	-	4	1890.3	-
Pit 271	-	6 g	3 g	127 g	136 g	-	-	-	2	48.1	-
Pit 274	-	5 g	10 g	54 g	69 g	1	-	-	4	81.2	-
Pit 276	-	-	7 g	-	7 g	-	-	-	2	7.0	-
Pit 280	-	-	-	8 g	8 g	-	-	-	-	-	-
Pit 283	-	12 g	-	13 g	25 g	-	-	-	1	5.4	-
Pit 288	-	-	15 g	63 g	78 g	-	砥石1	-	3	1078.2	-
Pit 289	-	-	-	3 g	3 g	-	-	-	1	36.6	-
Pit 291	-	-	-	5 g	5 g	-	-	-	1	11.5	-
Pit 303	-	7 g	-	27 g	34 g	-	-	-	1	1.5	-
Pit 304	-	-	2 g	22 g	24 g	1	磨石礫石類1	-	1	649.1	-
Pit 314	-	2 g	16 g	34 g	52 g	-	-	-	-	-	-
Pit 316	-	-	-	4 g	4 g	-	-	-	-	-	-
Pit 320	-	18 g	-	53 g (1)	71 g	-	-	-	-	-	-
Pit 321	-	3 g	-	5 g	8 g	-	-	-	-	-	-

別表7 縄文土器観察表 (英:石英・長石 角:角閃石 雲:雲母 岩A:硬質岩石 岩B:軟質岩石 ガ:ガラス状粒子 軽:軽石 土:土器片 赤:赤色粒子 針:海面骨針)

図版No.	写真図版No.	報告No.	出土位置			分類	遺存部位	含有物					色調		付着物		文様
			遺構	グリッド	層位			区分	鉱物	岩石	ガラス	土器	その他	外面	内面		
19	18	1	SI 8	13V7	1	IVA2d	口	Ia1	英○ 角▲	岩A○		軽△	ガ□	赤△	外:灰オリーブ (7.5Y6/2) 内:淡黄 (2.5Y8/3)		
19	18	2	SI 8	13V7	1	IVA2a	体	Ib1	英○■ 角▲ 雲△	岩A○■			ガ□	赤△	外:灰黄褐 (10YR6/2) 内:灰白 (5Y7/2)		縄文LR:ヨコ
19	18	3	SI 8	13V7	1	IVB2	体	Ie1	英○ 角△	岩A○			ガ○■	赤△ 針△	外:橙 (7.5YR6/6) 内:にぶい橙 (7.5YR6/4)		縄文LR:ヨコ
19	18	4	SI 8	13V7	1	IVA2	体	Ia2	英○ 角▲ 雲△	岩A○				赤△ 針△	浅黄橙 (7.5YR8/3)		縄文LR:ヨコ
19	18	5	SI 8	13V17	2	IVA2d	口	Iia	英■ 角▲	岩A○				赤△ 針△	橙 (7.5YR7/6) 浅黄橙 (7.5YR8/6)		
19	18	6	SI 8	13V17	2	IVA2	体	Ia1	英○ 角▲ 雲△	岩A○				針△	にぶい橙 (7.5YR6/4)		
19	18	7	SI 8	13V17	2	IVA2	体	Ib1	英○■	岩A●				針△	外:灰 (4/0) 内:黄灰 (2.5Y6/1)		
19	18	8	SI 8	13V17	2	IV	口	Ia2	英□	岩A●	岩B○		ガ□	赤△ 針△	外:にぶい橙 (7.5YR7/4) 内:浅黄橙 (7.5YR8/4)		縄文LR:ヨコ
19	18	9	SK109		3	III A1a	体	Ia2	英□ 角▲	岩A●	岩B□				にぶい褐 (7.5YR5/3)		斜行格子目文・隆帯 上連続爪形文
19	18	10	SK109		-	III A2a	口	I f2	英□	岩A○			土▲	赤△ 針△	外:にぶい褐 (7.5YR5/3) 内:橙 (7.5YR7/6)		三角形形去 (逆位)
19	18	11	SK109		-	III BC2ab	体	Ib2	英■ 角△ 雲△	岩A○				赤△	外:暗灰 (3/0) 内:浅黄橙 (10YR8/3)		縄文LR+RL:タテ
19	18	12	SK109		2	III A3ab	口	Ic2	英□	岩A●	岩B●			赤△ 針△	外:にぶい褐 (7.5YR6/3) 内:浅黄橙 (10YR8/3)		
19	18	13	SK109		-	III A3ab	口	Ia1	英□ 角△	岩A○	岩B□			針△	外:明赤褐 (2.5YR5/6) 内:橙 (4YR6/8)		縄文L:ヨコ
19	18	14	SK109		2	III A3a	口	Ib2	英■	岩A○				赤△	橙 (5YR7/6)		
19	18	15	SK109		2	III A3a	体	Ia2	英□ 角▲	岩A○		軽△		針△	外:灰 (5Y5/1) 内:明赤褐 (5YR5/3)		
19	18	16	SK109		7	IVA2d	口	Ib1	英○■ 角△	岩A●		ガ□		赤△	淡橙 (5YR8/3)		
19	18	17	SK109		2	IVA2	体	Ia2	英□ 角△	岩A○			ガ□		灰白 (10YR8/1) 褐灰 (10YR5/1)		
19	18	18	SK251		1	III A3b	体	Ia2	英□	岩A●					外:にぶい黄橙 (10YR6/3) 内:浅黄橙 (10YR8/4)		縄文LR:タテ
19	18	19	SK251		-	IVA1	口	Ib1	英● 角▲	岩A○			ガ□	針△	外:褐灰 (7.5YR4/2) 内:浅黄 (10YR8/5)		
19	18	20	SK251		1	IVA	体	Ie1	英○ 角△	岩A○			ガ○■		外:にぶい黄橙 (10YR7/2) 内:灰白 (10YR8/2)		
19	18	21	SK251		-	IV	口	Ib2	英■	岩A○	岩B□				外:にぶい橙 (7.5YR7/4) 内:にぶい橙 (5YR7/4)		縄文L:ヨコ・ナナメ
19	18	22	SK93		3	III A3a	体~底	Ib1	英○■ 角△	岩A●		ガ○		赤△	明褐灰 (7.5YR7/2) 灰 (N4/0)		
19	18	23	SK93		-	III A3a	体	Ia2	英□ 雲△	岩A○	岩B□		ガ○	赤△	外:にぶい黄橙 (5YR4/4) 内:橙 (5YR6/6)		
19	18	24	SK93		-	III	体	Ie1	英○ 角▲				ガ●■	赤△	外:橙 (5YR6/6) 内:浅黄橙 (7.5YR8/3)		縄文LR+RL:ヨコ
19	18	25	SK93		-	III	体	Ie1	英○ 角△	岩A□			ガ■	赤△	外:にぶい橙 (7.5YR6/4) 内:浅黄橙 (10YR8/3)		縄文LR+結節:ヨコ
19	18	26	SK93		-	III	口~体	Ia2	英□ 角▲	岩A○		軽△	ガ□	赤△	外:浅黄橙 (7.5YR6/4) 黒 (7.5YR2/1) 内:にぶい褐 (7.5YR6/3)		縄文LR:ヨコ
19	18	27	SK93		-	III	体~底	Ib2	英■ 角▲ 雲△	岩A○			ガ○	赤△	外:浅黄橙 (10YR8/3) 橙 (7.5YR7/6)		縄文LR:ヨコ・ 底面スダレ状圧痕
19	18	28	SK93		-	IVA4a	口	Ibe1	英○■ 角△	岩A○			ガ○■	針△	外:橙 (5YR6/6) 内:にぶい褐 (7.5YR6/4)		
19	18	29	SK114		1	III A2b	体	Ia2	英□ 角▲	岩A○				赤△ 針△	浅黄橙 (10YR8/3)		
19	18	30	SK114		1	III	体	Ia2	英□ 角△	岩A○	岩B□		ガ□	赤△ 針△	外:浅黄橙 (10YR8/8) 褐灰 (10YR5/1) 内:にぶい橙 (7.5YR7/4)		捺系R:タテ
19	18	31	SK49		1	III A1a	体	Ib2	英■ 角△ 雲△	岩A○					浅黄橙 (10YR8/3)	炭化物	横位平行沈線上連続 山形文
19	18	32	SK50		1	III BC2・3b	口	Ib2	英■	岩A○			ガ□	針△	外:にぶい橙 (5YR6/4) 内:橙 (5YR6/6)		口端無文肥厚帯 縄LR側面圧痕
19	18	33	SK50		1	IVA2a	体	Ia2	英□ 角▲	岩A○			ガ□		浅黄 (2.5YR8/3)		
19	18	34	SK59		1	III C1・2a	口	Ia2	英□ 角▲	岩A○			ガ□	赤△	外:にぶい褐 (7.5YR5/3) 内:明褐灰 (7.5YR7/1)		口端捺系L 絡糸帯圧痕
19	18	35	SK59		1	III A1	体	Ia2	英○ 角△	岩A○			ガ○	赤△	灰白 (10YR8/2)		
19	18	36	SK64		1	III A3ab	口	Ia2	英□	岩A●				針△	外:浅黄橙 (10YR8/3) 内:黒 (7.5Y2/1)		
19	18	37	SK74		-	III A1c	口	Ic2	英□ 角△	岩A●	岩B■		ガ○	赤△ 針△	橙 (7.5YR7/6)		口端捺系L:タテ・ 体部縄文LR:ヨコ
19	18	38	SK74		-	III A3e	口	Ia1	英○ 角▲ 雲△	岩A●	岩B□		ガ□	赤△ 針△	外:にぶい橙 (7.5YR6/4) 内:浅黄橙 (7.5YR8/4)		縄文LR:ヨコ
19	18	39	SK74		3	III A2	体	Ia1	英○ 角▲ 雲△	岩A○			ガ□	赤△ 針△	外:灰白 (10YR8/2) 内:浅黄橙 (2.5YR8/4)		縄文LR:ヨコ
19	18	40	SK74		1・3	III A2・3	体	Ia2	英□ 角△	岩A○	岩B□			赤△ 針△	外:にぶい褐 (7.5YR6/3) 内:にぶい橙 (7.5YR7/3) 褐灰 (7.5YR5/1)		捺系R:ナナメ
19	18	41	SK74		-	IVA1	口	Ia2	英□ 角△	岩A○		軽△	ガ○	赤▲ 針△	にぶい橙 (7.5YR7/4)		縄文RL:ヨコ
19	18	42	SK74		1	IVA2d	口	Ia1	英○ 角▲ 雲△	岩A○			ガ○	赤△ 針△	外:灰白 (7.5YR8/2) 内:浅黄橙 (10YR8/3)		
19	18	43	SK83		1	IVA1	体	Ib1	英■	岩A●				赤△	外:橙 (7.5YR7/6) 内:にぶい橙 (7.5YR7/3)		
19	18	44	SK83		3	III A2a	口	Iie	英□		岩B□			赤▲	外:褐灰 (7.5YR4/1) 内:橙 (7.5YR7/6)		三角形形去 (正位) 木目状捺系文C1種 L:タテ
19	18	45	SK113		1	III A1・2	体	Ia1	英○	岩A●			ガ○		外:にぶい橙 (7.5YR6/3) 内:浅黄橙 (10YR8/4)		縄文LR+結節:タテ
19	18	46	SK119		1	III A3ab	体	Ibe1	英●■	岩A○	岩B□		ガ■	赤△	外:にぶい赤褐 (5YR5/4) 内:にぶい橙 (7.5YR6/4)		
19	18	47	SK120		-	III A	体	Ia1	英○ 角▲ 雲△	岩A○			ガ□	針△	灰白 (10YR8/2)		縄文結節:ヨコ
19	18	48	SK125		1	IVA1	口	Ib2	英■ 角▲	岩A○				赤▲ 針△	橙 (5YR6/8)		縄文LR:ヨコ・ナナメ
19	18	49	SK126		-	III A3a	体	Ib1	英○■ 角△	岩A○				赤▲ 針△	灰白 (7.5YR8/1) 灰 (N4/0)		

別 表

図版No.	写真図版No.	報告No.	出土位置			分類	遺存部位	含有物				色調		付着物		文様	
			遺構	グリッド	層位			区分	鉱物	岩石	ガラス	土器	その他	外面	内面		
20	19	50a	Pit 56		Ⅲ	ⅢA1a	体	1b2	英 ■ 角△ 雲△	岩A○			赤△ 針△	外：にぶい黄橙 (10YR6/4) 内：浅黄橙 (10YR8/3)			襷系L：タテ
20	19	50b		12V19	Ⅲ	ⅢA1a	体	1a1	英○□ 角△	岩A○□			針△	外：浅黄橙 (10YR8/3) 内：褐灰 (10YR5/1)			
20	19	51	Pit 51			ⅢA1a	体	1a1	英○□ 角△	岩A○			針△	黒褐 (10YR3/1) 浅黄橙 (10YR8/3)	炭化物		縄文LR：ヨコ・タテ
20	19	52	Pit 56			ⅢBC2・3a	口	1a1	英○□ 角△ 雲△	岩A○			針△	外：黒褐 (10YR3/2) 内：灰黄褐 (10YR6/2)			木目状襷系文C1種L：タテ
20	19	53	Pit 56			ⅢA2c	口～体	1a2	英 □ 角△ 雲△	岩A○ 岩B □	ガ □		針▲	外：黒褐 (10YR3/2) 内：灰黄褐 (10YR6/2)			
20	19	54a	Pit 56			ⅢA3e	口～体	1a1	英○□	岩A○	ガ○□		赤△ 針▲	にぶい黄橙 (10YR5/3) にぶい橙 (7.5YR6/4)	炭化物		縄文LR：ランダム
20	19	54b		12V19		ⅢA3e	口～体	1a1	英○□	岩A○	ガ○□		赤△ 針▲	にぶい黄橙 (10YR5/3) にぶい橙 (7.5YR6/4)	炭化物		縄文LR：ランダム
20	19	55	Pit 56			ⅣA2	体	Ⅱe	英 □ 角△	岩A □		土△	赤△	にぶい黄橙 (10YR7/3)			
20	19	56	Pit 80			ⅢA2b	口	Ⅱd	英 □		ガ □ 土▲		赤△	外：にぶい橙 (7.5YR6/4) 内：にぶ赤褐 (5YR4/4)			
20	19	57	Pit 80			ⅢC1・2b	口	1a2	英 □ 角△ 雲△	岩A○	軽△ ガ○□		針△	外：にぶい黄褐 (10YR5/3) 内：褐灰 (5YR4/1)			縄文LR：ヨコ・縄文LR側面圧痕
20	19	58	Pit 80			ⅣA2a	体	1a1	英○□ 角△ 雲△	岩A○			赤▲	浅黄橙 (10YR8/3)			縄文L：ヨコ
20	19	59	Pit 80			Ⅳ	体	1a2	英 □ 角△	岩A○			赤▲ 針△	外：にぶい黄褐 (10YR7/4) 内：浅黄橙 (10YR8/3)			内外面歯条線
20	19	60	Pit 95			ⅢA2b	口	1a2	英 □ 角▲ 雲△	岩A○□	ガ○□			外：橙 (7.5YR7/6) 内：浅黄橙 (10YR8/3)			
20	19	61	Pit 95			ⅢA3a	体	1a2	英 □ 角△	岩A○	ガ □		赤△	外：浅黄橙 (10YR8/3) 内：にぶい黄橙 (10YR7/2)			
20	19	62	Pit 95			Ⅳ	体	1a2	英 □ 角△	岩A○□	ガ □		針△	外：灰黄褐 (10YR6/2) 内：橙 (7.5YR7.6)			歯条線
20	19	63	Pit 133			ⅢA2a	口	1b2	英 ■	岩A○□	ガ○□		赤▲	外：浅黄橙 (10YR8/3) 内：橙 (7.5YR7/6)			区画内三角形形去(正位)・襷系R：ヨコ
20	19	64	Pit 133			ⅢA3ab	口	Ⅱa	英 ■ 角▲		ガ □		赤▲ 針△	浅黄橙 (7.5YR8/6)			
20	19	65	Pit 133			(Ⅳ)	口	1a1	英○□ 角△	岩A●	ガ □			橙 (2.5YR7/6) 白色 (10YR8/2)			無文
20	19	66	Pit 82			ⅢA3ab	口	1b2	英 ■ 角▲	岩A○	軽△ ガ○			外：褐灰 (7.5YR4/1) 橙 (2.5YR6/1) 内：明赤褐 (2.5YR5/6)			
20	19	67	Pit 82			ⅢBC2・3a	口	1a2	英 □ 角▲	岩A○	ガ○□		赤△ 針△	灰白 (10YR8/2)			肥厚帯～体部L：ヨコ
20	19	68	Pit 82			ⅣB2	体	1a2	英 □ 角△	岩A○□	ガ □		赤△ 針△	灰白 (10YR8/2)			縄文LR：ナナメ
20	19	69	Pit 82			ⅣA2a	口	1a2	英 □ 角▲	岩A○□ 岩B○	ガ □		赤△ 針△	外：にぶい褐 (7.5YR6/3) 内：にぶい黄橙 (10YR7/3)	炭化物	炭化物	
20	19	70	Pit 82			ⅣA2a	体	1a2	英○□ 角△ 雲△	岩A○□	ガ □		赤△ 針△	外：褐灰 (10YR5/1) 内：にぶい黄橙 (10YR7/3)			縄文RL：ナナメ
20	19	71	Pit 108			ⅢA1～2	体	1a1	英 □ 雲△	岩A○□			針△	外：橙 (7.5YR7/6) 黒 (7.5Y2/1) 内：褐灰 (10YR4/1)			木目状襷系文B1種L・L：ヨコ
20	19	72	Pit 108			Ⅳ	体	1a2	英 □ 角△	岩A○ 岩B □				外：灰 (N4/0) 内：橙 (5YR7/6)			歯条線
20	19	73	Pit 108			ⅣA2b	体	1a2	英 □ 角▲	岩A○			赤△ 針△	外：灰白 (2.5Y8/2) 内：にぶい黄橙 (10YR7/3)			
20	19	74	Pit 108			(Ⅲ)	口	Ⅱe	英 □ 角△	岩A □	ガ □		針△	橙 (5YR6/8)			縄文LR：ヨコ
20	19	75	Pit 159			Ⅱ	口	1c1	英○□ 角△ 雲△	岩A○ 岩B ■			赤△	外：黄灰 (2.5Y4/1) 内：浅黄橙 (10YR8/3)			口端隆帯貼付・縄文LR：ヨコ
20	19	76	Pit 159			ⅢA1～3	底	1b2	英 ■ 角△	岩A●			赤△	浅黄橙 (7.5YR8/4)			底面スタレ状圧痕
20	19	77	Pit 159			ⅣA2	体	1a1	英○□ 角△	岩A○□	ガ○			灰白 (2.5Y8/1)			
20	19	78	Pit 159			Ⅳ	口～体	1b2	英 ■ 角△	岩A○			赤△ 針△	外：にぶい黄橙 (10YR6/3) 黄灰 (2.5Y4/1) 内：橙 (7.5YR7/6)			縄文LR：ナナメ
20	19	79	Pit			ⅣA2c	口	1b1	英○■ 角▲ 雲△	岩A○□			赤▲	外：にぶい赤褐 (5YR5/4) 内：にぶい橙 (5YR6/4)			
20	19	80	Pit 78			ⅣB2	体	1b2	英 ■ 角△	岩A○□	ガ □		針△	外：灰褐 (7.5YR4/2) 内：浅黄橙 (10YR8/3)	炭化物		
20	19	81	Pit 78			ⅣB2	体	Ⅱa	英 ■	岩A □ 岩B □			赤△	浅黄橙 (7.5YR8/4)			沈線区画内縄文LR：ヨコ
20	19	82	Pit 78			ⅣA2	体	1a2	英○□ 角△	岩A○□	ガ○		赤▲ 針△	外：浅黄橙 (10YR8/3) 内：灰黄褐 (10YR4/2)		アスファルト	
20	19	83	Pit 105			ⅢA2a	体	1b2	英 ■ 角△	岩A○			針△	外：灰褐 (7.5YR4/2) 内：にぶい黄橙 (10YR5/3)			区画内彫刻蓮華文(正位)
20	19	84	Pit 105			ⅢA2b	体	1c2	英 ■ 角△	岩A○ 岩B ■			赤△ 針△	外：浅黄橙 (7.5YR8/4) 内：灰白 (10YR8/2)			縄文LR：ヨコ
20	19	85	Pit 105			ⅣA2	口	1a1	英 ■	岩A●	ガ □		赤△ 針△	浅黄橙 (10YR8/3)			
21	19	86	Pit 70			ⅣA2d	口	1b2	英 ■ 角▲	岩A○□	ガ○□		針△	外：橙 (5YR6/8) 内：明黄橙 (10YR7/6)			
21	19	87	Pit 70			ⅣA2c	口	1a2	英 □	岩A○□	ガ○□		針△	明赤褐 (5YR5/6)			
21	19	88	Pit 70			ⅣA2	体	1a2	英 □ 角△ 雲△	岩A○			赤△	浅黄橙 (10YR8/3)			
21	19	89	Pit 70			ⅣA2d	口～体	1bc2	英 ■ 角△ 雲△	岩A○ 岩B ■	ガ □		針△	外：黄灰 (2.5YR6/1) 内：灰白 (10YR8/2)			
21	19	90	Pit 70			Ⅳ	口～体	1b2	英 ■ 角△ 雲△	岩A○			針△	外：にぶい褐 (7.5YR5/4) 内：にぶい橙 (7.5YR6/4)			縄文LR：ヨコ
21	19	91	Pit 70			Ⅳ	体～底	1a2	英 □ 角△	岩A○□	ガ □		赤△ 針△	外：浅黄橙 (10YR8/4) 内：灰白 (10YR8/2)			体部無文
21	19	92	Pit 273			ⅢA3c	口	Ⅱa	英 ■ 角▲	岩A □	ガ □			橙 (5YR6/6)			区画内粗大彫刻蓮華文(正位)
21	19	93	Pit 273			ⅢA3a	体	1c2	英 □	岩A○□ 岩B ■			赤△	外：灰白 (10YR8/2) 内：にぶい黄橙 (10YR8/2)			
21	19	94	Pit 273			Ⅳ	口	1b2	英 ■ 角▲ 雲△	岩A○			針△	浅黄橙 (10YR8/3)			無文
21	19	95	Pit 273			Ⅳ	体～底	1a2	英 □ 角▲	岩A●□	軽△		針△	外：灰白 (N7/0) 内：灰白 (10YR8/1)			体部無文・底面網状圧痕
21	19	96	Pit 103			ⅢA2c	体	1c2	英 □	岩A○□ 岩B ■			赤△	外：にぶい褐 (7.5YR5/3) 内：にぶい黄橙 (10YR6/4)			縄文RL：ヨコ
21	19	97	Pit 103			ⅢA3b	体	Ⅱe		岩A○		土▲		外：にぶい橙 (7.5YR6/4) 内：浅黄橙 (7.5YR8/4)			縄文LR：ヨコ
21	19	98	Pit 103			ⅣA2a	体	1b2	英 ■ 角▲	岩A○	ガ □		赤△	外：淡黄 (2.5Y8/4) 内：灰黄 (2.5Y7/2)			
21	20	99	Pit 286			ⅢC1・2b	口	1c1	英○ 角△	岩A○ 岩B ■	ガ □		針▲	褐灰 (10YR4/1)	炭化物		縄文RL：ヨコ・縄文RL側面圧痕
21	20	100	Pit 286			ⅢA2a	体	1a2	英 □	岩A○□	ガ □		赤△ 針△	にぶい橙 (7.5YR7/4)			襷系L：タテ
21	20	101	Pit 149			ⅢA3ab	口	1b1	英○■ 角△ 雲△	岩A○	軽△ ガ □		針△	橙 (5YR6/6)			

図版No.	写真図版No.	報告No.	出土位置			分類	遺存部位	含有物					色調		付着物		文様
			遺構	グリッド	層位			区分	鉱物	岩石	ガラス	土器	その他	外面	内面		
21	20	102	Pit 287		1	ⅢA1b	体	I c2	英 □	岩A ○	岩B ■	ガ ○ □		外: にぶい黄橙 (10YR5/4) 内: にぶい褐 (7.5YR5/4)			縄文RL: ヨコ
21	20	103	Pit 171		1	ⅢA3	体	I a1	英 □ 角▲ 雲△	岩A ● □		ガ □	赤△ 針△	外: 橙 (7.5YR6/6) 内: にぶい橙 (7.5YR7/4)			
21	20	104	Pit 10		2	ⅣA2	体	I e2	英 □	岩A ○ □	岩B □	ガ ○ ■	針△	外: 橙 (2.5YR6/6) 内: 浅黄橙 (7.5YR4/1)			
21	20	105	Pit 17		2	ⅣA2d	口	I a1	英 □ 角△	岩A ○ □	岩B □	ガ ○ □		灰白 (10YR8/2)			
21	20	106	Pit 17		2	ⅣA2d	口	I a1	英 □ 角▲	岩A ○ □	岩B ○	ガ □		外: 浅黄橙 (10YR8/3) 内: 灰白 (10YR8/2)			
21	20	107	Pit 17		2	ⅣA2	体	I a1	英 □ 角▲	岩A ○		ガ □		灰白 (10YR8/2)			
21	20	108	Pit 43		1	ⅣB2	体	I a1	英 □	岩A ○			針△	橙 (7.5YR7/6)			
21	20	109	Pit 51		-	ⅢBC2c	口	I a2	英 □ 角△ 雲△	岩A ○ □			赤△	外: 灰黄褐 (10YR5/2) 内: にぶい橙 (7.5YR7/4)			口端燃系L: タテ
21	20	110	Pit 51		1	ⅣA2a	体	I b2	英 ■ 角▲	岩A ○		ガ □	赤△ 針△	浅黄橙 (10YR8/4)			
21	20	111	Pit 236		1	ⅢA1・2	体	Ⅱa	英 ■ 雲△					外: にぶい褐 (7.5YR6/3) 内: 灰白 (10YR8/2)			木目状燃系文B1種 R/R: ヨコ
22	20	112	Pit 7		1	ⅣA2c	口	I b2	英 ■ 角▲	岩A ○ □	軽△	ガ □	赤△ 針△	橙 (5YR7/6)			
22	20	113	Pit 9		1	ⅣB2	体	I b2	英 ■	岩A ○ □		ガ □	赤△ 針△	外: 褐灰 (10YR4/1) にぶい黄橙 (10YR7/3) 内: 浅黄橙 (10YR8/3)			縄文LR: ランダム
22	20	114	Pit 11		1	ⅣA2	体	I a1	英 □ 角▲	岩A ○ □		ガ ○ □		浅黄橙 (10YR8/3)			
22	20	115	Pit 11		1	ⅣA2	体	I a2	英 □ 角▲	岩A ○	岩B □	ガ ○	赤△	外: 暗灰 (N3/0) 内: 灰白 (2.5Y8/2)			
22	20	116	Pit 28		1	ⅢA3b	口・体・底	I a1	英 □	岩A ○	岩B □		赤△ 針△	外: 灰白 (10YR8/2) 内: 淡黄 (2.5Y8/3)			縄文LR: ヨコ・ 底面スタレ状圧痕
22	20	117	Pit 36		1	ⅢA2a	口	I c1	英 ○	岩A ○ □	岩B ■		赤△ 針△	外: にぶい褐 (7.5YR5/3) 内: 灰白 (10YR8/2)			正位彫刻蓮華状
22	20	118	Pit 41		1	ⅣA2d	口~体	I a1	英 ○	岩A ●		ガ ● □	赤△	淡橙 (2.5Y8/3)			縄文LR: ヨコ・ 縄LR側面圧痕
22	20	119	Pit 52		2	ⅢC1・2b	口~体	I a2	英 □ 雲△	岩A ○			赤△	外: にぶい黄橙 (10YR6/3) 褐灰 (10YR4/1) 内: 浅黄橙 (10YR8/3)			
22	20	120	Pit 52		-	ⅢA3ab	体	I a2	英 □ 角▲	岩A ○		ガ □	赤△ 針△	外: 橙 (5YR6/6) 内: 浅黄橙 (7.5YR8/4)			
22	20	121	Pit 52		2	ⅢA3a	体	I a2	英 □ 角▲ 雲△	岩A ○ ■		ガ □	針△	外: 橙 (7.5YR6/6) 内: にぶい赤褐 (5YR5/4)			
22	20	122	Pit 52		-	ⅣA2	体	I a2	英 □ 角▲	岩A ●			赤△ 針△	外: 橙 (7.5YR7/6) 内: 橙 (2.5YR6/6)			縄文LR: ヨコ
22	20	123	Pit 52		-	Ⅲ・Ⅳ	口~体	I a1	英 □ 角△	岩A ○		ガ ○	針△	外: 橙 (7.5YR4/6) 内: 浅黄橙 (7.5YR8/4)			縄文LR: ヨコ
22	20	124	Pit 54		-	ⅢA1	口	I c1	英 □	岩A ●	岩B ■		赤△	外: 灰白 (10YR7/1) 内: 浅黄橙 (10YR8/4)			口端燃系L: タテ・ 隆帯上連続爪形文
22	20	125	Pit 54		-	Ⅳ	口	I a2	英 □ 角▲	岩A ●		ガ ○	赤△ 針△	浅黄橙 (7.5YR8/4)			縄文LR: ヨコ
22	20	126	Pit 61		1	ⅢA2a	体	Ⅱa	英 ■ 角△ 雲△				赤△	外: にぶい黄橙 (10YR6/4) 内: にぶい黄橙 (10YR7/3)			区画内軌軸文・ 六角形鋸歯文
22	20	127	Pit 61		1	ⅢA3c	口	I b2	英 ■ 雲△	岩A ●				外: 暗灰 (N3/0) 内: 浅黄橙 (10YR8/3)			口端斜位沈線
22	20	128	Pit 61		1	ⅢA	体	I a2	英 □ 角△ 雲△	岩A ○ □	軽△	ガ □	赤△ 針△	外: 橙 (7.5YR6/6) 内: にぶい黄橙 (10YR7/4)			縄文LR+RL (結束 羽状縄文): タテ
22	20	129	Pit 61		1	Ⅲ・Ⅳ	口	I a2	英 □ 角▲	岩A ○		ガ □	針△	浅黄橙 (10YR8/4)			縄文LR: ヨコ
22	20	130	Pit 62		-	Ⅲ	体	I a2	英 □ 角▲	岩A ○ ■	軽△	ガ ○ □	針△	外: 橙 (5YR6/6) 内: 橙 (5YR6/8)			隆帯貼付
22	20	131	Pit 62		1	ⅢA3d	口	I a2	英 □ 角▲ 雲△	岩A ○ □		ガ □	赤△ 針△	橙 (5YR7/6)			口端縦位竹管沈線
22	20	132	Pit 62		1	ⅢBC2a	口	I b1	英 ○ ■ 雲△	岩A ○		ガ ○ □	赤△ 針△	外: にぶい橙 (7.5YR7/4) 内: 浅黄橙 (10YR8/3)			交互刺突文・口端刻目
22	20	133	Pit 62		5	ⅢA3b	口	I c2	英 □ 雲△	岩A ○	岩B ■		赤△	外: にぶい赤褐 (5YR7/9) 内: 橙 (5YR7/6)			口縁部区画内縦位竹管沈線
22	20	134	Pit 62		-	ⅣA2b	口	I a1	英 □ 角△	岩A ●			赤△ 針△	にぶい黄橙 (10YR7/3)			口縁部肥厚帯横位四線
22	20	135	Pit 62		-	ⅣA2	体	I a2	英 □ 角△	岩A ○		ガ ○ □	針△	外: にぶい橙 (7.5YR7/4) 内: 浅黄橙 (7.5YR8/6)			縦位沈線
22	20	136	Pit 63		1+3	ⅢA1ab	口	I a2	英 □ 角▲	岩A ●			赤△ 針△	外: 橙 (7.5YR7/6) 内: 浅黄橙 (7.5YR8/6)			口縁部区画内格子目沈線・縦位竹管刺突
22	20	137	Pit 63		-	ⅣA2d (口)	口	I a1	英 □ 角△	岩A ●		ガ □	赤△ 針△	浅黄橙 (7.5YR8/4)			口端斜位沈線
22	20	138	Pit 72		-	ⅢA1b	口	Ⅱa	英 ■ 雲△	岩A □				外: にぶい橙 (7.5YR6/4) 内: 灰褐 (7.5YR5/2)			口端斜位沈線
22	20	139	Pit 76		1	ⅢA1ab	口	I a1	英 □ 角△	岩A ●		ガ □	針△	橙 (7.5YR6/6)			口端・隆帯上連続爪形文
22	20	140	Pit 76		1	ⅢA1c	口	I a1	英 ○ ■	岩A ○	軽△		赤△	外: 灰褐 (7.5YR5/2) 内: にぶい黄橙 (10YR7/4)			口端刻目
22	20	141	Pit 81		2	ⅢA2d	体	Ⅱa	英 ■ 雲△	岩A □			赤△ 針△	外: 灰黄褐 (10YR5/2) 内: 灰白 (10YR8/2)			連続爪形刺突鈍角施文・縄文RL: ヨコ
22	20	142	Pit 81		4	ⅢA3a	体	I a2	英 □	岩A ● □			赤△ 針△	外: 浅黄橙 (7.5YR8/6) 内: 浅黄橙 (7.5YR8/3)			区画内格子目沈線
22	20	143	Pit 81		2	ⅢA3c	体	I a2	英 □ 角▲	岩A ○		ガ ○ □		外: 橙 (5YR7/8) 内: 浅黄橙 (10YR8/3)			区画内蓮華文
22	20	144	Pit 81		2	ⅣA2	体	I a2	英 □ 角▲	岩A ● □		ガ □	針△	外: 橙 (2.5YR6/6) 浅黄橙 (10YR8/3) 内: 橙 (2.5YR6/6)			口端部肥厚帯横位沈線
22	20	145	Pit 81		1	ⅣA	体	I a1	英 □ 角△	岩A ○	軽△		赤△	外: 褐灰 (10YR4/1) にぶい橙 (7.5YR6/4) 内: にぶい褐 (7.5YR6/3)			櫛歯条線
22	20	146	Pit 81		2	ⅣA	体	I a2	英 □ 角△	岩A ●		ガ □	赤△ 針△	外: にぶい橙 (7.5YR7/4) 内: 橙 (5YR7/6)			櫛歯条線
22	20	147	Pit 81		2	Ⅲ・Ⅳ	口	I b1	英 ○ ■ 角△	岩A ■			赤△ 針△	外: 橙 (5YR6/6) 内: にぶい赤褐 (5YR5/4)			縄文R: ヨコ
22	20	148	Pit 91		1	ⅣA2	体	Ⅱe2	英 □	岩A ○ □		ガ ○ ■	赤△ 針△	外: 浅黄橙 (10YR8/3) 内: にぶい黄橙 (10YR7/3)			
22	20	149	Pit 97		-	ⅢA2	口	I b2	英 ■ 角▲	岩A ○ ■		ガ ○ □		外: 明赤褐 (2.5YR5/6) 内: 橙 (2.5YR6/8)			区画内逆位彫刻蓮文
22	20	150	Pit 97		1	ⅢA	底	I e	英 □ 角△	岩A	岩B □	ガ □ 土△	赤△ 針△	橙 (5YR6/6)			底面スタレ状圧痕
22	20	151	Pit 97		-	ⅣA	体	I b2	英 ■ 角△	岩A ○			赤△ 針△	外: にぶい赤褐 (5YR7/6) 内: 橙 (5YR7/6)	炭化物		櫛歯条線
22	20	152	Pit 97		-	Ⅲ・Ⅳ	口	I b2	英 ■ 角▲	岩A ○		ガ □	赤△	外: 浅黄橙 (10YR8/3) 内: 灰白 (10YR8/2)	アスファルト		縄文LR: ナナメ
22	20	153	Pit 99		1	ⅢA2a	体	I a2	英 □ 角△	岩A ○ □			赤△ 針△	外: 橙 (7.5YR7/6) 内: 浅黄橙 (7.5YR8/6)			溝状突起

別 表

図版No.	写真図版No.	報告No.	出土位置			分類	遺存部位	含有物				色調		付着物		文様
			遺構	グリッド	層位			区分	鉱物	岩石 ガラス 土器	その他	外面	内面			
22	20	154	Pit 99		1	IVA	体	1b1	英○■ 角△	岩A○□			赤△ 針△	外: にぶい橙 (7.5YR7/3) 内: 浅黄橙 (7.5YR8/4)		斜位沈線
22	20	155	Pit 101		1	ⅢA3ab	口	1a1	英○□ 角▲ 雲△	岩A○□	方□			外: 灰褐 (7.5YR4/2) 内: 明赤褐 (2.5YR5/6)		
22	20	156	Pit 101		1	IVA	体	1a2	英□ 角△	岩A○			赤△ 針△	灰黄褐 (10YR5/2)		櫛歯条線
22	20	157	Pit 104		-	ⅢA3	口	1a2	英□ 角▲	岩A○	方○		針△	外: 褐灰 (7.5YR5/1) 内: 浅黄橙 (7.5YR8/1)		
22	20	158	Pit 106		-	ⅢA3	体	1b2	英■ 角▲ 雲△	岩A○■	方□		赤△ 針△	浅黄橙 (7.5YR8/6)		
22	20	159a	Pit 111		1	ⅢA1a	口	1b2	英■ 角△ 雲▲	岩A○	方□	赤△		外: にぶい黄橙 (10YR6/4) 内: にぶい黄橙 (10YR6/3)		区画内斜格子目文・ 口端隆帯上撫系L・ 区画下竹管沈線縦位 等間隔施文・縄文 LR: ヨコ
22	20	159b	Pit 112		-		体									
22	20	159c	12V15		II		口~体									
24	20	159c	12V15		II		口~体									
22	20	160	Pit 111		1	ⅢA1	体	IIa	英■ 角△ 雲△				赤△	外: 灰褐 (7.5YR5/2) 内: にぶい黄橙 (10YR7/3)		竹管沈線縦位等間隔 施文・縄文LR: ヨコ
22	20	161	Pit 111		1	ⅢA2a	口	1b2	英■	岩A○	方□		赤△	外: 灰黄褐 (10YR4/2) 内: 浅黄橙 (10YR8/3)		区画内正位彫刻蓮華 文
22	20	162	Pit 111		1	ⅢA2・3	口	1c2	英□	岩A○□ 岩B■			赤△	外: にぶい黄橙1 (10YR7/3) 内: 浅黄橙 (10YR8/4)		縄文LR: ヨコ
22	20	163	Pit 112		1	ⅢA1b	体	1b2	英■ 角△ 雲▲	岩A○□			赤△ 針△	にぶい黄橙 (10YR7/3)		横位隆帯上縦位竹管・ 沈線・隆帯下連続 山形文
23	21	164	Pit 115		1	ⅢBC2・3b	口~体	1a2	英□ 角△ 雲△	岩A○□	方□		針△	外: 橙 (7.5YR7/6) 内: 浅黄橙 (7.5YR8/6)		肥厚帯上縄LR押圧・ 体部縄文LR: タテ
23	21	165	Pit 115		1	ⅢBC2・3c	口~体	1a2	英□ 角▲ 雲△	岩A○			針△	外: 褐灰 (7.5YR4/1) 内: 灰白 (10YR8/2)	炭化物	無文
23	21	166	Pit 115		1	ⅢA1・2	体	1b1	英○■ 角△	岩A○	方□		赤△	外: 灰黄橙 (10YR5/2) 内: 橙 (7.5YR7/6)	炭化物	縄文R+結節: タテ
23	21	167	Pit 118		-	ⅢA2・3	体	IIe	英□ 角△	岩A□	方□		赤△	灰白 (10YR8/2)		
23	21	168	Pit 118		1	ⅢA1・2	体	IIa	英■ 角△ 雲△	岩A□				外: 浅黄橙 (10YR8/4) 内: 灰黄褐 (10YR5/2)		木目状撫系文B1種 R: タテ
23	21	169	Pit 121		-	IVA	体	1a2	英□ 角△	岩A○			赤△ 針△	外: にぶい黄橙 (10YR7/2) 内: にぶい褐 (7.5YR6/3)		櫛歯条線
23	21	170	Pit 124		-	ⅢA2b	口	1a2	英□ 角△	岩A○	方□		赤△ 針△	浅黄橙 (10YR8/3)		口縁部肥厚帯上横位 凹線
23	21	171	Pit 124		1	IV	口	1a1	英○□	岩A○□			赤△ 針△	外: 浅黄橙 (7.5YR8/3) 内: 浅黄橙 (7.5YR8/4)		縄文LR: ヨコ
23	21	172	Pit 127		1	ⅢA2a	体	IIa	英■ 雲△	岩A□				外: 灰白 (10YR8/2) 内: 灰 (N4/0)		区画内正位彫刻蓮華 文
23	21	173	Pit 127		1	ⅢA3ab	口	1a2	英□ 角▲	岩A○□	軽△ 方□		赤△	外: 橙 (7.5YR6/6) 内: 橙 (2.5YR6/6)		縄文LR: ヨコ
23	21	174	Pit 132		2	ⅢA2	体	1b2	英■ 角△ 雲△	岩A○			赤△ 針△	外: にぶい黄褐 (10YR5/3) 内: 浅黄橙 (10YR8/3)		縄文LR: ヨコ
23	21	175	Pit 132		-	IV	口	1a2	英□ 角△	岩A○	方□		赤△	浅黄橙 (7.5YR8/4)		縄文LR: ヨコ
23	21	176	Pit 148		1	ⅢA1	体	1b2	英■ 雲△	岩A●□			赤△	外: 明赤褐 (5YR5/8) 内: にぶい黄橙 (10Y7/3)		縄文RL: タテ
23	21	177	Pit 148		2	IVA2	体	1b2	英■ 角△	岩A○			赤△	浅黄橙 (10YR8/3)		縄文RL+結節: タテ
23	21	178	Pit 155		1	ⅢBC2・3a	口	1a2	英■ 角△	岩A● 岩B□	方□		赤△ 針△	外: 灰白 (10YR8/2) 内: 灰白 (2.5YR8/2)		肥厚帯上縄文LR: ヨコ
23	21	179	Pit 157		-	ⅢA1・2	口	1d1	英○	岩A●□	方○		赤△ 針△	外: にぶい褐 (7.5YR5/3) 内: にぶい橙 (5YR6/4)		木目状撫系文B1種R + R: タテ
23	21	180	Pit 161		-	ⅢA1	口	IIe	英□ 角△ 雲△				針△	外: 暗灰 (N3/0) 内: 褐灰 (10YR6/1)		口端連続爪形文
23	21	181	Pit 162		-	ⅢA1a	体	1b2	英■ 角△	岩A○	方□		赤△ 針△	橙 (5YR6/6)		区画内斜位竹管集合 沈線
23	21	182	Pit 162		1	IVA2	体	IIa	英■ 角△ 雲△		方□		赤△	にぶい橙 (7.5YR7/4)		
23	21	183	Pit 162		2	IV	口~体	1b2	英■ 角▲	岩A○	方○□		赤△ 針△	灰白 (10YR8/2)		縄文L: ヨコ
23	21	184	Pit 164		2	IVA2a	口	1a2	英□ 角△	岩A○				灰白 (10YR8/2)		
23	21	185	Pit 165		1	ⅢA2b	体	1a2	英□ 角▲	岩A○	方□		赤△ 針△	橙 (5YR6/6)		
23	21	186	Pit 165		-	IVA2d	口	1b2	英■ 角△	岩A○	方○□		赤△	灰白 (2.5Y8/2)		
23	21	187	Pit 165		-	IVA2	体	1a2	英□ 角△	岩A○	方□		赤△ 針△	外: 褐灰 (10YR5/1) 内: 浅黄橙 (7.5YR8/6)		
23	21	188	Pit 169		-	ⅢA3c	体	1a2	英□ 角▲	岩A□	方□		赤△ 針△	外: にぶい褐 (7.5YR7/4) 内: 橙 (7.5YR7/6)		区画内蓮華文
23	21	189	Pit 169		1	IVA2	体	1a2	英□	岩A○	方□			外: 明黄褐 (10YR7/6) 内: 橙 (5YR6/6)	炭化物	
23	21	190	Pit 169		-	IV	口~体	1c1	英○ 角▲	岩A○ 岩B■			赤▲	外: 橙 (7.5YR7/6) 内: 灰白 (10YR8/2)		縄文L: ヨコ
23	21	191	Pit 190		1	ⅢC1・2a	口	1a2	英□ 角△	岩A○			針△	外: にぶい黄褐 (10YR5/3) 内: にぶい黄橙 (10YR7/3)		肥厚帯上絡条体押圧
23	21	192	Pit 198		1	ⅢA	体	1b2	英■ 雲△	岩A○				外: 浅黄橙 (10YR8/3) 内: 浅黄橙 (10YR8/4)		縄文L+結節: タテ
23	21	193	Pit 207		-	ⅢA	体	1b2	英■ 雲△	岩A○			赤△ 針△	灰褐 (7.5YR6/2)		縄文RL: ヨコ
23	21	194	Pit 216		1	ⅢA	体	1a1	英○ 角△	岩A○	方○□		赤△ 針△	橙 (5YR6/6)		縄文LR+RL: タテ
23	21	195	Pit 221		2	ⅢBC2a	口	1a2	英□	岩A○			赤▲	浅黄橙 (10YR8/4)		区画内交互刺突文
23	21	196	Pit 221		2	ⅢA3	体	1c2	英□	岩A○ 岩B■			赤△ 針△	外: 橙 (7.5YR7/6) 内: 浅黄橙 (7.5YR8/4)		隆帯貼付
23	21	197	Pit 221		-	IVA2	体	1a2	英□ 角△	岩A○	方□		赤△ 針△	橙 (5YR7/6)		
23	21	198	Pit 223		1	ⅢA2a	口	1b2	英■ 角▲	岩A○□	方□		赤△	外: 灰白 (2.5Y8/3) 内: 浅黄橙 (7.5YR8/4)		区画内正位彫刻蓮華 文
23	21	199	Pit 249		1	ⅢA3ab	口	1a2	英□ 角△	岩A○□	方□		赤△	外: にぶい黄褐 (10YR5/3) 内: 橙 (5YR7/6)		
23	21	200	Pit 250		1	ⅢA2a	口	1a2	英□	岩A○				外: にぶい褐 (7.5YR7/4) 内: 灰白 (10YR8/2)		横位竹管沈線下縦位 等間隔施文
23	21	201	Pit 255		1	ⅢA1b	口	1b1	英○■	岩A○□			赤△	外: 明赤褐 (2.5YR5/6) 内: 灰白 (10YR8/2)		口縁区画内格子目沈 線
23	21	202	Pit 257		1	ⅢA3a	口	1a1	英□ 角▲	岩A○	方□		赤△	橙 (7.5YR7/6)		
23	21	203	Pit 258		1	IVA4	体	IIa	英■ 雲△	岩A□				外: 褐灰 (10YR5/1) 内: 灰白 (10YR8/2)		
23	21	204	Pit 265		1	ⅢA3	体	IIa	英■ 角△ 雲△					外: 褐灰 (110YR4/1) 内: 橙 (5YR7/8)		
23	21	205	Pit 266		1	ⅢA1a	体	1a1	英○□	岩A●□				外: 浅黄橙 (7.5YR8/6) 内: 灰 (N4/0)		区画内斜位格子目文

図版No.	写真図版No.	報告No.	出土位置			分類	遺存部位	含有物				色調		付着物		文様
			遺構	グリッド	層位			区分	鉱物	岩石	ガラス	土器	その他	外面	内面	
23	21	206	Pit 266		1	ⅢA3a	体	1b2	英 ■ 角△	岩A○□			外：浅黄橙 (7.5YR8/6) 内：明赤褐 (2.5YR5/6)			区画内格子目沈線
23	21	207	Pit 267		3	ⅢA2b	口	Ⅱa	英 ■			赤△	外：灰 (N4/0) 内：黄灰 (2.5Y6/1)			横位竹管沈線下縦位集合沈線
23	21	208	Pit 270		1	Ⅲ・Ⅳ	口	1a2	英 □ 角▲	岩A○□		方○	針△	内：黄橙 (10YR7/2)		縄文LR：ヨコ
23	21	209	Pit 275		2	Ⅳ	口～体	1a2	英 □ 角△	岩A●		方□	赤△ 針△	外：黄灰 (2.5YR6/1) 内：浅黄橙 (10YR8/3)		無文
23	21	210	Pit 283		1	ⅢA1b	体	1a2	英 □ 角△ 雲△	岩A○	岩B □		針△	外：にぶい黄橙 (10YR7/4) 内：灰白 (10YR8/2)		横位区画竹管沈線・縦位等間隔施文
23	21	211	Pit 288		1	ⅣA	体	1a1	英 □ 角△	岩A○		方□	赤△ 針△	外：にぶい黄橙 (10YR7/4) 内：灰白 (10YR8/2)		歯歯条線
23	21	212	Pit 288		1	V	体	1a2	英 □ 角△	岩A○□		方□	赤△ 針△	外：にぶい橙 (7.5YR6/4) 内：灰白 (10YR8/2)		
23	21	213	Pit 290		-	ⅢA3	口	Ⅱb	英 □	岩A □	岩B ■			橙 (7.5YR7/6)		
23	21	214	Pit 303		1	ⅢA3	体	1b2	英 ■ 雲△	岩A○□			赤△	外：にぶい褐 (7.5YR5/3) 内：にぶい黄橙 (10YR6/4)		焼成前両面穿孔
23	21	215	Pit 303		1	ⅢBC2・3a	口～体	Ⅱa	英 ■ 雲△				赤△	外：にぶい褐 (7.5YR5/3) 内：にぶい橙 (7.5YR7/4)		縄文LR：ヨコ
23	21	216	Pit 1	2T	-	ⅢBC2ab	体	1b2	英 ■	岩A○□			赤△	外：浅黄橙 (10YR8/3) 内：灰黄褐 (10YR6/2)		区画内交互刺突文
24	22	217		12V13	Ⅱ	Ⅱ	口	1b2	英 ■ 雲△	岩A○□		方□		外：黒褐 (7.5YR3/2) 内：明褐 (7.5YR5/6)		口縁隆帯貼付
24	22	218		12V24	Ⅱ	Ⅱ	口	1f1	英○□ 角▲	岩A○		方□ 土▲	針△	外：橙 (5YR7/6) 内：浅黄橙 (10YR8/4)		口縁部隆帯貼付
24	22	219		12V13	Ⅱ	ⅢA1b	口～体	Ⅱa	英 ■ 角△	岩A □			赤△ 針△	外：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内：にぶい橙 (7.5YR7/4)		口端燃系L：タテ
24	22	220		12V19	Ⅱ	ⅢA1a	口	1b2	英 ■ 角△	岩A○			赤△ 針△	橙 (7.5YR7/6)		口縁部区画内斜行格子目・口端連続爪形文
24	22	221		12V2	Ⅱ	ⅢA1b	口～体	1f1	英○ 角▲	岩A○	岩B ■	方□	赤△ 針△	外：浅黄橙 (10YR8/3) 内：灰白 (10YR8/2)		横位竹管沈線下縦位竹管・口端外面連続爪形文・口端内面縄文LR：ヨコ
24	22	222		12V19	Ⅱ	ⅢA1a	口	1a2	英 □	岩A○		方□	赤▲ 針△	浅黄橙 (10YR8/4)		口縁部区画内U字文・口端連続爪形文
24	22	223		12V8	Ⅲ	ⅢA1	口	Ⅱe	英 □ 角△				針△	灰黄褐 (10YR4/2)		口端連続爪形文
24	22	224		12V15	I	ⅢA1a	口	1a2	英 □ 角▲	岩A○□			赤△ 針△	外：橙 (7.5YR7/6) 内：浅黄橙 (10YR8/3)		口縁部区画内斜行格子目文
24	22	225		12V6	Ⅲ	ⅢA1a	口	1a1	英○ 角▲ 雲△	岩A○□			針△	外：黒褐 (10YR3/1) 内：浅黄橙 (10YR8/4)		口縁部区画内斜行格子目文
24	22	226		13V8	Ⅲ	ⅢA1a	口	1a2	英 □ 角▲	岩A○□	岩B □	方○□	針△	外：黒褐 (7.5YR3/1) 内：にぶい橙 (7.5YR6/4)		口縁部区画内斜行格子目文
24	22	227		12V24	Ⅲ	ⅢA1a	体	1a1	英○□ 角▲	岩A○□			赤△ 針△	外：橙 (7.5YR7/6) 内：黄橙 (7.5YR7/8)		横位区画内斜行格子目文
24	22	228		12V2	I	ⅢA1a	体	1a1	英○□ 角▲	岩A○	岩B○		針△	にぶい黄橙 (10YR5/3)	アスファルト	区画内斜行格子目文
24	22	229		12W11	Ⅲ下	ⅢA1a	体	Ⅱa	英 ■ 角△ 雲△			方□	赤△ 針△	外：にぶい褐 (7.5YR6/3) 内：黒 (7.5YR2/1)		横位隆帯上連続爪形文・隆帯下連続山形文
24	22	230		12V15	Ⅲ下	ⅢA1a	体	1a	英 ■ 角△ 雲△				赤△	外：灰黄褐 (10YR4/2) 内：浅黄橙 (10YR8/3)		横位竹管沈線上連続山形文
24	22	231		12W16	I	ⅢA1a	体	1a2	英 □ 角△	岩A○□			針△	外：橙 (5YR6/6) 内：にぶい橙 (7.5YR7/4)		横位竹管沈線下Y字文
24	22	232		12V25	Ⅲ	ⅢA1a	体	1b2	英 ■	岩A○□		方□	赤△	外：灰黄褐 (10YR6/2) 内：浅黄橙 (10YR8/3)		Y字文・燃系R：タテ
24	22	233		12V18	Ⅱ	ⅢA1	体	Ⅱa	英 ■ 雲△	岩A □			針▲	外：褐灰 (7.5YR4/1) 内：灰黄褐 (10YR5/2)		横位竹管沈線下等間隔縦位竹管+U字文・縄文LR：タテ
24	22	234		12V25	Ⅲ	ⅢA1	体	1a2	英 □ 角△	岩A○□			針△	外：にぶい黄橙 (10YR8/2) 内：灰白 (10YR8/2)		横位竹管沈線下等間隔縦位竹管+U字文
24	22	235		12V20	Ⅲ下	ⅢA1	体	Ⅱa	英 ■ 雲△	岩A □			赤△	外：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内：浅黄橙 (10YR8/3)		横位竹管沈線上等間隔縦位竹管・燃系R：タテ
24	22	236		2T	Ⅱ・Ⅲ	ⅢA2a	口～体	Ⅱa	英 ■ 角△ 雲△					外：灰黄褐 (10YR6/2) 内：にぶい黄橙 (10YR7/3)	炭化物	口縁部区画内正位彫刻連華文・横位竹管沈線上連続爪形鈍角施文
24	22	237		12V20	Ⅱ	ⅢA2a	口	1a1	英○ 角△	岩A○□		方○□		外：にぶい黄橙 (10YR7/4) 内：にぶい赤褐 (5YR5/4)		口縁部区画内正位彫刻連華文
24	22	238		12V24	Ⅲ	ⅢA2a	口	Ⅱa	英 ■ 雲△		岩B □			外：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内：灰白 (10YR8/2)		口縁部区画内正位彫刻連華文・横位竹管沈線上連続爪形鈍角施文
24	22	239		12V19	Ⅱ	ⅢA2a	体	Ⅱa	英 ■ 角△ 雲△					外：黒 (10YR2/1) 内：にぶい黄橙 (10YR7/2)	炭化物	横位区画内正位彫刻連華文
24	22	240		12V12	Ⅱ	ⅢA2a	口	1b2	英 ■ 雲△	岩A○□				外：橙 (7.5YR7/6) 内：浅黄橙 (10YR8/3)		口縁部区画内逆位彫刻連華文
24	22	241		12V13	Ⅱ	ⅢA2a	体	1c2		岩A○	岩B ■			外：褐灰 (10YR4/1) 内：浅黄橙 (7.5YR8/4)		横位区画内正位彫刻連華文
24	22	242		12V19	Ⅲ	ⅢA2a	口	1b2	英 ■	岩A○□				外：浅黄橙 (10YR8/3) 内：灰黄褐 (10YR5/2)	炭化物	口縁部区画内正位彫刻連華文
24	22	243		12V20	Ⅱ	ⅢA2a	口	1a2	英 □	岩A○			赤△	外：にぶい黄橙 (10YR7/4) 内：浅黄橙 (7.5YR8/6)		口縁部区画内正位彫刻連華文
24	22	244		12V2	Ⅱ	ⅢA2a	口	1c2	英 □	岩A○	岩B ■		赤△	にぶい橙 (7.5YR6/4)		口縁部区画内軌軸文
24	22	245		12V24	Ⅲ	ⅢA2a	口	1b1	英●□	岩A●				灰白 (2.5Y8/2)		口縁部区画内軌軸文
24	22	246		12V2	Ⅱ	ⅢA2a	体	Ⅱe	英 □ 角△		岩B □		赤▲ 針△	外：橙 (7.5YR6/6) 内：にぶい橙 (7.5YR7/4)		区画内六角形鋸歯文・逆位三角形去文
24	22	247		12V18	Ⅲ	ⅢA2a	体	Ⅱa	英 ■ 角△	岩A □		方□		外：灰白 (2.5Y8/2) 内：灰黄褐 (10YR5/2)		区画内軌軸文
24	22	248		12V20	Ⅲ上	ⅢA2a	口	Ⅱd		岩A □			赤▲	橙 (7.5YR7/6)		口縁部区画内斜位細線
24	22	249		11V22・23	Ⅱ	ⅢA2a	口	1a1	英○□	岩A●□		方□	赤▲	外：橙 (7.5YR7/6) 内：浅黄橙 (10YR8/3)		口縁部区画内斜位細線
24	22	250		11V19	Ⅱ	ⅢA2b	口～体	Ⅱa	英 ■ 雲△	岩A □				外：にぶい黄橙 (10YR6/3) 内：灰黄褐 (10YR4/2)		口縁部区画内縦位竹管等間隔施文・口縁下区画内集合施文・体部燃系R：タテ

別 表

図版No.	写真図版No.	報告No.	出土位置			分類	遺存部位	含有物				色調		付着物		文様
			遺構	グリッド	層位			区分	鉱物	岩石	ガラス	土器	その他	外面	内面	
24	22	251		12W16	III	III A2b	□	I be1	英○■ 角△	岩A●□		ガ●■	針△	外：にぶい黄褐 (10YR5/4) 内：浅黄橙 (10YR8/4)		口縁部区画内縦位竹管等間隔施文
24	22	252		12W2	III	III A2b	□	I b2	英 ■ 角△ 雲△	岩A●		ガ○	赤△	浅黄橙 (10YR8/3)		口縁部・口縁下区画内縦位竹管等間隔施文
24	22	253		12W11	III	III A2b	□	I a2	英 □ 角▲ 雲△	岩A○□		ガ □	針△	外：赤褐 (5YR5/4) 内：橙 (5YR6/6)		口縁部区画内縦位竹管等間隔施文
24	22	254		12W8	II	III A2b	□	II b	英○□		岩B ■	ガ □	赤△	外：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内：浅黄橙 (7.5YR8/4)		口縁部区画内縦位沈線等間隔施文
24	22	255		12V7	II	III A2b	□	I a1	英○□ 角▲	岩A●		軽△ ガ○	赤▲ 針△	浅黄橙 (10YR8/3)		口縁部区画内縦位竹管等間隔施文
24	22	256		12V15	II	III A2b	□	I b2	英 ■ 角△ 雲△	岩A○				外：にぶい黄橙 (10YR6/4) 内：橙 (7.5YR6/6)		口縁部区画内縦位竹管等間隔施文
24	22	257		11V22・23	II	III A2b	□	II e	英 □ 雲△				赤△	外：黒 (7.5YR2/1) 内：にぶい黄橙 (10YR7/2)		口縁部区画内縦位竹管等間隔施文
24	22	258		12V20	II	III A2b	□	II e	英 □	岩A □	岩B □			外：浅黄橙 (7.5YR8/4) 黒 (7.5YR1.7/1) 内：灰白 (10YR8/1)		口縁部区画内縦位沈線等間隔施文・縄文L：ヨコ+横位区画沈線上連続爪形文鈍角施文
24	22	259		12V13	III	III A2b	□	II b	英 □ 角▲ 雲△	岩A○	岩B ■	ガ □	赤△ 針△	外：浅黄橙 (7.5YR8/4) 内：灰白 (10YR8/2) 褐灰 (10YR6/1)		口縁部区画内縦位竹管等間隔施文・口縁下区画内三角形形去文+縄文LR：ヨコ+斜位刺突
24	22	260		12V19	III	III A2a	体	I c2	英 ■	岩A○	岩B ■	ガ○	赤△	外：橙 (7.5YR6/6) 内：浅黄橙 (10YR8/3)		縦位竹管集合施文
24	22	261		12V8	II	III A2a	体	I b1	英○■	岩A●				外：にぶい黄褐 (10YR7/2) 内：灰白 (10YR8/2)		縦位竹管等間隔施文
24	22	262		12V22	II	III A2a	体	I b1	英○■ 角▲	岩A●				灰白 (10YR8/2)		竹管集合施文
24	22	263		12V17	III	III A2a	体	II a	英 ■ 雲△				赤△	外：にぶい黄橙 (10YR6/4) 褐灰 (10YR5/1) 内：浅黄橙 (7.5YR8/4)		縦位竹管等間隔施文
24	22	264		12V15	I・II	III A2a	体	I b1	英○■ 角△ 雲△	岩A○□	岩B ■			外：灰白 (10YR8/2) 内：にぶい黄橙 (10YR7/2)		
24	22	265		12V18	III	III A2a	体	II b	英 □				赤△ 針△	外：にぶい橙 (7.5YR7/3) 黄灰 (2.5Y4/1) 内：灰黄褐 (10YR5/2)		縦位竹管等間隔施文・体部縄文LR：タテ
24	22	266		12V19	III	III A2c	□	I a2	英 □	岩A●□		軽△ ガ □	赤△ 針△	外：にぶい黄橙 (10YR6/3) 内：灰白 (10YR8/2)		口縁部区画内縄文L：タテ
24	22	267		12V14	II	III A2c	□	I b2	英 ■ 角▲	岩A○□		ガ○□	赤△ 針△	外：橙 (7.5YR6/6) 内：浅黄橙 (10YR8/4)		口縁部区画内縄文LR：ヨコ
24	22	268		12V20	III上	III A2c	□	I be1	英○■ 角△ 雲△	岩A○□		ガ○■	赤△	外：浅黄橙 (10YR8/4) 内：浅黄橙 (7.5YR8/6)		口縁部区画内縄文LR：ヨコ
24	22	269		12V18	II	III A2c	□	I b2	英 ■ 雲△	岩A○□				外：褐灰 (7.5YR4/1) 内：灰白 (10YR7/1)		口縁部区画内縄文
24	22	270		12V18	II	III C2・3d	□	I b2	英 ■	岩A○		ガ○□	赤△	外：灰黄橙 (10YR4/2) 内：にぶい橙 (7.5YR7/4)		縄RL横位押圧・口端刻目
24	22	271		12V11	II	III C2・3d	□	I b2	英 ■ 角▲	岩A○		ガ○□	赤△ 針△	外：灰褐 (7.5YR5/2) 内：橙 (5YR6/6)		縄RL横位押圧
24	22	272		12V18	III	III C1・2b	□	I a2	英 □ 角▲	岩A●		軽△ ガ○	赤△ 針△	外：橙 (5YR6/6) 内：浅黄橙 (7.5YR8/4)		縄RL横位・斜位押圧
24	22	273		12V23	II	III BC2b	□	I b2	英 ■	岩A○			針△	外：褐灰 (7.5YR4/1) 内：にぶい黄橙 (10YR7/2)		口縁部交互刺突文・口端燃系文LR：タテ
24	22	274		12V23	I	III BC2b	□	I b1	英○■ 角△	岩A●□				外：灰白 (10YR8/2) 内：浅黄橙 (10YR8/3)		口縁部交互刺突文・口端燃系文LR：タテ
24	22	275		13V3	III	III BC2	□	I b1	英○□ 角▲ 雲△	岩A○		軽△ ガ □	赤△ 針△	にぶい黄橙 (10YR7/3)		口端燃系文LR：タテ
24	22	276		12V13	II	III BC2	□	I a2	英 □ 角△ 雲△	岩A○		軽△ ガ □	赤△ 針△	外：にぶい黄橙 (10YR7/3) 内：橙 (7.5YR7/6)		口端燃系文LR：タテ
24	22	277		12W16	II	III BC2	□	I a2	英 □ 角△	岩A○		ガ □		外：にぶい黄橙 (10YR6/3) 内：橙 (5YR6/6)		口端燃系文LR：タテ
24	22	278		12V15	I	III BC2c	□～体	I a2	英 □ 角▲ 雲△	岩A○□		ガ □	赤△ 針△	外：にぶい黄橙 (10YR6/3) 内：橙 (5YR7/6)		口端燃系文LR：タテ・体部縄文
24	22	279		12W11	II	III BC2d	□～体	I b2	英 角▲ 雲△	岩A○□			針△	外：にぶい黄橙 (10YR6/4) 内：灰黄褐 (10YR6/2)		口端肥厚帯燃系文LR：タテ・体部縄文LR：ヨコ
24	22	280		12V15	II	III BC2d	□～体	I a2	英 □ 角▲ 雲△	岩A○□		ガ □		外：橙 (7.5YR7/6) 内：浅黄橙 (7.5YR8/6)		口端肥厚帯燃系文LR：タテ・体部縄文
25	23	281		12V18	III	III A3a	□	I a2	英 □ 角△	岩A●□			赤△	外：にぶい黄橙 (10YR7/2) 内：灰白 (10YR8/2)		口縁部突起下区画内格子目沈線
25	23	282		12V15	II	III A3a	□	I a2	英 □ 角▲	岩A○		ガ □		橙 (5YR7/6)		口縁部突起下区画内格子目沈線
25	23	283		12W11	II	III A3ab	□	I a1	英○□ 角△ 雲△	岩A○			針△	外：にぶい赤橙 (5YR5/3) 内：にぶい黄橙 (10YR7/4) 橙 (2.5YR7/6)		口端内面竹管沈線
25	23	284		1T	I～III	III A3ab	□	I a1	英○□ 角△	岩A●□			赤△ 針△	外：灰白 (10YR8/2) 内：にぶい黄橙 (10YR7/4)		口端内面竹管沈線
25	23	285		12W16	II	III A3ab	□	I a2	英 □ 雲△	岩A○□	岩B □			外：黄灰 (2.5YR4/1) 内：浅黄橙 (10YR8/3)		口縁部下区画内無文帯
25	23	286		13V23	III	III A3ab	□	II b	英 □ 角△		岩B ■			橙 (5YR7/6)		口縁部下区画内無文帯
25	23	287		12V12	III	III A3ab	□	I a2	英 □ 角△	岩A○□	岩B □		赤△	外：橙 (5YR6/8) 内：にぶい黄橙 (10YR6/4)		口端刻目
25	23	288		12V8	III	III A3ab	□	I a1	英○□ 角△	岩A○□		軽△		外：にぶい橙 (7.5YR6/4) 内：浅黄橙 (10YR8/4)		口縁部区画内蓮華文
25	23	289		12W11	II	III A3b	体	I b2	英 ■ 角△	岩A○		ガ □	赤▲ 針△	外：浅黄橙 (10YR8/3) 橙 (5YR7/6) 内：橙 (5YR7/8)		口縁部下区画内無文帯・体部縄文
25	23	290		12V18	III	III A3b	体	I a2	英 □ 角△	岩A●			針△	浅黄橙 (10YR8/4)		口縁部下区画内LR：ヨコ縄文
25	23	291		12V24	III	III A3ab	体	I b2	英 ■ 角△ 雲△	岩A●□			赤△	外：浅黄橙 (7.5YR8/6) 内：浅黄橙 (10YR8/4)		区画下溝状隆帯
25	23	292		12V18	III	III A3ab	体	I a1	英○□	岩A○□	岩B □	ガ □	赤△	外：にぶい黄橙 (10YR7/2) 内：灰白 (10YR8/2)		横位区画内弧状隆帯・竹管沈線上連続爪形文鈍角施文
25	23	293		2T	II・III	III A3d	□	I d2	英 □ 角▲	岩A○		ガ ■		浅黄橙 (10YR8/3)		口縁部突起上縄文LR：ヨコ・突起下垂下隆帯

図版No.	写真図版No.	報告No.	出土位置			分類	遺存部位	含有物				色調	付着物		文様	
			遺構	グリッド	層位			区分	鉱物	岩石	ガラス		土器	その他		外面
25	23	294		12V14	II	ⅢA3c	口	IIb	英 □	岩A □ 岩B ■		赤▲			口縁部区画内粗大彫刻連華文・口縁下部区画内無文帯	
25	23	295		12V18	III	ⅢA3c	口	I b2	英 ■ 角△	岩A○□	ガ □	赤△ 針△	外: 褐灰 (10YR4/1) 内: 浅黄橙 (10YR8/3) 灰白 (2.5Y7/1)		口縁部・口縁下部区画内粗大彫刻連華文+無文帯・体部縄文RL: ヨコ	
25	23	296		12V18	III	ⅢA3d	口~体	I b2	英 ■ 角△	岩A○□	ガ○□	赤▲ 針△	外: 浅黄橙 (10YR8/3)		口縁部区画内縦位竹管・突起下垂下隆帯・体部縄文RL: ヨコ	
25	23	297		13V4	III	ⅢA3d	体	I a1	英○□	岩A○	ガ □	赤▲	外: 黄褐 (10YR6/2) 黒褐 (2.5Y3/1) 内: 浅黄橙 (10YR8/3)		隆帯上刻目・体部縄文LR: ヨコ	
25	23	298		12W16	II	ⅢA3d	口	I a2	角▲	岩A○□	ガ □	針△	内: 浅黄橙 (10YR8/3)		突起下部区画内縄文LR: タテ	
25	23	299		12V2	I	ⅢA3d	体	II a	英 ■ 雲△	岩A □	ガ □		外: にぶい赤褐 (5YR5/4)		体部縄文LR: ヨコ	
25	23	300		12W11	I・II	ⅢA3e	口	II b	英 □	岩B ■	ガ □	針△	外: にぶい黄褐 (10YR5/3) 黒 (10YR2/1) 内: にぶい黄橙 (10YR7/4)		口端横位竹管下竹管先端刺突列	
25	23	301		12V5	II	ⅢA3e	口~体	I a2	英 □ 角△	岩A●	ガ □		外: 浅黄橙 (7.5YR8/6) 内: 橙 (5YR6/6)		口端横位竹管・体部縄文LR: ヨコ	
25	23	302		12V5	I・II	ⅢB3	口~体	I a2	英 □	岩A●□		赤△	外: 浅黄橙 (10YR8/3) 褐灰 (10YR5/1) 内: 浅黄橙 (7.5YR8/6)		口端横位竹管・口端内面角押文・体部縄文LR: ヨコ	
25	23	303		12W11	III	ⅢA3ab	体	II a	英 雲▲			赤△	外: 灰白 (10YR8/2) 褐灰 (10YR5/1) 内: にぶい橙 (7.5YR7/4)		渦状隆帯	
25	23	304		12V20	II	ⅢA3a	口	I e2	英 □ 角△ 雲△	岩A○	ガ ■	赤▲ 針▲	橙 (7.5YR7/6)		口縁部区画内格子目沈線+刺突文	
25	23	305		12W11	I・II	ⅢA3a	口	I a2	英 □ 角▲	岩A○	ガ○□	赤△ 針△	橙 (5YR7/6)		口縁部区画内格子目沈線・内面玉抱三文	
25	23	306		12V2	II	ⅢA3a	体	I b2	英 ■ 角△	岩A○■		針△	外: 橙 (5YR7/8) 内: 橙 (7.5YR7/6)		区画内格子目沈線	
25	23	307		12W16	III	ⅢA3a	体	II a	英 ■ 角△ 雲▲			赤△	外: 灰白 (10YR8/2) 内: 灰黄褐 (10YR5/2)		区画内格子目沈線	
25	23	308		12V19	III	ⅢA3a	体~底	I a1	英○ 角▲ 雲△	岩A●	ガ □	赤△ 針△	外: 褐灰 (10YR5/1) にぶい黄橙 (10YR7/2) 内: 灰白 (10YR8/1)		体部横位+縦位竹管・底面スタレ状圧痕	
25	23	309		12V15	II	ⅢA3a	体~底	I a2	英 □ 角▲ 雲△	岩A○	軽△	針△	外: 浅黄褐 (10YR8/3) 内: 灰黄褐 (10YR6/2)		縦位竹管等間隔施文	
25	23	310		12V15	I	ⅢA3a	体~底	I b1	英○■	岩A○		赤△	外: 灰白 (10YR8/1) 褐灰 (10YR5/1) 内: にぶい黄 (2.5Y6/3)		区画内格子目沈線	
25	23	311a		12V15	III上	ⅢA3f	口	II c	英 □ 角△ 雲△	岩A □	軽▲	赤△ 針△	外: にぶい橙 (7.5YR7/3) 内: 白灰 (10YR7/1)		突起下隆帯上竹管先端刺突	
25	23	311b		12V14	II	ⅢA3f	体									横位・縦位隆帯上竹管先端刺突
25	23	312		12V13	II	ⅢA3f	口	II b	英 □	岩B ■	ガ □	赤△ 針△	外: にぶい橙 (5YR6/4) 褐灰 (5YR4/1) 内: 橙 (7.5YR7/6)		口端+縦位隆帯上竹管先端刺突・横位竹管上連続爪形文鈍角施文	
25	23	313a		12V8	II	ⅢA3f	口~体	I a1	英○	岩A●□	ガ □		外: にぶい黄橙 (10YR7/3) 内: 灰白 (10YR8/2)		縦位隆帯上竹管先端刺突+縄文LR: タテ・口縁部~体部縄文LR: ヨコ	
25	23	313b		12V20	III上	ⅢA3f	体									横位隆帯上竹管先端刺突・縦位隆帯上縄文LR: タテ
25	23	313c		12W16	II	ⅢA3f	体									縦位隆帯上竹管先端刺突+縄文LR: タテ
25	23	314		12W11	II	ⅢA3f	体	I e2	英 □ 角▲ 雲△	岩A○	軽△ ガ ■	赤△ 針△	外: 橙 (7.5YR6/6) 内: 橙 (7.5YR7/6)		縦位隆帯上竹管先端刺突・体部縄文LR: ヨコ	
25	23	315		12V19	III	ⅢC3b	口~体	I b2	英 ■ 角▲ 雲△	岩A○□	軽△ ガ □	針△	外: 黒褐 (10YR3/1) 内: にぶい橙 (7.5YR7/4)		口端肥厚帯上縄LR側面押文	
25	23	316		12V18	III	ⅢC3c	口~体	I a1	英○□ 角△	岩A○	ガ □	赤△ 針△	橙 (7.5YR7/6)		口端肥厚帯~体部無文	
25	23	317		12W11	II	ⅢC3c	口~体	I b2	英 ■ 角△	岩A○□	ガ □	針△	外: 橙 (7.5YR6/6) 褐灰 (7.5YR6/1) 内: 黄橙 (7.5YR7/8)		口端肥厚帯下凹形突起+刺突・体部縄文RL: ヨコ	
25	23	318		12V8	II	ⅢC3b	口~体	I a2	英 □ 角△	岩A○□	ガ □	赤△ 針△	浅黄橙 (7.5YR8/4)		口端肥厚帯上縄LR側面押文・体部縄文LR: タテ	
25	23	319		12W16	II	ⅢC3a	口~体	I b2	英 ■ 角▲	岩A●	ガ □	針△	外: 橙 (5YR6/6) 内: 橙 (7.5YR7/6)		口端肥厚帯~体部縄文LR: ヨコ	
25	23	320		12V18	II	ⅢC3a	口~体	I a2	英 □ 角△ 雲△	岩A○	軽△ ガ □	赤△ 針△	浅黄橙 (10YR8/3)		口端肥厚帯上縄文LR: ヨコ・体部縄文LR: タテ	
25	23	321		12V25	II	ⅢC3a	口~体	II d	英 □ 角△ 雲△	岩A □		赤▲ 針△	外: 灰黄褐 (10YR5/2) 内: 浅黄橙 (10YR8/4)		口端肥厚帯上縄文LR: ヨコ・体部縄文LR: タテ	
25	23	322		12V19	III	ⅢC3a	口~体	I a2	英 □ 角△ 雲△	岩A○□	ガ □	赤△ 針△	外: 灰黄褐 (10YR4/2) 内: 浅黄橙 (10YR8/3)		口端肥厚帯上~体部縄文RL: タテ・体部縄文LR: タテ	
26	24	323		12V15	II	IVA	口~体	I a2	英 □ 角△ 雲△	岩A○□	ガ □	赤△ 針△	灰黄褐 (10YR6/2)		口縁部無文帯下隆帯~体部縄文LR: ヨコ	
26	24	324		12V16	I	IVA	体	I a2	英 □ 角△	岩A○	ガ □	赤△	橙 (7.5YR7/6)		S字沈線・縄文LR: ヨコ	
26	24	325		12V15	I・II	IVA1	口~体	I b2	英 ■ 雲△	岩A●□		赤△ 針△	外: 橙 (7.5YR7/6) 内: 浅黄橙 (7.5YR8/6)		縄LR: ヨコ	
26	24	326		12V16	I	IVA2	口	II b	英 □	岩A ■	軽△ ガ □	赤△ 針△	浅黄 (2.5Y7/4)			
26	24	327		12V14	II	IVA2d	口~体	I e1	英○□	岩A○□	ガ ■	針△	にぶい黄橙 (10YR7/4)			
26	24	328		12V20	II	IVA2c	口~体	I c2	英 □ 角▲ 雲△	岩A○	岩B ■	ガ □	赤▲ 針△	外: にぶい黄橙 (10YR7/2) 内: 灰白 (10YR8/2)		
26	24	329		12V16	I	IVA2d	口~体	I b2	英 ■ 角▲	岩A○	ガ○□		外: にぶい褐 (7.5YR6/3) 赤褐 (10R5/4) 内: 灰黄褐 (10YR5/2)			

別 表

図版No.	写真図版No.	報告No.	出土位置			分類	遺存部位	含有物					色調	付着物		文様	
			遺構	グリッド	層位			区分	鉱物	岩石	ガラス	土器		その他	外面		内面
26	24	330		13V18	II	IVA2d	口~体	I e2	英 □	岩A○		方●□		灰白 (10YR8/2)			
26	24	331		12V14	II	IVA2b	口~体	I b2	英 ■ 角△	岩A○□		方 □	針▲	外: にぶい橙 (7.5YR7/4)			
26	24	332		12W11	II	IVA2b	口~体	I a2	英 □ 角△	岩A○□		方 □	赤△ 針▲	灰白 (10YR8/2)			
26	24	333		12V19	III	IVA2b	体	I a1	英○□ 角△ 雲△	岩A○		方 □	赤△	灰白 (10YR8/2)			
26	24	334		12V9	II	V	口	I a2	英 □ 角△	岩A○ 岩B □		方 □	赤△	外: にぶい黄橙 (10YR7/2) 内: 灰黄褐 (10YR6/2)			
26	24	335		12V8	II	V	口~体	I a2	英 □ 角▲ 雲△	岩A○		方○	針▲	外: にぶい赤褐 (5YR5/4) 内: 橙 (7.5YR7/6)			
26	24	336		12V16	II	V	体	I a1	英○□ 角△	岩A○		方 □	赤△ 針▲	外: 浅黄 (2.5Y7/3) 内: にぶい黄橙 (10YR7/4)			
26	24	337		12V16	I	V	体	II c	英 □ 角△			軽▲		にぶい黄橙 (10YR7/3)			
26	24	338		12V23	II	VI	口	I a2	英 □ 角△	岩A○ 岩B □		方 □		にぶい橙 (7.5YR6/4)			
26	24	340		12W16	II	III~IV	口~体	I b2	英 ■ 角▲ 雲△	岩A○		軽△ 方 □	赤△ 針▲	橙 (7.5YR7/6)			口縁部縄文LR: ヨコ・体部縄文LR: タテ
26	24	341		12W11	I・II	III~IV	口~体	II b	英 □			岩B ■	針▲	外: 橙 (7.5YR7/6) 内: 黒褐 (7.5YR3/1)			縄文LR: ヨコ・タテ
26	24	342		12V2	II	III~IV	口~体	I b2	英 □ 角▲ 雲△	岩A○□			赤△ 針▲	浅黄橙 (10YR8/3)			縄文LR: ヨコ・タテ
26	24	343		12W11	III	III~IV	口~体	I b2	英 ■ 角▲ 雲△	岩A○□		方 □	赤△	外: にぶい黄橙 (10YR7/3) 内: 灰白 (10YR8/2)			縄文LR: ヨコ
26	24	344		12V8	II	III~IV	口~体	I b2	英 ■ 角▲	岩A○		軽▲	針▲	外: 灰褐 (7.5YR4/2) 内: にぶい橙 (7.5YR7/4)			縄文LR+結節: ヨコ
26	24	345		13V6	III	III~IV	口~体	I a2	英 □ 角△	岩A○		軽△ 方 □	赤▲ 針▲	橙 (7.5YR7/6)			縄文LR: ヨコ
26	24	346		12V13	II	III A・2	体	I b2	英 ■ 角▲	岩A●□		方 □	赤△ 針▲	にぶい橙 (7.5YR6/4)			木目状燃系文B1種 RL・RL: タテ
26	24	347		12V2	III	III A・2	体	I b2	英 ■ 雲△	岩A○■			赤△ 針▲	外: 浅黄橙 (10YR8/3) 内: にぶい黄橙 (10YR7/2)			木目状燃系文B1種 L・L: タテ
26	24	348		12V19	II	III A・2	体	II b	英 □			岩B ■	赤△ 針▲	外: 灰黄褐 (10YR4/2) 内: 橙 (7.5YR6/6)			木目状燃系文B1種 L・L: タテ
26	24	349		12V2	III	III A・2	体	I a1	英 □ 雲△	岩A●□				外: にぶい褐 (7.5YR6/3) 内: 灰白 (10YR8/2)			木目状燃系文B1種 R・R: タテ
26	24	350		12V2	II	III A・2	体	I b2	英 ■ 角△ 雲△	岩A○			赤△	外: にぶい黄橙 (10YR7/4) 内: 灰黄褐 (10YR6/2)			木目状燃系文B1種 L・L: タテ
26	24	351		12V19	II	III A・2	体	I a2	英 □ 角△ 雲△	岩A○		方○□		外: にぶい橙 (7.5YR7/4) 内: 灰白 (10YR8/2)			木目状燃系文B1種 R・R: タテ
26	24	352		12V15	I・II	III A・2	体	I b2	英 ■ 雲△	岩A○				外: にぶい黄橙 (10YR6/3) 内: 浅黄橙 (10YR8/3)			木目状燃系文B1種 R・R: タテ
26	24	353		12V13	III	III A・2	体	I b1	英○■ 角△ 雲△	岩A○□		方○□	赤△	外: にぶい黄橙 (10YR7/2) 褐灰 (10YR5/1) 内: 褐灰 (10YR6/1)			木目状燃系文B1種 R・R: タテ
26	24	354		1T	I	III A・2	体~底	I b1	英○■ 雲△	岩A○□		方○	赤△	にぶい黄橙 (10YR7/3)			木目状燃系文B2種 R・R: タテ
26	24	355		12V14	II	III A・2・3	体	II a	英 ■ 雲△			岩B □		外: にぶい橙 (7.5YR6/4) 内: 浅黄橙 (10YR8/4)			木目状燃系文C1種 R: タテ
26	24	356		12V20	II	III~IV	体	I b2	英 ■ 雲△	岩A○□			赤△	外: 浅黄橙 (7.5YR8/6) 内: にぶい黄 (2.5Y6/3)			網目状燃系文R・R: タテ
26	24	357		2T	II・III	III A・3	体	II e	英 □ 角▲ 雲△			軽△ 方 □	赤△ 針▲	外: 橙 (7.5YR7/6) 内: にぶい橙 (7.5YR7/3)			縄文LR+RL: タテ
26	24	358		12V24	III	III~IV	口~体	I a2	英 □	岩A○□		方○□	赤△ 針▲	外: にぶい橙 (7.5YR7/4) 内: 灰白 (10YR8/2)			無文
26	24	359		12V15	I	III~IV	体~底	II a	英 ■ 雲△			方○□		外: 灰黄褐 (10YR6/2) 内: にぶい黄橙 (10YR7/2)			無文
26	24	360		12V15	II	III A・3	体~底	I b2	英 ■ 角▲ 雲△	岩A○		軽△ 方 □	針▲	外: 橙 (5YR7/6) 内: 浅黄橙 (7.5YR8/4)			底面スタレ状圧痕 (タテ糸1.2~1.4cm・ヨコ糸3mm間隔)
26	24	361		12V12	I	III A・3	体~底	I a1	英○□ 角▲ 雲△	岩A○		方 □	赤△ 針▲	外: 浅黄橙 (7.5YR8/4) 内: 浅黄橙 (10YR8/3)			体部縄文RL: タテ・底面スタレ状圧痕 (タテ糸1.2~1.4cm・ヨコ糸4mm間隔)
26	24	362		13V19	II	III A・3	体~底	I a2	英 □ 角△	岩A●□		方 □	赤△ 針▲	灰白 (2.5Y8/2)			体部斜位凹線・底面スタレ状圧痕 (タテ糸1.0cm・ヨコ糸3mm間隔)
26	24	363		1T	I~III	III A・3	底	I e2	英 ■	岩A○□		方 ■	針▲	外: 黄橙 (10YR8/6) 内: 橙 (2.5YR6/8)			底面スタレ状圧痕 (タテ糸1.1cm・ヨコ糸4mm間隔)
26	24	364		12W11	III	III A・3	体~底	I c2	英 □	岩A●□ 岩B ■				外: 橙 (5YR7/6) 内: にぶい黄橙 (10YR6/3)			底面スタレ状圧痕 (タテ糸1.1cm・ヨコ糸7mm間隔)
26	24	365		12V14	II	IV~V	体~底	I e1	英○□	岩A○		方●■	赤△ 針▲	明赤褐 (2.5YR5/6)			底面網代圧痕 (2本越・2本潜・1本送)
26	24	366		12V13	III	IV~V	体~底	I b2	英 ■ 角△	岩A○		方○□	針▲	橙 (2.5YR6/8)			底面網代圧痕 (2本越・2本潜・1本送)

別表 8 土製品観察表

図版No.	写真図版No.	報告No.	出土位置			種別	遺存部位	含有物					色調	法量			
			遺構	グリッド	層位			区分	鉱物	岩石	土器	その他		長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)
26	24	367		13V23	III	土偶	完形	I b2	英 ■ 角▲ 雲△	岩A●□		針▲	橙 (5YR6/3) 褐灰 (5YR6/3)	39	26	22	18.2+
26	24	368		12V24	III	土偶	脚	I b1	英○■ 角△	岩A●□		針▲	浅黄橙 (10YR8/4) 灰白 (2.5Y7/1)	45+	14+	13	9.2+
26	24	369		12V20	II	土偶	足	I a2	英 □ 雲△	岩A○□ 岩B□ 土△		赤△ 針▲	橙 (5YR6/6)	38+	35+	45	45.7+
26	24	370		12V14	II	焼成粘土塊A		I a1	英○	岩A○□			橙 (2.5YR6/8) 黄橙 (7.5YR7/8)	23	24	20	11.7
26	24	371	Pit 82		I	焼成粘土塊A		I a2	英 □ 角△	岩A○			淡黄 (2.5Y8/3)	34	21	21	11.9
26	24	372		12V7	III	焼成粘土塊A		III	英 □ 角△			赤△	灰白 (2.5Y8/2)	32	21	16	7.5
26	24	373	SK 50		I	焼成粘土塊A		III	英 □				浅黄橙 (10YR8/4)	28	20	18	7.6
26	24	374		12V20	II	焼成粘土塊B		I a2	英 □ 角△	岩A○□		赤△ 針▲	橙 (5YR6/6)	26	26	19	8.9
26	24	375	Pit 70		-	焼成粘土塊C		I a2	英 □	岩A○		針▲	黄灰 (2.5Y5/1)	27	20	16	5.7
26	24	376	Pit 70		3	焼成粘土塊C		III	英 □				にぶい赤褐 (5YR5/3)	24	21	13	5.4
26	24	377	Pit 72		-	焼成粘土塊C		III	英 □			赤△	灰白 (2.5Y8/2)	32	21	11	5.9
26	24	378		12V15	II	焼成粘土塊B		III	英 □			針▲	橙 (2.5YR6/8)	37	23	16	6.0

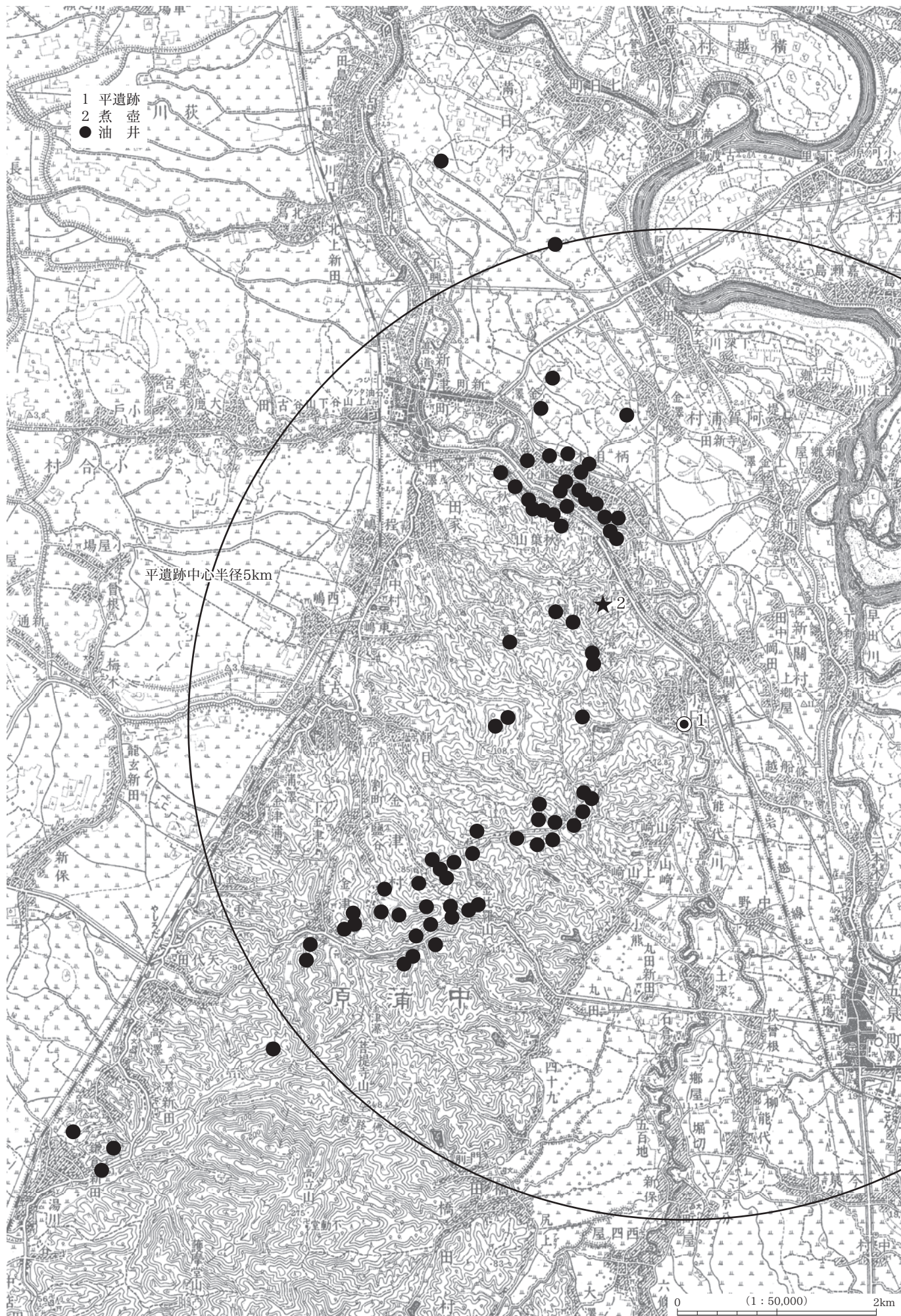
別表9 石器・搬入礫観察表

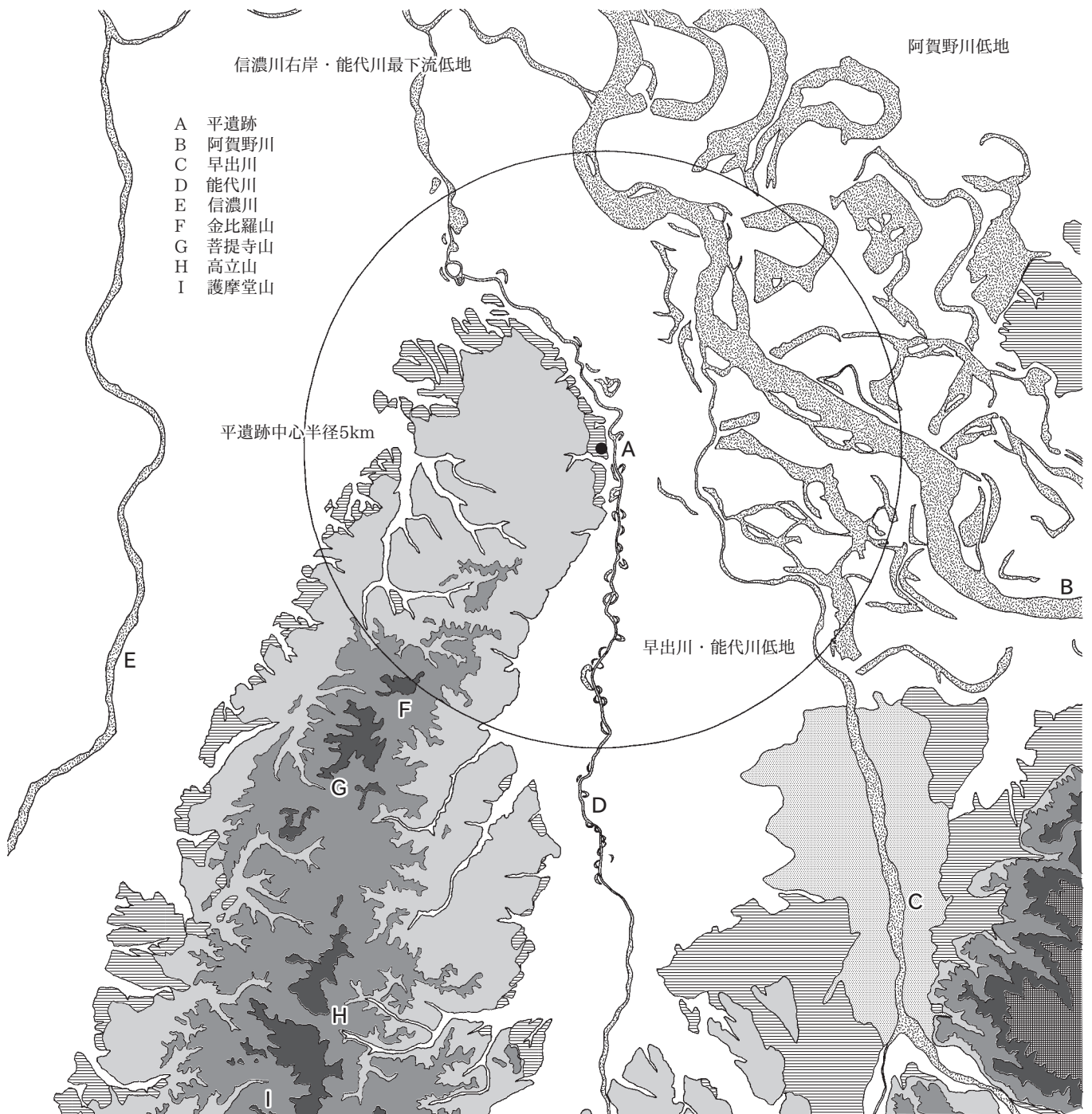
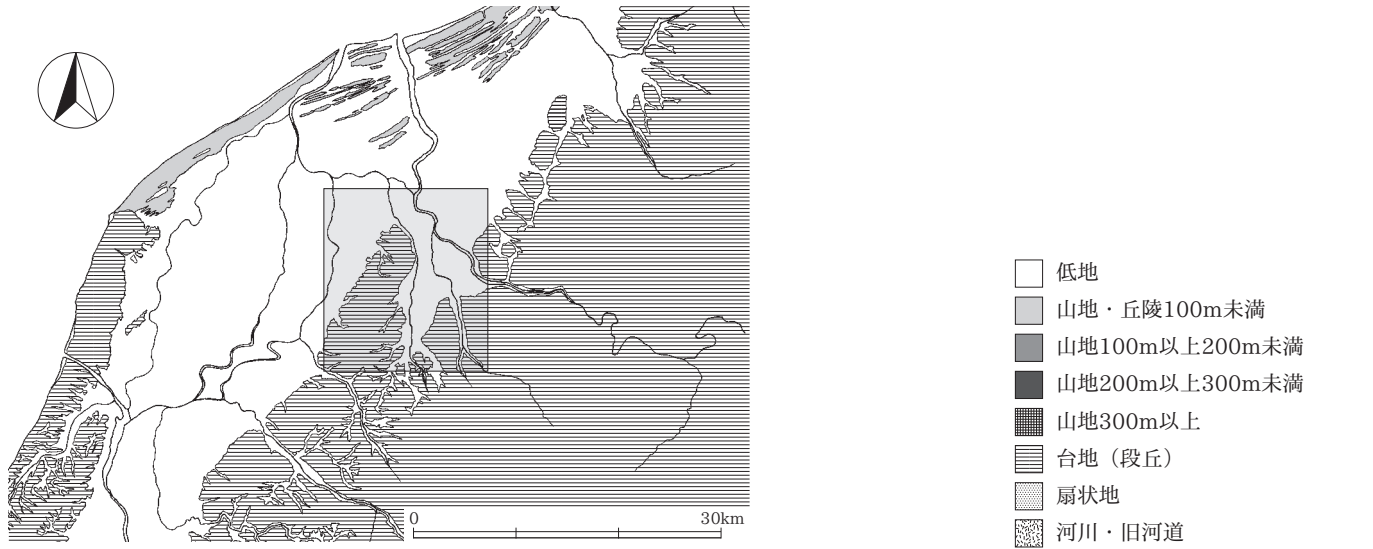
図版No.	写真図版No.	報告No.	出土位置			種別	遺存状態	石材	色調	法量				備考
			遺構	グリッド	層位					長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
27	26	1	Pit 263		I	石鏝	完形	黒曜石 I b	-	2.5	2.1	0.5	2.2	
27	26	2	Pit 56		I	石鏝	完形	鉄石英	赤 (7.5R4/6)	1.4	1.0	0.2	0.4	
27	26	3	Pit 65		I	石鏝未製品	先端欠損	流紋岩	灰白 (7.5YR1)	2.3+	2.3	1.0	3.6	
27	26	4		13V24	II	石鏝未製品	完形	流紋岩	灰赤 (2.5YR6/2)	3.1	1.8	0.6	3.2	
27	26	5	SK 109		-	石鏝未製品	完形	鉄石英	暗赤褐 (7.5R3/3)	2.0	1.4	0.2	0.9	
27	26	6	Pit 65		I	石鏝	完形	黒曜石 I b	-	2.8	1.0	0.5	1.4	
27	26	7		13V5	I	石鏝	完形	流紋岩	灰白 (7.5YR8/1)	4.0	3.6	1.1	13.6	
27	26	8		12V23	II	打製石斧	中間部破片	粘板岩	黒褐 (10YR3/1)	2.6+	4.0+	1.1	14.4	
27	26	9		12V13	III	搬入礫 (原石)	完形	黒曜石 II	黒 (10YR2/1)	2.9	2.1	1.1	8.7	
27	26	10	SK 109		2	搬入礫 (原石)	完形	黒曜石 II	黒 (10YR2/1)	1.7	1.4	0.7	2.6	
27	26	11		13V10	III	搬入礫 (原石)	完形	黒曜石 II	黒 (10YR2/1)	1.5	1.2	0.9	1.8	
27	26	12		13V9	III	石核	完形	黒曜石 II	黒 (10YR2/1)	2.4	1.7	1.1	4.5	
27	26	13		12W16	II	石核	完形	黒曜石 II	黒 (10YR2/1)	2.6	2.3	1.3	8.7	
27	26	14		12V18	II	石核	完形	黒曜石 I c	-	2.4	1.2	1.0	2.3	
27	26	15		12V7	III	剥片	完形	黒曜石 I c	-	1.3	1.9	1.0	4.3	
27	26	16		12V19	III	剥片	完形	黒曜石 II	黒 (10YR2/1)	2.2	1.6	0.9	1.6	
27	26	17		13V5	III	剥片	完形	黒曜石 I c	-	3.4	1.5	0.7	2.7	
27	26	18		12V14	II	使用剥片	完形	黒曜石 I c	-	2.3	2.4	0.9	3.9	版面側縁辺微細剥離擦痕・版面擦痕
27	26	19		12V17	III	剥片	完形	黒曜石 II	黒 (10YR2/1)	2.3	1.1	0.7	1.7	
27	26	20		12V20	II	剥片	完形	黒曜石 I c	-	1.5	2.5	0.5	1.2	
27	26	21		12V14	III	剥片	完形	黒曜石 I a	-	2.4	2.1	0.1	1.5	
27	26	22		12V15	III下	石核	完形	流紋岩	灰白 (10YR8/2)	4.3	3.4	2.3	27.0	
27	26	23	SK 77		I	石核+砥石	完形	流紋岩	灰白 (10YR8/1)	22.3	11.8	8.4	2562.0	平坦面スレ+線条痕・側面線条痕
27	26	24	Pit 290		-	剥片	完形	流紋岩	灰白 (5YR8/1)	1.9	1.7	0.5	1.5	両極打法
27	26	25		13V9	III	剥片	完形	流紋岩	灰白 (5YR8/1) 灰白 (5Y7/1)	3.0	3.5	0.8	6.1	両極打法
27	26	26		13V8	I	使用剥片	完形	流紋岩	明褐灰 (7.5YR7/1)	3.2	3.9	0.8	8.9	背面側縁辺微細剥離
27	26	27	Pit 56		I	加工剥片	完形	流紋岩	灰白 (10YR8/1)	8.5	3.1	0.8	16.5	上部版面剥離・下部背面剥離
28	27	28	Pit 62		-	磨石・砥石類B	完形	花崗岩	灰白 (7.5YR8/1)	8.3	6.2	3.9	227.6	先端・側面タタキ・被熱
28	27	29		12V14	II	磨石・砥石類B	完形	流紋岩	灰白 (10YR8/2) にふい橙 (5YR7/3)	7.7	6.5	2.7	129.7	平坦面スレ+タタキ
28	27	30	Pit 238		I	磨石・砥石類A	欠損	花崗岩	灰白 (7.5YR8/1) にふい赤褐 (2.5YR5/4)	5.9+	7.3	5.2	300.5	平坦面スレ+側面~先端タタキ・被熱
28	27	31	Pit 165		-	磨石・砥石類B	完形	花崗岩	灰白 (5Y8/1)	6.3	5.0	3.8	177.6	平坦面スレ
28	27	32		12V24	III	磨石・砥石類D	完形	流紋岩	灰白 (10YR8/2)	16.7	6.4	5.8	775.0	側面スレ+タタキ・先端タタキ
28	27	33	Pit 62		-	磨石・砥石類C	完形	流紋岩	灰白 (2.5Y8/1)	14.1	6.3	3.6	417.3	平坦面スレ+タタキ・側面タタキ
28	27	34		12V14	I	磨石・砥石類C	完形	砂岩	褐灰 (10YR6/1)	15.6	4.9	3.4	441.3	平坦面タタキ
28	27	35	SK 126		3	磨石・砥石類B+ 礫石鏝未製品	完形	花崗岩	灰白 (7.5YR8/1) 褐灰 (7.5YR5/1)	9.2	5.8	2.5	201.8	平坦面タタキ・被熱・黒色付着物
28	27	36	Pit 62		-	磨石・砥石類B	完形	砂岩	灰白 (7.5YR8/1) 灰 (N6/0)	10.9	6.8	2.9	268.2	平坦面タタキ・側面・先端タタキ
28	27	37	SK 77		I	台石	一部欠損	花崗岩	灰白 (7.5YR8/1)	18.2	12.1	6.7	1876.9	
28	27	38	Pit 164		I	台石	一部欠損	安山岩	灰白 (7.5YR8/1) にふい橙 (2.5YR6/3)	16.7	11.1	4.3	967.0	被熱
29	28	39		3区	III	礫石鏝	完形	花崗岩	灰白 (10YR8/2)	7.2	5.2	2.0	94.2	
29	28	40		12V25	III	礫石鏝	完形	チャート	灰白 (10YR8/1) 灰 (N7/0)	7.9	5.9	2.7	162.1	
29	28	41		12V20	III	礫石鏝未成品	完形	流紋岩	灰白 (10YR8/1)	5.5	4.7	2.0	53.3	暗赤褐色付着物
29	28	42		12W11	III	礫石鏝未成品	完形	片麻岩	灰 (10Y6/1)	9.3	6.5	2.9	238.7	
29	28	43		12W16	III	磨製石斧	基部(対部欠損)	蛇紋岩(透閃石)	灰白 (7.5YR7/2)	3.7+	3.3+	1.6	32.1	
29	28	44		12W2	II	磨製石斧	刃部破片	蛇紋岩(透閃石)	緑灰 (5G5/1)	3.1+	3.5+	1.6+	13.3	破損部部分研磨
29	28	45	Pit 62		-	磨製石斧	完形	流紋岩	灰白 (10YR8/1) にふい橙 (7.5YR7/3)	5.6	3.7	1.7	35.1	刃部微細欠損
29	28	46	Pit 252		I	磨製石斧	刃部欠損	砂岩	灰 (10Y6/1)	10.1+	5.5	3.0	249.9	
29	28	47	Pit 56		3	磨製石斧	中間部破片	蛇紋岩	明オリーブ灰(2.5GY7/1)	2.7+	2.5+	1.6+	11.7	擦切溝
29	28	48	Pit 51		-	磨製石斧製作工程資料	中間部破片	砂岩	灰白 (N7/1)	2.6+	2.0+	1.3+	3.4	擦切溝
29	28	49		12V24	III	砥石	中間部破片	砂岩	灰白 (10YR8/1)	8.3+	8.2+	4.3+	316.2	
29	28	50		12V11	II	砥石	先端破片	砂岩	灰褐 (7.5YR6/2)	3.3+	3.5+	1.8	18.1	
29	28	51		13V8	II	砥石	先端破片	砂岩	灰褐 (7.5YR6/2)	3.0+	3.1+	0.9	8.6	
29	28	52	Pit 55		3	石製円盤	1/2遺存	安山岩	灰 (N6/0)	3.3	2.3+	1.1	10.4	
29	28	53		12V14	II	磨耗礫	完形	流紋岩	灰白 (10YR8/2) 浅黄橙 (10YR8/4)	4.9	3.2	1.1	22.9	平坦面両面スレ
29	28	54		12V24	III	磨耗礫	完形	粘板岩	灰 (N4/0)	4.1	2.6	0.7	11.9	平坦面両面スレ
29	28	55		12V11	II	磨耗礫	一部欠損	泥岩	灰白 (10YR8/2)	6.8	5.2	1.5	58.6	平坦面両面スレ
29	28	56		13V3	III	磨耗礫	完形	流紋岩	褐灰 (10YR6/1)	5.7	2.0	1.9	24.7	全面スレ
29	28	57		12V24	II	磨耗礫	完形	軽石	灰白 (10YR8/1)	8.5	4.7	4.0	67.9	
29	28	58	Pit 124		I	アスファルト付着礫	完形	流紋岩	灰白 (2.5Y8/1)	6.1	4.8	3.1	112.5	
29	28	59	Pit 124		I	アスファルト付着礫	完形	流紋岩	灰白 (5YR8/1)	7.0	3.0	2.9	67.7	被熱
29	28	60	Pit 124		I	敲打・磨耗礫	完形	流紋岩	緑灰 (10G6/1)	27.5	12.8	10.2	5031.0	平坦面タタキ・側面スレ・粗粒砂付着

別表10 弥生土器観察表

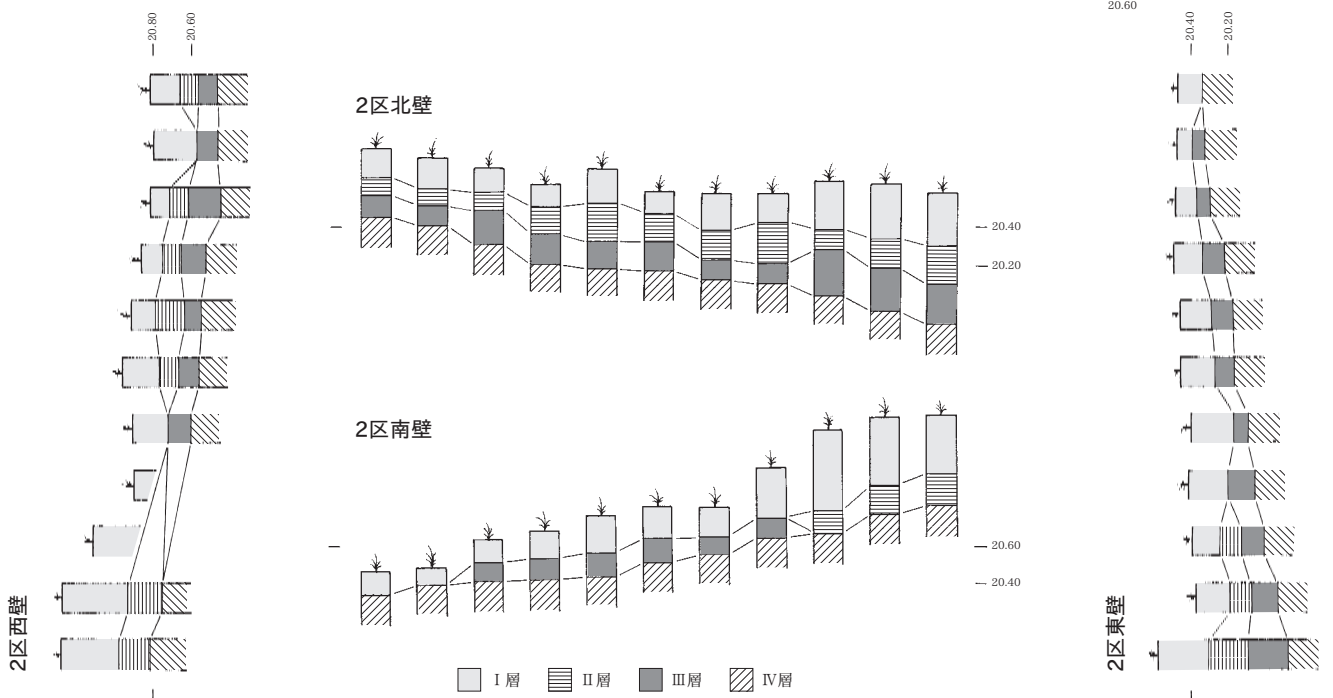
図版No.	写真図版No.	報告No.	出土位置			分類	遺存部位	含有物					色調	付着物		文様
			遺構	グリッド	層位			区分	鉱物	岩石	ガラス	土器		その他	外面	
26	24	339		12V9	I	口	I e2	英口	岩AO口	岩B口	ガ●■	針▲	外：にふい黄橙 (10YR6/4) 内：灰黄褐 (10YR5/2)			口縁部連弧文下交互刺突文・縄文LR：タテ

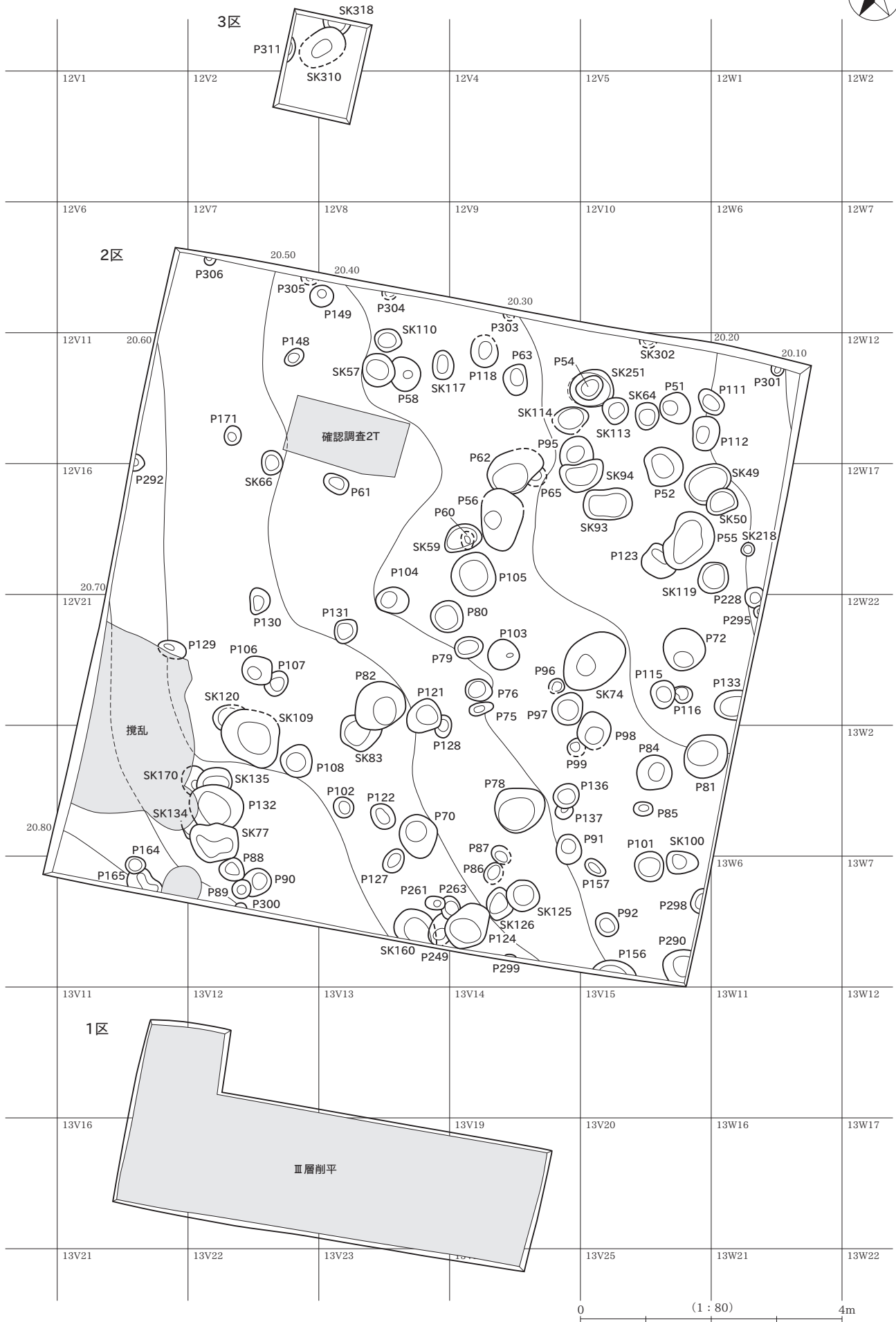
圖 版

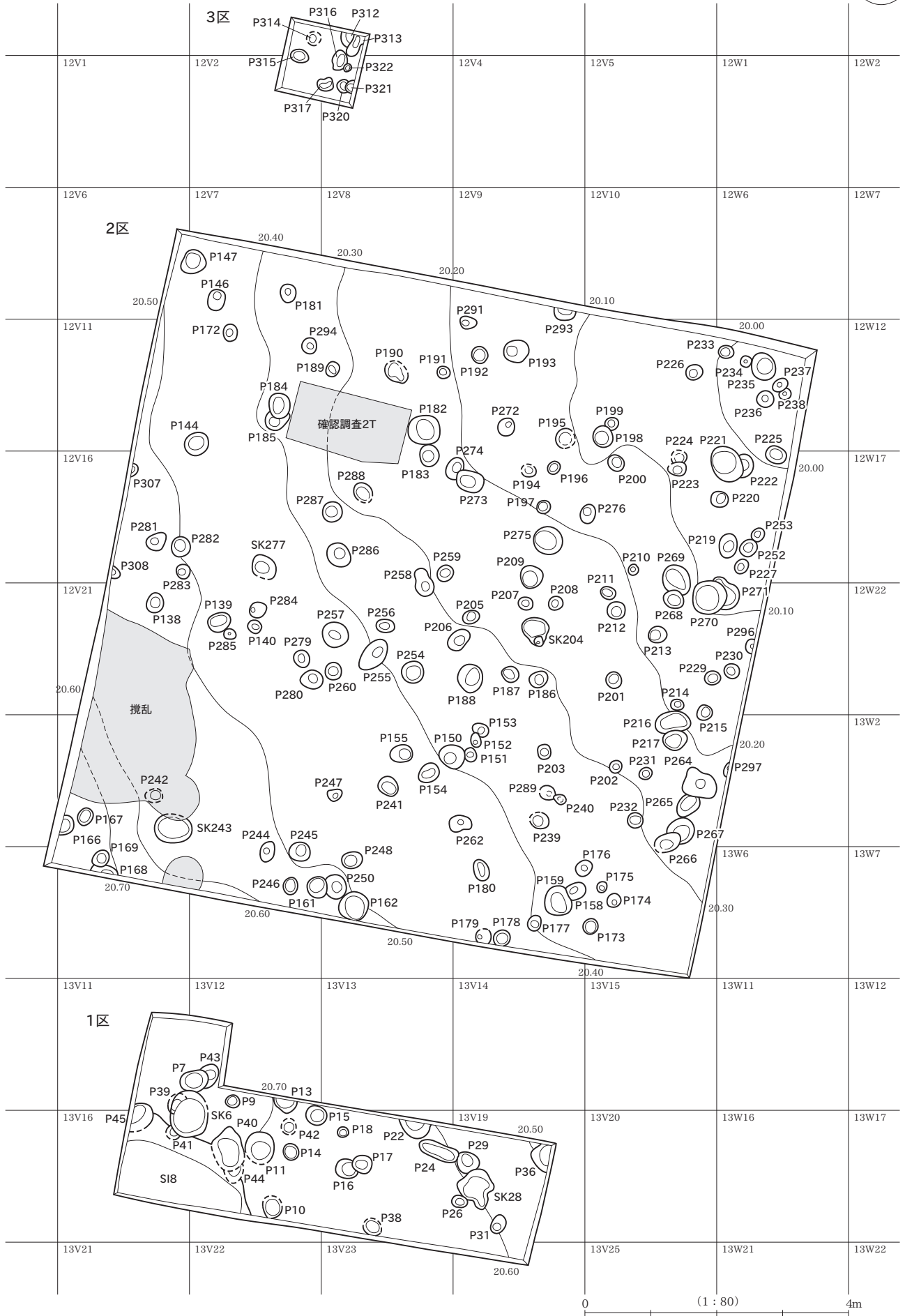




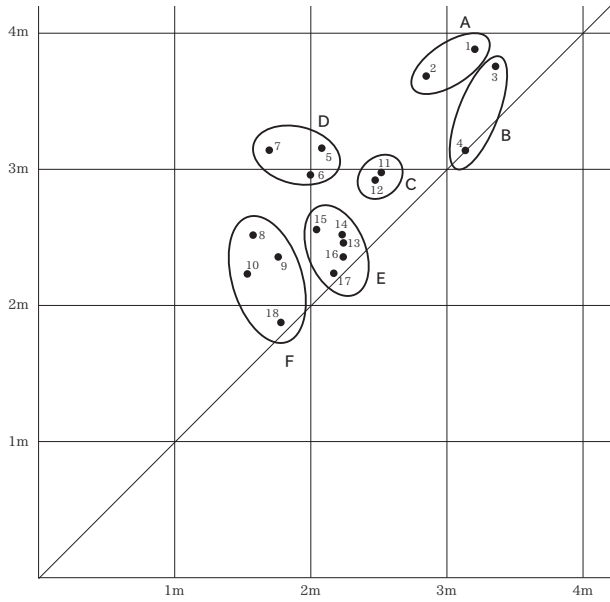




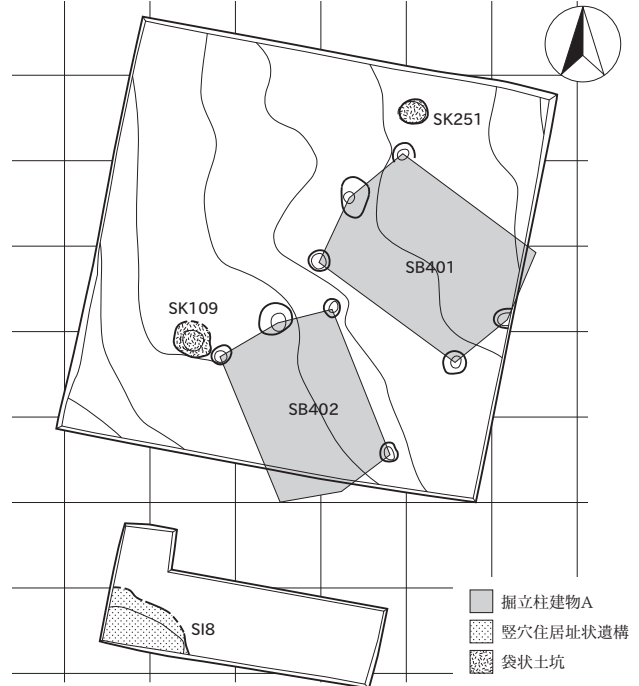




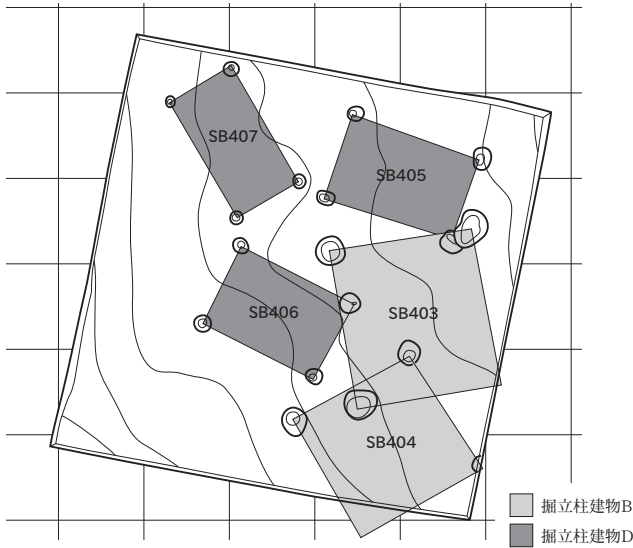




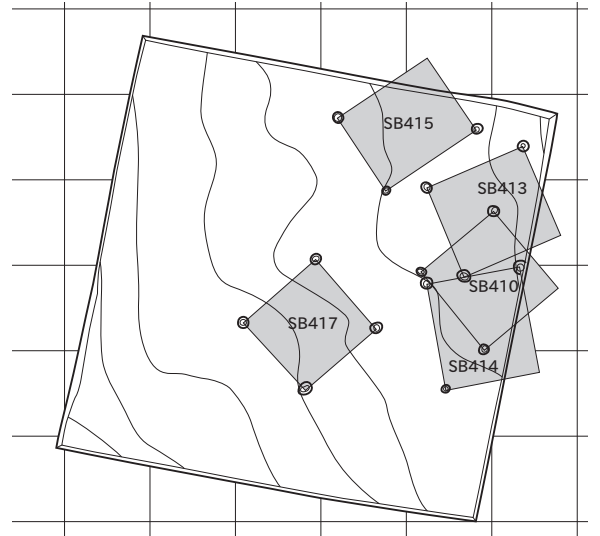
掘立柱建物の区分



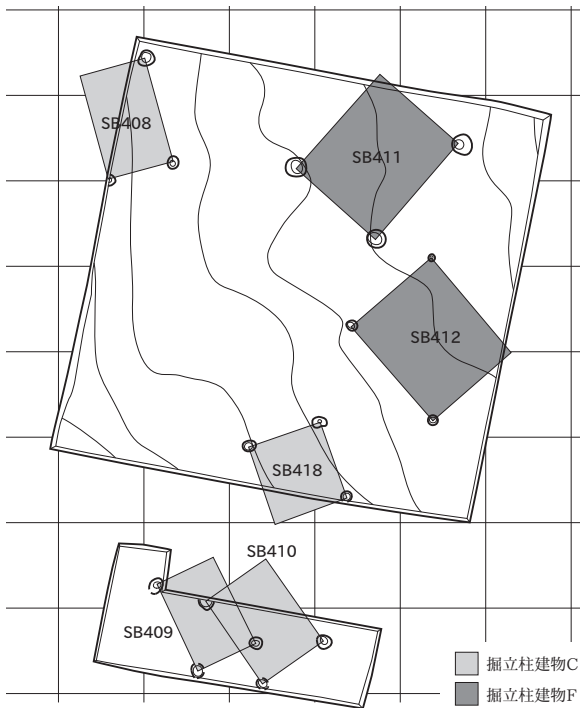
竪穴住居址状遺構・掘立柱建物A・袋状土坑



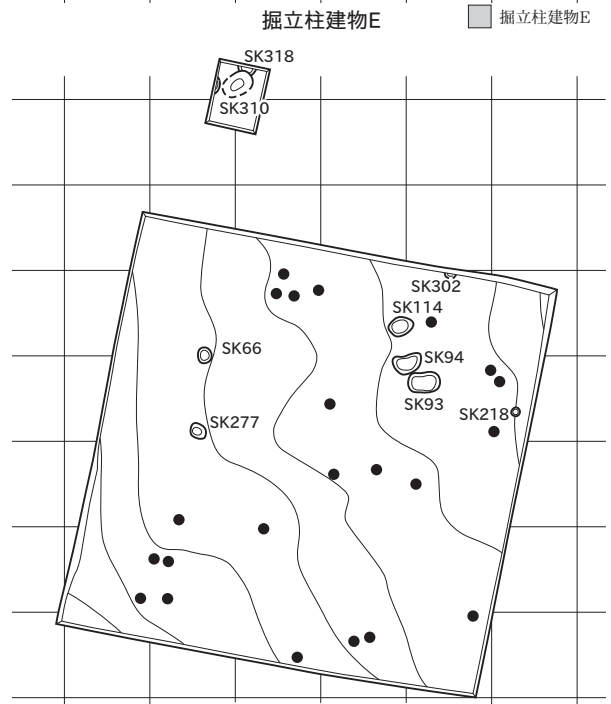
掘立柱建物B・D



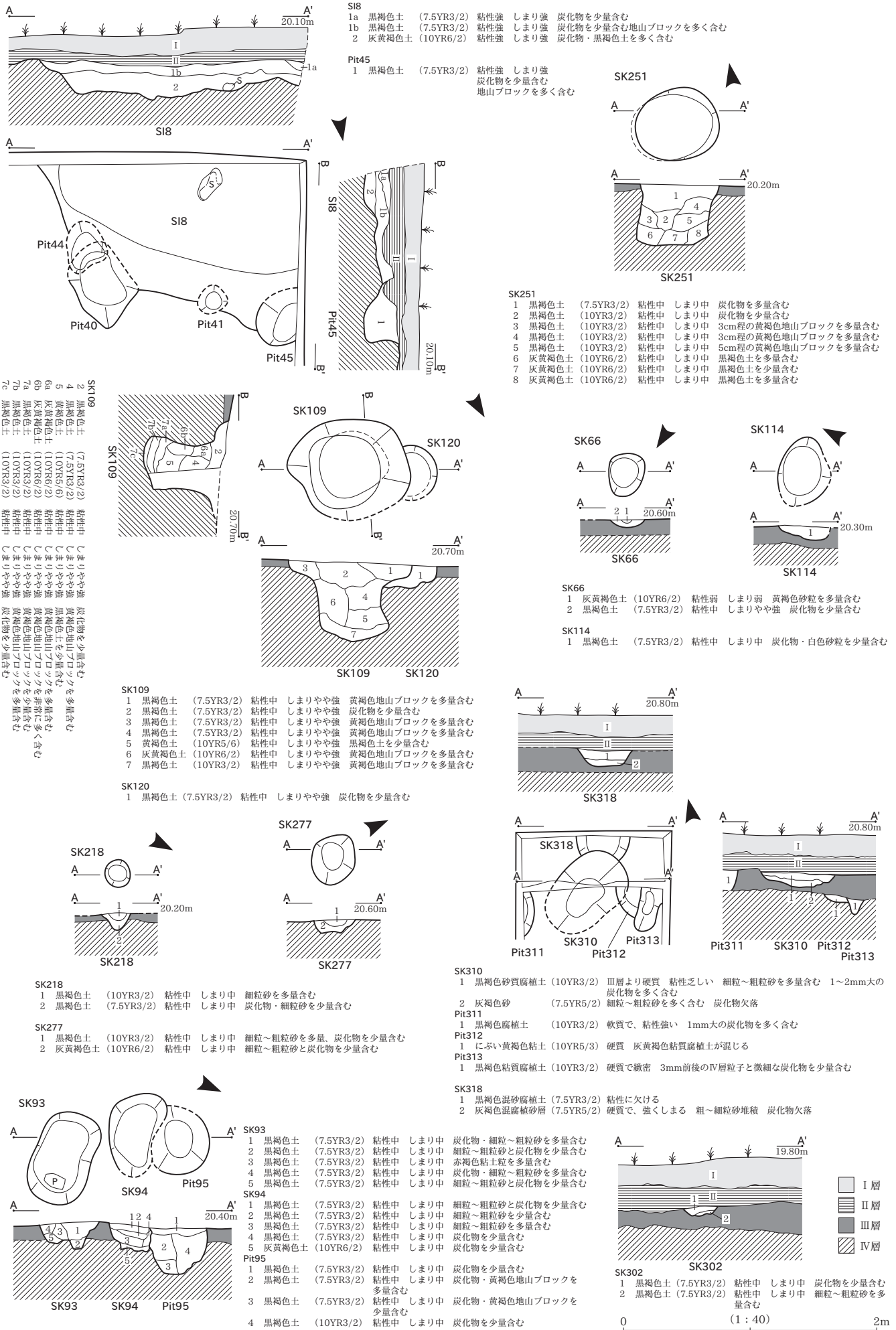
掘立柱建物E

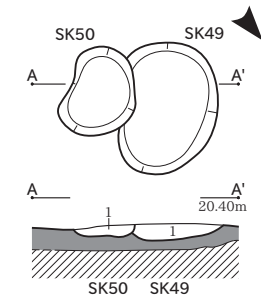


掘立柱建物C・F

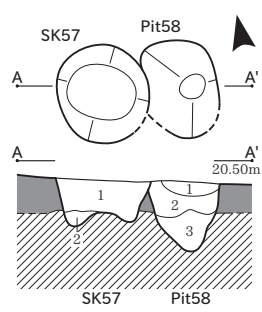


砂集積土坑と皿状土坑 (ドット)

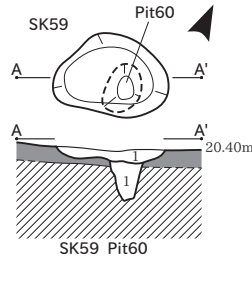




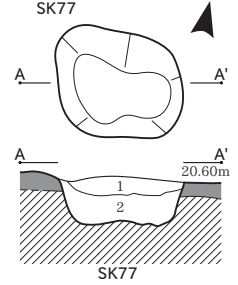
SK50
1 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘性中 しまり強 炭化物・白色砂粒を少量含む
SK49
1 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘性中 しまり強 炭化物・黄褐色地山ブロックを少量含む



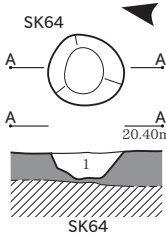
SK57
1 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘性中 しまり中 炭化物を少量含む
2 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘性中 しまり中 黄褐色地山を少量含む
Pit58
1 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘性中 しまり中 炭化物・黄褐色地山ブロックを少量含む
2 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘性中 しまり中 炭化物・黄褐色地山ブロックを多量含む
3 黒褐色粘土 (10YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物・黄褐色地山ブロックを多量含む



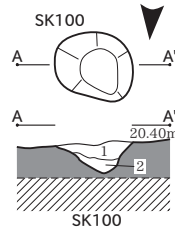
SK59
1 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘性中 しまり強 炭化物を少量含む
Pit60
1 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性強 しまり強 炭化物・黄褐色地山ブロックを少量含む



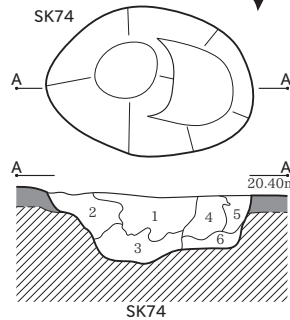
SK77
1 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物を少量含む
2 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物・黄褐色地山ブロックを少量含む



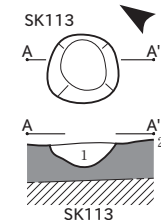
SK64
1 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘性中 しまり中 炭化物を少量含む



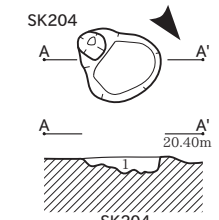
SK100
1 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物を少量含む
2 灰黄褐色土 (10YR6/2) 粘性中 しまり中 炭化物を少量含む



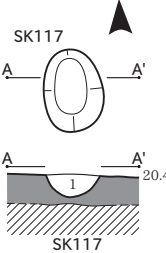
SK74
1 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物を少量含む
2 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中 しまり中 黄褐色地山ブロックを少量含む
3 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性中 しまり中 5cm程の黄褐色地山ブロックを多量含む
4 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物を多量含む
5 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性中 しまり中 黄褐色地山ブロックを多量含む
6 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性中 しまり中 炭化物を少量含む



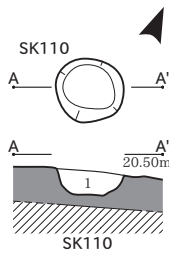
SK113
1 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物を多量含む



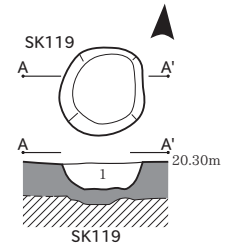
SK204
1 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物を少量含む



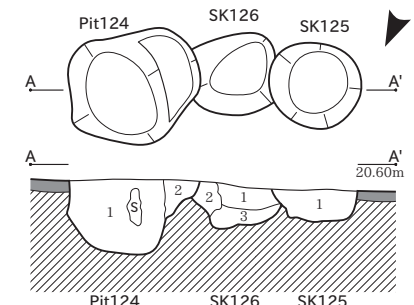
SK117
1 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物・白色砂粒を少量含む



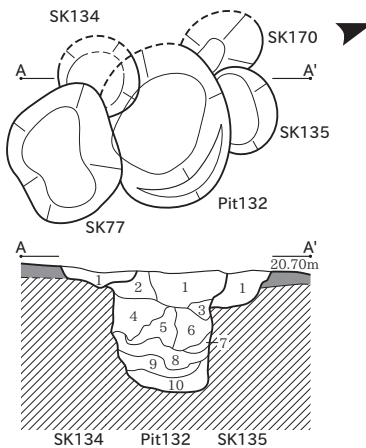
SK110
1 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物・白色砂粒を少量含む



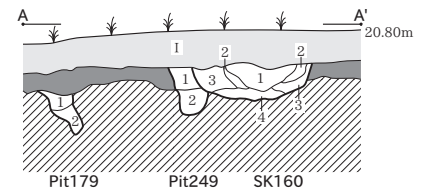
SK119
1 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物を多量含む



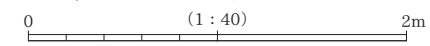
Pit124
1 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物・灰黄褐色粘土を少量含む
2 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物を少量含む
SK126
1 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物を少量含む
2 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物・黄褐色地山ブロックを少量含む
3 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物を少量含む
SK125
1 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物を多量含む

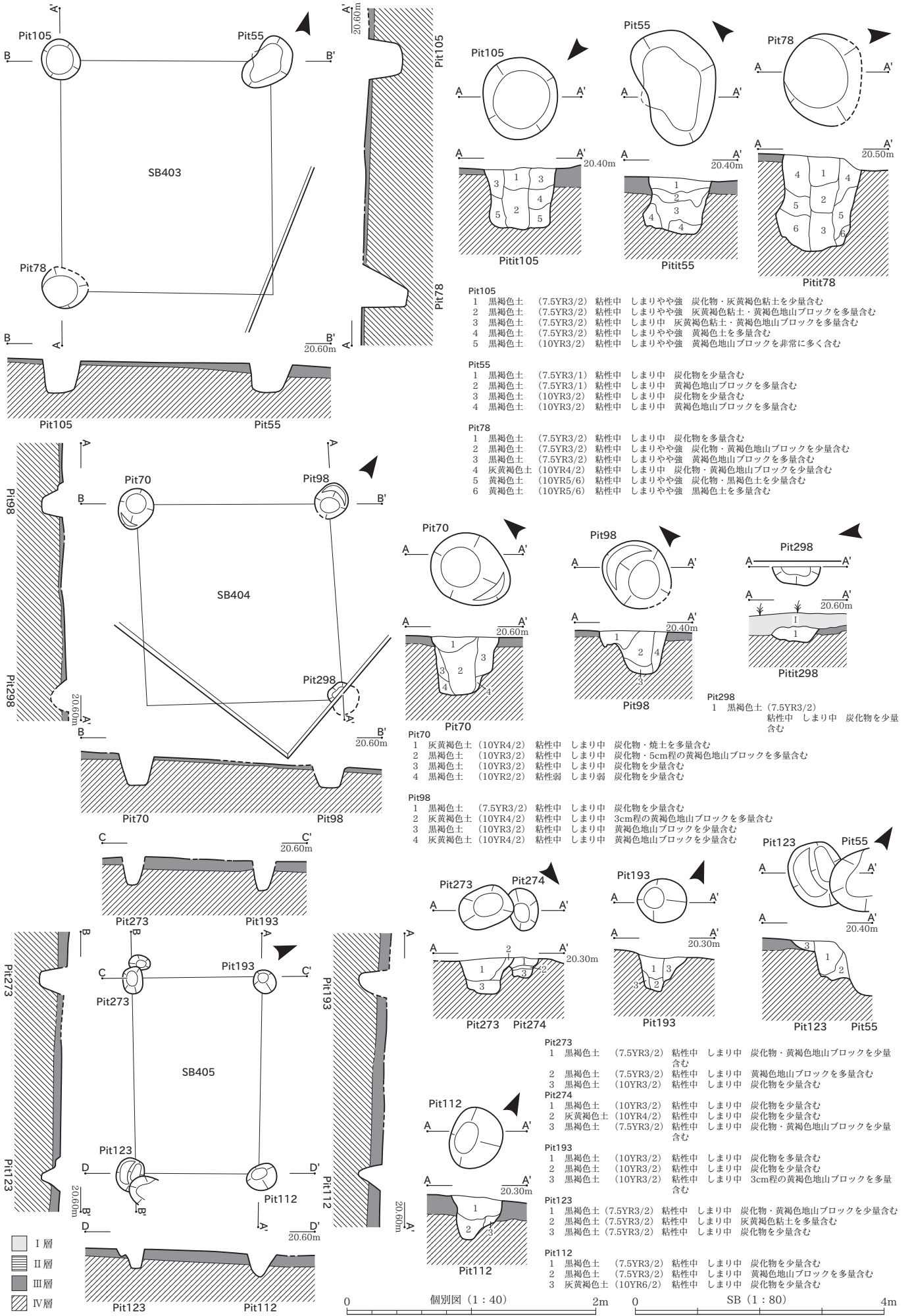


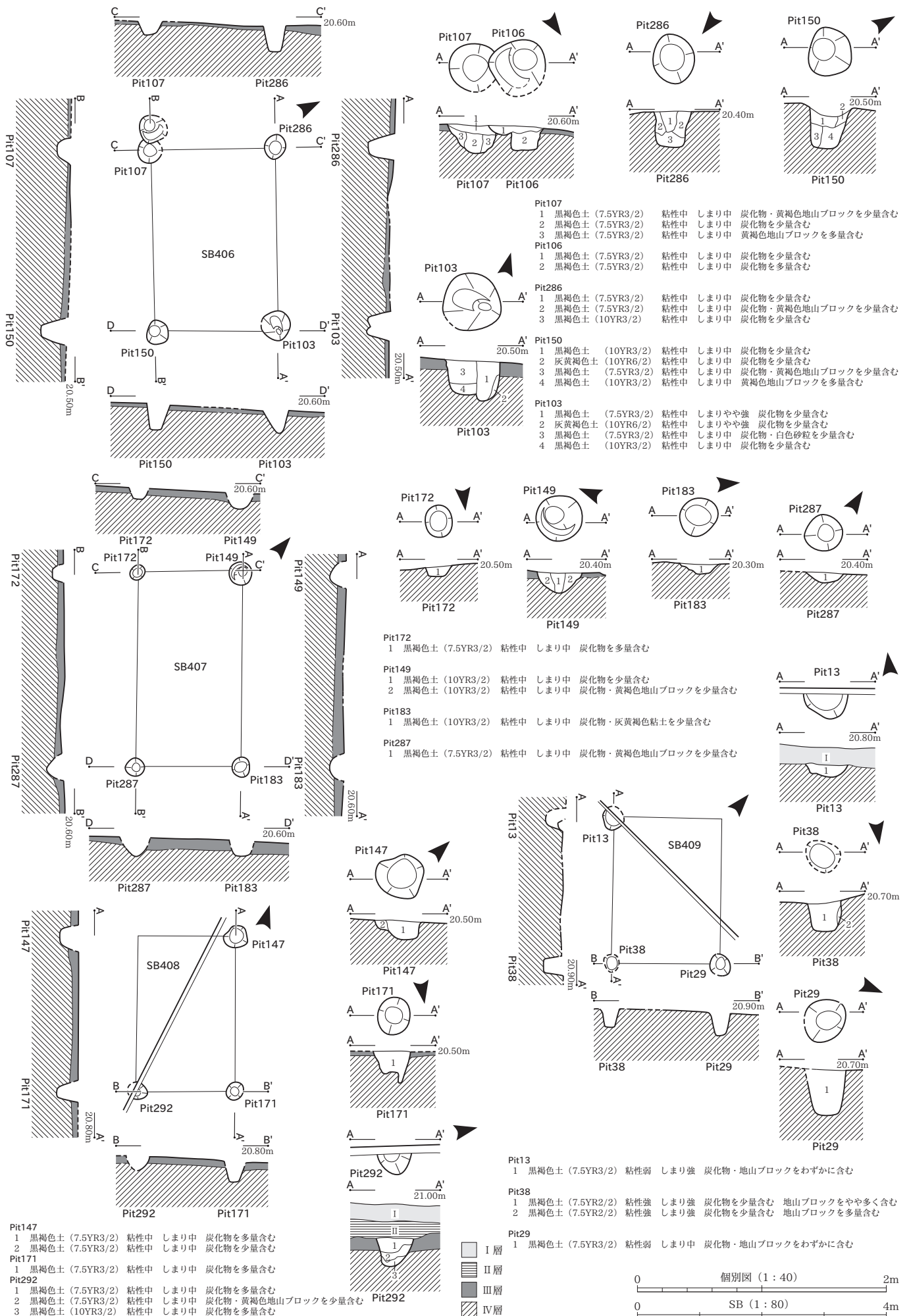
SK134
1 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物を少量含む
Pit132
1 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物・黄褐色地山ブロックを少量含む
2 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物を多量含む
3 灰黄褐色土 (10YR6/2) 粘性中 しまり中 炭化物・黄褐色地山ブロックを多量含む
4 灰黄褐色土 (10YR6/2) 粘性中 しまり中 炭化物・黄褐色地山ブロックを多量含む
5 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物・黄褐色地山ブロックを少量含む
6 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物を多量含む
7 灰黄褐色土 (10YR6/2) 粘性中 しまり中 炭化物・黄褐色地山ブロックを多量含む
8 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物を多量含む
9 灰黄褐色土 (10YR6/2) 粘性中 しまり中 炭化物・黄褐色地山ブロックを多量含む
10 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物・黄褐色地山ブロックを少量含む
SK135
1 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物を少量含む

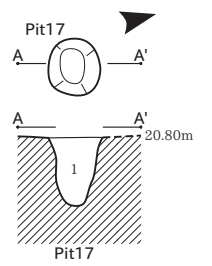
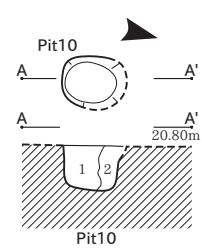
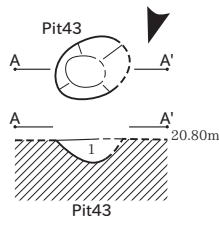
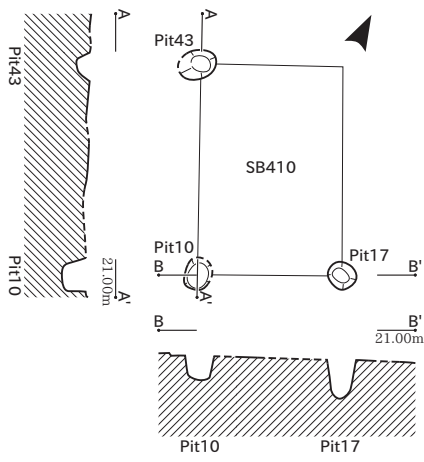


Pit179
1 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物を多量含む
2 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性中 しまり中 炭化物を少量含む
Pit249
1 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物を少量含む
2 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性中 しまり中 黄褐色地山ブロックを多量含む
SK160
1 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物を少量含む
2 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性中 しまり中 黄褐色地山ブロックを多量含む
3 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性中 しまり中 炭化物を少量含む
4 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物を少量含む





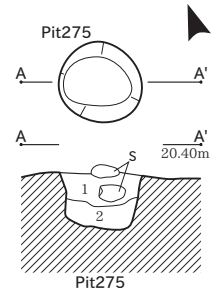
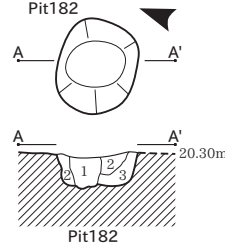
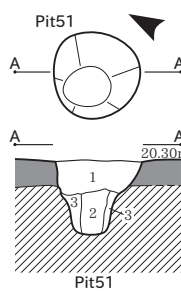
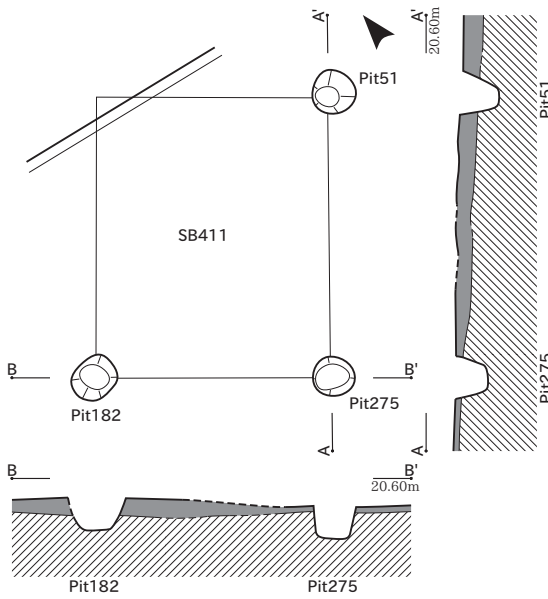




Pit43
1 極暗褐色土 (7.5YR2/3) 粘性中 しまり強 炭化物を少量含む

Pit10
1 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性中 しまり強 炭化物・地山ブロックをわずかに含む
2 黒色土 (10YR2/1) 粘性弱 しまり強 炭化物をやや多く含む 地山ブロックをわずかに含む

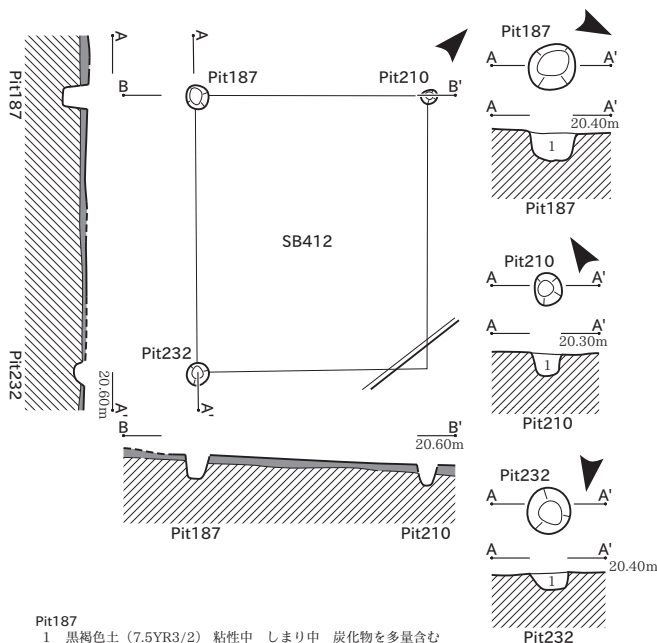
Pit17
1 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中 しまり強 炭化物を少量含む 地山ブロックをやや多く含む



Pit51
1 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性強 しまり強 炭化物・白色砂粒を多く含む
2 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性強 しまり強 炭化物を少量含む
3 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性強 しまり強 浅黄褐色地山ブロックを多量含む

Pit182
1 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物を少量含む
2 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物・5cm程の黄褐色地山ブロックを少量含む
3 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物を多量含む

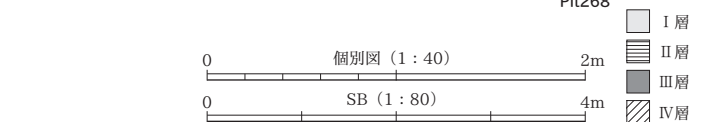
Pit275
1 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物を少量含む
2 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物・黄褐色地山ブロックを少量含む



Pit200
1 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物を多量含む

Pit236
1 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物を多量含む

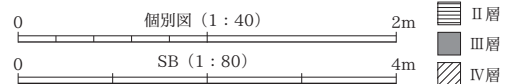
Pit268
1 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物を少量含む

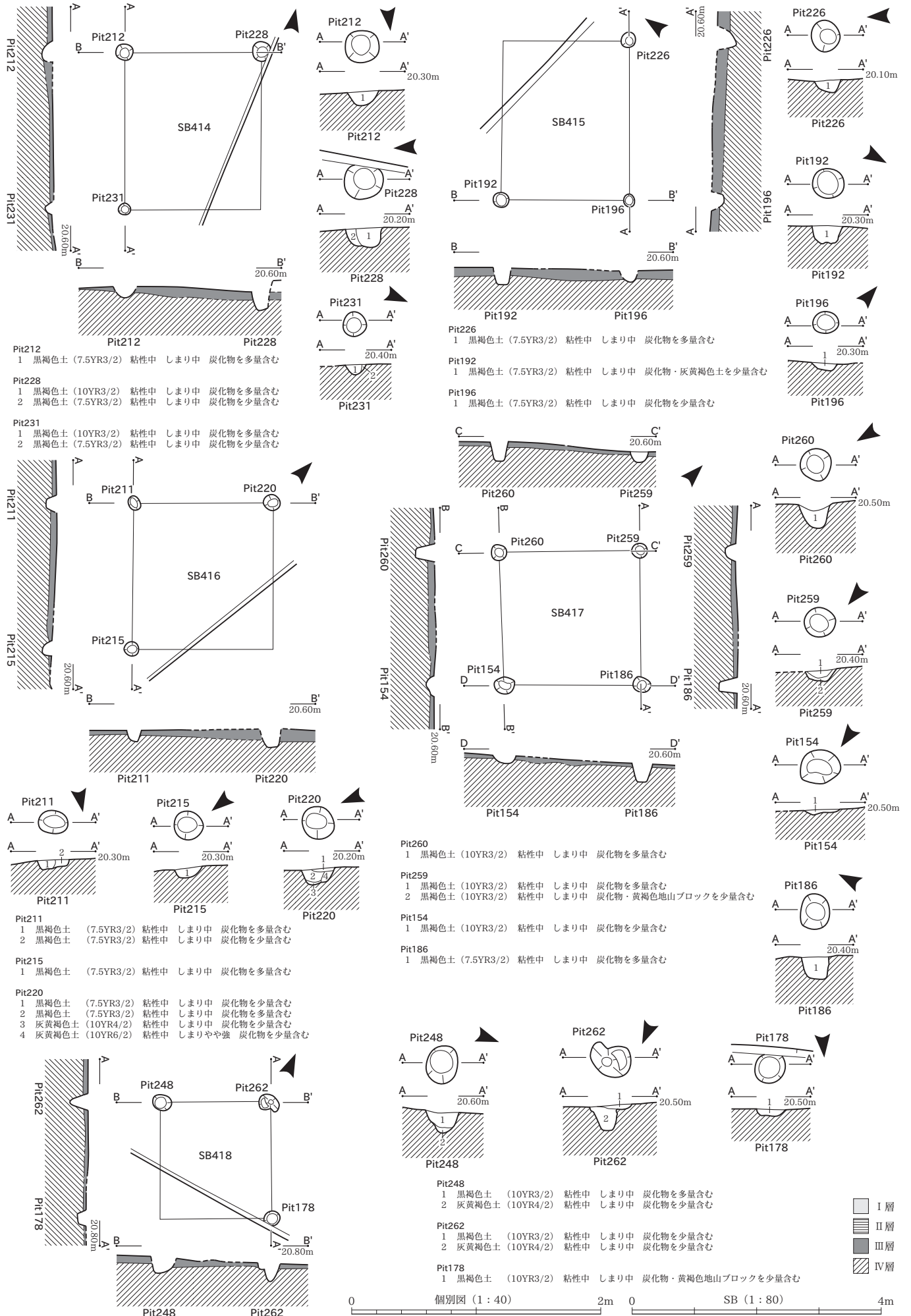


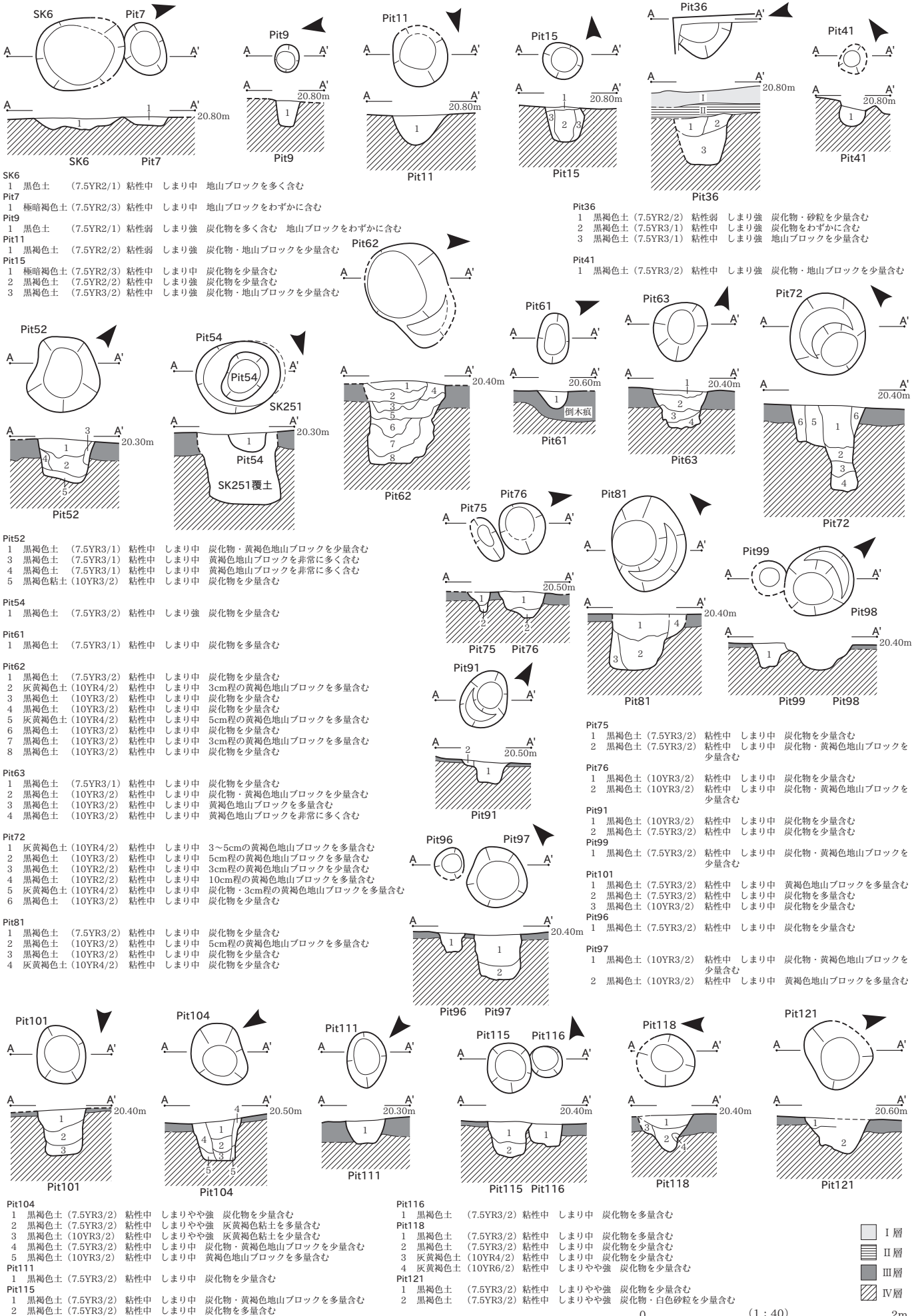
Pit187
1 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物を多量含む

Pit210
1 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物を多量含む

Pit232
1 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性中 しまり中 炭化物を多量含む



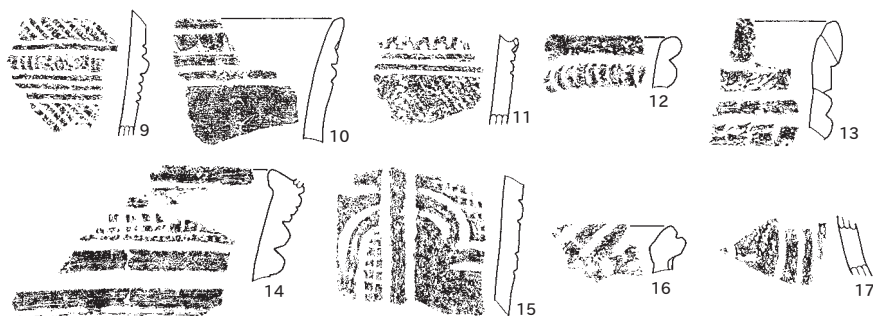




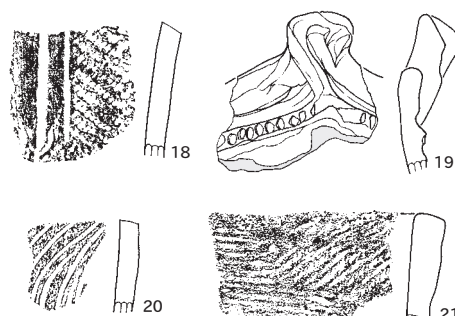
SI8 (1~8)



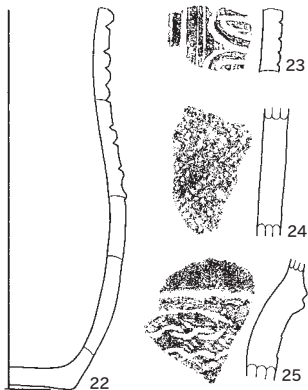
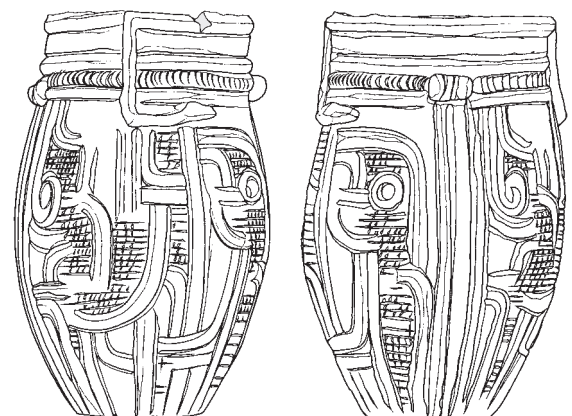
SK109 (9~17)



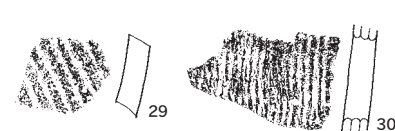
SK251 (18~21)



SK93 (22~28)



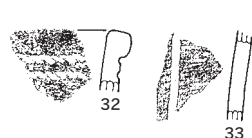
SK114 (29・30)



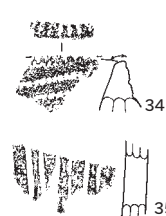
SK49 (31)



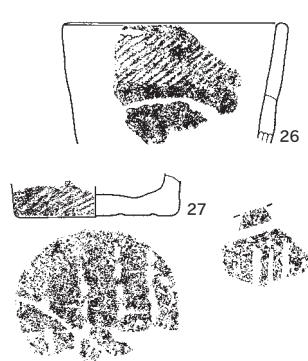
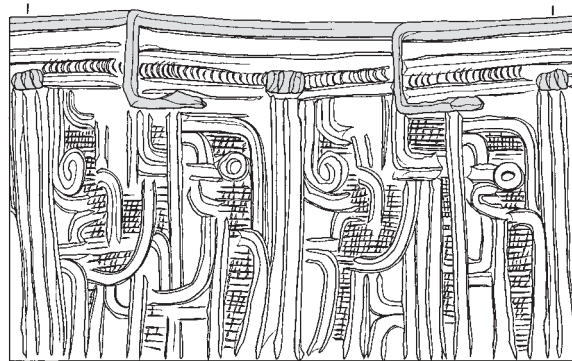
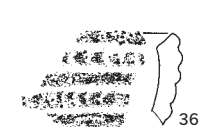
SK50 (32・33)



SK59 (34・35)



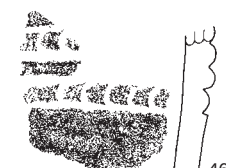
SK64 (36)



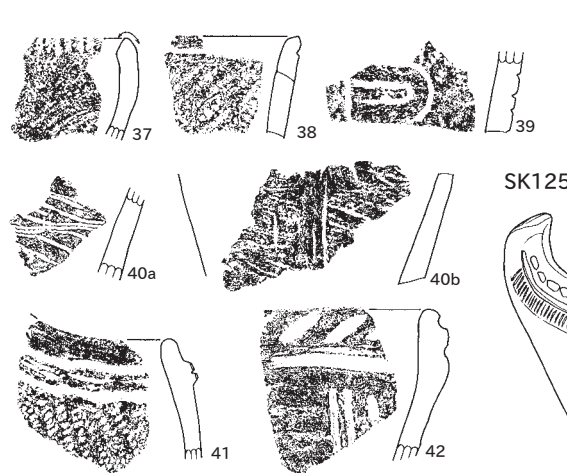
SK113 (45)



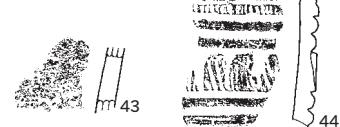
SK119 (46)



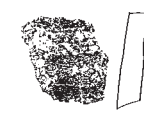
SK74 (37~42)



SK83 (43・44)



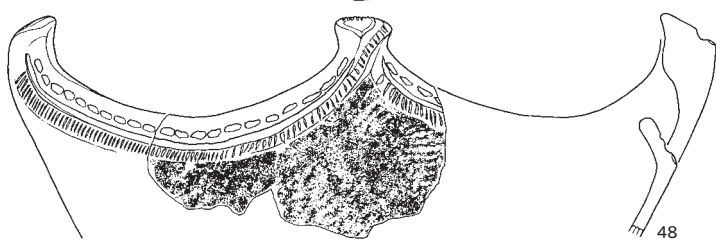
SK120 (47)



SK160 (49)



SK125+SK126 (48)

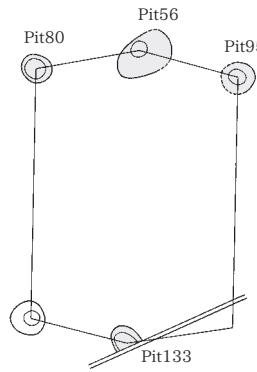
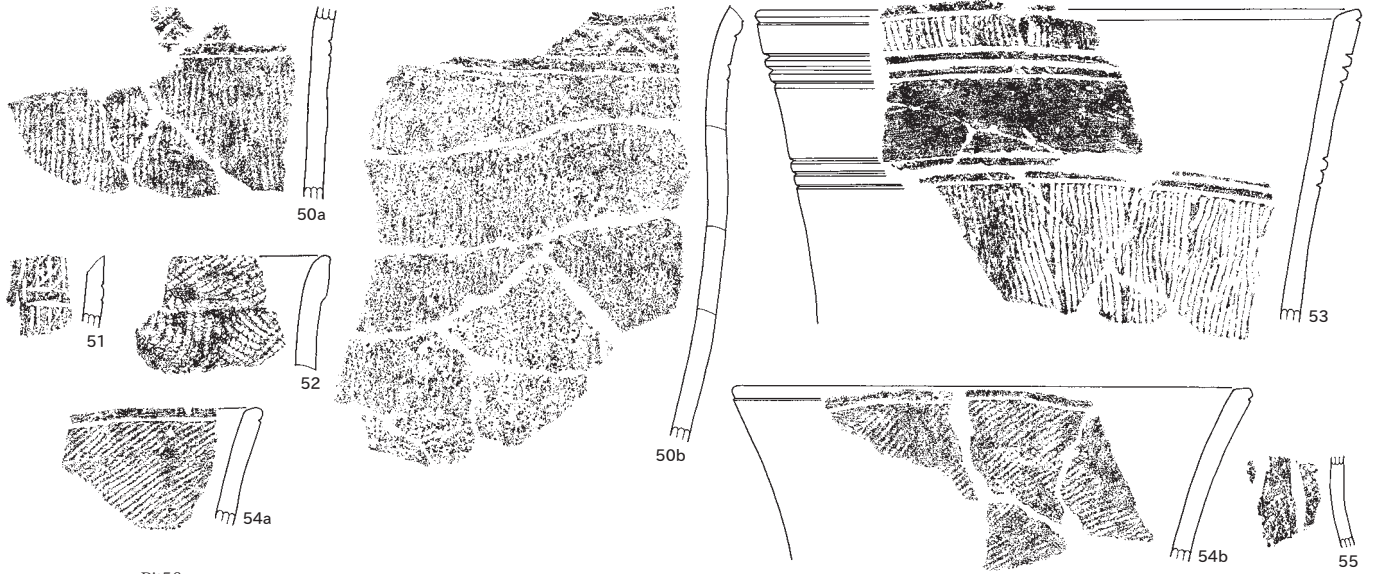


隆帯
破損面

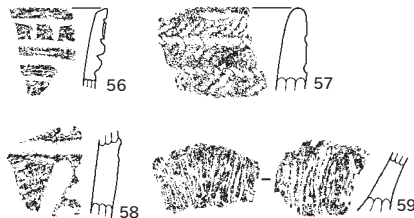
0 (1:3) 10cm

SB401 (50~65)

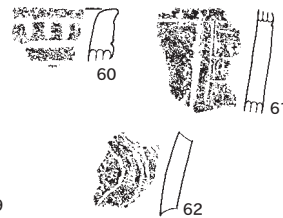
Pit56 (50~55)



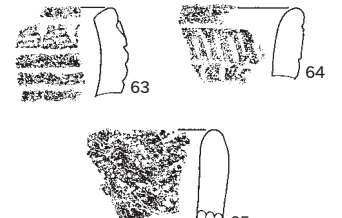
Pit80 (56~59)



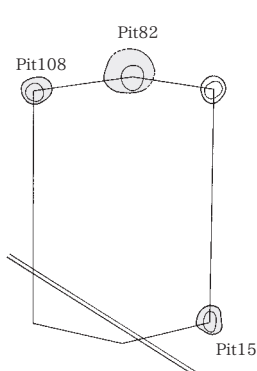
Pit95 (60~62)



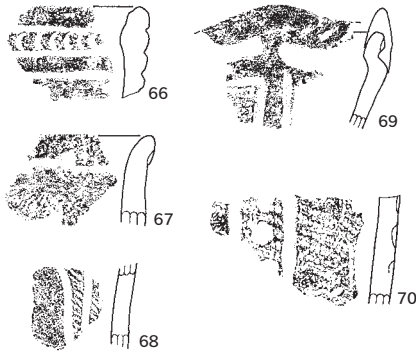
Pit133 (63~65)



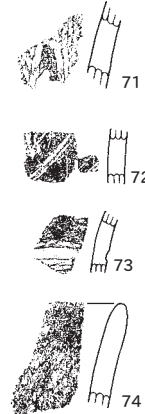
SB402 (66~78)



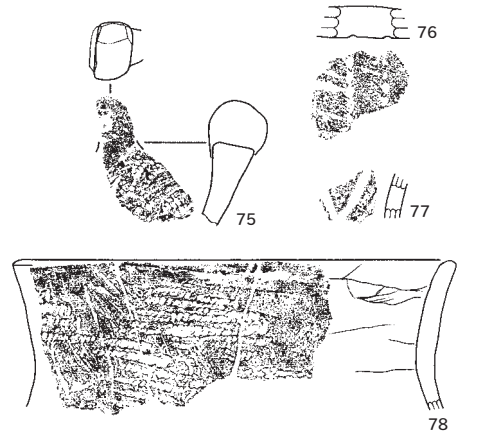
Pit82 (66~70)



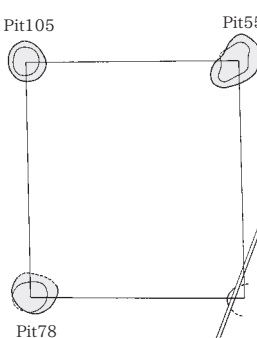
Pit108 (71~74)



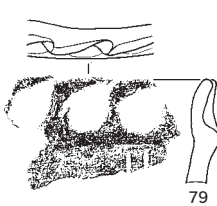
Pit159 (75~78)



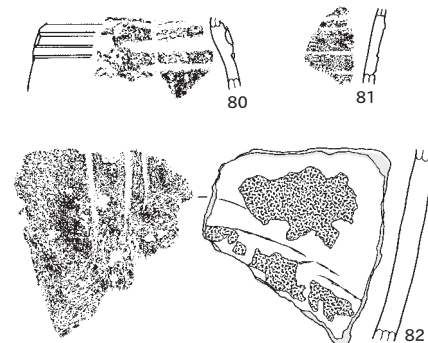
SB403 (79~85)



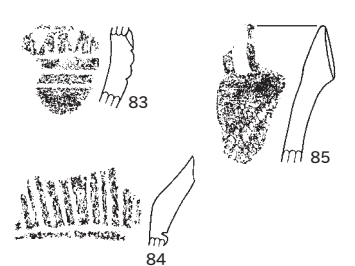
Pit55 (79)






Pit78 (80~82)



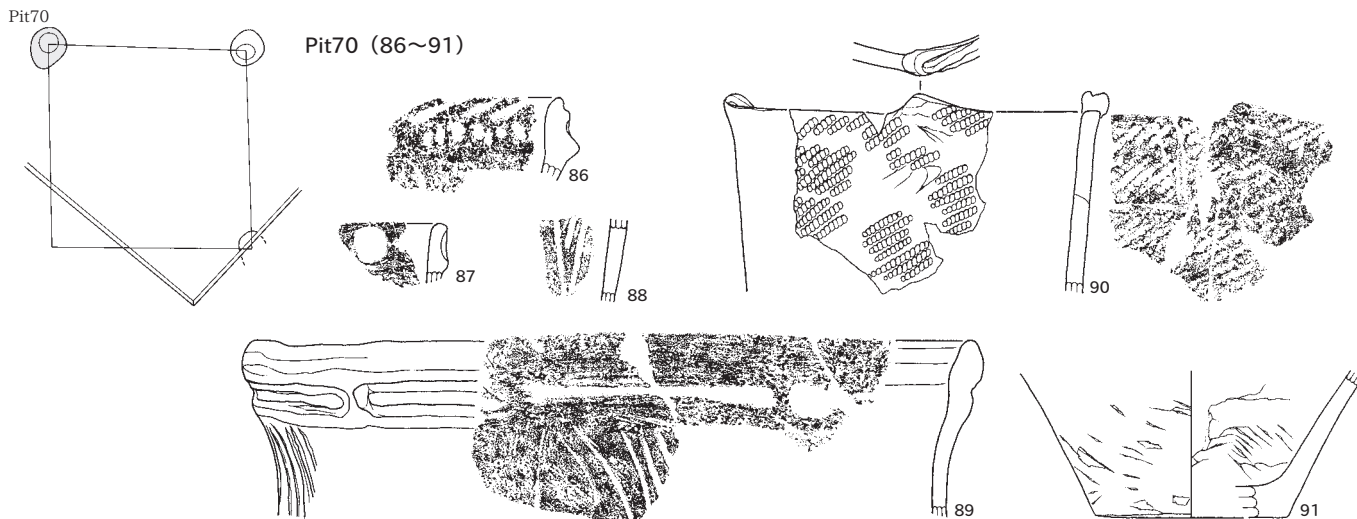
Pit105 (83~85)



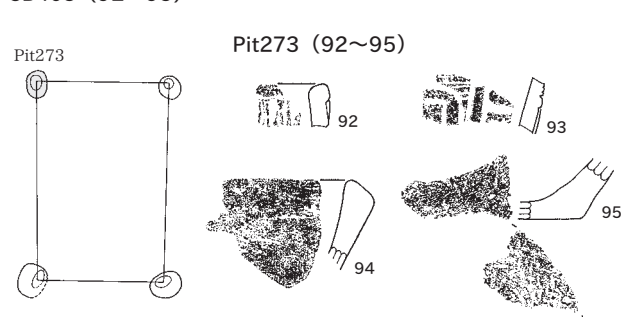
 破損面
 掘立柱建物柱穴
 アスファルト

0 (1:3) 10cm

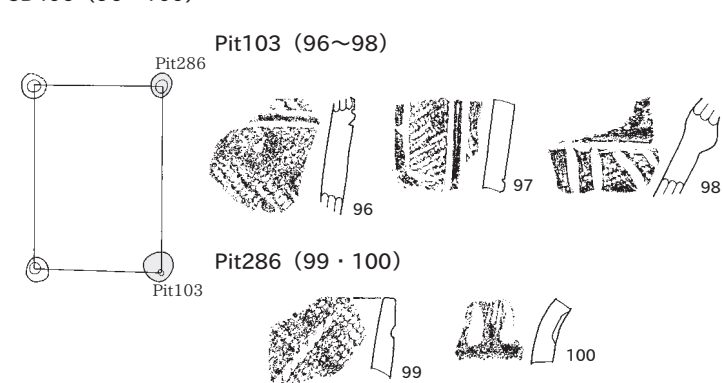
SB404 (86~91)



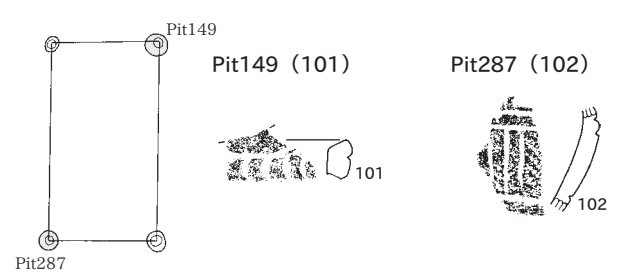
SB405 (92~95)



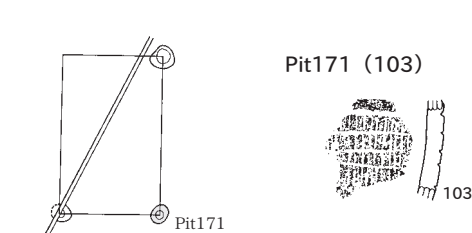
SB406 (96~100)



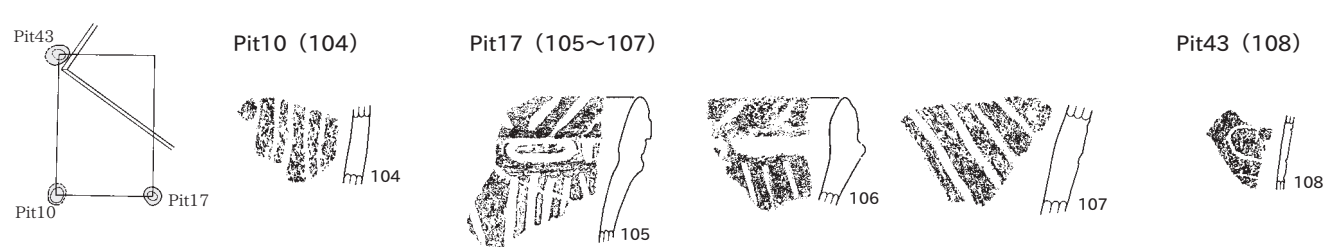
SB407 (101・102)



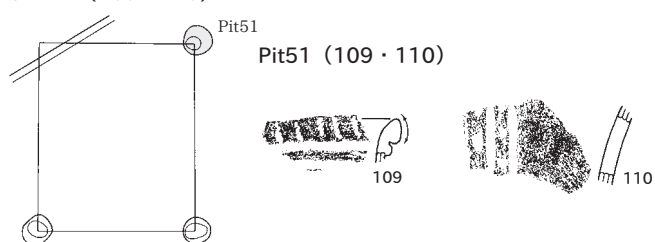
SB408 (103)



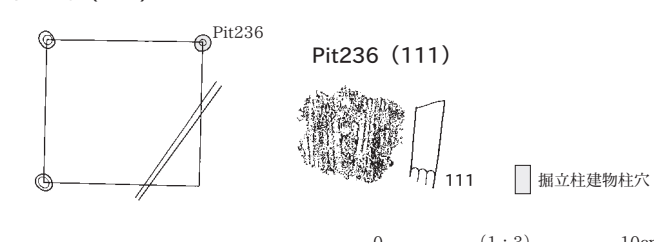
SB410 (104~108)



SB411 (109・110)



SB413 (111)

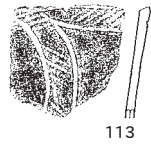


掘立柱建物柱穴

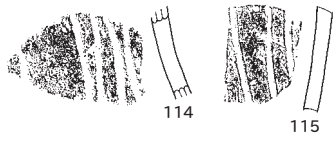
Pit17 (112)



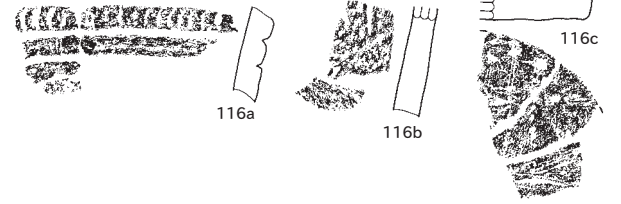
Pit9 (113)



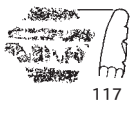
Pit11 (114・115)



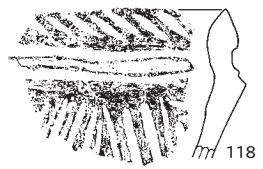
Pit28 (116)



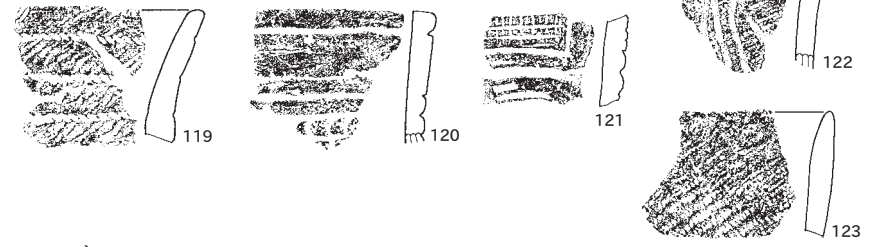
Pit36 (117)



Pit41 (118)



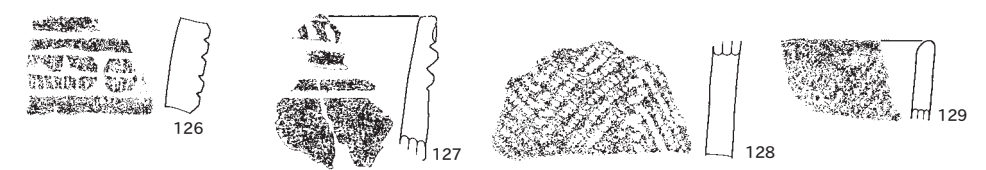
Pit52 (119~123)



Pit54 (124・125)



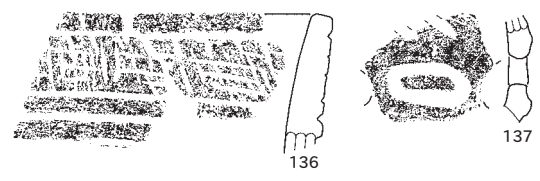
Pit61 (126~129)



Pit62 (130~135)



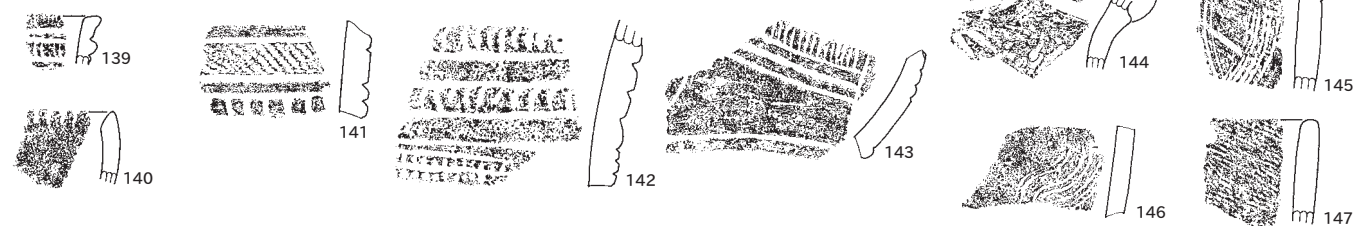
Pit63 (136・137)



Pit72 (138)



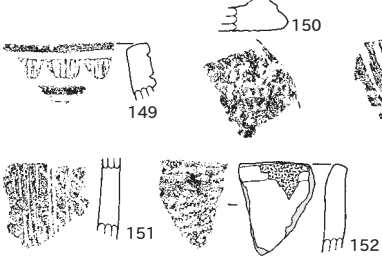
Pit76 (139・140) Pit81 (141~147)



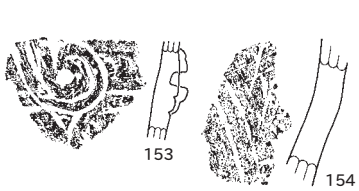
Pit91 (148)



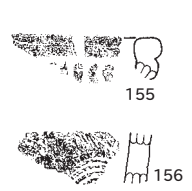
Pit97 (149~152)



Pit99 (153・154)



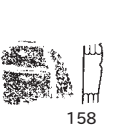
Pit101 (155・156)



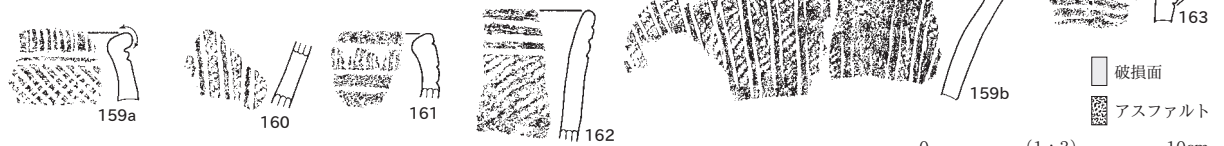
Pit104 (157)



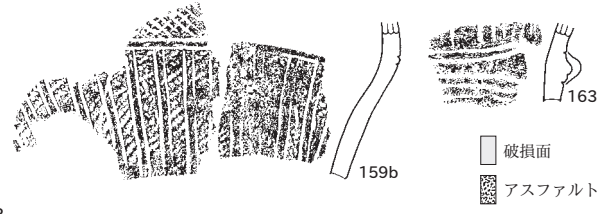
Pit106 (158)



Pit111 (159a~162)



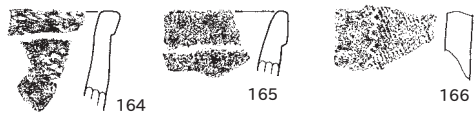
Pit112 (159b・163)



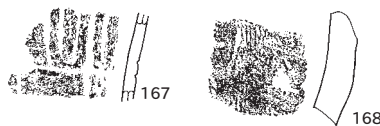
破損面
アスファルト

0 (1:3) 10cm

Pit115 (164~166)



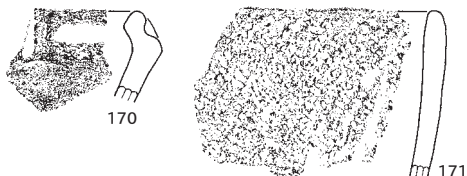
Pit118 (167・168)



Pit121 (169)



Pit124 (170・171)



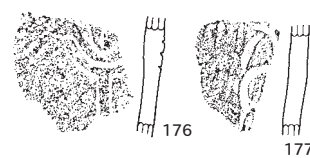
Pit127 (172・173)



Pit132 (174・175)



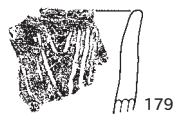
Pit148 (176・177)



Pit155 (178)



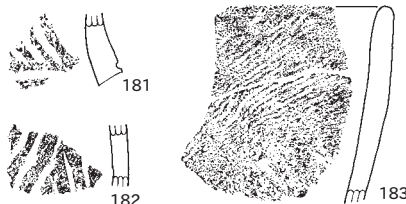
Pit157 (179)



Pit161 (180)



Pit162 (181~183)



Pit164 (184)



Pit165 (185~187)



Pit169 (188~190)



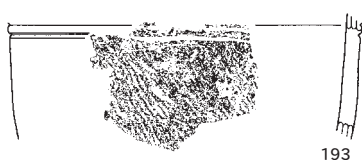
Pit190 (191)



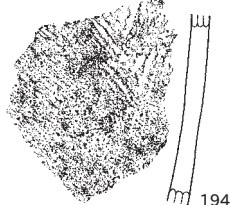
Pit198 (192)



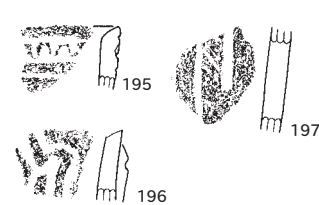
Pit207 (193)



Pit216 (194)



Pit221 (195~197)



Pit223 (198)



Pit249 (199)



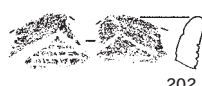
Pit250 (200)



Pit255 (201)



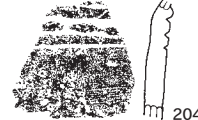
Pit257 (202)



Pit258 (203)



Pit265 (204)



Pit266 (205・206)



Pit267 (207)



Pit270 (208)



Pit275 (209)



Pit283 (210)



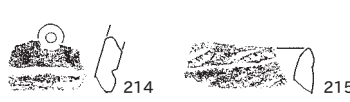
Pit288 (211・212)



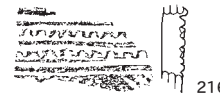
Pit290 (213)

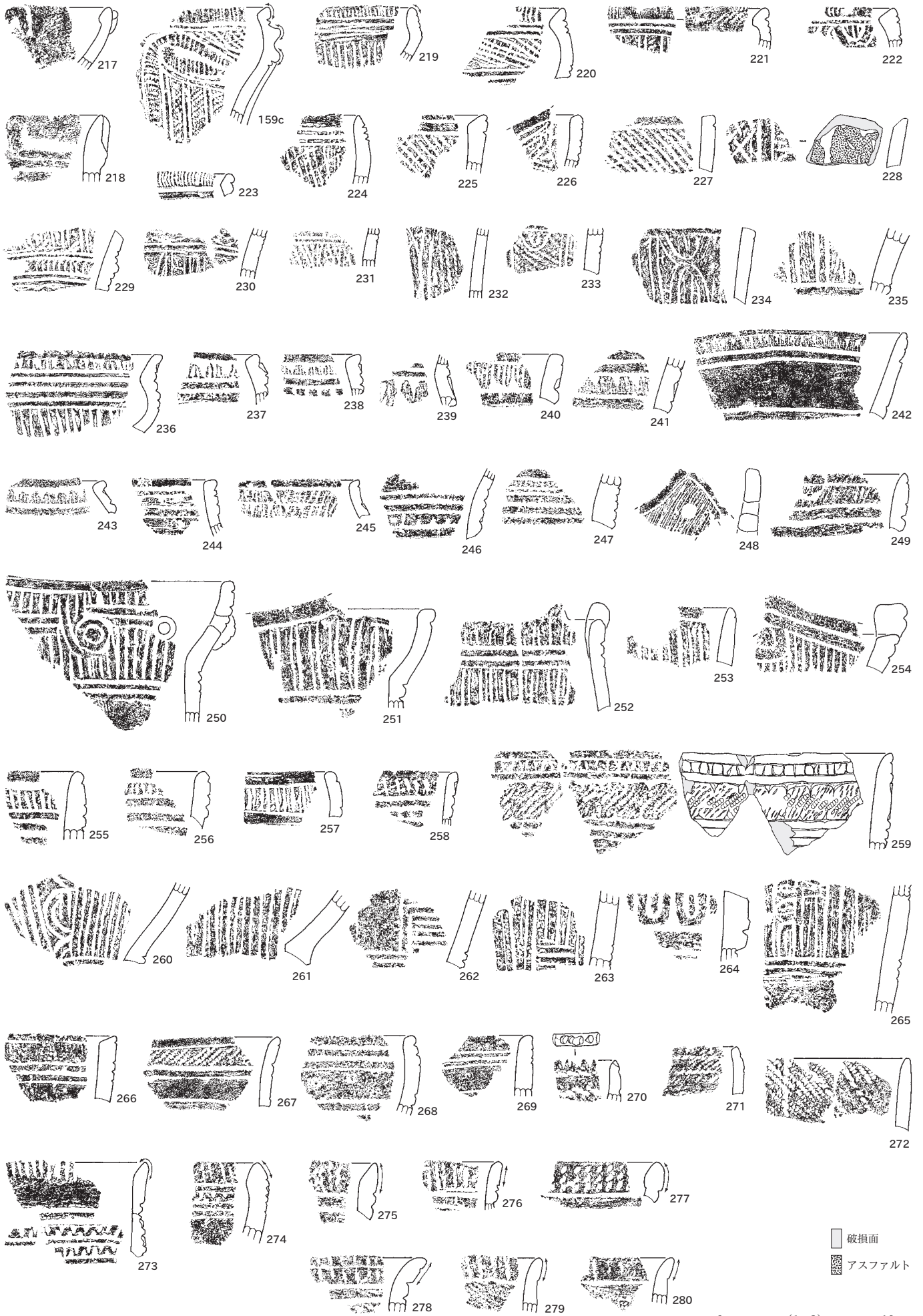


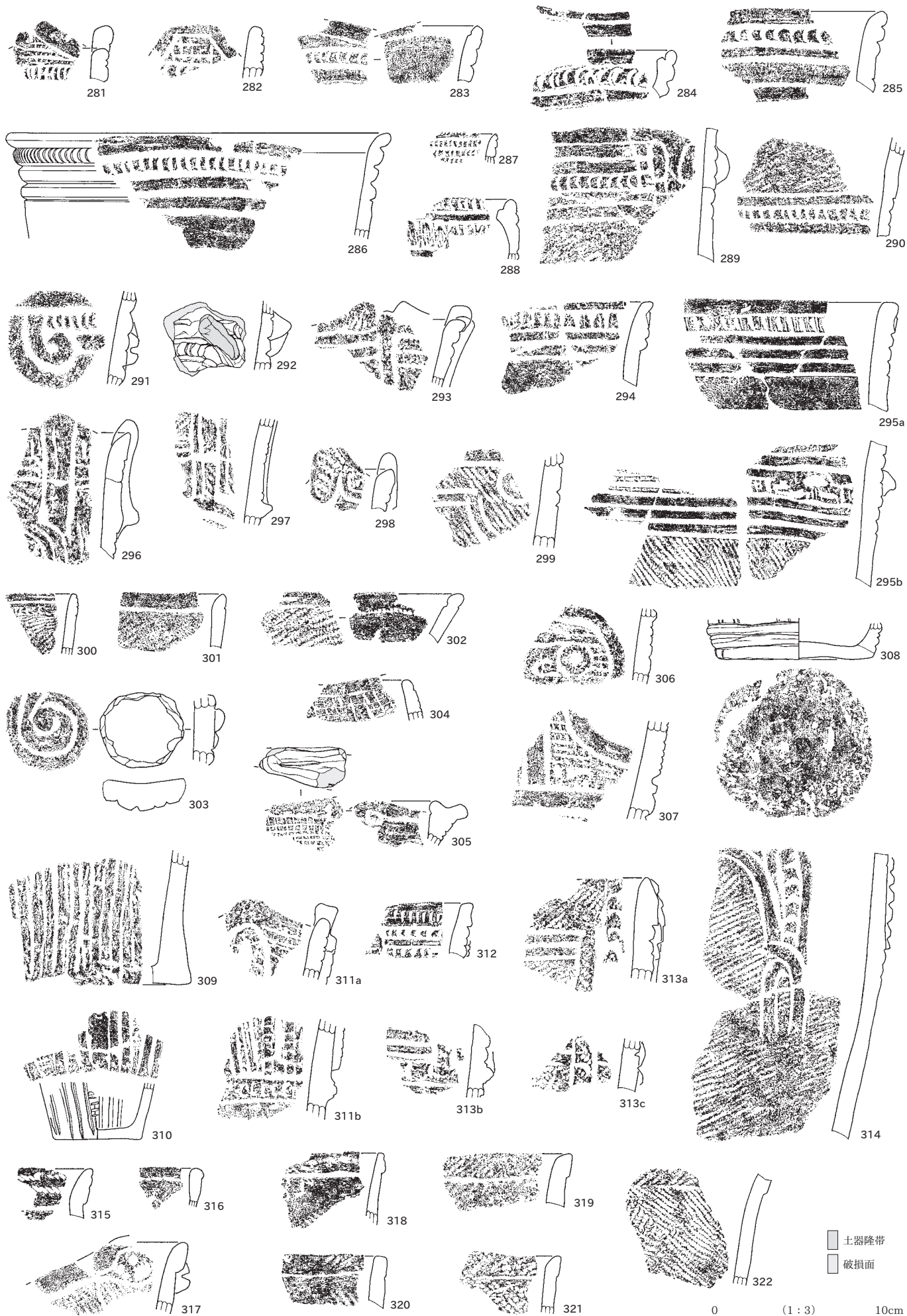
Pit303 (214・215)

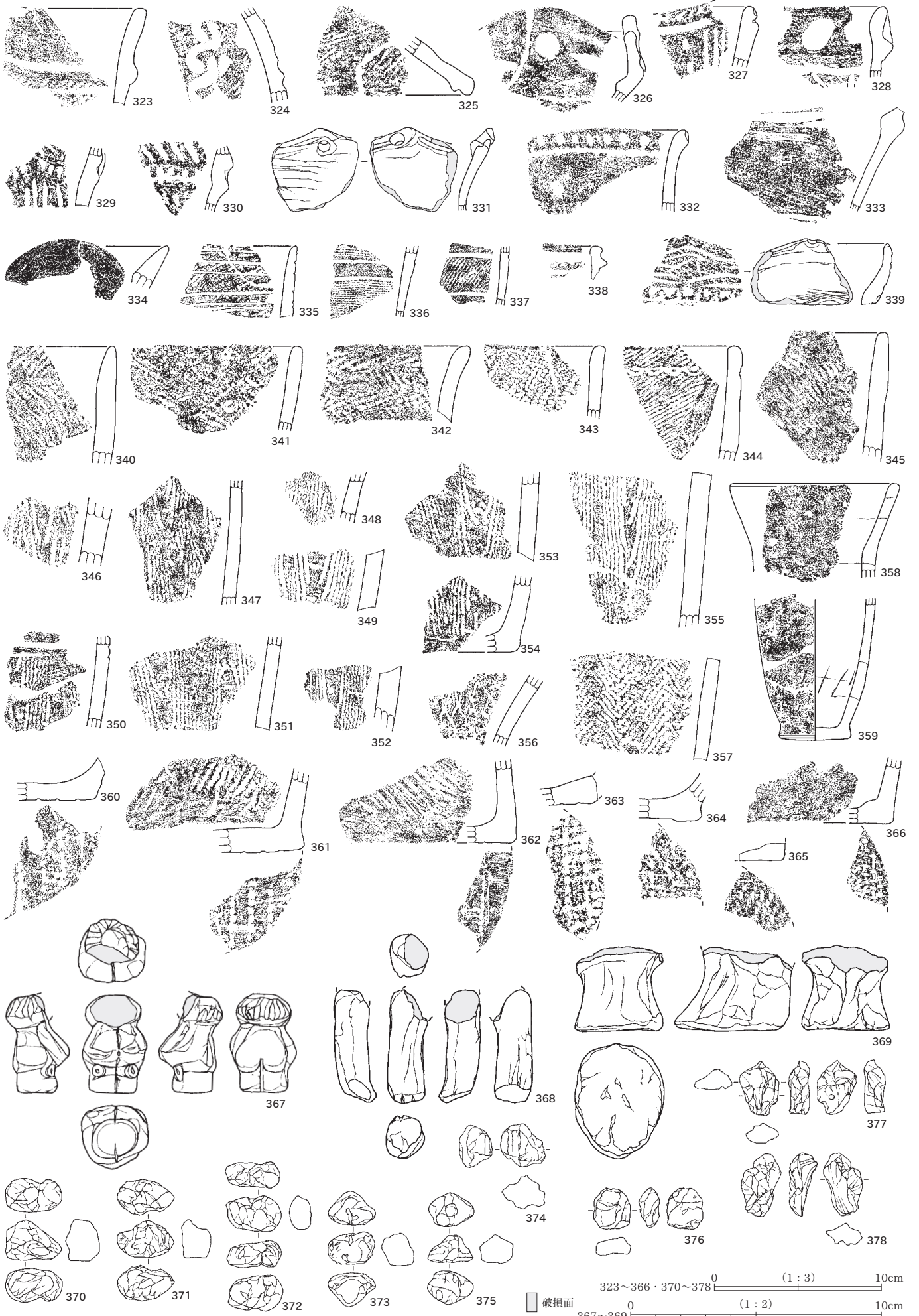


2T-Pit1 (216)

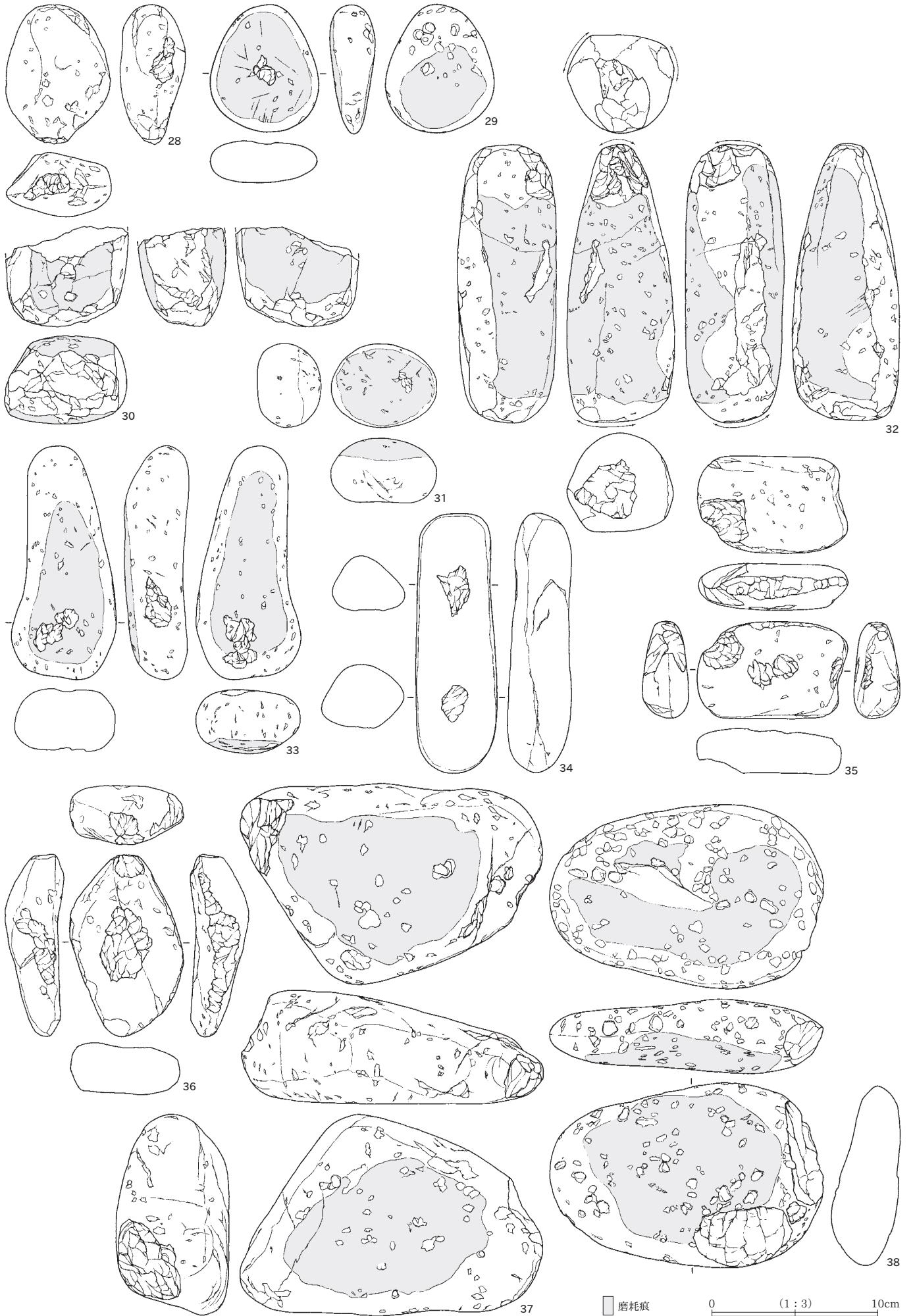


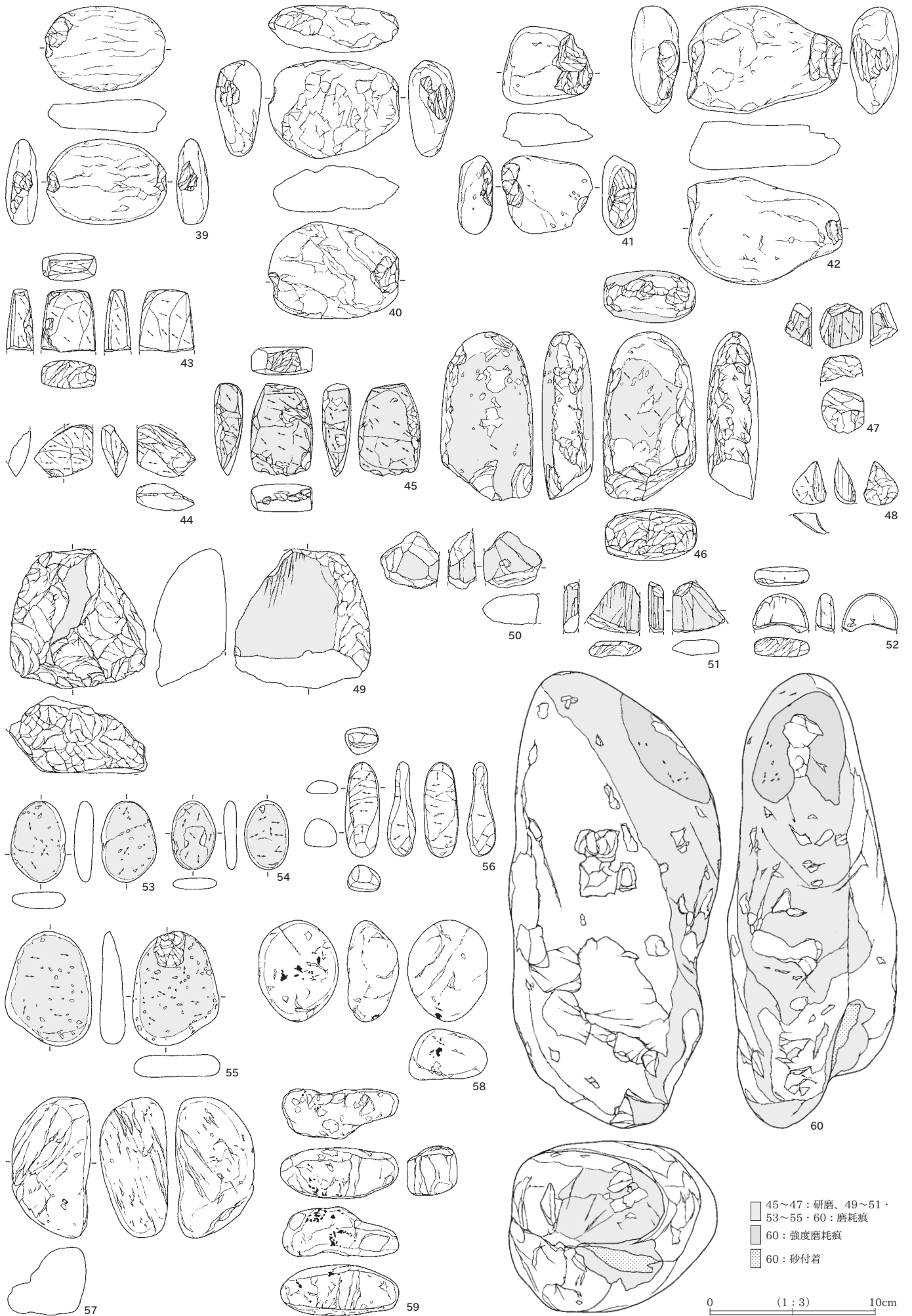












■ 45~47 : 研磨、49~51・
 ■ 53~55・60 : 磨耗痕
 ■ 60 : 強度磨耗痕
 ■ 60 : 砂付着

0 (1:3) 10cm



東上空から見た平遺跡



南上空から見た平遺跡



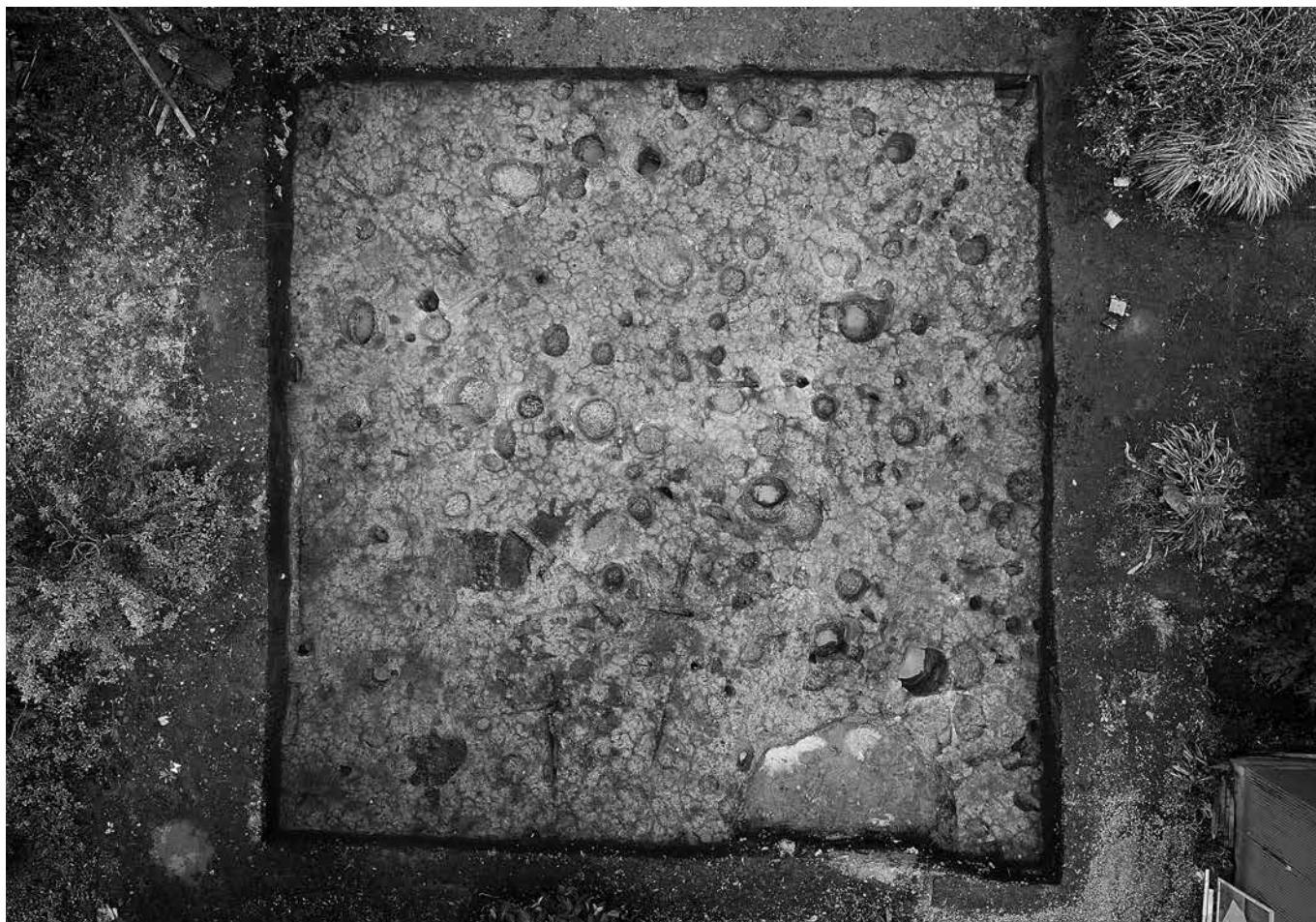
西上空から見た平遺跡



北上空から見た平遺跡



Ⅲ層上面遺構完掘状況（東→西）



Ⅳ層上面遺構完掘状況



Pit304 断面(2区北壁)



SK302 断面(2区北壁)



SK160 断面(2区南壁)



Pit296 断面(2区東壁)



SK318 断面(3区北壁)



SK310の砂堆積状況



SK109 断面(北東→南西)



SK251 断面(南→北)



Pit80 (SB401) 断面(東→西)



Pit108 (SB402) 断面(北東→南西)



Pit78 (SB403) 断面(東→西)



Pit105 (SB403) 断面(北西→南東)



Pit70 (SB404) 断面(南西→北東)



Pit103 (SB406) 断面(南→北)



Pit107 (SB406)・Pit106 断面(北東→南西)



Pit51 (SB411) 断面(西→東)



S18 断面(北→南)



SK109 断面(東→西)



SK66 断面(北西→南東)



SK114 断面(南西→北東)



SK218 断面(北東→南西)



SK277 断面(東→西)



SK93 断面(北東→南西)



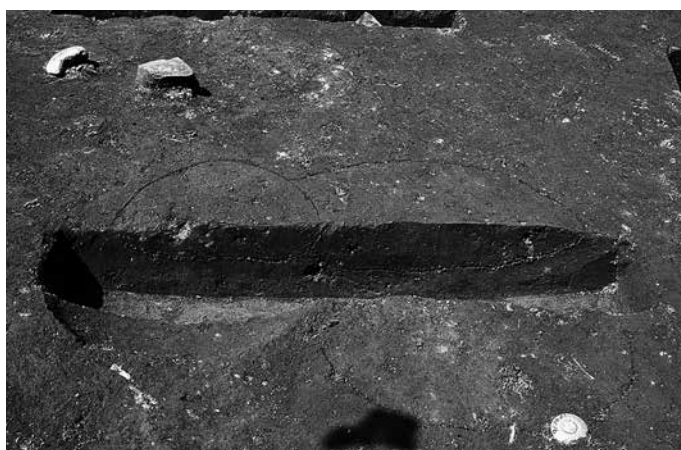
SK93の小型土器出土状況(南→北)



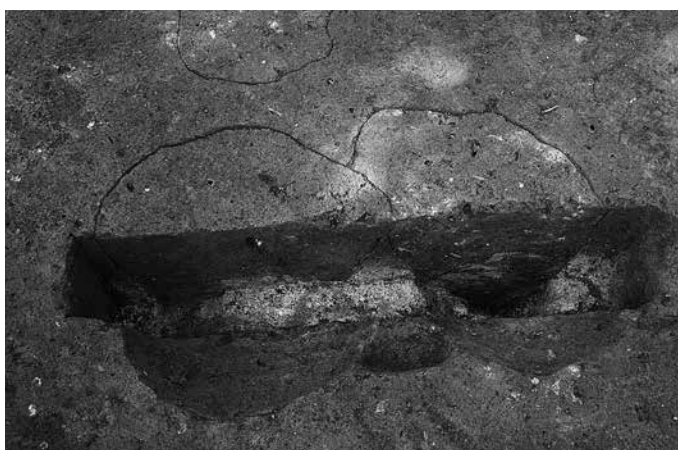
SK94・Pit95 (SB401) 断面(北東→南西)



SK94の砂堆積状況



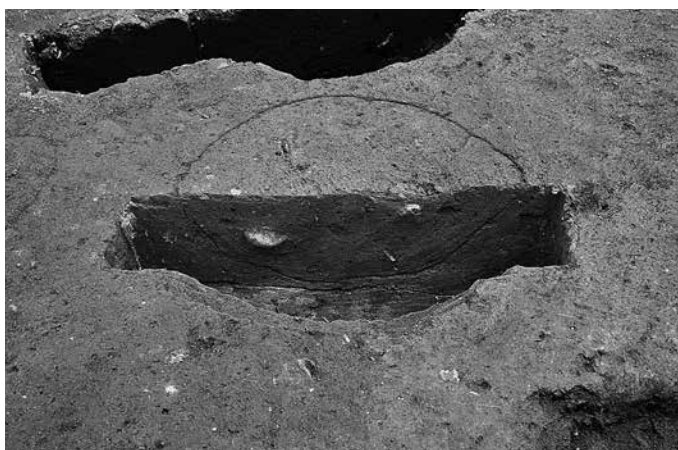
SK50・SK49 断面(北東→南西)



SK57・Pit58 断面(南→北)



SK59・Pit60 断面(南東→北西)



SK64 断面(西→東)



SK74 断面(南東→北西)



SK77 断面(南→北)



SK100 断面(北→南)



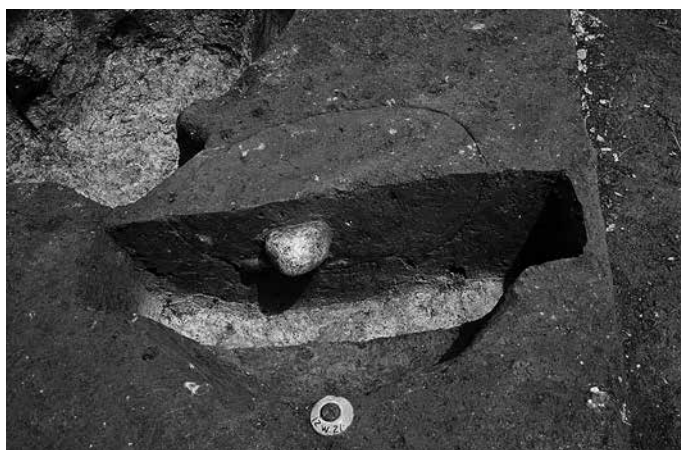
SK110 断面(南東→北西)



SK113 断面(南西→北東)



SK117 断面(南→北)



SK119 断面(南→北)



Pit124・SK126・SK125 断面(南西→北東)



SK134・Pit132・SK135 断面(東→西)



SK204 断面(北東→南西)



Pit56 (SB401) 断面(北→南)



Pit133 (SB401) 断面(西→東)



Pit84 (SB401) 断面(東→西)



Pit82 (SB402) 断面(北西→南東)



Pit188 (SB402) 断面(東→西)



Pit159 (SB402) 断面(東→西)



Pit55 (SB403) 断面(南西→北東)



Pit98 (SB404) 断面(南西→北東)



Pit273 (SB405)・Pit274 断面(北東→南西)



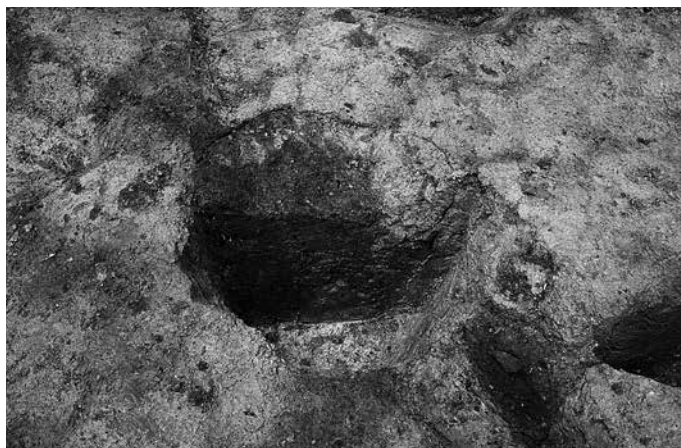
Pit193 (SB405) 断面(南東→北西)



Pit123 (SB405) 断面(南東→北西)



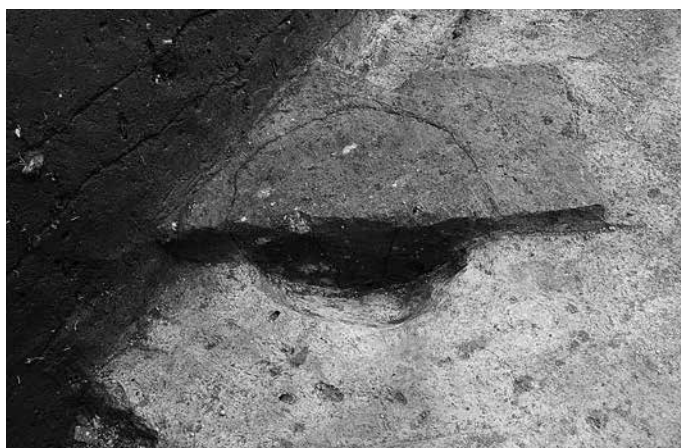
Pit112 (SB405) 断面(南東→北西)



Pit150 (SB406) 断面(東→西)



Pit286 (SB406) 断面(北西→南東)



Pit149 (SB407) 断面(南西→北東)



Pit183 (SB407) 断面(東→西)



Pit147 (SB408) 断面 (南東→北西)



Pit171 (SB408) 断面 (北→南)



Pit292 (SB408) 断面 (東→西)



Pit38 (SB409) 断面 (北→南)



Pit29 (SB409) 断面 (東→西)



Pit43 (SB410) 断面 (北→南)



Pit10 (SB410) 断面 (東→西)



Pit17 (SB410) 断面 (東→西)



Pit182 (SB411) 断面(南西→北東)



Pit275 (SB411) 断面(南→北)



Pit187 (SB412) 断面(北東→南西)



Pit210 (SB412) 断面(南→北)



Pit232 (SB412) 断面(北→南)



Pit200 (SB413) 断面(南東→北西)



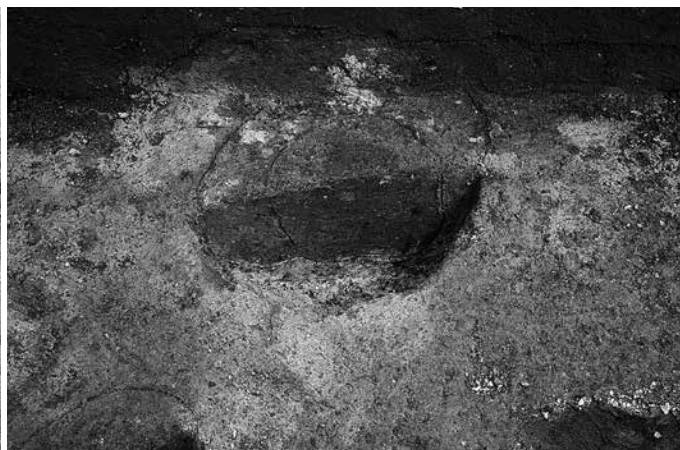
Pit236 (SB413) 断面(南→北)



Pit269・Pit268 (SB413) (西→東)



Pit212 (SB414) 断面 (北→南)



Pit228 (SB414) 断面 (西→東)



Pit231 (SB414) 断面 (北東→南西)



Pit226 (SB415) 断面 (西→東)



Pit192 (SB415) 断面 (北東→南西)



Pit196 (SB415) 断面 (南東→北西)



Pit211 (SB416) 断面 (北→南)



Pit215 (SB416) 断面 (北西→南東)



Pit220 (SB416) 断面 (西→東)



Pit260 (SB417) 断面 (西→東)



Pit259 (SB417) 断面 (北西→南東)



Pit154 (SB417) 断面 (北西→南東)



Pit186 (SB417) 断面 (南西→北東)



Pit248 (SB418) 断面 (東→西)



Pit262 (SB418) 断面 (北西→南東)



Pit178 (SB418) 断面 (北→南)



Pit52 断面(南東→北西)



Pit62 断面(東→西)



Pit63 断面(南東→北西)



Pit72 断面(南西→北東)



Pit75・Pit76 断面(東→西)



Pit81 断面(南西→北東)



Pit91 断面(南東→北西)



Pit96・Pit97 断面(南西→北東)



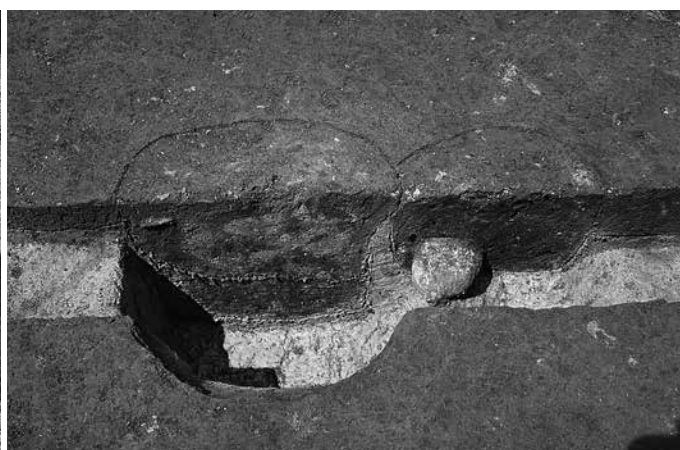
Pit101 断面(北→南)



Pit104 断面(北西→南東)



Pit111 断面(北西→南東)



Pit115・116 断面(南→北)



Pit127 断面(南西→北東)



Pit148 断面(北東→南西)



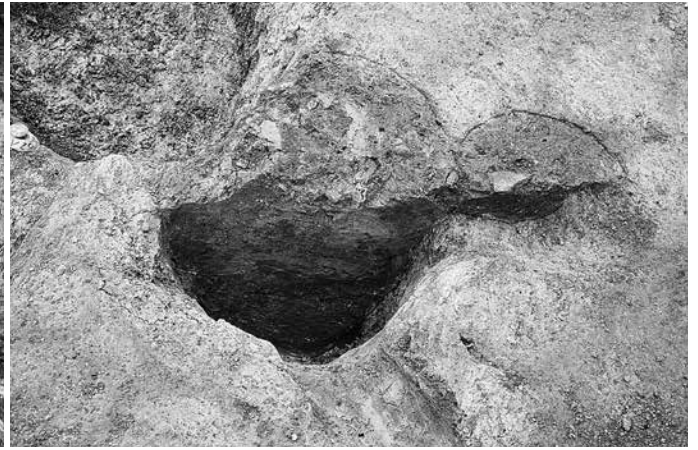
Pit157 断面(東→西)



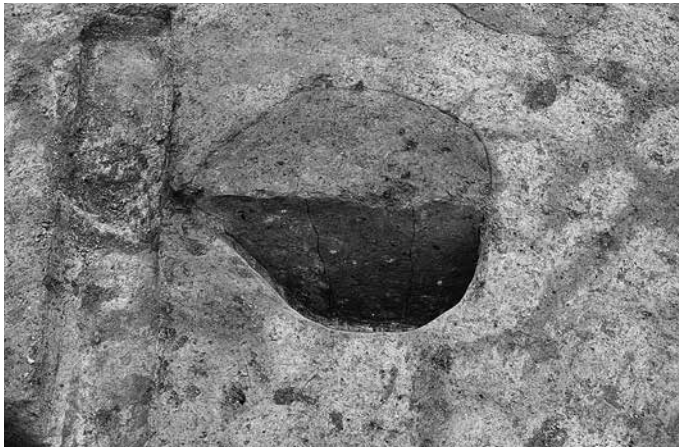
Pit290 断面(西→東)



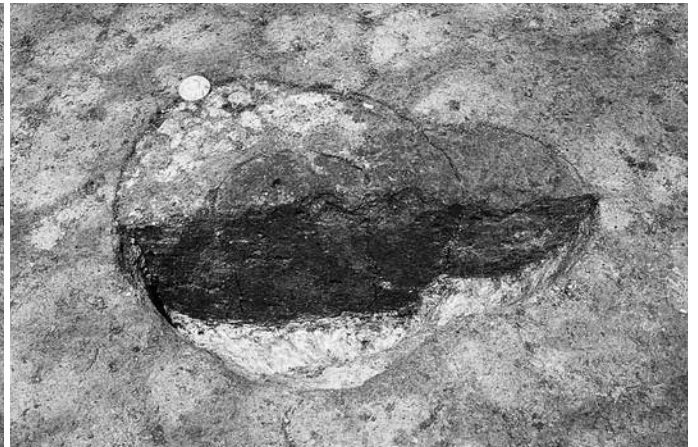
Pit162 断面(北→南)



Pit198・Pit199 断面(北東→南西)



Pit209 断面(北西→南東)



Pit221・Pit222 断面(南→北)



Pit258 断面(南西→北東)



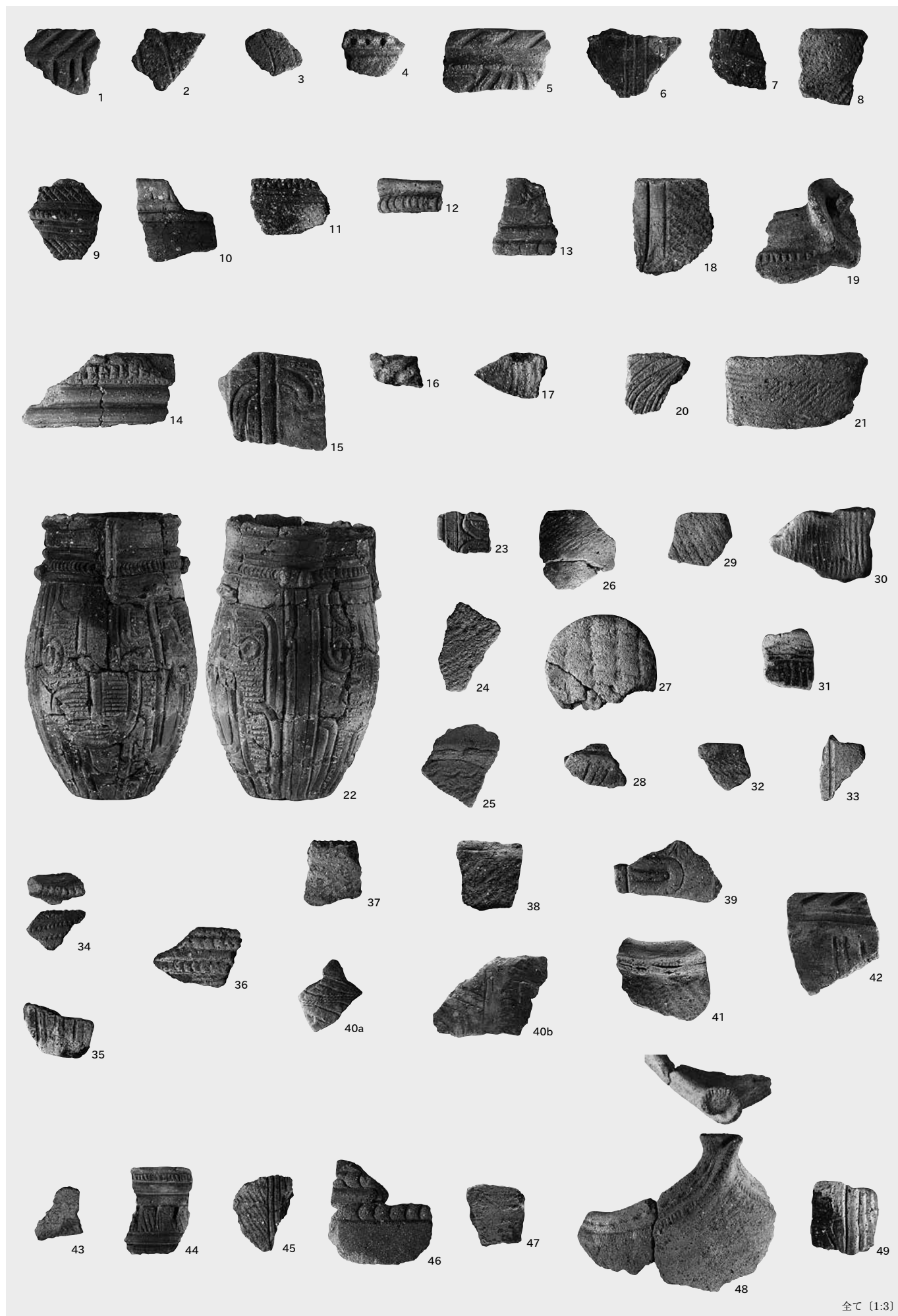
Pit264・Pit265 断面(西→東)

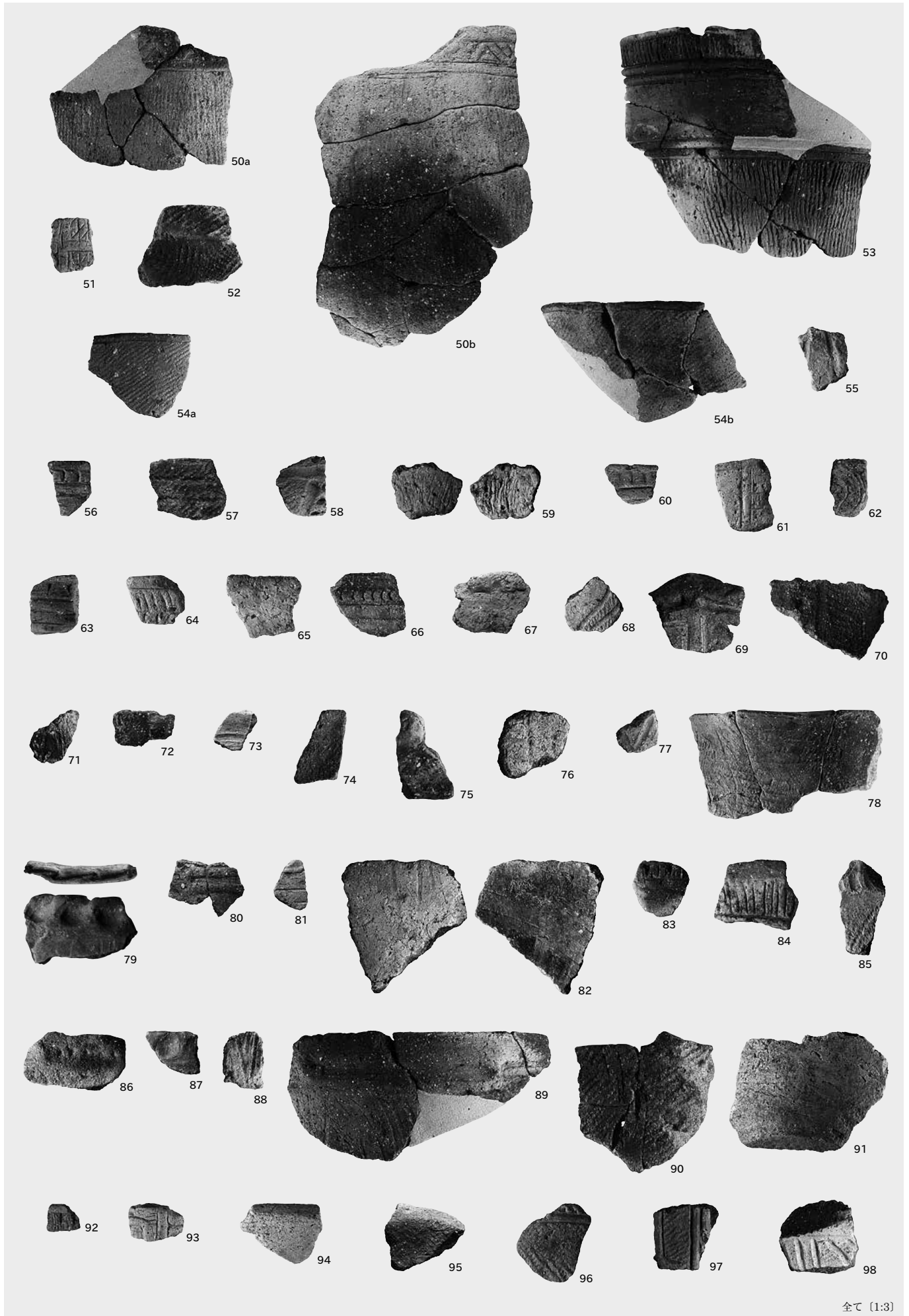


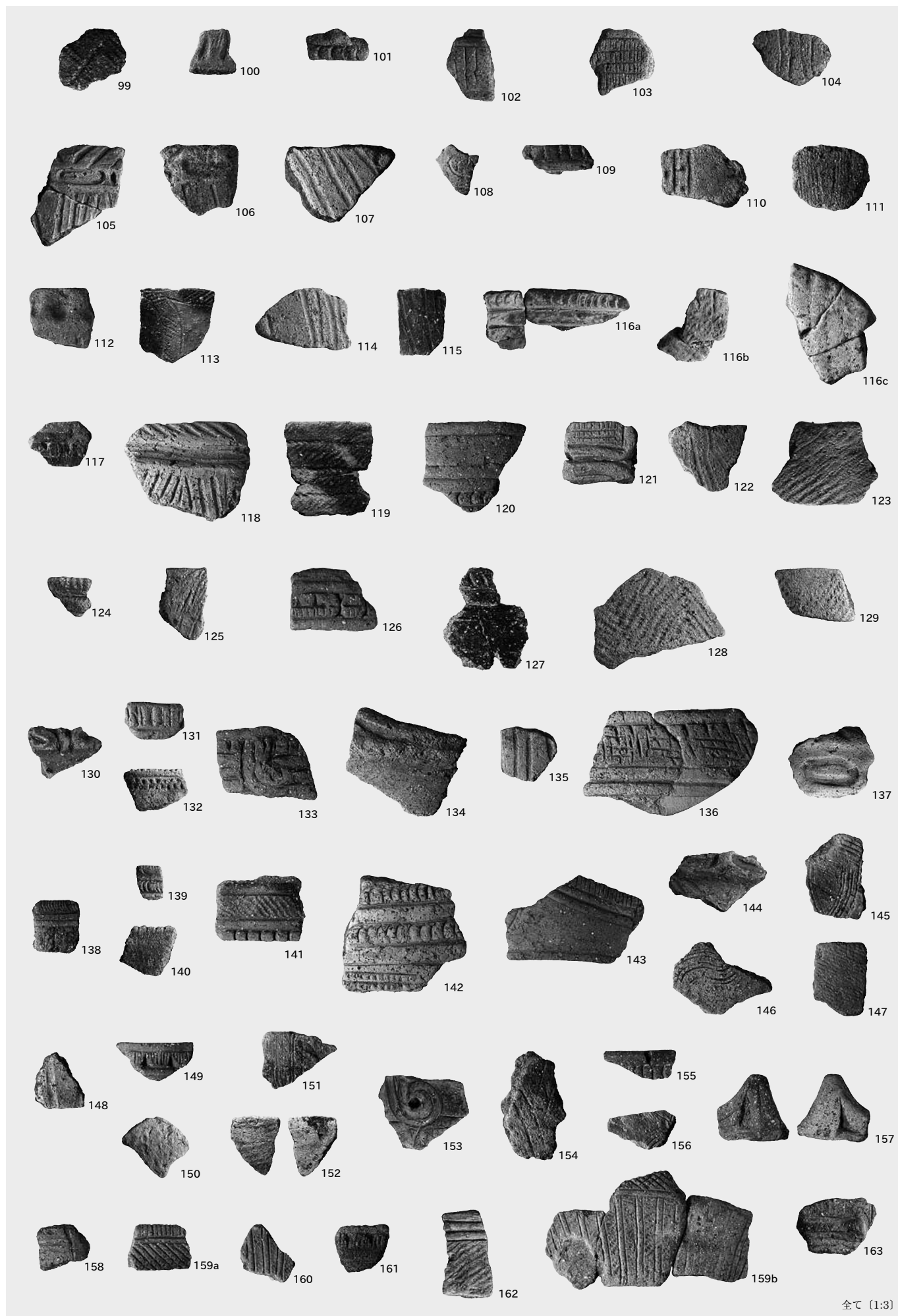
Pit267・Pit266 断面(北西→南東)

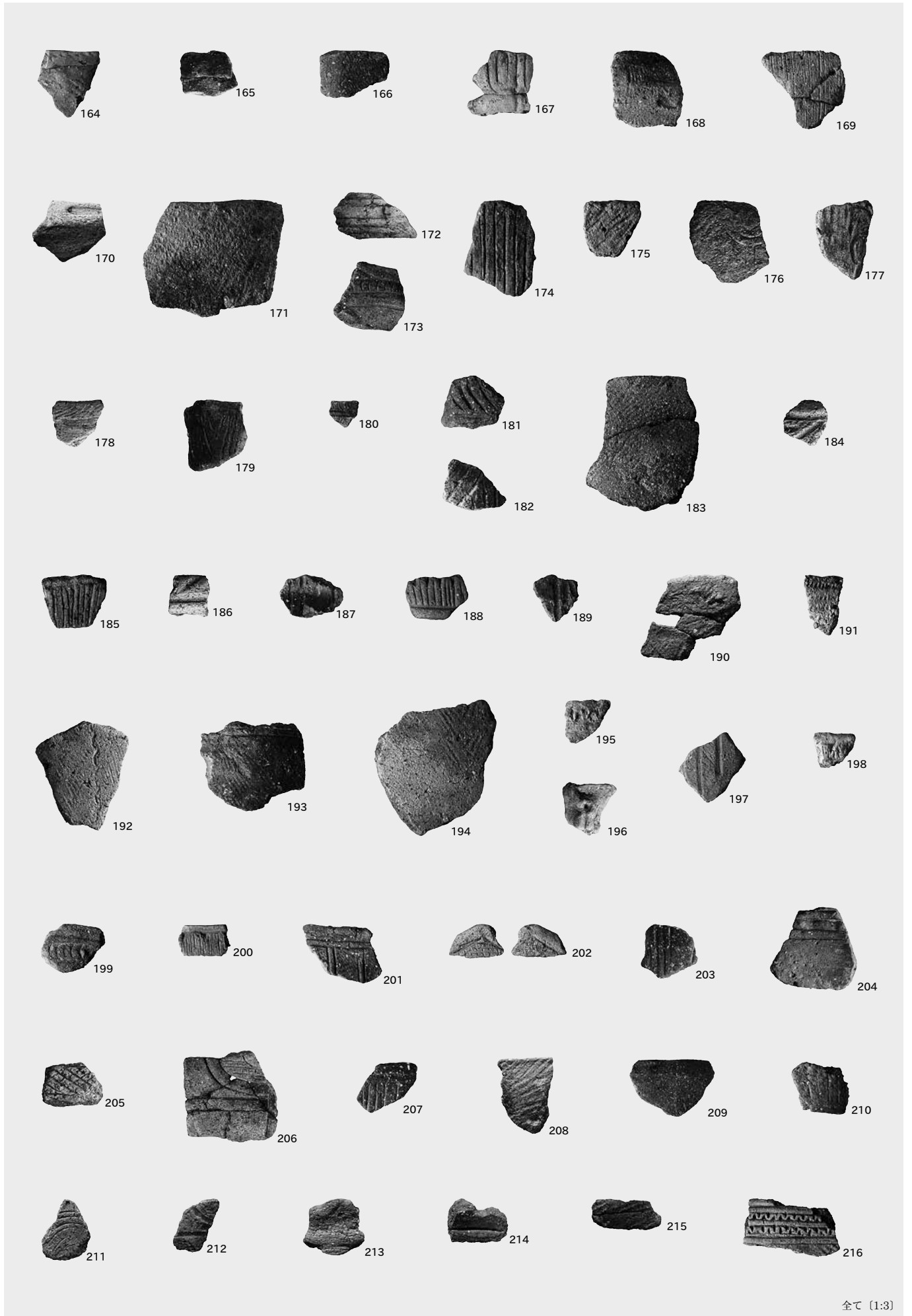


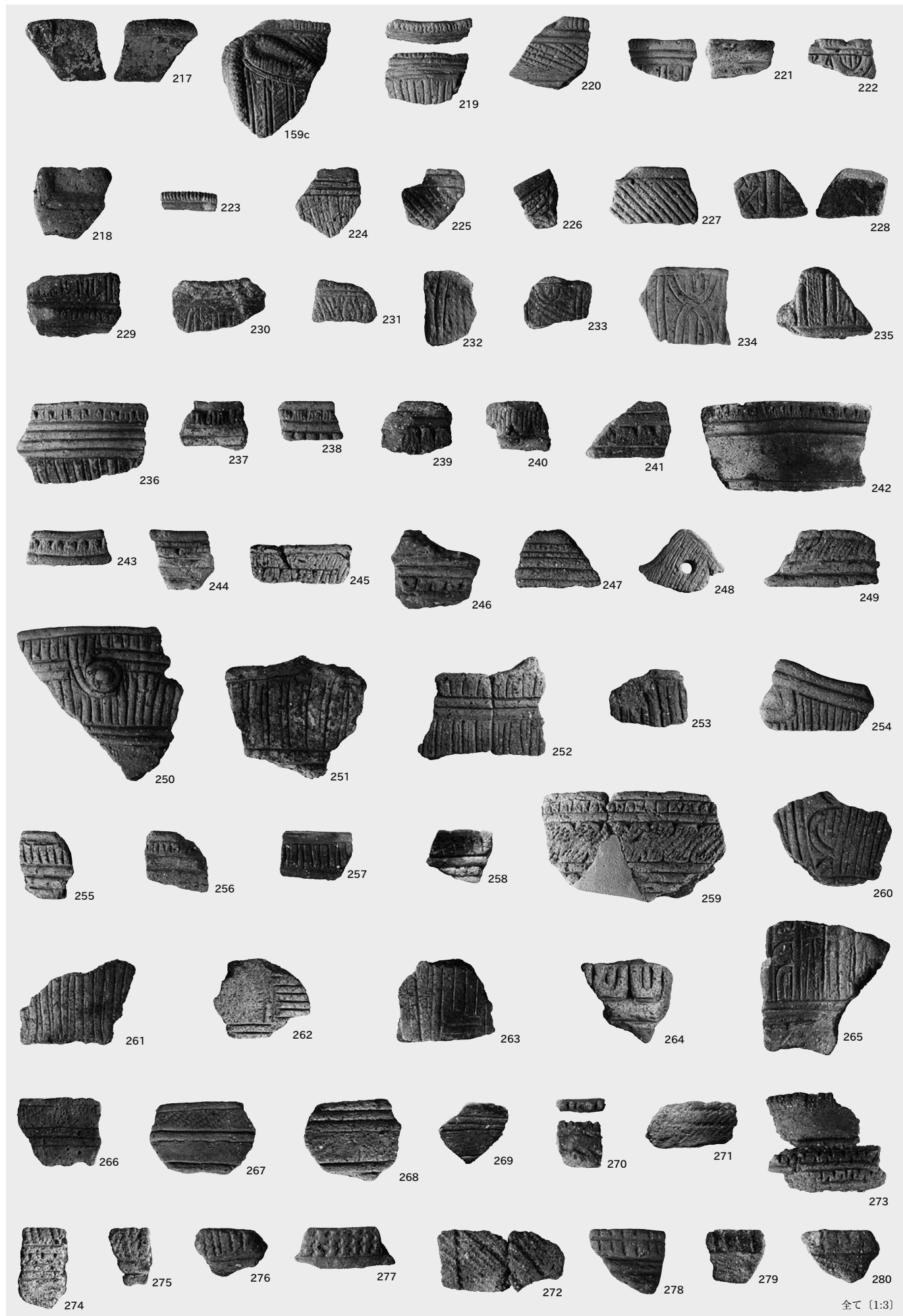
Pit270・Pit271 断面(南→北)

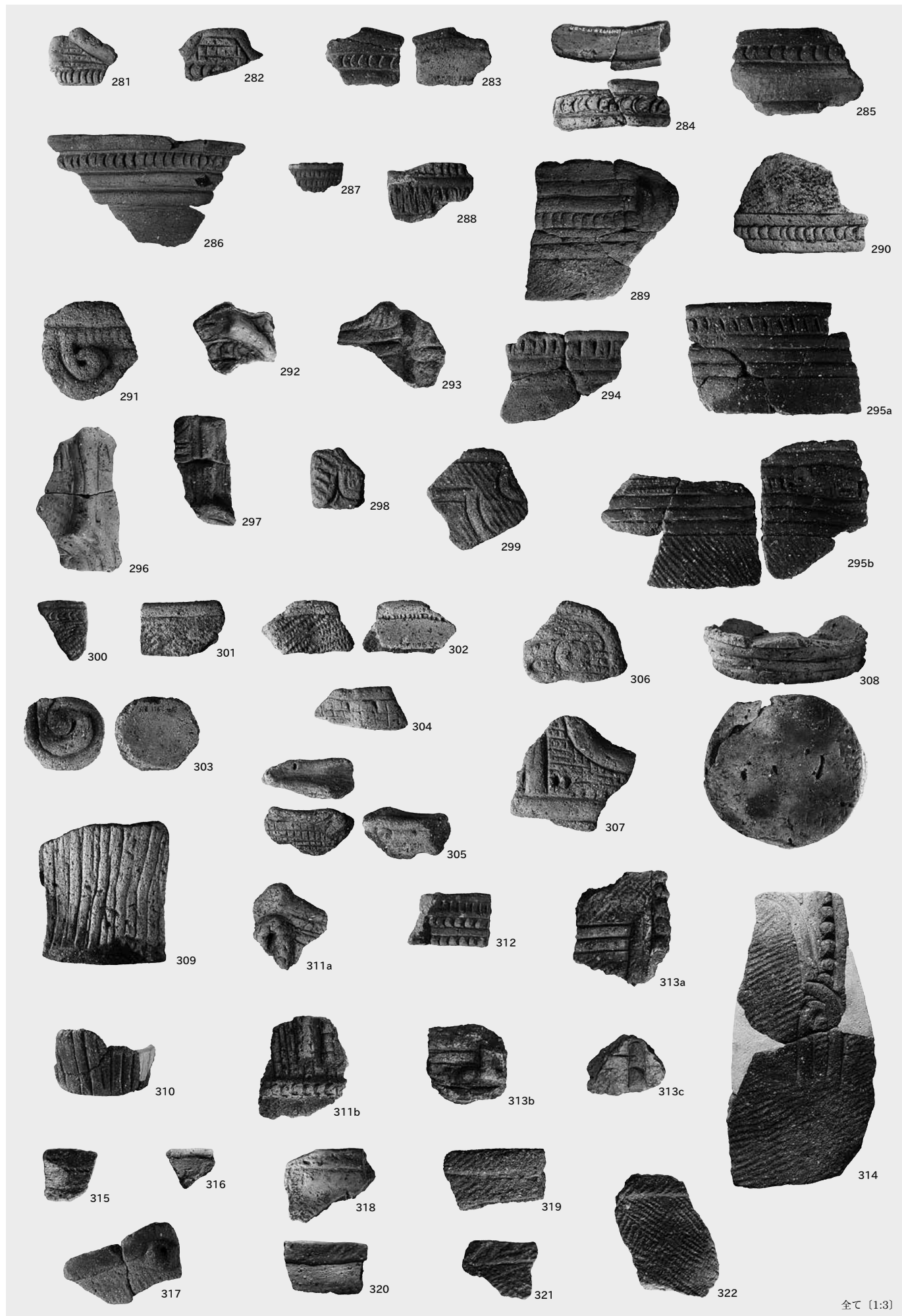


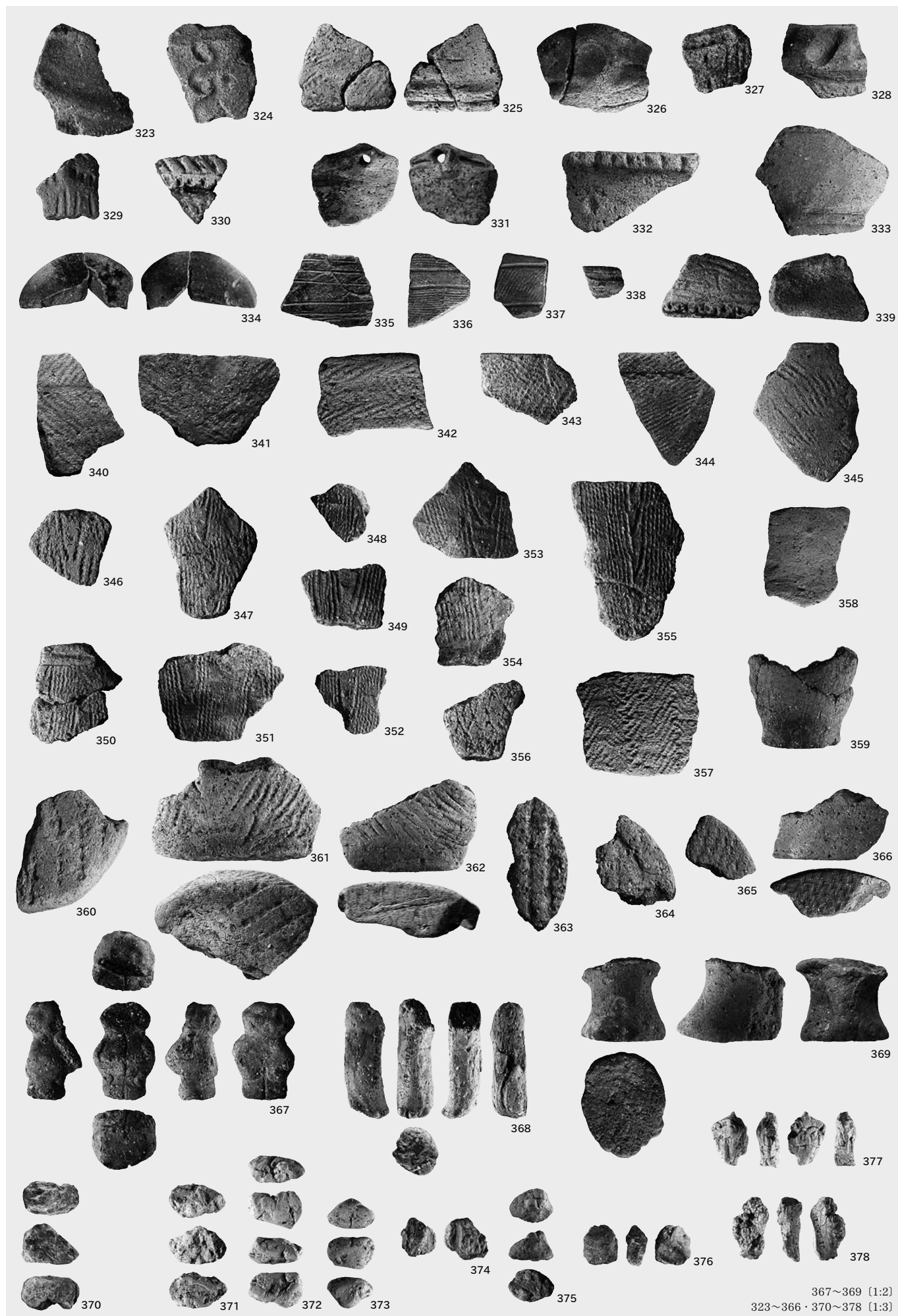












367~369 [1:2]
323~366・370~378 [1:3]



1 土器 Ia1 種 (51)



2 土器 Ia2 種 (36)



3 土器 Ib1 種 (245)



4 土器 Ib2 種 (21)



5 土器 Ic2 種 (360)



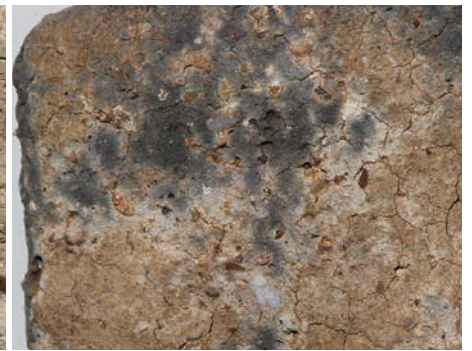
6 土器 Ie1 種 (251)



7 土器 If2 種 (10)



8 土器 IIa 種 (235)



9 土器 IIb 種 (326)



10 土器 IIc 種 (311)



11 土器 II d 種 (248)



12 土器 IIe 種 (357)



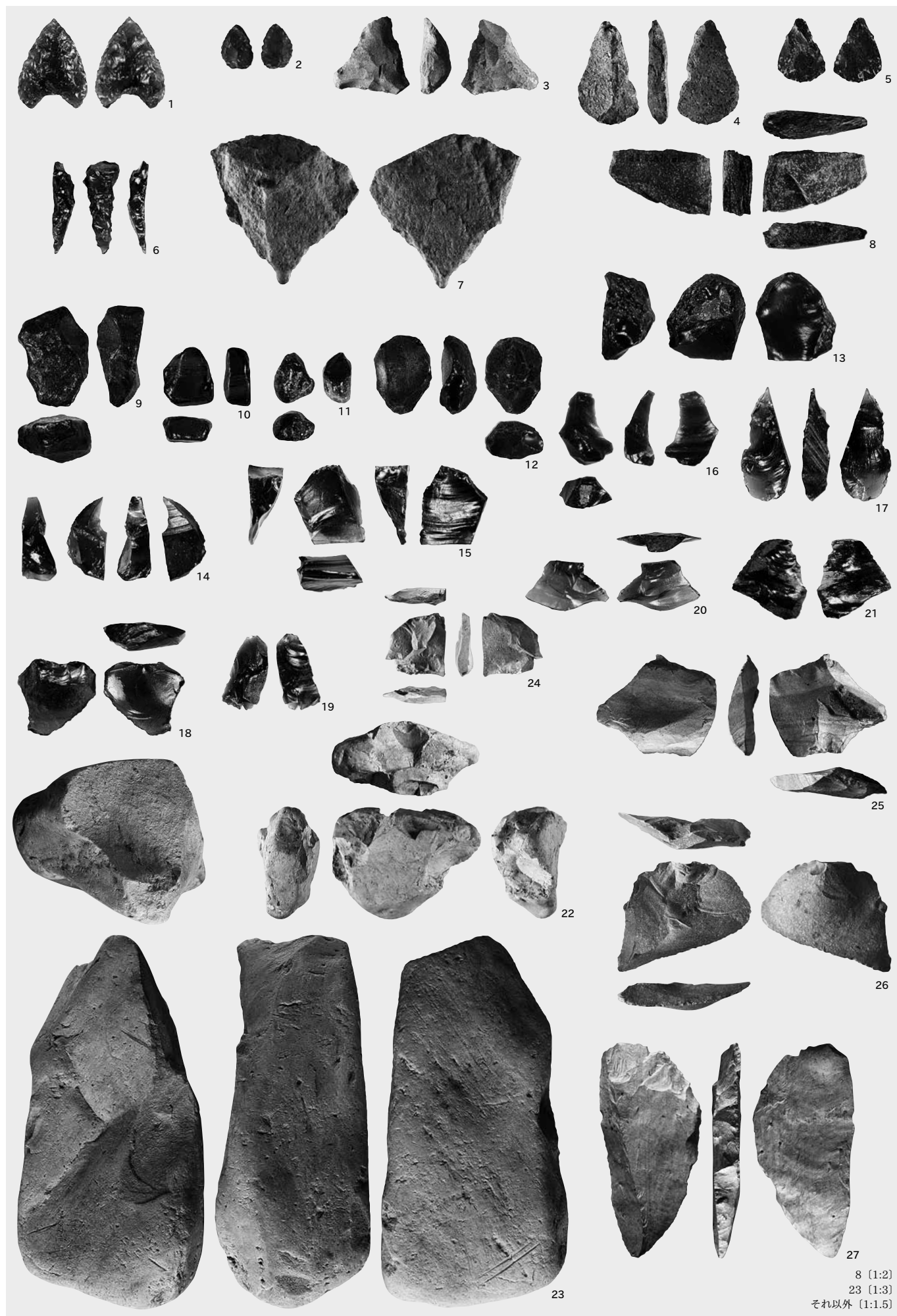
13 土偶 (367)

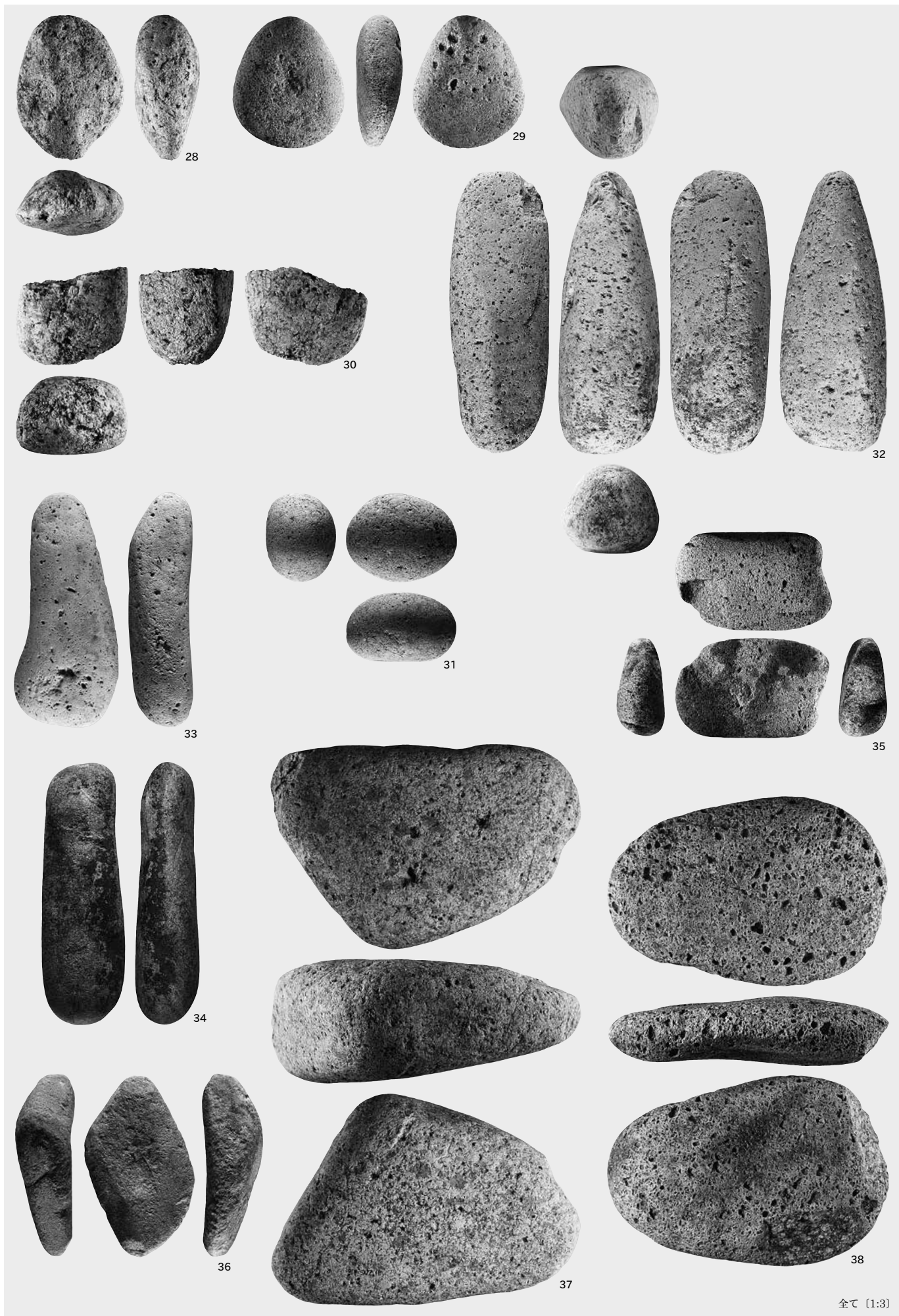


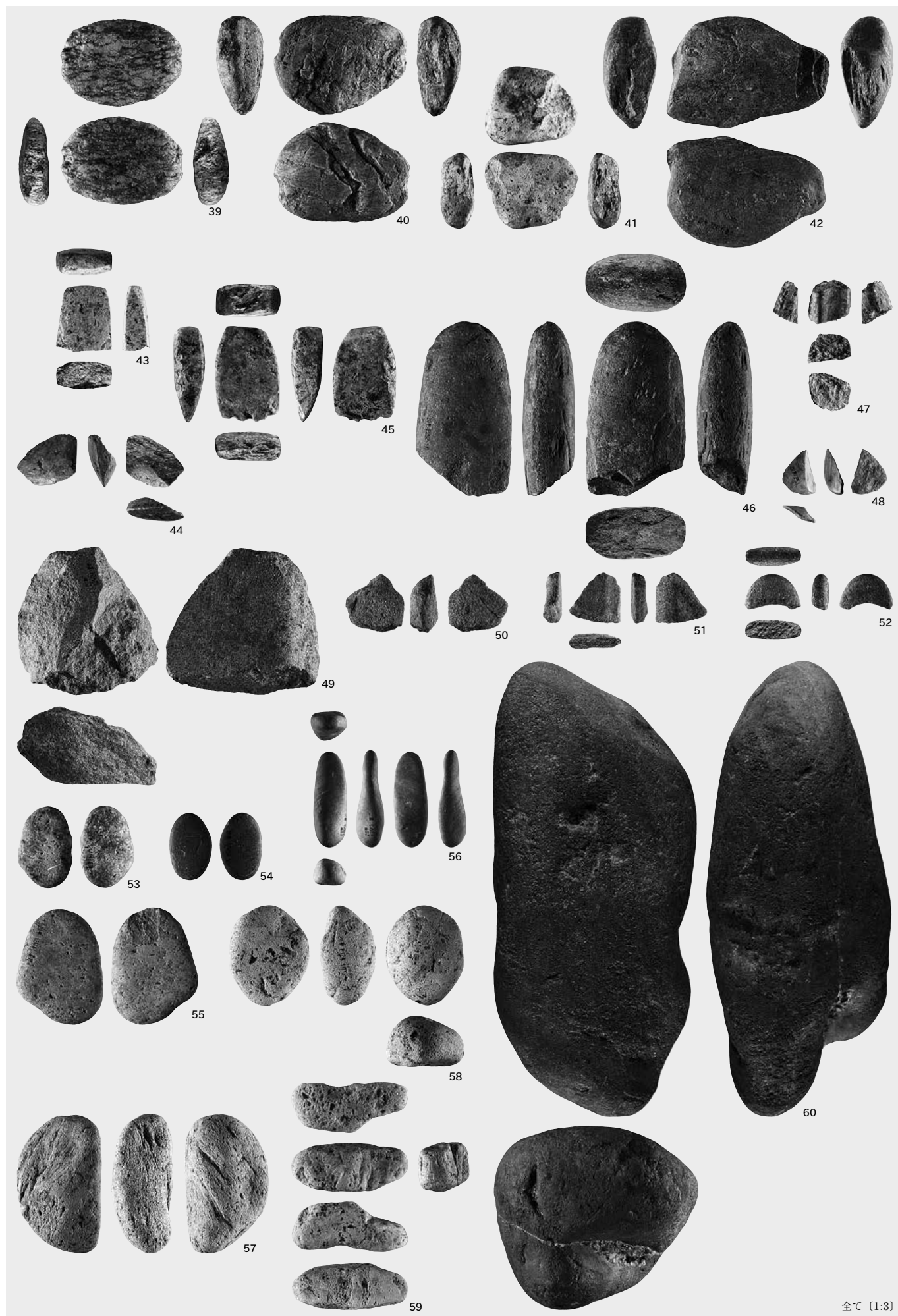
14 焼成粘土塊 (376)



15 焼成粘土塊 (372)







報告書抄録

ふりがな	たいらいせきに だいきゅうじちようさ							
書名	平遺跡Ⅱ 第9次調査							
副書名	個人住宅建設に伴う平遺跡第9次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	新潟市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	前山精明 (新潟市文化財センター)・上條信彦 (弘前大学)・高橋和也 (理化学研究所)・古環境研究所							
編集機関	新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター							
所在地	〒950-1122 新潟市西区木場 2748 番地 1 TEL 025-378-0480							
発行年月日	2023年3月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
たいらいせき 平遺跡	新潟市秋葉区 こぐち いだいら 小口字居平 1134 番地	15105	128	37° 46' 11"	139° 9' 18"	20200518 ~ 20200721	113 m ²	個人住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
たいらいせき 平遺跡	集落	縄文時代中期前葉・ 後期前葉		掘立柱建物 18 棟・ 袋状土坑 2 基・ 砂集積土坑 9 基		中期前葉土器・完形土偶・アス ファルト塊・アスファルト付着 土器		
要約	<p>平遺跡は新潟丘陵北東部の段丘上に立地する。調査地の堆積土はⅠ層(表土)・Ⅱ層(盛土)・Ⅲ層(中期前葉の遺物包含層)・Ⅳ層(基盤)に分かれ、掘立柱建物群・土坑群などの主要遺構をⅢ層上面から確認した。これらは「しまりをもった粘質土」に基づき把握したもので、大半が後期前葉に属す。特筆されるのは、多量の砂粒が堆積した土坑である。磨耗粒子を主体とし沼沢火山起源の軽石を含むことから、阿賀野川で採取した砂粒とみられる。同様の含有物が土器に含まれるところから、混和材の保管を意図した施設と考えられる。土器の80%は中期前葉に属す。3時期に区分でき、中期初頭の1期は北陸地方の新保式Ⅱ期との強い類似性が指摘できる。完形土偶は全長3.9cm たらすの極小品で、「長山タイプ」の特徴をもつ。アスファルト塊は後期前葉に属す。精製滓とみられる資料を含み、本遺跡での加工を物語る。アスファルト付着土器は中期初頭と後期前葉に属し、前者は現時点で新潟県内最古の資料となる。</p>							

平遺跡Ⅱ 第9次調査

— 個人住宅建設に伴う平遺跡第9次発掘調査報告書 —

2023年3月17日印刷
2023年3月20日発行

編集 新潟市歴史文化課文化財センター
〒950-1122 新潟県新潟市西区木場 2748 番地 1
TEL 025 (378) 0480

発行 新潟市教育委員会
〒951-8554 新潟県新潟市中央区古町通 7 番町 1010 番地
古町ルフル 4 階
TEL 025 (228) 1000

印刷・製本 株式会社ハイングラフィック
〒950-2022 新潟市西区小針 1 丁目 11 番 8 号
TEL 025 (233) 0321